社会医療法人景岳会　南大阪病院

創立70周年史

社会医療法人景岳会　南大阪病院

創立70周年史

目　　次

・社会医療法人景岳会南大阪病院 　創立 70 周年史発刊のことば	理事長	柿 本 祥 太 郎	1
・創立 70 周年を迎えて	病院長	福 田　　隆	3
・南大阪病院創立 70 周年史発刊にあたって	会長	飛 田　忠 之	5
・社会医療法人景岳会南大阪病院 　創立 70 周年にあたって	名誉院長	宮 越　一 穂	7
・南大阪病院での思い出	元副院長	久 保　正 治	9
・南大阪病院の思い出	白鷺病院院長	庄 司　繁 市	11

第 1 部

創業者　内藤景岳理事長

1. 内藤景岳理事長経歴　13

第 2 部

医療法人景岳会

1. 景岳会 History
　過去～現在～未来へ　14
2. 社会医療法人景岳会組織図　26
3. 社会医療法人景岳会年表　27

南大阪病院

1. 社会医療法人景岳会
　南大阪病院組織図　30
2. 病院の概要　31
3. 診療用放射線装置一覧表　40
4. 臨床検査科保有機器一覧表　41
5. 院内委員会組織図　42
6. 各種定例会議及び各種委員会等　43

7. 各科のあゆみ
【診療部】 内科 44
循環器内科 48
消化器内科 50
外科・内視鏡外科 55
乳腺外科 58
整形外科 62
胸部外科 67
皮膚科 71
形成外科 72
泌尿器科 77
眼科 81
耳鼻咽喉科 83
放射線科 85
病理診断科 91
麻酔科 93
地域包括ケア病棟 94
回復期リハビリテーション病棟 96
（閉鎖）小児科 97
（閉鎖）産婦人科 99
医師事務サポート係 101
【教育研修センター】 102
【医療安全管理室】 109
【感染制御室】 110
【TQM 推進室】 111
【看護部】 112
5 階病棟 114
6 階病棟 115
7 階病棟 116
8 階病棟 117
9 階病棟 118
10 階病棟 119
11 階病棟 120
12 階病棟 121
ＨＣＵ 122
手術室 123
外来 124
【薬剤部】 125
【診療支援部】 リハビリテーション科 127
臨床検査科 131
栄養科 134
【臨床工学科】 139
【医療情報部】 システム管理課 142
診療情報管理課 143
【地域医療部】 医療福祉相談室 149
地域医療推進室 151
【事務部】 医事課 153
【法人本部】 158
総務部・経理課 159
管理課・物品管理課・施設課・保育所 160
委託会社 161
8. 南大阪病院医学雑誌 162
9. 学術懇話会 163
10. 各種統計 164
11. 防災と減災への取り組み
～防災力は想像力～ 166
12. 電子カルテ導入経緯 172
13. 院内行事・思い出写真集 176

第 3 部
関連施設

1. 南大阪病院附属
リハビリテーションクリニック 193
2. 南大阪総合健診センター 195
3. 血液浄化センター 207
4. 南大阪地域支援センター 210
南大阪訪問看護ステーション
南大阪ハッピーセンター
南大阪ヘルパーステーション
5. 南大阪看護専門学校 212
6. 社会福祉法人　白寿会 214
7. 介護付き有料老人ホーム つむぎ苑 216

・ 編集後記 217

付録

・ 南大阪病院医学雑誌 付録 1
・ 学術懇話会 付録 23

70TH

社会医療法人景岳会南大阪病院
創立 70 周年史発刊のことば

社会医療法人景岳会理事長
柿本　祥太郎

南大阪病院は昭和26年（1951年）5月1日に創設者である内藤景岳初代院長が現在の住之江の地に115床の病院として設立以来、多くの医療関係者の方々ならびに職員諸氏、そして地域の皆様の絶大なるご支援、ご協力をいただき、令和3年（2021年）に創立70周年を迎えることができました。あらためて関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

さて当院の歴史を振り返ってみますと、当院は創立以来、“地域からよろこばれ信頼される病院づくり”を理念として昭和32年（1957年）には大阪府下で第1号の民間総合病院として認可され、その後増築増床を重ね、昭和46年（1971年）には最大病床数700床となり、地域の基幹病院として、その役割を果たしてまいりました。

さらに昭和45年（1970年）に南大阪病院付属准看護学院、昭和48年（1973年）には高等看護学院を設立して看護師の養成にあたるとともに、昭和55年（1980年）に南大阪臨床検査技師専門学校を設立し看護専門学校と合わせて南大阪学園と改称しました。

また昭和62年（1987年）には、健診施設（人間ドック）に体力増強施設（スポーツ施設）を取り入れた南大阪総合健診センター（南大阪ファンクス）を設立、厚生省認定第1号の健康増進施設となりました。

このように当院は常に時代の先を見据え順調に発展してまいりました。

しかし、しだいに施設の老朽化が進み、療養環境も悪化して病院の建て替えが急務となったため、平成20年（2008年）12月に現地建て替えによる新病院建設に着工しました。現地建て替えのため5年6か月の長期にわたる工事を経て平成26年（2014年）6月に28診療科を有する400床の新病院が完成いたしました。

同時に平成21年（2009年）12月には40床の透析クリニックを開設し、南大阪健診センターとともに南大阪クリニックとしてスタートしました。

さらに平成22年（2010年）には社会医療法人の認可をうけるとともに大阪府がん診療拠点病院の認可も受けました。

また新病院完成後の令和2年（2020年）2月には日本病院機能評価機構の4回目の審査

（3rdG:Ver2.0）を受審するなど病院機能の向上に取り組んでまいりました。

新病院の完成により療養環境、職場環境は大幅に改善され、優秀な医療スタッフの確保や最新の医療機器の導入をはかり診療内容の充実もはかってまいりました。

幸いにも新病院は地域の皆様のご支持をいただき、地域医療の要としての役割を果たしているものと自負しております。

当院は急性期から回復期へ、さらに在宅復帰を見据えたトータルヘルスケアを提供し、近隣の診療所や介護、福祉施設と連携し、地域の住民の皆様が住み慣れた町で安心して暮らせる地域包括ケアシステムの中心的役割を担っていきたいと考えております。

さらに大阪府のがん診療拠点病院として、今後も増加が予想されるがん患者さんの診断治療に積極的に取り組んでまいります。

社会のあり方を大きく変えた新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、発生以来約3年になろうとしていますが、いまだ終息する気配が見えません。本邦における感染症対策の脆弱性が明らかになり、当院においても初期には対応に混乱が生じましたが、しだいに体制を整え多くのコロナ感染の患者さんを治療してまいりました。

しかし現在は、ほとんどの方は軽症で重症例は少なく、今後は過度に恐れることなく、コロナと共存する方向に進んでいくことと思われます。

病院創立70周年を迎えるにあたり、今回の新型コロナウイルス感染症の対応も踏まえ、あらためて“地域からよろこばれ信頼される病院づくり”という創立以来の理念を職員全員が共有し、心を新たに地域医療に貢献していく所存です。

今後も各関係者の皆様方の一層のご指導、ご協力をお願い申し上げ、発刊のご挨拶といたします。

70TH

創立 70 周年を迎えて

病院長
福田　隆

1951年、日本が第二次世界大戦終結のためのサンフランシスコ講和条約を締結したこの年、住之江区の軍需工場の跡地に115床の病院が開設されました。後に最大700床まで増床し大阪府の総合病院認可第1号を受けるこの病院こそ、当院南大阪病院の始まりです。長い歴史の中で病院長は創立者の初代内藤景岳先生以降、二代目福本圭士先生、三代目忠田守喜先生、四代目飛田忠之先生（現法人会長）、五代目下山孝先生、六代目宮越一穂先生（現名誉院長）、七代目柿本祥太郎先生（現法人理事長）と綿々と引き継がれ、2020年7月1日八代目院長に私が就任しました。

その中でも38歳の若さで病院を設立し50年近く院長職を務められた内藤先生は、カリスマ性のある突出した医療人でした。第4回日本病院会学会会長を務められた際には、「明晰・細心・緻密・果断，全身これ燃える火の玉といった医界では異色の闘士，硬骨漢」と雑誌で紹介されています。進取の気性に富み、病院創立後も全国第1号の老年医学研究所や、厚生省認定第1号健康増進施設となるスポーツ施設併設の総合健診センターなどを開設されています。日本の未来を見据えて医療者の育成にも情熱を燃やし、看護専門学校、臨床検査技師専門学校を次々と開校されました。夢はかないませんでしたが、医師不足に備えて医科大学の創立も目指されていました。

その内藤先生が創立30周年記念誌の中で病院経営の方針として述べられた言葉があります。それは、1.誠意をつくすこと、2.責任を果たすこと、3.技術の練磨向上に努めること、の3つです。コロナ禍という戦後最大の医療危機の中でその方針を守ることができたのか？内藤先生の教えを引き継ぐ者として常に自問しています。

私が院長就任後のこの2年間は、新型コロナウイルスとの長い戦いに明け暮れた日々とも言えます。当院では2021年1月以降コロナ患者の入院を受け入れており、1病棟全てをコロナ専用病棟として運用していました。最大41床までコロナ患者用病床を確保し、看護師、職員は終日完全 PPE 着用で「誠意をつくして」看護・治療に当たりました。その結果、コロナの入院患者数は2022年8月末までに延べ374人にのぼっています。

外来のコロナ患者には発熱外来を開設して対応しました。当初救急外来だけでは多数の患者さんが溢れ出したため、急遽屋外に発熱外来用プレハブを2棟建設しました。第6、7波のピーク時には連日多忙を極め、PCR 等コロナ検査件数も1日100件を超えて、検査科職員は深夜までその対応に追われました。また、2022年2月と7月には院内クラスターが発生しています。特に第7波の時期には院内各部署で職員に多数の感染者及び濃厚接触者が発生し、長期的な人員不足から医療崩壊の危機に瀕していました。その危機を乗り越えられたのも、現場職員の地域医療を守るために「責任を果たす」、という強い意志によるところが大きいと思っています。

その一方でコロナ禍においても、救急指定病院およびがん診療拠点病院として総手術件数や消化管内視鏡件数、心臓カテーテル検査数などは順調に件数を伸ばして来ました。緊急手術件数も増え、地域の救急医療に貢献しています。透析センターと外来透析室を統合し血液浄化センターとして機能性・効率性アップに努め、腫瘍内科、呼吸器内科等を新設して急性期医療の充実に注力して来ました。今後はより低侵襲な手術のために手術支援ロボットの導入を目指しています。当院の特徴を活かして幅広い分野で最新の医療を提供できるように、全職種で「技術の練磨向上」に励んでいます。

我々医療者は、コロナ禍により日本の医療体制の脆弱性を知り、多くの問題点に直面しました。そこで学んだことを糧として、将来の新興感染症の流行や大規模災害の発生に備えて新たな医療提供体制を創造する必要があります。ICT を駆使した情報・連携ネットワーク作りや、専門職を含めた医療資源の柔軟な有効活用のための医療改革、優れた人材育成と医療者が安心して活躍できる環境作りなどが重要です。当院もそのための病院改革を進めたいと考えています。

今後日本は世界でも類のない超高齢化・労働人口減少化社会に突入します。超高齢化社会に対しては、当院の特徴である急性期・回復期リハビリテーション・地域包括ケアの各種病棟を活かした切れ目のない医療の提供が必要です。労働人口減少化社会に備えて、個々の医療者のワークライフバランスを重視した働き方改革を推進する所存です。

これからも初代院長内藤景岳先生の教えを守り、高い志を持って、70有余年の歴史を誇る当院の医療を未来に継続し発展させることが、八代目院長の役割と考えています。

70TH

南大阪病院創立 70 周年史
発刊にあたって

社会医療法人景岳会会長
飛田　忠之

南大阪病院は昭和26年に創立され、令和3年5月に創立70周年をむかえました。この間、地域住民の皆様、地区の医師会をはじめ府医師会、日本医師会や各種の医療法人の団体様の心温まるご支援とご鞭撻をたまわり、また多くの大学の医学部医学研究科のご支援をいただき、また各時代の職員の皆様の絶大なご協力をいただきましたことを深く感謝申しあげます。

この度、創立70周年史を発刊することとなり各診療科、並びに各部門の最近20年間の歩みについて簡単にまとめるようにとの方針のもと、会長として内藤景岳先生の病状、葬儀、新病院の建て替え計画ならびに主な診療科の医師獲得について回想という形で記させていただきます。

南大阪病院の創立者であられた内藤景岳先生は生来きわめて健康であり、晩年まで早朝8時には病院に到着され、連日早朝の幹部会に出席され、幹部を叱咤激励されていました。しかし平成12年2月21日下肢の脱力と歩行困難、呂律困難となり入院され、翌日22日には左片麻痺、嚥下困難となり、CT にて左被殻の新鮮梗塞と診断されました。その後呼吸不全に対して、長期にわたり気管挿管のうえ呼吸管理が行われましたが、次第に全身状態悪化し、敗血症から DIC を併発され平成13年5月20日に多臓器不全にて永眠されました。

6月16日四天王寺、本坊、五智光院にて葬儀委員長、大阪医科大学学長・島田眞久博士のもとで病院葬が盛大にとり行われました。

丁度この時期には、老朽化した南大阪病院本体の建て替え問題が景岳会の喫緊の懸案事項であり、平成13年はじめより院内でいろんな意見が飛びかっていましたが、平成14年2月に私が理事長に就任し、しばらくのあいだ病院長も兼任し院内の体制の立て直しをはかりました。平成14年3月にはじめて院内に新病院開設準備室を立ち上げ各部署の職員代表で方向性を検討していきました。

当初、設計施工は別々の会社にほぼ決定されていましたが、施工を依頼していた会社が辞退したために大林組に設計施工を一任することになり、現地建て替えの方向で大筋が決定

されていきました。

平成14年当時はまだ循環器内科以外の内科系の医師が少なく、内科系の診療科の充実がまず必須と考えました。消化器内科は平成15年3月より兵庫医科大学、下山教室より複数の有能な医師(福井医師など)を派遣していただきました。また住之江区医師会の学術講演会ではじめてお知り合いになった大阪市立大学(当時)第2内科稲葉助教授に腎臓内科の設立の必要性を訴え、当時の西沢教授にお願いし、代謝内分泌内科としてやはり平成15年5月より優秀な複数の医師(庄司、川口医師など)の派遣がかないました。また当時、外科は故後藤副院長が難易度のたかい手術を縦横無尽にこなしておられましたが、若年層の外科医に非常に負担がかかり、このままでは外科医が過重労働で倒れてしまうという危機的な状態でありました。外科医の増員が必須との判断で大阪市立大学第2外科・木下教授に医局員の派遣をお願いし、やはり平成15年4月から優秀な複数の医師(清田、大村医師など)の派遣が実現されました。消化器内科は平成18年から手薄になりましたが、平成23年4月より大阪市立大学第3内科・荒川教授のご配慮にて複数の中堅の医師(中谷、野村医師など)を派遣していただき、現在は福田病院長以下8名の大所帯となっています。この時期にこれだけの大学医学研究科の応援をいただいたことは非常に幸運であり、その後の病院の発展に大いに寄与した大きな一因と考えます。

(整形外科は平成5年に、形成外科は平成15年に、泌尿器科は平成26年に新しい医局から複数の医局員の派遣があり、乳腺外科は平成20年に独立してたちあがりました。)

なお平成15年に新医師臨床研修制度がはじまり、当院は協力型臨床研修病院として翌年から研修医は毎年4ないし6名の参加があり、新藤先生が研修部長として統括し、活躍しておられます。

新病院建設に関する病院側と大林組との基本設計、実施設計に関する話し合いは平成20年12月まで続き、平成21年1月より第1期工事がはじまり第3期工事が終了したのは平成25年10月であり、11月23日に竣工式を行いました。この間きわめて長期にわたり近隣の皆様に非常にご迷惑をおかけしましたことをあらためてお詫び申し上げます。

外来棟、入院棟一体の新病院となり療養環境が一新され、また同時に電子カルテの導入やオーダリングの一元化など非常に効率的な運用が可能となり、利用されている患者様の利便性も向上してきているようにおもえます。

今後ますます医療内容を充実させて、大阪市南部医療圏の住民の医療を守る最後の砦として末長く発展していくことを期待するところです。

70TH

社会医療法人景岳会南大阪病院 創立 70 周年にあたって

名誉院長
宮越　一穂

南大阪病院創立70周年にあたり、わたしの院長時代を振り返ってみたいと思います。

南大阪病院の創業者・理事長・内藤景岳先生が亡くなったのは平成13年5月20日であった。その後、飛田忠之先生が理事長・院長に就任された。飛田先生はまず、消化器内科の再構築を計画され、兵庫医科大学消化器内科の下山孝教授を平成15年10月に南大阪病院の院長に招聘された。同時に若い消化器内科医2名が派遣された。さらに、大阪市立大学・第2内科西澤教授、稲葉助教授に腎臓内科・糖尿病内科創設を要請され、平成15年5月庄司部長など4名の腎・代謝内科医が着任され、平成16年3月から、それまでの第3会議室を透析室に改装し外来透析を開始した。

副院長に指名されたわたしは飛田理事長に、法人の理念、基本方針の見直し、患者の権利の創設を提案した。理念は内藤先生が掲げられた理念『地域からよろこばれ信頼される病院をめざします』のままに、基本方針には、経営の安定化や職員満足の内容が盛り込まれた。患者の権利は、飛田理事長の試案をもとに内容や文言を検討し、患者へのお願いを追加して『患者の権利』として明文化した。さらに、倫理委員会の創設を提案し、生殖医療や、代理決定、終末医療、“エホバの証人”の患者さんを経験していたので、それらを審議することとした。

下山先生は着任される半月前の3月中旬、自身の病気が判明し、4月1日の病院長着任は延期され、わたしは院長代行に任命された。下山先生は無事に病気治療を終えられ平成15年10月に南大阪病院の院長に就任された。平成15年10月8日～10日の日本病院機能評価機構の初回審査は下山院長の下で受審した。しかし、下山院長のご逝去に伴い、平成15年11月わたしが院長に就任することとなった。

院長就任の約1カ月後、平成15年12月28日、京都府立医大・小児科から平成16年4月施行の新初期臨床研修制度に伴い、大阪に出向させている小児科医を引きあげる意向が示された。そのため大阪市大、大阪医大、近畿大学、関西医大などの大学医局や大阪府医師会、日本小児科学会に小児医療の窮状を説明し理解と応援を要請したが医師の派遣は困難となり

小児科は廃止のやむなきに至った。また小児科閉鎖に伴って、兵庫医大から出向していた産婦人科も平成17年3月末で閉鎖した。

小児科・産婦人科が無くなって、看護師や病棟の再編を行い、使われなくなった産婦人科外来を7床の外来化学療法室に改装、『外来ケモ室』として関節リウマチ注射も実施した。

当時、許可病床は506床であったが、小児科・産婦人科の2病棟を閉鎖し400床運用していたので病床利用率は極端に低率であった。

新病院建設にあたっては、院内の新病院建設準備委員会で新病院構想の中に、1. 急性期医療、2. 救急医療、3. リハビリ医療、4. 地域に開かれた病院に追加して、5. 教育研修を入れるよう提案した。“教育”は、医師、看護師、その他の医療スタッフの教育で、病院玄関などに教育病院であることを掲示し、患者さんの理解をもとめた。平成16年4月の新・医師臨床研修制度にともない南大阪病院も教育研修機関と認可された。

また、新病院構想の一つとして DPC 病院になることを計画した。当時、紙ベースで EF ファイルなどをまとめ、毎月、各診療科や各医師に修正をお願いした。その結果、平成18年4月、DPC 準備病院としての許可が下りた。毎日毎月の DPC 病院への対応は、診療データや、医療事務データ、月次報告など経営指標データの精度を上げ、ベンチマークや経年変化の検証がようやく可能になった。

新病院建設に向けて、まず各種会議を見直し、審議する場を再構築した。新病院建設の具体化には、設計・建築会社の選定が問題になり、建築会社に大林組が選ばれた。設計会社も大林組になった時点で第三者に検証を依頼した。各部門とヒアリングを行い、放射線治療や RI 検査は断念した。

この間の病院のソフト面の変化には日本病院機能評価の受審がある。そのために診療情報管理を見直し、カルテの書き方を統一、受審のプロジェクトチームを編成した。実際の病院機能評価は平成15年10月8～10日に ver 4で受審し、現在に至っている。

いろいろ当時の出来事を綴ってきましたが、紆余曲折がありながらも南大阪病院が地域の基幹病院として発展することができたのは、多くの関係者の方々そして地域の皆様のお力添えのおかげであり、この場を借りて深く感謝申し上げます。

70TH

南大阪病院での思い出

南大阪病院　元副院長
元耳鼻咽喉科部長
元看護学校校長
久保　正治

先ず、命の番人である医師の食道異物の珍しい治験2例を紹介します。
1例はクエ鍋の宴席でクエの骨を誤飲した高齢男性医師、もう1人は自宅での忙しい診療の合間に隣室で疲れを癒やす為に、PTP 包装の薬をそのまま飲み込まれた熟年男性医師で、2人とも直後からのどの痛みが酷く時間外に受診されており、何れも全身麻酔により食道鏡下、食道の第一狭窄に嵌在している異物を除去しました。私の医師生活60年の間、医師の異物誤飲例はこの2例のみです。魚骨を誤飲された方は後味の悪い宴会での御馳走であったと思います。また、健康増進薬を服まれた方は苦い良薬になったと思います。

次に飲んだ異物の種類が他に報告例のない、極めて稀な女子中学2年生の症例です。校庭で昼食後にコーヒーのスプーンを口に咥えて逆立ちをしていた所、誤って飲み込み母親と共に午後遅く受診しましたが、特に自覚症状はなく、腹部のＸ線写真でスプーンは腸内に落下していましたので、明朝排便時にスプーンが自然排出しておれば持参するように告げ帰宅させました。翌日午前中に約束通りスプーンを持って再診しましたので、スプーンは洗浄消毒後に貴重な標本として当科に戴く事としました（写真）。母親へ今後の注意を告げ帰宅してもらいましたが、退出時親子共々足取りも軽く、安堵した様子でした。

当科は昭和52年以来、大阪市の耳鼻科休日急病診療の後送病院に参画しており、手術、入院の必要な食道、気道異物症例を始めとして、他の多くの耳、鼻、のどの救急例も受診します。看護学生の実習にも大変勉強になります。ただ当科の疾患の観察には術野が小さく、狭く内視鏡を通しての供覧は十分ではなく残念な思いをしました。併し近年は軟性の内視鏡下テレビの大きな画面で複数の学生が同時に見られて病像を理解出来るようになりました。

看護学校の校長も長年の内藤院長先生から、福本副院長に替わり、次いで私に3代目校長を命じられました（昭和63年）。学校事務長、正看、准看教務主任、各教員の協力を得て校長職を兼任しました。

内藤院長の時代から、20数年経過し医学、医療の進歩は著しく、これが日常の治療や看護の広い分野にも応用される時代になり、看護教育制度についても注目されるようになりました。時代も昭和から平成へと変わり、大学も4年制看護大学の増加と共に、准看護学科卒業生の進学コースへ進む学生も増え、戦後からの准看護学科の制度の存続についての是非について理事長、看護部長そして正看、准看学科教務主任らの現場の方々に意見を聞きました。又、多くの准看学生に関わっている地区医師会の先生方の率直な考えを聞き、時勢を考慮し合意に達した所で、准看護学科の閉科が決まりました。そして、平成19年3月4日スイスホテル南海大阪で閉科式を行い、式には卒後南大阪病院で中心となって勤務する准看護学科の看護師の出席も多く、見守る私の心情は、感謝と更なる健闘祈願でした。

多くの病気の中には、異物事故、交通事故、遭難事故等の不注意により、急に発生する疾病がありますが、中でも耳鼻科での異物事故は身近に起こるだけに不幸をもたらす場合もあります。知り尽くしているはずの老練の医師2例の誤嚥事故のように、いつ起こるかも判りません。幼少児の場合はより痛ましい場合があります。病院の院是に等しい「人間の幸福は健康にあり」の内藤院長先生の信念を理解し、事故・外傷に注意し、現代の感染症に罹ることなく健康で明るい日々を過ごされる事と願っております。

病院の思い出を語るには、内藤院長先生を抜きに語ることは出来ません。院長先生は長年の医療への功績等により、1984年秋の叙勲で勲3等旭日中綬章を受章された祝賀会での思い出があります。祝賀会は大阪都島の美しい庭園で有名な太閤園にて盛大に行われましたが、壇上の院長先生ご夫妻に、2人のお孫さんからお祝いの花束を受けられている時の和やかなご満足な表情は忘れられません。

昭和52年、わざわざ市大病院まで来ていただき当時の狭い耳鼻科医局で初対面、挨拶代わりの「南大阪病院医学雑誌の編集を頼みます」の出会いから約40年、今日まで病院各科医師、各部署職員皆様に力強いご支援を頂き、耳鼻咽喉科の診療に大過なく携わることが出来ました事を、光栄に思い感謝しますと共に南大阪病院の益々の発展をお祈りします。

70TH

南大阪病院の思い出

特定医療法人仁真会白鷺病院院長
庄司　繁市

2003年5月1日に私は川口祐司先生（現：南大阪内科副部長）と徳山進輔先生の3人でお世話になりました。「Love and Create」が私の信条です。当時兵庫医大から来られた福井信先生が消化器でご活躍でした。朝、病院に来ると福井先生も早く来られていて消化器疾患の患者さんは診ていただいており主治医を決めていただいて大変助かりました。2010年3月31日、久米田靖郎先生（現：南大阪病院副院長）に引き継ぐまで約7年間お世話になりましたが、その思い出は数多く、多くの方に助けられました。その方々へのお礼を込めて思い出を語ります。南大阪病院は診療部間の垣根がなく働きやすい病院でした。私の南大阪病院勤務中に一番大きなことは、新藤光郎先生が2004年に臨床研修部長として南大阪病院に来ていただいたことではと思っています。南大阪病院は2004年度より大阪市立大学医学部付属病院の協力病院として研修医受け入れ開始をしていましたが、新藤助教授が来られ管理型臨床研修施設になりました。南大阪病院で研修を受けた医師が世に出ていくこと、また後に一緒に南大阪病院で働くことはすばらしいことです。今でも南大阪病院で研修された先生が大学で会うと声をかけていただけるのはうれしい次第です。

私はもともと専門が腎臓でしたが、立場上糖尿病診療・透析医療にも従事する必要がありました。私が南大阪病院に来て一番うれしかったことは病理診断科に小林庸次先生がおられたことでした。腎生検、病理解剖では大変お世話になりました。糖尿病透析患者の下肢切断の浅大腿動脈に骨化生を認めた時には、世界的大発見だと喜んだのを覚えています。実際は病理学の本には時々見られると書かれていました。

【糖尿病・腎臓病診療】　2003年7月より臨床検査科の仲子國典さんの熱意で糖尿病教育入院（1週間）パスが作成され開始。地域に向けて月1回の糖尿病教室（第1回：2003年10月18日）、腎臓病教室(第1回12月6日)を開始しました。5月1日健康増進法が施行されたので、院内の禁煙対策として8月29日より南大阪病院職員への愛の禁煙キャンペーンを行い9月1日より院内禁煙としました。また禁煙の啓発のため月1回の禁煙教室を開始しました。2005年の4月に糖尿病の患者会が発足しました。加賀屋の“かがや”と希望の“き”をとって「かがや

き会」としました。その活動の一つに7月23日に市民公開講座：生活習慣病教室を開きました。10月16日にはウォークラリーに参加しました（写真）。2006年には「かがやき会」の新聞の発行を開始しました。糖尿病教育入院の3日間コースを検査科の大仲一善課長補佐に作成していただきました。中核病院機能として病診連携強化のために2007年には第1回住之江糖尿病談話会（8月4日、大阪鉄道病院の北川良裕先生）、第1回南大阪フットケア研究会（11月7日：講師：大阪医療センターの東堂龍平先生）を開催しました。

【睡眠時無呼吸症候群】　睡眠時無呼吸症候群（SAS）の検査入院（1泊2日）の実施は検査科の山内一浩課長補佐らの努力により2004年6月より院内で開始し8月より院外を開始しました。ポリソノグラフィー検査は58件になりました。その内33件にCPAPが導入されました。川口先生には睡眠時無呼吸外来も開始していただきました。第66回アメリカ糖尿病学会（ワシントンDC、2006年6月12日）に「睡眠時無呼吸の動脈硬化進行におけるCD34+/CD45-細胞」で発表ができました。また川口先生は「睡眠時無呼吸症候群の重症度に対する首周囲径と内臓脂肪の異なった影響」で学位を取得されました。

【透析室の開設】　2003年就任と同時に透析室開設の準備を開始し上畠順次看護師主任、岩橋雅延臨床工学技士主任らの努力で2004年3月に管理棟の3階に開設でき4月より外来透析を開始しました。その後順調に透析患者数は増加し1年間の透析導入患者数は43名でした。2009年12月に当院の関連施設として南大阪クリニック透析センターを新規開設しました。

楠本看護部長にはいろいろご指導いただきました。学会発表でワシントンDCに行った時にご主人に現地で案内していただいたのはいい思い出です。入院稼働率が低く、地域医療推進室の森崎さんと開業医の先生の挨拶回りをしたのも懐かしく思います。宮越一穂院長には退院サマリーのチェックをしていただきいつも申し訳なく頭が下がる思いでした。副院長になって医療安全管理室長になった時は森雅子看護師に大変お世話になりました。病院で一番危険な医師が管理室長になったものですから。森田雅文先生には透析患者さんのシャントの手術をお願いし私も前立に入って手術をさせていただきました。放射線科の中島秀行部長のCT所見はすばらしいものでした。またいつも応援していただいていました。まだまだ多くの方にお礼を述べる必要がありますが私にとっての南大阪病院の7年はすばらしい思い出の時でした。ありがとうございました。

内藤景岳理事長経歴

景岳会創立者

内藤 景岳 理事長

1913年 1月23日 - 2001年 5月20日（享年89歳）
福井県今立郡今立町にて出生

章

1957年 9月25日　紺綬褒章
（教育施設寄付功労）
1976年 5月 3日　大阪府知事表彰
（公衆衛生事業功労）
1978年 7月29日　紺綬褒章
（教育施設寄付功労）
1979年 6月14日　厚生大臣表彰
（公衆衛生事業功労）
1979年11月 3日　藍綬褒章
（公衆衛生事業功労）
1980年 7月30日　紺綬褒章
（日本赤十字社大阪府支部
事業資金寄付功労）
1984年11月 3日　勲三等旭日中綬章
（保険衛生の功労）

学　　歴

1937年 3月10日	大阪高等医学専門学校卒業（現　大阪医科薬科大学）
1937年 4月 6日	医師免許証交付（医籍登録第82716号）
1941年 2月 1日～1950年11月30日	大阪大学医学部衛生学教室に入局
1950年11月10日	医学博士の学位を受く（大阪大学）

南大阪病院関係

1951年 1月 1日～1951年 4月30日	内藤病院開設　同病院長
1951年 5月 1日～1957年 6月30日	南大阪病院開設　同病院長
1957年 7月11日～1961年12月31日	総合病院南大阪病院　同病院長
1962年 1月 1日～2000年 9月19日	医療法人景岳会 総合病院南大阪病院に改組 理事長並びに病院長
1987年12月 1日～2000年 9月19日	南大阪総合健診センター(南大阪ファンクス)開設 同理事長

医 師 会 関 係

1953年 4月 1日～1963年10月31日	社団法人住吉区医師会会長
1956年 4月 1日～1966年 3月31日	社団法人大阪府医師会理事
1956年 4月 1日～1966年 3月31日	社団法人日本医師会代議員

病 院 会 関 係

1975年 4月 1日～1980年 3月31日	社団法人大阪府病院協会会長
1974年 8月 7日～1976年 3月31日	社団法人大阪府私立病院協会会長
1974年 8月 1日～1976年 3月31日	社団法人大阪府私立病院協同組合理事長
1962年 4月 1日～1972年 3月31日	社団法人全日本病院協会専務理事
1977年11月23日～1978年10月22日	第4回日本病院学会会長
1980年 4月 1日～1983年 3月31日	社団法人日本病院会会長
1980年 4月 1日～1983年 3月31日	アジア病院連盟会長　国際病院連盟会長
1981年 3月 1日～1983年 3月31日	日本病院団体連合会会長

社 会 福 祉 関 係

1994年 4月 1日～2001年 5月	社会福祉法人白寿会理事長

メディカル・フィットネス関係

1994年11月22日～2001年 5月	メディカル・フィットネス協会理事長

大阪医科大学・大阪医科大学仁泉会関係

1989年 4月 1日～1990年 6月30日	社団法人大阪医科大学仁泉会（同窓会）理事長

景岳会 History 過去～現在～未来へ

南大阪病院の誕生

昭和25年８月

戦時中軍需工場であった旧日本冶金工業株式会社跡地の一部（5,330.45㎡）を購入。
同年9月3日、大阪地方を襲ったジェーン台風に見舞われ建物も木端みじんに飛び散り、その形さえとどめなかった。
しかし持ち前の不屈の闘志をもって、荒野の中の廃墟を経済的困難と人心未だ和やかでない建設業者を駆使して復旧につとめ…

創立当時の正面入口より見た全景・門内の車は患者輸送車

1月 内藤医院として開院
4月 戦後の廃墟の中から今日総合病院南大阪病院の母体が完成。

5月1日(創立記念日)
南大阪病院と改称し、診療科目は内科、小児科、産婦人科、放射線科で病棟115床で開院。

3月 南大阪病院医学雑誌創刊

10月 産婦人科病棟を新築し病床数を145床に増床。

南大阪病院の誕生

昭和 26 年

病院の基礎造り

昭和 27 年

7月 設備構造の改築を行い、更に内臓外科、整形外科、呼吸器科、気管食道科を増設。

産婦人科病棟 新築

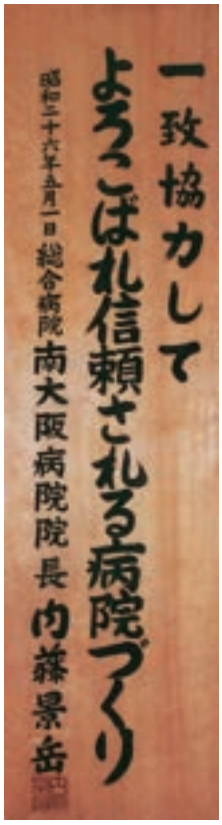
昭和 28 年

人間ドックを新設

昭和 29 年

11月 大阪市南区久左衛門町に分院並びに予防医学を主体とした老人医学研究所（成人病、人間ドック）を新設。

日本における人間ドックの創始者となる



新築になった産婦人科病棟（左側）

総合病院認可の頃

近くに建てられた職員寮「第２以誠寮」

大阪府下第１号の 総合病院

昭和32年7月　病棟の増築を行い、病床数を188床に増床し、創業以来わずか6年、総合病院として認可を受けた。大阪府第1次認可は7カ所（大阪市内4カ所、府下3カ所）であったが、その中で唯一の私立病院として異彩を放った。

職員宿舎を新築

昭和35年2月　医学の進歩に伴い老人医学研究所施設は狭隘となり、本院の成人病科に合併。

昭和36年4月　病院近くに職員宿舎を新築し、職員の厚生施設の改善をはかった。

昭和 32 年 — 昭和 34 年 — 昭和 35～36 年 — 昭和 36 年

地域医療に徹す

地域医療に徹する活動はすさまじいものであった。各科の診療は朝9時から夜8時まで（当初は9時まで）行われ、若手医師は中古の自転車にかばんを積んで交替で往診に走り廻っていた。

各種行事も活発

木造ながら病院としての機能を十分果たせるまでに整備されてくると、各種の行事等も活発となった。
南大阪病院新聞の発行。お産の教室、離乳食調理講習会の催物も定例の行事として軌道にのってきた頃である。

交通不便な地域を巡回した無料送迎バス

お産の教室

医療法人立　南大阪病院の表札

第 2 期工事完成（以誠寮の東側より）

規模が大きくなってくると、個人の運営はあらゆる面で運営が難しくなり、
昭和37年1月1日付
医療法人景岳会 総合病院南大阪病院に改組。

病床数240床に増床、又、各種保険医療機関の指定をうけ、基準給食、基準寝具の許可を受けた。

医療法人に改組

昭和 37 年 1 月

昭和 37 年 9 月

第 1 期鉄筋化工事(中央病棟)

昭和37年9月　新館（中央病棟）が落成し、鉄筋建築への幕開けとなった。

患者収容定員の増加をはかり、病床数を376床とした。

病院構内に鉄筋4階建の看護婦寄宿舎、講堂、図書室、会議室を新築し、看護婦収容数の増加と職員研鑽の場を設けた。

新たに消化器科、循環器科、皮膚泌尿器科、性病科、肛門科を増設。

第 2 期鉄筋化工事

昭和 40 年

昭和 41 年

第 3 期鉄筋化工事

中央病棟東側に冷暖房施設を有する鉄筋病棟の増築を完了し、病床数を438床に増床。リハビリテーション科を整形外科に併設。テレビレントゲン装置他各種レントゲン装置の近代化、産婦人科診察室、分娩室、新生児室、未熟児室、指導室を充実し、アレルギー科、聴力精密検査室を新設。

新館（中央病棟）落成の航空写真

第 3 期竣工後の病院全景

創立 15 周年記念式典で挨拶する内藤

准看護学院門札

創立 15 周年

『幸にして全職員の協力と各界の皆様のあたたかい御指導、御支援、ご協力によりまして、順調な発展をとげ、今日の満15周年を迎えることが出来ましたことは、誠に慶びに堪えないところでありまして、衷心より深く感謝いたす次第でございます。』
院長 内藤景岳
創立15周年記念史より

附属准看護学院の開校

4月 念願であった附属准看護学院を修業年限2年、入学定員20名、全寮制で開校し、看護教育のスタートを切った。開設当初、校舎を建設中であったため、南大阪病院10病棟の一部を仮校舎として授業を開始した。

昭和 41 年 ― 昭和 44 年 ― 昭和 45 年 4 月 ― 昭和 45 年 12 月

第 4 期鉄筋化工事(東病棟)

旧第 1 病棟の解体、患者移動に苦労を重ね昭和44年に東病棟が竣工した。
この棟には地階に厨房の他コバルト治療室、1階に臨床検査室、中央材料室、病理解剖室、礼拝堂、宿直室、2、3、4階は病室、5階に大手術室と研究室、6階には発電機が設置された。

第 5 期鉄筋化工事(南病棟)

旧木造外来診察室、リハビリテーション科、第1病棟・第5病棟、厨房等を解体し、地下1階、地上7階、延5,940㎡で、患者輸送用エレベーターを有する南病棟を新設。南病棟完成により延16,500㎡、総病床数700床を有する近代的総合病院としてその機能が十分発揮できるよう整備された。

第 4 期工事完成（東病棟：写真右奥）

南病棟　正面玄関付近

全館完成した病棟全景

高等看護学院入学式

鉄筋化を企画し、10年を6期に分割し、診療に支障を来さないよう配慮して工事を進め、9月30日全館鉄筋化の整備を完了。病床650床の近代病院として、又新しい時代にふさわしい医療施設をもった病院として、地域の皆様から「よろこばれる病院」づくりに更に新たな努力を傾注する決意をかためる。

第６期鉄筋化工事(管理棟)

昭和 46 年

南大阪高等看護学院を修業年限3年、全日制、入学定員25名、全寮制として開校し、同時に准看護学院の生徒募集を休止した。

南大阪高等看護学院開校

昭和 48 年

創立 20 周年

昭和 46 年

創立20周年を迎えて
『今日まで20年間、各大学はじめ各界の皆様のご支援ご協力と、当院職員の皆様の一方ならぬご協力によりまして、今日を迎えることが出来ましたことは感慨無量のものがあります。』
院長 内藤景岳
創立20周年記念史より

南大阪看護専門学校移転

昭和 51 年

南大阪高等看護学院は教育の充実をはかるため病院近郊に用地を求め移転し、又、名称を南大阪看護専門学校とした。同時に南大阪看護専門学校第2部（進学コース）を同年9月に開校した。

創立20周年・全館竣工記念式典

南大阪看護専門学校　全景

完成した看護婦寮

南大阪学園地鎮祭

昭和 52 年 第一看護職員寮建設

看護専門学校を卒業し、職員として第一線に立つようになると、看護職員寮が不十分となり、病院と道路をへだてた場所に看護職員寮（地上4階、収容人員100名）を建設した。

昭和 53 年 南大阪健診センター開設

大阪市南区久左衛門町に南大阪健診センターを開設し、自動化された各種の最新鋭医療機器とコンピューターを高度に利用して、3時間人間ドックとして成人病などの健康診断を行い、検査項目は60種に及び、成人病の早期発見等、健康管理に努め、予防から治療への一貫体制を整えた。

昭和 54 年 南大阪学園建設計画

南大阪病院創立30周年を記念して、南大阪学園（南大阪看護専門学校並びに南大阪臨床検査技師専門学校）の建設が計画され、南大阪看護専門学校敷地に建設が始まった。
すでに教育中の看護専門学校（第1部・第2部）は一時病院内の設備に移転した。

昭和 55 年 南大阪学園竣工

新校舎の竣工により、南大阪看護専門学校第1部の入学定員を50名に増員、南大阪臨床検査技師専門学校修業年限3年入学定員40名を併設し、南大阪学園と改称した。

南大阪健診センター　全景

南大阪学園　全景

挨拶する内藤院長

屋上に「救急病院」の標識

昭和 56 年 創立 30 周年

創立30周年記念事業として建設した南大阪学園も竣工した。
『病院創立以来幾多の困難にも遭遇したが、今日の発展を見ることが出来たのは、病院長以下職員一同のたゆまぬ努力と各位の絶大なるご支援・ご協力の賜である。』

昭和 57 年 特定医療法人へ

地域の中核病院としてこの施設を末永く社会に存続させ、より一層地域医療に貢献するため医療法人景岳会を租税特別措置法第67条の2第1項の規程による特定医療法人の認可を得た。

昭和 59 年 救急医療科の拡張改善

地域中核病院としての責務を十二分に課し、24時間救急体制に万全を期すため救急医療科を拡張改善した。

第二看護婦寮（コーポ双葉）建設
（昭和59年2月竣工、定員70名）

コーポ双葉

昭和 62 年 総合健診センター開設

南大阪病院南隣りに敷地面積2,554.90㎡（日本セメント株式会社所有地）を買収し、従来の予防医学（人間ドック）に健康医学（スポーツ施設）を取り入れた南大阪総合健診センターを開設。
「全国第1号厚生省認定健康増進施設」「労働省認定労働者健康保持増進サービス機関」にそれぞれ認定された。

南大阪病院全景、下手は看護婦寮

南大阪総合健診センターと南大阪病院

サウスタワーパーキング

白寿苑

南大阪立体駐車場

自家用車の普及により従来の来院患者の駐車場を立体駐車場（197台収容）に建替えを行い患者の便宜に供した。

社会福祉法人白寿会設立

特別養護老人ホーム100床、ケアハウス40床、ショートステイ20床、デイサービス事業1日15名、在宅介護支援センター及び機能回復訓練室（リハビリテーション）を有し、地域の皆様に開かれた施設、利用者の方々の生活の場として、在宅福祉の増進に寄与していく施設として設立。

平成2年(1990)　平成3年(1991)　平成6年(1994)　平成8年(1996)

創立40周年

創立40周年記念史を発刊。
病院創立40年の歴史の流れには幾多の変遷があり歴史の大網がわかるよう
第一部：内藤景岳院長医師生活55年
第二部：総合病院南大阪病院
第三部：南大阪学園(別冊)
第四部：南大阪総合健診センター(別冊)
で構成された。

看護師寮の建設

平成4年、第三看護師寮（イーストハウス）建築に次いで、平成8年には北加賀屋駅近くに第四看護師寮（さくら荘）を建築。立地がよく、毎年、新入職員の見学希望が多く、2023年現在も利用されている。

創立40周年記念史

平成４年イーストハウス、平成８年さくら荘　竣工

事業所入口

住み慣れた自宅で利用者の希望に添った、安心の療養生活が送れるよう24時間サポート体制で運営している。

訪問看護ステーション開設

病院創立50周年記念旗

5月　創立50周年および内藤景岳院長医師生活65年を記念し、小冊子を発刊。
また、記念旗も制作された。

創立 50 周年

受審時最終日全体講評

審査は2003年10月8日～10日の3日間にわたって行われ、2005年4月25日、バージョン4.0の認定を受けた。

その後、５年毎に更新されている。
2010年　バージョン6.0
2015年　3rdG:Ver.1.0
2020年　3rdG:Ver.2.0

日本医療機能評価機構認定

平成 9 年(1997)
平成 12 年(2000)
平成 12 年(2000)
平成 17 年(2005)
平成 17 年(2005)

介護支援事業所開設

4月　居宅介護支援「南大阪ハッピーセンター」開設。
ケアプランの作成を行い、施設入所をお手伝いします。
6月　訪問介護「南大阪ヘルパーステーション」開設。
ご家庭へお伺いして、日常生活の支援をサポートいたします。

臨床検査技師専門学校閉校

昭和55年（1980）開校後、平成17年（2005）閉校まで、卒業生は第1期生から第23期生まで、総勢701名となった。

病院機能評価認定シンボルマーク

事業所入口

南大阪学園全景

当時のホームページ

透析センター

南大阪病院建替え工事着工

建物の老朽化に伴い、これからも地域医療のニーズに対応していくため現地での建替えを決定し工事着工した。

透析センター開設

南大阪病院の建替えに伴い、病院内で20床運営していたのを併せて総合健診センターの2階にクリニックとして40床新設し、運営を開始した。

平成 20 年(2008)　平成 21 年(2009)　平成 21 年(2009)　平成 22 年(2010)1 月

総合健診センター新築移転

南大阪病院の建替えに伴い、南大阪看護専門学校に隣接した敷地に新築移転、運営を開始した。

社会医療法人の認定

南大阪病院開設以来地域医療を守るという使命の元、今後もより質の高い医療を地域に提供し続け、更なる社会貢献を行っていくため社会医療法人の認定（救急医療）を受け、法人名を社会医療法人景岳会に変更した。

1階：総合健診センター、　2・3階：つむぎ苑

認定証

南大阪病院附属リハビリテーションクリニック

日本医療機能評価機構

日本医療機能評価機構より、2010年3月に受審したバージョン6.0の病院機能評価の認定証が届く。当院は平成17年にバージョン4.0の認定を受けており、今回は更新年であった。認定期間は2010年4月25日から2015年4月24日までの5年間である。

平成 22 年(2010)9 月

リハビリクリニック開設

外来専用のリハビリテーション施設として、整形外科疾患や脳血管疾患などの運動療法やADLの改善に努める施設として運営している。また、介護保険に対応した通所リハビリテーションも運営している。

平成 24 年(2012)

本館完成

平成23年10月31日に本館が完成し建物の引渡しを受けた。平成25年12月25日に旧病院から入院患者を移動し本館での運営を開始した。また、外来棟が完成するまでの間、本館5階病棟フロアーを仮設外来として運営を開始した。

平成 24 年(2012)

旧病院解体工事開始

新病院本館が完成し運営を開始したため、旧病院の解体工事を行い、外来棟の建設を開始した。

平成 24 年(2012)

新病院と旧病院

旧病院解体工事

竣工式典・祝賀会

本部棟

平成25年9月に外来棟建物が完成引渡しを受け、平成25年10月14日に外来棟にて外来診療を開始した。

外来棟竣工

平成 25 年(2013)

平成 26 年(2014)

新病院全面完成

外来棟の運営開始後、仮設外来で使用していた本館5階フロアーを病棟に改修し、400床の運営となった。また、駐車場、植栽等外構工事も終了し約5年6カ月にわたる南大阪病院の建替え工事が完了した。

外来棟の4階を30床の透析室に変更するため、旧サウスタワーパーキング跡地に本部事務所を建築し法人本部、総務部等が移転した。

本部事務所新築移転

平成 31 年(2019)

令和元年(2019)

外来透析室の開設

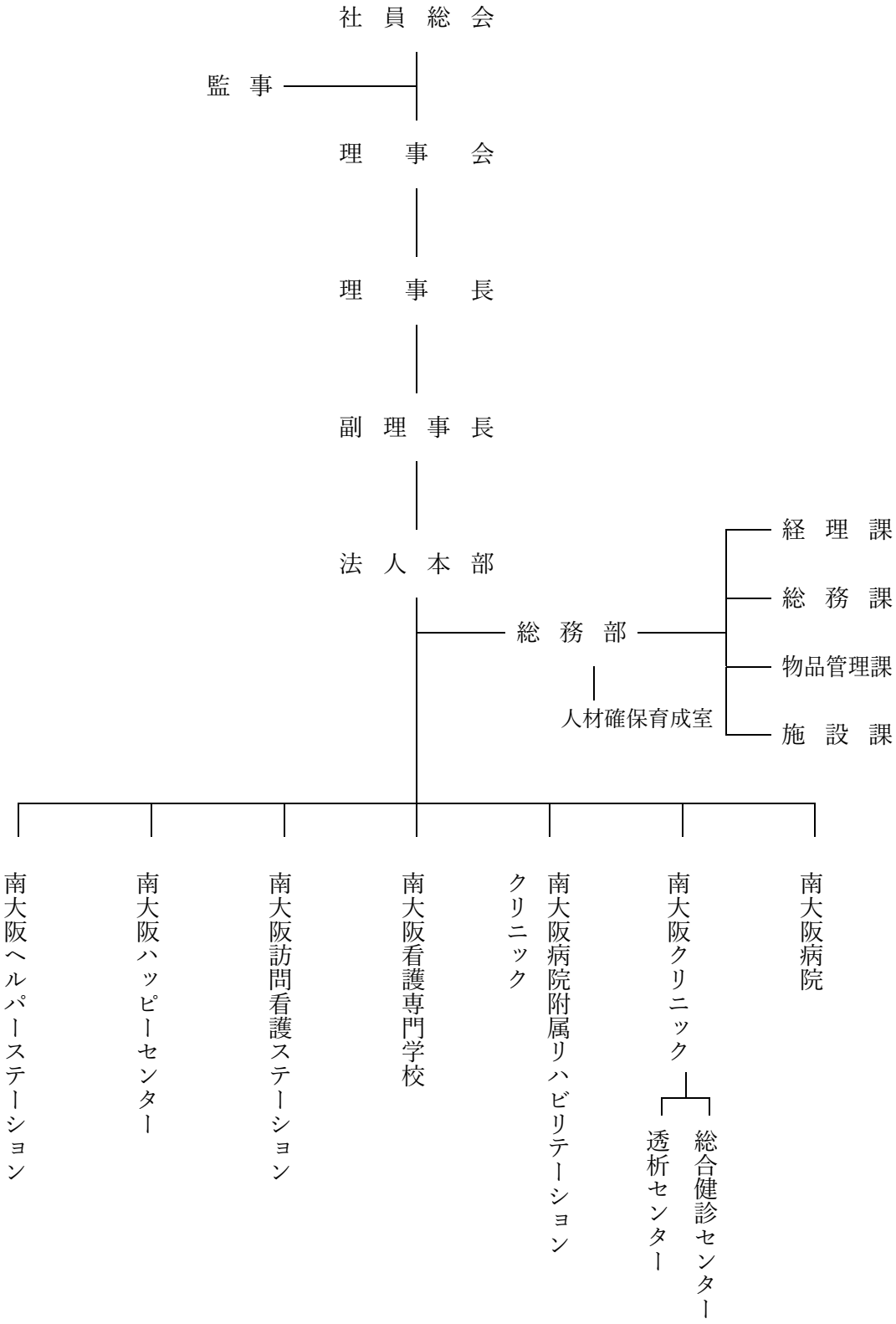
外来棟の4階フロアーを改修し、30床の外来透析室の運営を令和1年10月に開始した。

新病院（本館および外来棟）全景

外来 4 階透析室

社会医療法人景岳会組織図

（2023年5月1日現在）



社会医療法人景岳会年表

1951(S.26) 年 1月　内藤病院として病院開設（大阪市住吉区北加賀屋町51番地）　病床数 115床
（診療科目：内科、小児科、産婦人科、放射線科）
1951(S.26) 年 5月　病院名称変更〈名称　南大阪病院〉
所在地名変更〈大阪市住吉区東加賀屋町1丁目60番地〉
（診療科目：内科、小児科、外科、耳鼻咽喉科、眼科、産婦人科、放射線科）
1951(S.26) 年 9月　労災指定病院
1952(S.27) 年10月　診療科目増設による増改築
1953(S.28) 年10月　産婦人科病棟　新築　145床
1954(S.29) 年11月　南大阪病院　難波分院　老年医学研究所　開設
1957(S.32) 年 7月　総合病院として認可、病棟増築　188床
1960(S.35) 年 2月　南大阪病院　難波分院　老年医学研究所　廃止
1961(S.36) 年 4月　看護婦寄宿舎　増築
1961(S.36) 年11月　一般病棟のうち52床を結核病棟として独立
1961(S.36) 年12月　法人組織に改組　医療法人景岳会　設立
1962(S.37) 年 1月　医療法人景岳会・総合病院南大阪病院　各種保険医療機関の指定
1962(S.37) 年 9月　病棟増築〔第一期工事〕　376床
1963(S.38) 年 9月　原子爆弾被爆者の一般疾病医療機関に指定
1965(S.40) 年 8月　救急病院に指定
1965(S.40) 年 9月　看護婦寄宿舎増築〔第二期工事〕（一部講堂・会議室・図書室）
1966(S.41) 年 5月　南大阪病院　創立15周年
1966(S.41) 年 8月　病棟増築〔第三期工事〕 438床
1969(S.44) 年 7月　南大阪病院附属准看護学院寮　購入
1969(S.44) 年 9月　病棟増築〔第四期工事〕（一部厨房・臨床検査室・中央材料室・手術室）　499床
1970(S.45) 年 4月　南大阪病院附属准看護学院　開校
1970(S.45) 年12月　病棟増築〔第五期工事〕（一部診察室・薬局）、結核病棟　廃止　575床
1971(S.46) 年 5月　南大阪病院　創立20周年
1971(S.46) 年 6月　南大阪病院内保育所　開設
1971(S.46) 年 9月　管理棟増築〔第六期工事〕（一部、准看護学院教室）　650床
1973(S.48) 年 3月　南大阪病院附属准看護学院　廃校
1973(S.48) 年 4月　南大阪高等看護学院（一部）新設
1976(S.51) 年 6月　南大阪高等看護学院　移転

1976(S.51) 年10月　南大阪高等看護学院（二部）開校、南大阪看護専門学校に改称
1977(S.52) 年 3月　看護婦寄宿舎　増築
1978(S.53) 年11月　南大阪健診センター　開設
1979(S.54) 年 4月　南大阪看護専門学校　新改築、
南大阪臨床検査技師専門学校　工事着工
1980(S.55) 年 2月　南大阪看護専門学校・南大阪臨床検査技師専門学校　落成
1980(S.55) 年 4月　南大阪臨床検査技師専門学校　開校
1980(S.55) 年 5月　南大阪病院　創立30周年
1982(S.57) 年 3月　特定医療法人認可
1984(S.59) 年 4月　南大阪看護専門学校准看護学科　開校、看護婦寄宿舎　増築
1987(S.62) 年12月　南大阪総合健診センター（南大阪ファンクス）開設〔第七期工事〕
（全国第一号校正大臣認定健康増進施設）
1990(H. 2) 年10月　南大阪立体駐車場（サウスタワーパーキング）開設
1991(H. 3) 年 5月　南大阪病院　創立40周年
1996(H. 8) 年 2月　保険法により病床数610床から580床へ変更
1996(H. 8) 年 5月　南大阪病院　創立45周年
1996(H. 8) 年 7月　看護婦寮（マンション形式）「さくら荘」竣工
1997(H. 9) 年 3月　南大阪訪問看護ステーション 開設
1998(H.10)年 3月　人工透析治療開始
1998(H.10)年10月　大阪市立大学 協力型臨床研修病院に指定
2000(H.12)年 4月　南大阪ハッピー・センター（居宅介護支援事業所）　開設
2000(H.12)年 7月　南大阪ヘルパーステーション　開設
2000(H.12)年 9月　南大阪病院　療養病棟稼働（75床）　病床数580床から535床へ変更
2000(H.12)年10月　南大阪病院　院外処方箋　全面運用開始
2001(H.13)年 2月　南大阪病院　一般病棟　看護体系変更　3：1看護→2.5：1看護
2001(H.13)年 5月　南大阪病院　創立50周年
2001(H.13)年 9月　南大阪総合健診センターのうち健康開発増進部門・健康教育指導部門　廃止
（通称：ファンクス）
2005(H.17)年 3月　南大阪臨床検査技師専門学校　廃止
2005(H.17)年 4月　日本医療機能評価機構 認定
2007(H.19)年 3月　南大阪看護専門学校　准看護学科　廃止
2008(H.20)年 4月　ＤＰＣ対象病院

2008(H.20)年12月　南大阪病院　建替え工事　着工

2009(H.21)年 2月　一般病棟入院基本料　10対1　7棟426床

回復期リハビリテーション病棟入院料1　37床

2009(H.21)年 3月　一般病棟入院基本料　10対1　6棟388床

亜急性期入院医学管理料1　1棟38床

2009(H.21)年11月　南大阪クリニック　総合健診センター 新築移転（南大阪看護専門学校　隣）

2009(H.21)年12月　南大阪クリニック　透析センター開設（40床）

2010(H.22)年 1月　社会医療法人に認定（救急医療）　法人名を社会医療法人景岳会に変更

2010(H.22)年 4月　大阪府がん診療拠点病院に指定

2010(H.22)年 9月　日本医療機能評価機構 Ver.6.0　更新認定

2011(H.23)年 5月　南大阪病院　創立60周年

2011(H.23)年10月　南大阪病院　建替え工事　本館（12階建）完成　建物引渡し

2011(H.23)年12月　南大阪病院　本館　移転運営開始　病床数400床

※外来棟が完成するまでの間、5階病棟フロアーを仮設外来として運営　350床運用

2012(H.24)年 1月　南大阪病院附属リハビリテーションクリニック 新規開設

旧南大阪病院　解体工事開始

2012(H.24)年 7月　南大阪病院　建替え工事　外来棟着工

2013(H.25)年 9月　南大阪病院　外来棟完成　建物引渡し

2013(H.25)年10月　南大阪病院　外来棟　運営開始

2014(H.26)年 6月　南大阪病院　新病院全面 完成（駐車場、外構整備）

2014(H.26)年 8月　地域包括ケア病棟 開設　（48床）

※病床数　急性期一般入院料4　302床、地域包括ケア病棟　48床、

回復期リハビリテーション病棟　42床、ＨＣＵ　8床　合計400床

2015(H.27)年 4月　心療内科　開設

2015(H.27)年 5月　日本医療機能評価機構　3rdG:Ver.1.0　更新認定

2019(H.31)年 3月　社会医療法人景岳会　本部事務所　新築移転

ＭＲＩ装置（3.0テスラ）　更新入れ替え

2019(R. 1)年10月　南大阪病院　外来透析室　（30床）　開設

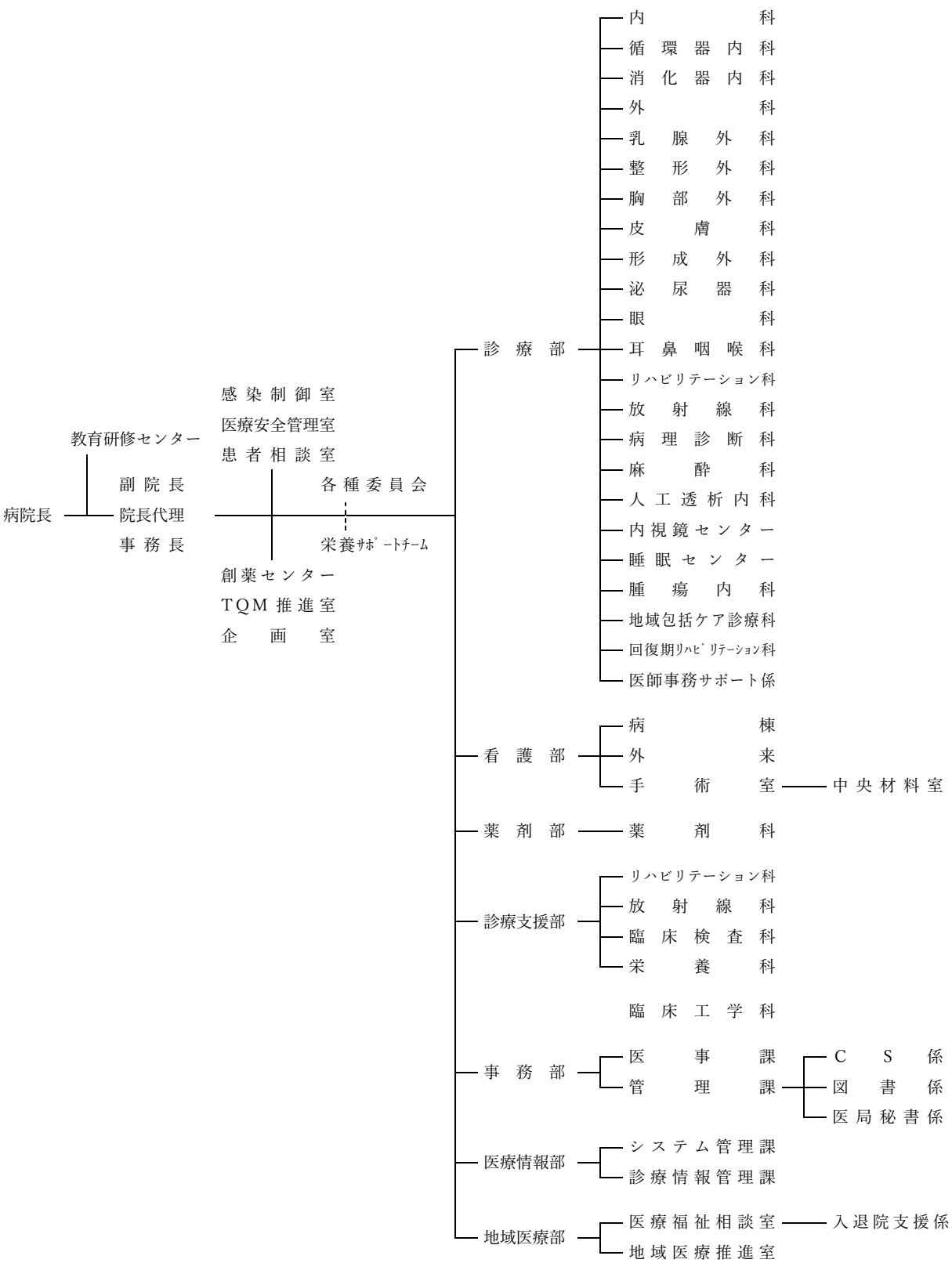
2020(R. 2)年 5月　形成外科　開設

2020(R. 2)年 5月　日本医療機能評価機構　3rdG:Ver.2.0　更新認定

2021(R. 3)年 5月　南大阪病院　創立70周年

社会医療法人景岳会　南大阪病院組織図

（2023年5月1日現在）



病院の概要

1．病院概要

名　　称	社会医療法人景岳会南大阪病院
所 在 地	〒559-0012　大阪市住之江区東加賀屋1丁目18番18号
病院創設	昭和26年5月1日
開 設 者	理事長　柿本祥太郎
管 理 者	院長　福田隆
敷地面積	8,862.31㎡
建築面積	3,013.96㎡
延床面積	23,253.91㎡
構　　造	RC造、一部S造、地上12階、塔屋1階
許可病床数	400床（一般302床、HCU8床、地域包括ケア病床48床、回復期リハビリテーション病床42床）
診療科目	総合内科、一般内科、糖尿病内科、腎臓病内科、リウマチ内科、腫瘍内科 神経内科、心療内科、甲状腺内科、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科 乳腺外科、泌尿器科、一般外科、肝胆膵外科、上部消化管外科、下部消化管外科 胸部外科、心臓血管外科、整形外科、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科、形成外科 麻酔科、放射線科、リハビリテーション科、病理診断科、臨床検査科
専門・特殊外来	内　　科：糖尿病指導外来、シャント外来、睡眠時無呼吸外来、禁煙外来 地域包括ケア外来、減量外来 消化器内科：肝炎外来、ピロリ菌外来 乳腺外科：術後外来 泌尿器科：術前術後外来 外　　科：緩和外来、減量外来、女性外科専用外来
各種指定	健康保険指定医療機関、生活保護法指定病院 国民健康保険指定医療機関、義肢採型指導医 救急指定病院、更生医療指定医療機関 労災指定病院、指定小児慢性特定疾病医療機関 結核指定医療機関、大阪府特定疾患契約医療機関 大阪府がん診療拠点病院、臨床研修病院（協力型）
救急医療	二次救急指定医療機関
教育指定 学会認定等	日本内科学会教育関連病院 日本糖尿病学会認定教育施設Ⅰ 日本腎臓学会認定教育施設 日本透析医学会専門医制度認定施設 日本消化器内視鏡学会専門医制度指導施設 日本消化器病学会認定施設 日本消化管学会胃腸科指導施設 日本循環器学会認定循環器専門医研修施設 日本高血圧学会専門医認定施設 日本消化器外科学会専門医制度指定修練施設

教育指定 学会認定等	日本外科学会外科専門医制度修練施設 日本気管食道科学会認定専門医研修施設 日本食道学会全国登録認定施設 日本食道学会食道外科専門医認定施設 日本腹部救急医学会腹部救急認定医・教育医制度認定施設 日本胸部外科学会認定研修施設 日本整形外科学会専門医研修施設 日本リウマチ学会認定教育施設 日本超音波医学会超音波専門医研修施設 日本乳癌学会認定医・専門医制度認定施設 日本皮膚科学会専門医研修施設 日本泌尿器科学会専門医教育施設 日本眼科学会専門医制度研修施設 日本輸血・細胞治療学会認定輸血検査技師制度指定施設 日本臨床細胞学会認定施設 日本麻酔学会認定病院 日本病理学会登録施設 協力型臨床研修病院 臨床研修協力施設（回復期リハビリテーション病棟） 看護学生教育実習施設 日本栄養療法推進協議会NST稼働施設 日本臨床栄養代謝学会NST稼働施設 日本臨床栄養代謝学会栄養サポートチーム（NST）専門療法士認定教育施設 日本健康・栄養システム学会臨床栄養士研修施設 日本医療機能評価機構認定病院 日本乳がん検診精度管理中央機構マンモグラフィ画像認定施設 日本医学放射線学会画像診断管理認証施設 日本形成外科学会教育関連施設 日本乳房ｵﾝｺﾌﾟﾗｽﾃｨｯｸｻｰｼﾞｬﾘｰ学会ｲﾝﾌﾟﾗﾝﾄ・ｴｷｽﾊﾟﾝﾀﾞｰ実施施設
施設基準	ア.基本診療料等施設基準等 急性期一般入院4、診療録管理体制加算1、医師事務作業補助体制加算1(30対1)、急性期看護補助体制加算（25対1)、看護補助体制充実加算、療養環境加算、地域医療体制確保加算、救急医療管理加算、緩和ケア診療加算、せん妄ハイリスク患者ケア加算、栄養サポートチーム加算、医療安全対策加算1・医療安全対策地域連携加算1、感染対策向上加算1・連携強化加算、患者サポート体制充実加算、報告書管理体制加算、術後疼痛管理チーム加算、後発医薬品使用体制加算1、病棟薬剤業務実施加算1、データ提出加算2、入退院支援加算1・入退院支援加算の注8に掲げる総合機能評価加算、認知症ケア加算2、ハイケアユニット入院医療管理料1、回復期リハビリテーション病棟入院料2・体制強化加算1、地域包括ケア病棟入院料2、排尿自立支援加算 看護職員処遇改善評価料46

施　設　基　準	イ.特掲診療料等施設基準等 心臓ペースメーカー指導管理料の注5に規定する遠隔モニタリング加算、糖尿病合併症管理料、がん性疼痛緩和指導管理料、がん患者指導管理料（イ）（ロ）（ハ）（二）、糖尿病透析予防指導管理料、院内トリアージ実施料、二次性骨折予防継続管理料1、二次性骨折予防継続管理料2、二次性骨折予防継続管理料3、夜間休日救急搬送医学管理料の注3に掲げる救急搬送看護体制加算1、外来腫瘍化学療法診療料1、ニコチン依存症管理料、開放型病院共同指導料、外来排尿自立指導料、がん治療連携計画策定料、肝炎インターフェロン治療計画料、薬剤管理指導料、医療機器安全管理料1、持続血糖測定器加算及び皮下連続式グルコース測定、遺伝学的検査、BRAC1/2遺伝学的検査、検体検査管理加算（Ⅰ）（Ⅳ）、時間内歩行試験及びシャトルウォーキングテスト、ヘッドアップティルト試験、CT透視下気管支鏡検査加算、画像診断管理加算2、CT撮影及びMRI撮影、冠動脈CT撮影加算、心臓MRI撮影加算、乳房MRI撮影加算、抗悪性腫瘍剤処方管理加算、外来化学療法加算1、無菌製剤処理料、心大血管疾患リハビリテーション料（Ⅰ）、脳血管疾患等リハビリテーション料（Ⅰ）、運動器リハビリテーション料（Ⅰ）、呼吸器リハビリテーション料（Ⅰ）、がん患者リハビリテーション料、集団コミュニケーション療法料 、エタノールの局所注入（甲状腺）、エタノールの局所注入（副甲状腺）、人工腎臓・人工腎臓の導入期加算1・透析液水質確保及び慢性維持透析濾過加算・下肢末梢動脈疾患指導管理加算、組織拡張器による再建手術（乳房（再建手術）の場合に限る）、緊急整復固定加算及び緊急挿入加算、脊髄刺激装置植込術及び脊髄刺激装置交換術、乳がんセンチネルリンパ節加算1及びセンチネルリンパ節生検（併用）、乳がんセンチネルリンパ節加算2及びセンチネルリンパ節生検（単独）、ゲル充填人工乳房を用いた乳房再建術（乳房切除後）、経皮的冠動脈形成術（特殊カテーテルによるもの）、ペースメーカー移植術及びペースメーカー交換術、大動脈バルーンパンピング法（IABP法）、腹腔鏡下胃縮小術（スリーブ状切除によるもの）体外衝撃波胆石破砕術、腹腔鏡下肝切除術、早期悪性腫瘍大腸粘膜下層剥離術、体外衝撃波腎・尿管結石破砕術、腹腔鏡下膀胱悪性腫瘍手術、腹腔鏡下小切開膀胱悪性腫瘍手術、人工尿道括約筋植込・置換術、輸血管理料Ⅰ・輸血適正使用加算、自己生体組織接着剤作成術、人工肛門・人工膀胱造設術前処置加算、胃瘻造設術、胃瘻造設時嚥下機能評価加算、麻酔管理料（Ⅰ）、病理診断管理加算Ⅰ、悪性腫瘍病理組織標本加算、医科点数表第2章第10部手術の通則の16に掲げる手術 ウ.入院時食事療養費 入院時食事療養（Ⅰ）、特別食加算

2．建物の概要及び用途

入院棟本館	
12 階	回復期リハビリテーション病棟
11 階	循環器センター、胸部外科 心大血管リハビリテーション室
10 階	腎・代謝センター、泌尿器科、透析治療室
9 階	整形外科、眼科
8 階	内科、整形外科、耳鼻咽喉科、形成外科 皮膚科
7 階	消化器センター（消化器内科・外科）
6 階	消化器センター（消化器内科・外科） 乳腺外科
5 階	地域包括ケア病棟
4 階	手術室、HCU
3 階	生理機能検査室、検体検査室、放射線科 地域医療部、外来治療室、病理診断科
2 階	看護部、薬剤部、栄養科、医療情報部 臨床工学科、物品管理課
1 階	救急外来、防災センター

外来棟
外来透析室
内科、消化器内科、外科、整形外科 内視鏡センター、点滴・処置室
総合内科、循環器内科、乳腺外科、胸部外科、 心臓血管外科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、眼科、 皮膚科、形成外科
総合案内、患者相談室、医事課 情報コーナー

3．設備の概要

電気設備	受電方式／入院棟：本線・予備電源の2回線受電、外来棟：高圧1回線受電 変圧器容量／入院棟：3,500kVA、外来棟：830kVA 予備電源／入院棟：非常用発電機 6.6kV 700kVA 外来棟：非常用発電機 200V 150kVA
空調設備	空調方式／中央式＋個別分散方式、 熱源／吸収式冷温水発生機＋空冷パッケージエアコン
衛生設備	給水／加圧給水方式、給湯／中央式＋局所式併用（ガス／電気） 排水／重力式＋ポンプアップ式、特殊排水処理設備
防災設備	消火／スプリンクラー設備　排煙／自然排煙、機械排煙
昇降機	入院棟：一般乗用×2基、寝台用×2基、人荷用×2基（うち1基は非常用） 小荷物専用×3基 外来棟：一般乗用×2基、人荷用×1基
特殊設備	医療ガス設備、特殊排水処理設備

4．新病院建築計画

― 運営しながらの現地建替

南大阪病院は、日本病院会の会長も務めた内藤景岳氏が昭和26年に設立し、大阪市南部における民間の地域基幹病院として最大560床の規模で隆盛を誇った。医療環境の目まぐるしい変化の中、当病院も老朽化・狭隘化が顕著となり、さらなる医療ニーズに応えていくため、新病院への建替えを迫られていた。追い打ちを掛けるように2000年の医療法大改正によって病床維持も困難となったが、既存敷地は増改築を繰り返し、建替の余地も無く、移転新築を中心に検討がなされてきた。しかしながら、創業の地で地域医療を守り続けたいという病院側の強い意向がある中、公道を挟んだ2つの敷地を一団地型総合設計・上空通路許可申請等を活用し一体的に整備するという現地建替手法を提案することにより、66カ月に及ぶ長い工事期間ではあったが、病院運営を継続しながら、新たに400床の急性期病院として生まれ変わることができた。

― 外来の分棟化

2つの敷地を一体的に整備する中で、北側敷地に外来を分棟化して建設し、南側敷地の入院棟と公道上の3階で上空通路接続する構成とした。これに合わせ、放射線科・生理検体検査部門などの外来入院双方に必要な診療検査機能を入院棟3階の要の位置に配置することで、機能性を担保しつつ、明快に外来・入院の患者動線を分離した。この形態は、アメリカ型のMOB（Medical Office Building）を想起させる機能分化を体現しており、「機能的で明快なゾーニング」を実現している。

— 分かりやすい平面計画

コンパクトに設計することは、明快なゾーニングと動線の短縮が必要条件であり、結果、患者やスタッフにとって分かりやすい病院を実現することに繋がると考え、「高効率でコンパクトな分かりやすい病院」の実現を目指した。入院棟1階には救急部門が位置しており、敷地の形状をうまく利用し、時間外と救急車の出入口を明快に分離している。2階には厨房・薬剤などの供給部門と医局等の管理部門、3階に放射線科・生理検体検査室等の検査部門、4階に手術・HCU（重症者ケアユニット）、5〜12階は病棟と、外来の分棟化に加え、階毎に明確に機能を分化している。また、各階を用途毎の縦動線（EV）で直結させることで、要求される部門間の連携を効率的に実現できる計画としている。更に、外来や病棟など幾つかの階を跨ぐゾーンは、階毎にテーマカラーを設定し、視覚的にも認知できる分かりやすさを追求した。

— 周辺環境との調和・融合

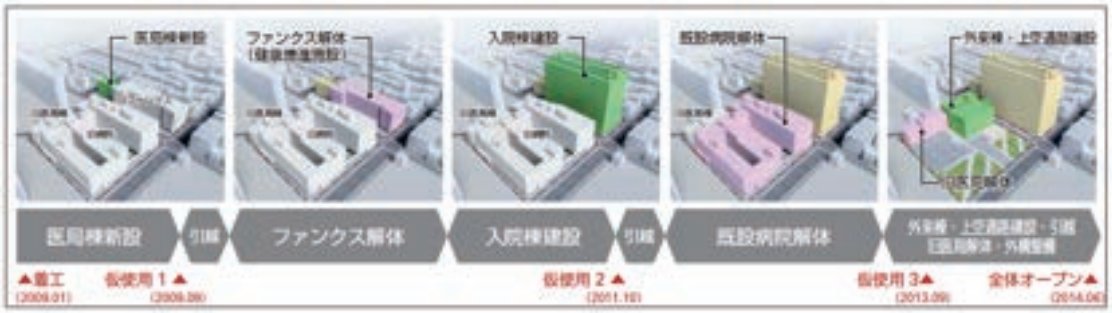
外構の公開空地と敷地西側の都市計画公園の空間、さらには外来棟の屋上緑化を含めた緑のネットワークを連続させるように計画し、公開空地を取り囲むように棟配置を行うことで、周辺環境との調和・融合を図ると共に、外来棟西面のフルハイトの窓から明るい日差しと連続した緑を望める快適な待合空間を演出している。

— 病棟計画

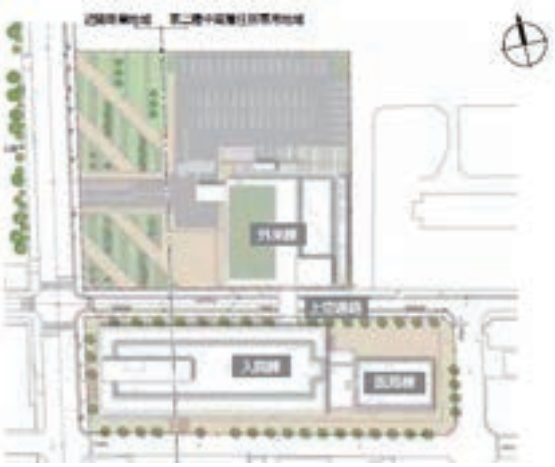
基準病棟は、1フロアー1看護単位50床とし、ダブルコリドー型で中心にスタッフステション（SS）を配置することで、病棟全体を効率的に看視できる構成としている。暖かい日差しの入る南面に4床室群、安定的な環境光が得られ公開空地に開ける北側に個室群を配置する計画としている。ハンディーキャップトイレ3室とは別に、4床室間には廊下からアプローチできる分散トイレを設置し、介助可能な広さの確保と左右勝手のバリエーションを揃えることで、患者の肢体の状況によって選択できる範囲を拡充し、ストレス低減と早期離床の促進を期待している。周辺に高い建物の少ない中、5〜12階の高層部に位置する病棟部分には、全周バルコニーとこれに繋がるフルハイトの掃き出し窓を設置しており、明るい療養環境と高い安全性を実現している。

— 将来対応

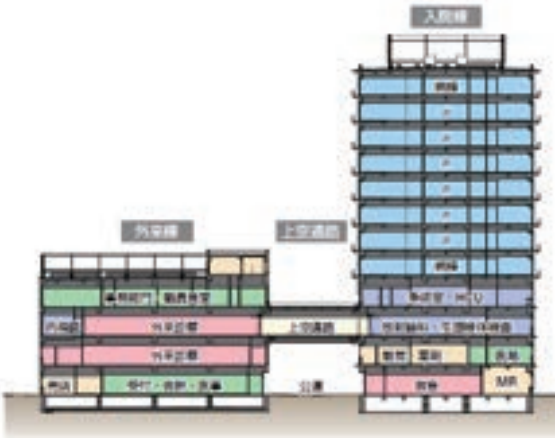
HCU（重症者ケアユニット）はICU（集中治療室）への転換が可能なハードで整備しており、メーカーと協働して個室にも総室にも転換できるノンレールアルミ製折戸を開発することで利便性の向上を図った。構造は鉄筋コンクリート造の純ラーメンで構成しており、内外装を乾式で設けたスケルトンインフィル形式とすることと、総合設計による割増容積に余裕を持たせることで、将来的な改修・増築への容易な対応を可能としている。また、北側敷地に公開空地を含めた大きな空地を確保することで、長期的な視野に立った次回現地建替計画の可能性を残す計画とした。（吉本正樹／大林組『近代建築』2014年11月号）



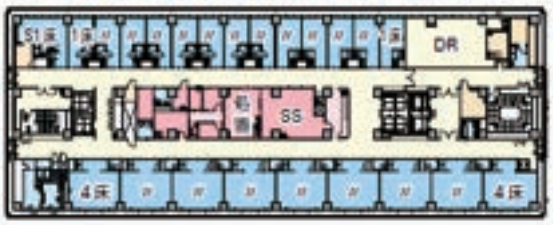
建替プロセス　運営しながらの現地建替（工期：66カ月）



配置図　縮尺 1/2,500



断面図　縮尺 1/1,000



基準階平面図

12 階平面図

3 階平面図

4 階平面図

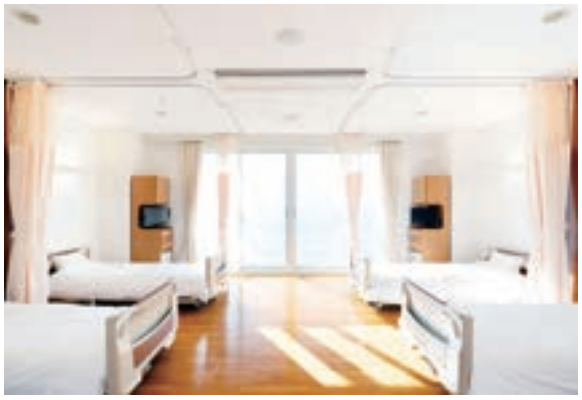
1 階平面図　縮尺 1/1,500

2 階平面図　縮尺 1/1,500

左／北西側の都市計画公園等の空間の広がりを受け止めるような建物配置
右／屋上庭園・公開空地・都市計公園へと連続する緑のネットワーク

左／外来棟受付・会計待合ホール　西面のフルハイトの窓から明るい日差しと連続した緑を望める
右／外来棟西外観夕景　各階の西面大開口が、外部の空間の広がりと内部とを連続させる快適な待合空間

特１床室



４床室は、８㎡の床を確保

明るい日差しの入る 12 階病棟リハ

階毎にテーマカラーを設定し、視覚的にも認知できる分かりやすい外来受付・待合

外来から放射線科・検査部門へと患者が不安なく移動できる上空通路

HCU・ICU 基準で整備。個室、総室でも利用可能なノンレールタイプの建具を開発利用している（左／閉　右／開）
（撮影／㈱エスエス大阪支店）

診療用放射線装置一覧表

（2022年11月1日現在）

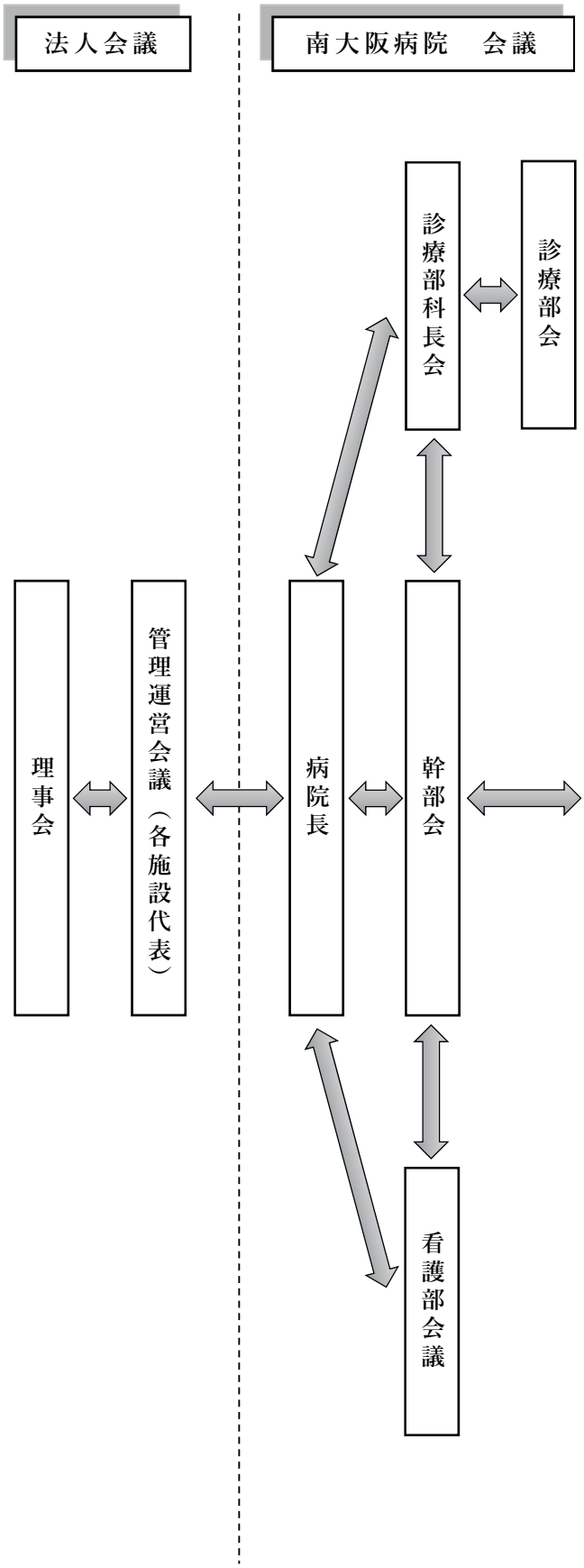
	室名	型式	制作者名	管球数	用途
1	一般撮影室　1	RADspeed　Pro （150LC－45EX）	（株）島津製作所	1	直接撮影
2	一般撮影室　2	RADspeed　Pro （150LC－45EX）	（株）島津製作所	1	直接撮影
3	乳房検査室 （マンモグラフィー）	Senographe　Essential	GE ヘルスケア ジャパン（株）	1	乳房撮影
4	X 線透視室　2	KXO-80XZ （Astorex i9 ASTX-I9000）	キャノンメディカル システムズ（株）	1	透視撮影
5	骨密度測定室	Explorer	東洋メディック（株）	1	骨密度測定
6	マンモグラフィー	MGU-100B （Mermaid）	東芝メディカル システムズ（株）	1	乳房撮影
7	体外衝撃波破砕装置	PIEZOLITH-3000	利康商事	1	位置決め透視
	腎盂造影室	KXO-50G	東芝メディカル	1	直接撮影
8	血管造影室	INFX-8000V	東芝メディカル システムズ（株）	1	血管透視撮影
9	CT 室	Aquilion　Prime　SP TSX-303B	キャノンメディカル システムズ（株）	1	全身用 CT 撮影
10	X 線透視室　1	ZEXIRA DREX-ZX80	東芝メディカル システムズ（株）	1	透視撮影
11	MRI 室	Vantage　Galan　3T MRT-3020	キャノンメディカル システムズ（株）	1	核磁気共鳴画像
12	（保管場所） X 線透視室　2	MobileArt　Evolution	（株）島津製作所	1	移動型直接撮影
13	（保管場所） 手術準備室	MobileArt　Evolution	（株）島津製作所	1	移動型直接撮影
14	（保管場所） 手術室前室	BV　Libra	フィリップスエレクトロ ニクスジャパン（株）	1	移動型透視
15	（保管場所） 手術室前室	BV　Endura	フィリップスエレクトロ ニクスジャパン（株）	1	移動型透視

臨床検査科保有機器一覧表

（2022年11月1日現在）

配置	装置名	装置機種名	装置メーカー
検体検査	生化学免疫自動分析装置	Atellica SCI	シーメンス ヘルスケア ダイアクノスティクス
	生化学自動分析装置	Atellica SC	シーメンス ヘルスケア ダイアクノスティクス
	HbA1c 測定装置	ADAMS A1c HA-8182	アークレイ
	多項目自動血球分析装置	XN-2000	シスメックス
	血液凝固自動分析装置	CP3000	積水メディカル
	血液ガス分析装置	ラピットラボ 348EX	シーメンス ヘルスケア ダイアクノスティクス
	浸透圧測定装置	OM-6060	アークレイ
	全自動輸血装置	オーソ　ビジョン	オーソ クリニカル ダイアクノスティクス
	アンモニア測定専用ドライケム	NX10N	富士フィルム和光純薬
	全自動尿分析装置	AU-4050	アークレイ
	尿検査ソフトウェア	メックネット ミニラボ	アークレイ
	半自動尿分析装置	AE-4020	アークレイ
	全自動便中ヒトヘモグロビン分析装置	HM-JACK arc	ミナリス　メディカル
	赤血球沈降速度測定装置	クイック 8	テクノメディカ
	全自動採血管準備システム	BC-ROBO　888	テクノメディカ
微生物検査	微生物同定感受性分析装置	Walk Away 40Plus	ベックマンコールター
	血液培養自動分析装置	BD Bactec 9050	日本ベクトン・ディッキンソン
		BD Bactec FX-40 スタック	日本ベクトン・ディッキンソン
	免疫自動分析装置	ルミパルス G600 II	富士レビオ
	自動遺伝子解析装置	Gene Xpert システム GX-IV	ベックマンコールター
	微生物由来成分分析装置	リムセイブ MT7500	富士フィルム和光純薬
	尿素呼気分析装置	POC one	大塚電子
生理検査	生理検査　波形マネジメントシステム	EFS-8800	フクダ電子
	自動解析心電図	FCP-7541	フクダ電子
	血圧脈波心電図検査装置	VaSera VS-2500	フクダ電子
	ポータブル心電計	ESP-300DX	フクダ電子
	長時間心電図解析	SCM-6600	フクダ電子
	ホルター記録器（4 台）	FM-190	フクダ電子
	睡眠評価装置（2 台）	LS-120	フクダ電子
	運動負荷システム	ML-9000	フクダ電子
	トレッドミル	MAT-2700	フクダ電子
	電子スパイロメーター	SP-770	フクダ電子
	睡眠時無呼吸検査装置	Nox　A1 システム	テイジン
	オージオメーター	AA-74	リオン
	インピーダンスオージオメータ	RS-33	リオン
	超音波診断装置	Aplio a450	キャノンメディカルシステム
		Aplio 400	キャノンメディカルシステム
		GE　LOGIQ Fortis	GE ヘルスケア・ジャパン

院内委員会組織図



医療安全
1 医療安全管理委員会
2 院内感染予防対策委員会
3 NST 委員会
4 褥瘡予防対策委員会
5 衛生委員会
6 医療ガス安全管理委員会

職域
7 救急委員会
8 手術室委員会
9 HCU 委員会

業務
10 薬事委員会
11 クリニカルパス委員会
12 病床管理委員会
13 化学療法委員会
14 緩和支持療法委員会
15 DPC 管理委員会
16 診療情報管理委員会
17 医療情報システム管理委員会
18 広報委員会
19 医療の質改善委員会
20 サービス向上委員会
21 糖尿病療養指導委員会
22 高額医療機器・備品等審査購入検討委員会
23 医療材料評価検討委員会
24 福利厚生委員会
25 医療情報開示委員会
26 電子文書管理委員会
27 役割分担推進委員会
28 外来業務等検討委員会

法令設置
29 治験審査委員会
30 輸血療法委員会
31 栄養委員会
32 臨床検査適正委員会
33 透析機器安全管理委員会
34 防火防災委員会

教育研修
35 教育管理委員会
36 初期臨床研修委員会
37 後期臨床研修委員会
38 教育研修委員会
39 医学雑誌編集委員会

法人会議（※）
40 倫理委員会
41 賞罰委員会
42 個人情報保護委員会
43 人権啓発推進委員会

※法人会議は理事長による決裁とする

各種定例会議及び各種委員会等

番号	名称	委員長	開催頻度
	幹部会議	福田院長	週 1
	診療部科長会	福田院長	月 1
	診療部会	福田院長	月 1
1	医療安全管理委員会	竹垣部長	月 1
2	院内感染予防対策委員会	大坂副院長	月 1
3	NST 委員会	福田院長	月 1
4	褥瘡予防対策委員会	蔡部長	月 1
5	衛生委員会	原田 総務部長	月 1
6	医療ガス安全管理委員会	賀陽部長	年 1
7	救急委員会	竹村副院長	月 1
8	手術室委員会	竹垣部長	月 1
9	HCU 委員会	吉岡医長	年 6
10	薬事委員会	髙尾 薬剤部長	年 4
11	クリニカルパス委員会	佐々木部長	月 1
12	病床管理委員会	竹村副院長	月 1
13	化学療法委員会	田中部長	月 1
14	緩和支持療法委員会	瀧井医長	月 2
15	DPC 管理委員会	中谷雅美 部長	年 4
16	診療情報管理委員会	久米田副院長	適宜
17	医療情報システム管理委員会	福田院長	月 1
18	広報委員会	中谷 院長代理	月 1
19	医療の質改善委員会	福田院長	月 1
20	サービス向上委員会	福田院長	月 1

番号	名称	委員長	開催頻度
21	糖尿病療養指導委員会	久米田副院長	月 1
22	高額医療機器・備品等審査購入検討委員会	中谷 院長代理	年 4
23	医療材料評価検討委員会	山名顧問	年 4
24	福利厚生委員会	小林 科長補佐	月 1
25	医療情報開示委員会	久米田副院長	適宜
26	電子文書管理委員会	福田院長	月 1
27	役割分担推進委員会	福田院長	適宜
28	外来業務等検討委員会	中谷 院長代理	月 1
29	治験審査委員会	中谷 院長代理	年 6
30	輸血療法委員会	賀陽部長	年 6
31	栄養委員会	久米田副院長	年 6
32	臨床検査適正委員会	小味渕臨床検査科顧問	年 2
33	透析機器安全管理委員会	久米田副院長	月 1
34	防火防災委員会	山川部長	適宜
35	教育管理委員会	宮越 名誉院長	適宜
36	初期臨床研修委員会	新藤教育研修センター長	年 2
37	後期臨床研修委員会	宮越 名誉院長	適宜
38	教育研修委員会	新藤教育研修センター長	年 4
39	医学雑誌編集委員会	川口副部長	年 1
40	倫理委員会	福田院長	年 6
41	賞罰委員会	福田院長	不定期
42	個人情報保護委員会	福田院長	適宜
43	人権啓発推進委員会	総務部	適宜

内科

副院長
診療部部長
内科部長
久米田　靖郎

平成15年(2003年)

臨床検査科の仲子國典の熱意により糖尿病教育(1週間)入院パスが作成され7月より開始となり、平成15年度は26件の実施があった。5月1日に健康増進法が施行されたので、院内の禁煙対策として8月29日より南大阪病院職員への愛の禁煙キャンペーンを行い、9月1日より院内禁煙となった。さらに禁煙の啓発のため月1回の禁煙教室を9月3日より開始した。また透析室開設の準備を開始した。

平成16年(2004年)

平成16年は、前年より準備中の透析室は上畠順次看護師主任、岩橋雅延臨床工学技師主任らの努力で平成16年3月に管理棟の3階で開設でき、4月より外来透析室を開始した。以後、順調に透析患者数は増加し、平成17年3月末の透析患者数は43名(外来透析29名、入院透析14名)で、総透析件数は478件となった。

睡眠時無呼吸症候群(SAS)の検査入院(1泊2日)の実施は検査科の山内一浩課長補佐の努力により6月より院内で開始し、8月に院外でも開始した。ポリソムノグラフィー検査は58件にのぼり、そのうち CPAP 導入は33件(平成16年6月～平成17年3月)であった。

糖尿病教育入院は46名にとどまり、今後さらに開業医の先生方に利用していただけるよう発信していく方針とした。糖尿病教育入院7日入院に加え、3日間コースの教育入院も、検査科大仲一善課長補佐で作成していく方針とした。

内視鏡室は1月26日には1階の臨床検査科の前に移動し改装された。

平成17年(2005年)

平成17年度の大きな出来事は、糖尿病患者会の発足であった。加賀屋の“かがや”と希望の“き”を取ってかがやき会とした。その活動の一つに7月23日に市民公開講座“生活習慣病教室”を開いた。

平成18年(2006年)

平成17年4月に発足した糖尿病患者会“かがやき会”は順調に活動し、年2回の新聞を発行した。

平成19年(2007年)

平成17年4月に発足した糖尿病の患者会“かがやき会”は順調に活動し、年2回の新聞を発行、春のウォークラリー、市民公開講座を開催した。

この年度から新藤光郎臨床教育部長の申請により、南大阪病院は管理型臨床研修施設に認定された。

平成20年(2008年)

糖尿病教育入院の7日入院に加えて3日間コースの教育入院を平成20年2月より開始した。

平成20年3月28日より糖尿病地域連携パスの準備を開始し、平成21年3月14日に住之江病診連携懇話会で住之江医師会の了承を得た。

平成21年(2009年)

平成21年(2009年)12月に当院の関連施設として南大阪クリニック透析センターを新規開設し、当院の外来維持透析部門として集約的治療を開始することとなった。

平成21年11月29日に南大阪病院が日本糖尿病学会認定教育施設に認定された。

平成22年(2010年)

平成22年9月1日に南大阪病院が日本リウマチ学会認定教育施設に認定された。

平成2８年(2016年)

平成28年には病診連携、病病連携の強化を進めていくために、第1回生活習慣病セミナー(平成28年7月9日)と第2回南大阪病院糖尿病研修会(平成28年10月8日)を開催した。

平成29年(2017年)

院整形外科と共催で南大阪関節リウマチ Expert Meeting(平成29年6月3日)を開催した。

平成30年(2018年)

平成30年(2018年)6月 1 日に南大阪病院が日本透析医学会教育関連施設に認定された。

令和元年(2019年)

内科では一般内科を始め、糖尿病、腎臓病、甲状腺疾患などの内分泌疾患、リウマチ疾患、脳神経内科、心療内科については専門のスタッフを揃え、診療の充実に努めている。また、糖尿病の専門病院として地域の先生方と連携して糖尿病診療と糖尿病教育入院、糖尿病患者会活動にも力を入れている。さらに当院の眼科とも連携して病診連携、病病連携を積極的に進め、糖尿病患者さんの早期発見、早期治療により徹底した血糖コントロールを行い、糖尿病合併症の発症抑制を図っていきたいと考えている。腎不全から血液透析患者さんの40%以上を糖尿病性腎症が占めており、世界的に糖尿病患者さんが増加していることから、今後ますます糖尿病患者さんが増えていくと考えられ、増加する透析患者さんに対応するため、令和元年(2019年)10月 1 日に外来透析室を外来棟4階に開設することとなった。

腎疾患の予兆が認められた患者さんを病診連携等によりご紹介いただき、腎生検を含めた検査を行い、診断、早期の治療を開始することで腎疾患の進行抑制を図れるよう取り組んでいる。また、早期の腎炎から、慢性腎臓病、末期腎不全、血液透析までの一貫した診療体制を構築している。

令和元年(2019年)7月1日に南大阪病院は日本腎臓学会認定教育施設に認定された。

令和 2 年(2020年)

当院は地域の中核病院として、地域の医療機関の先生方との密接な連携をはかり、当院を十分に利用していただきたいと考えている。 我々は常に最新の専門医療の研鑽につとめ、質の高い医療を提供していくことを信念としている。当院は内科関連では日本内科学会教育関連病院、日本糖尿病学会認定教育施設、臨床研修病院となっており、さらに日本リウマチ学会認定教育施設、日本透析学会教育関連施設、日本腎臓学会教育認 定施設にも認定されている。2004年度より大阪市立大学医学部附属病院の研修医協力病院として研修医を受け入れており、毎年 4〜5 名の研修医が当院で研修している。病診連携では当院整形外科と共催で『関節リウマチ治療の最前線』を毎年で開催してきた。また、糖尿病関連の病診連携では、毎年『生活習慣病セミナー』をしてきたが、この会についても、2020年以降はコロナウイルス 蔓延のため、開催を中止している。今後、コロナウイルス感染状況をみて再開を検討中である。

スタッフ

(2022年10月)

内科

久米田靖郎(副院長、診療部部長、内科部長)
川口　祐司(内科副部長)
濱崎　健司(内科医長)
澤　　絢　(内科医員)
増本　晃治(内科医員)
濵井　智恵(内科医員)
林下　真保(内科医員)
蘆田　成美(内科医員)
羽鹿由里子(内科医員)
岡藤　梨華(内科医員)

呼吸器内科

平野　勝也(呼吸器内科医長)

腫瘍内科

長谷川晶子(腫瘍内科医員)

業務実績統計

疾患別患者数の推移(**図１**)では２型糖尿病は一時は1,300人と少ない時期もあったが、以後1,800人以上で推移していた。１型糖尿病では130例前後で横ばいで経過している。気管支喘息や誤嚥性肺炎等の呼吸器疾患は減少傾向となっている。

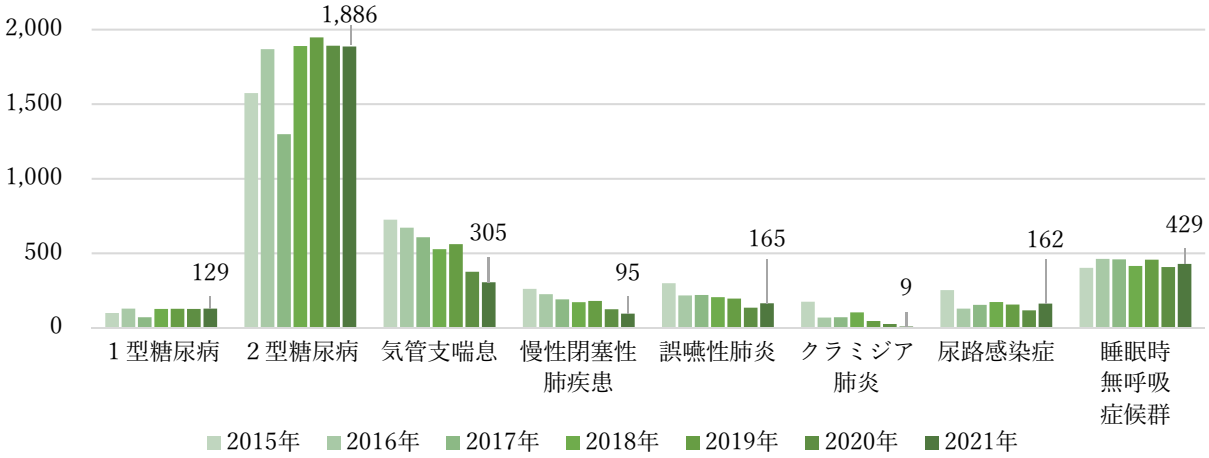


図１　疾患別患者の推移(人)

慢性腎不全や関節リウマチも漸減傾向となっているが、甲状腺疾患は漸増傾向となっている(**図２、３**)。

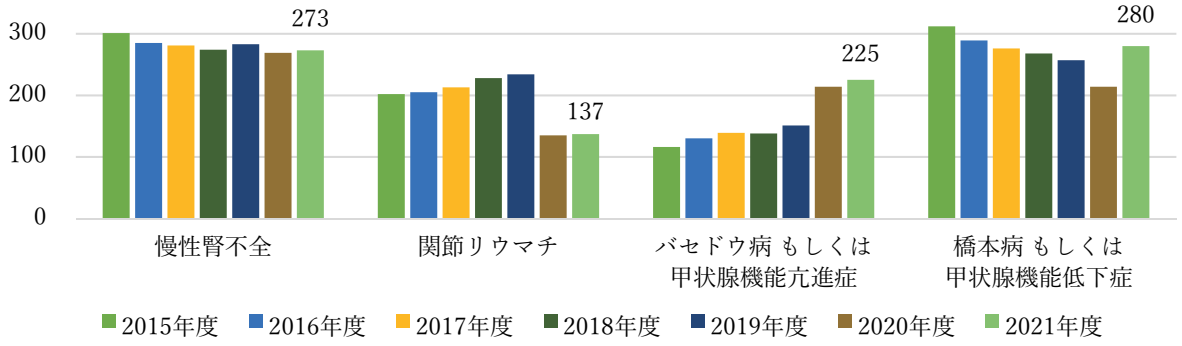


図２　患別患者数の推移（人）

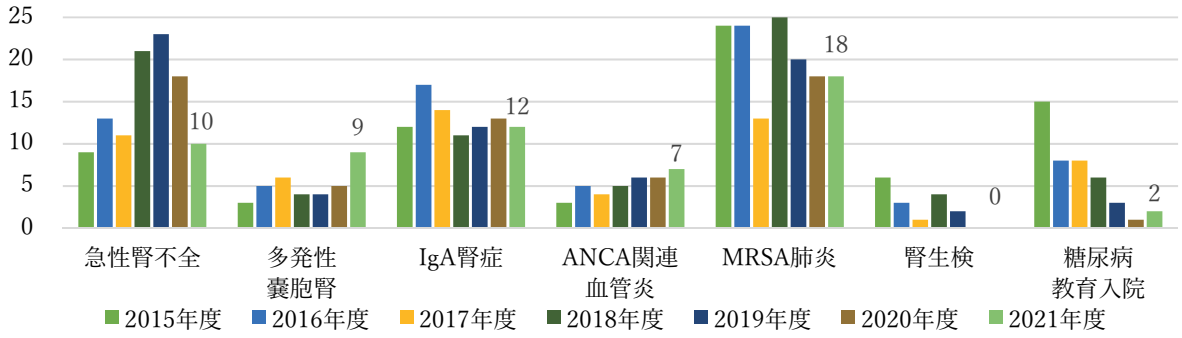


図３　疾患別患者数の推移（人）

当院の血液透析患者数(**図4**)では2020年度までは120例と横ばいで推移していたが、2021年度は増加傾向となっている。新規透析導入数(**図4**)では25～50例で推移している。

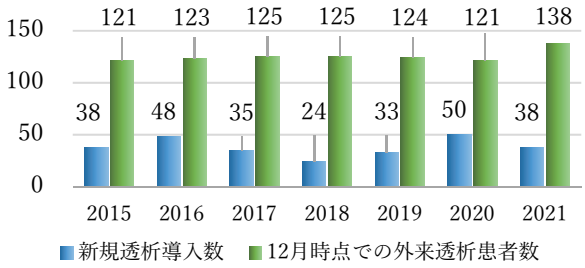


図4　新規透析導入数、外来透析患者数の推移

近隣の透析施設から当院のシャント外来への診療依頼が近年増加していることから、当院のPTA件数は(**図5**)2017年度以降増加傾向となっている。

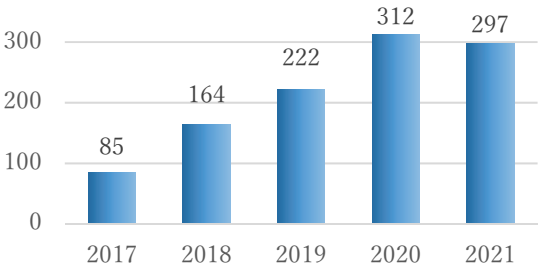


図5　PTA件数の推移

慢性腎不全から末期腎不全となって、透析導入患者も増加傾向となっていることから、内シャント設置手術も含めたシャント関連手術(**図6**)も年々増加傾向となっている。現在は内シャント設置術の依頼も3か月待ち状態となっていることから、今後透析導入患者並びに、外来維持透析患者の増加に対応するためには、シャント外来のスタッフ並びにハード面での充実を図ることが当院にとって重要な喫緊の課題となっている。

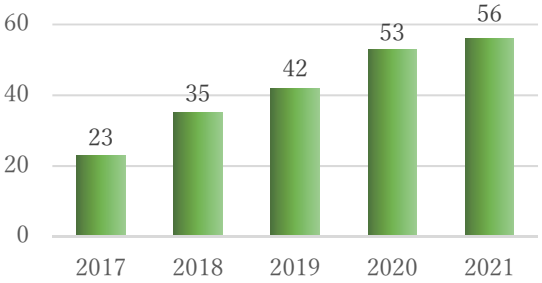


図6　シャント関連手術の推移

内科

腫瘍内科

内科・呼吸器内科

循環器内科

名誉院長
宮越　一穂

循環器内科副部長
中島　大成

当院循環器内科は昭和59年4月より大阪医科大学（現大阪医科薬科大学）第一内科故茂在敏司教授、故関一郎助教授のご指導、ご協力のもとに、濱田偉文（現顧問）、宮越一穂（現名誉院長）を迎え設立された。翌年大阪医科大学（現大阪医科薬科大学）より柿本祥太郎（現理事長）を迎え胸部外科も開設され、以後両科連携のもと専門的な診療にあたり現在に至っている。地域の高齢化に伴い循環器疾患は増加傾向であり、高血圧、虚血性心疾患、弁膜症、不整脈、心筋症などを扱っている。

開設以降、概ね4名体制で運営していたが、一時期2名まで減少する期間があった。診療体制の縮小も考慮されたが、令和2年より綾田医長を常勤医に迎え、複数の非常勤医、濱田顧問、宮越名誉院長にご協力いただき、当地域の循環器診療が維持できているのではないかと考えている。

現在行っている検査・手術は、心電図、運動負荷心電図（マスター負荷、トレッドミル運動負荷）、心臓カテーテル検査、経皮的冠動脈インターベンション、下肢動脈インターベンション、心臓及び血管エコー検査、ホルター心電図、冠動脈CT、ペースメーカー植え込み術などである。ICD、CRTなどは他院へお願いし、症例によっては当院にてフォローしている。弁置換術、TAVI、冠動脈バイパス術は大阪公立大学心臓血管外科より隔週で外来に来ていただいていることから、院内紹介し転院のうえ施行いただいている。

スタッフ

現職

宮越一穂　（名誉院長）
中島大成　（循環器内科副部長）
津久田享三（循環器内科医長）
綾田健士　（循環器内科医長）

氏名	入職日	退職日
山下　英丸	1993年 7月	2006年11月
寺杣　晋彦	2002年 6月	2006年 6月
宇津　典明	2003年 6月	2020年 8月
徳岡　孝仁	2007年 3月	2009年 3月
横山　　亮	2009年 4月	2011年 3月
柚木　孝仁	2003年 6月	2005年 5月
藤阪　智弘	2004年 6月	2007年 3月
柴田　兼作	2006年 7月	2008年 6月
上田　航平	2011年 4月	2018年 3月
中西　宣文	2016年 5月	2018年 9月

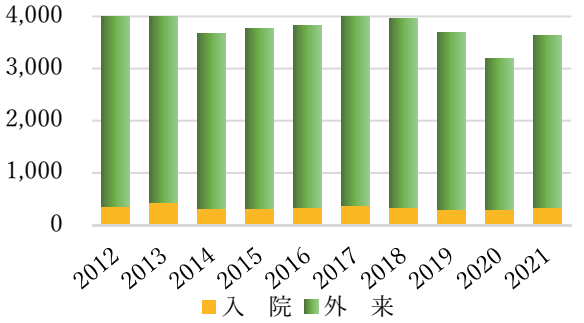
今後の展望

地域の循環器診療のニーズに対して十分ではない部分もあるかとは思うが、今後も可能な限り貢献できればと考えている。

業務実績統計

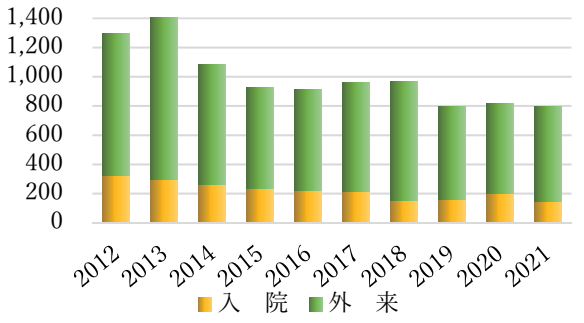
※検査件数実績上位３項目

①心電図検査（標準12誘導）



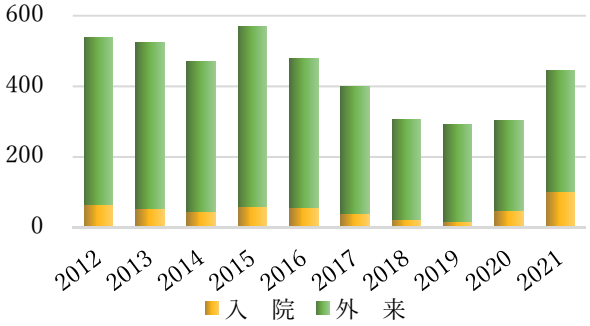
	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
外来	3728	3767	3361	3463	3497	3913	3611	3395	2901	3289
入院	351	427	321	310	325	369	343	304	292	345
合計	4079	4194	3682	3773	3822	4282	3954	3699	3193	3634

②心エコー



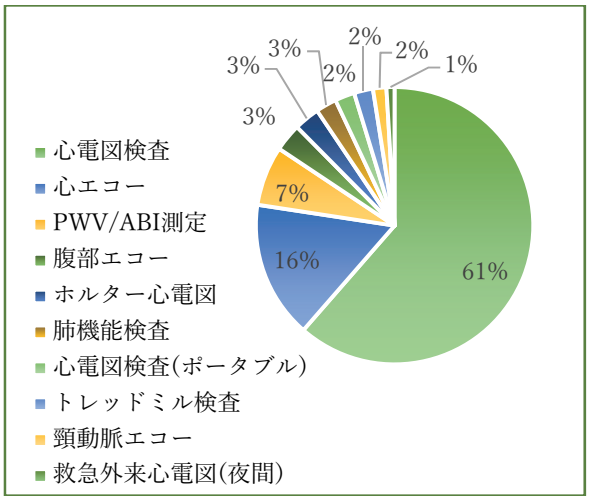
	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
外来	976	1112	822	686	695	748	819	636	620	651
入院	321	296	263	237	221	216	152	162	199	148
合計	1297	1408	1085	923	916	964	971	798	819	799

③PWV/ABI 測定



	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
外来	474	470	424	509	424	361	282	275	256	341
入院	64	55	47	60	56	39	23	18	48	103
合計	538	525	471	569	480	400	305	293	304	444

検査件数上位10項目割合



消化器内科

消化器内科部長
佐々木 英二

病院長
福田 隆

消化器内科部長
内視鏡センター長
中谷 雅美

消化器内科は、2011年4月1日に内科から独立した。創設当初のメンバーは、元々内科所属の南條知己医長、柳生利彦医長に加え、大阪市立大学消化器内科の関連病院として中谷雅美医員、東森啓医員が派遣された。7月1日に野村勉医師が消化器内科部長兼内視鏡センター長として就任、2012年10月1日に福田隆医師が副院長として就任した。これにより、当院は日本消化器病学会および日本消化器内視鏡学会の認定指導施設となった。医局員の増員に伴い、上下部消化管内視鏡検査を月曜日から土曜日まで連日行い、内視鏡的止血術や ERCP 等の緊急内視鏡治療も随時施行できる体制が整った。2012年度には早期大腸癌に対する大腸 ESD の保険適応施設の認定を得た。2013年3月31日付で野村勉医師が退任、4月1日付で福田隆副院長が消化器内科部長を兼任、中谷雅美医員が内視鏡センター長に就任した。

2013年10月15日の外来棟オープンに伴い、外来棟3階に新・内視鏡センターが新設された。新・内視鏡センターは180平方メートルの広大なスペースを誇り、個別内視鏡検査室が4室（内1室は機器保管室として使用）と専用の透視室1室を有し、検査個室を連結する内視鏡洗浄スペース、鎮静処置検査後のリカバリースペース（回復室）、待合室、更衣室等が、職員と患者様の動線を考慮して効率的に配置された。医師待機室では、全検査室での内視鏡映像がリアルタイムでモニター可能となった。また、内視鏡専用の透視室が確保できた事により他科透視検査との調整が不要となり、緊急での ERCP/EST、イレウス管挿入等の透視下処置が常時可能となった。新・内視鏡センター新設に伴い、内視鏡検査システムはすべてオリンパス社製とし、光源も最新式システムを導入した。

消化器内科創設以来内視鏡件数は年々増加し、2011年の年間件数は約4,000件であったが2019年には10,000件を越え、大阪府内でも指折りの High volume center となっている。

2020年4月1日に佐々木英二医師が消化器内科部長として就任、同年7月1日に福田副院長が院長に就任した。

2020年以降は新型コロナウイルス感染症が流行したため、内視鏡検査に伴う感染拡大防止に対する取り組みにも注力した。具体的には、発熱や体調不良のある患者様には内視鏡検査の延期をお願いする、内視鏡検査前1週間以内に胸部単純撮影又は CT 検査にて肺炎の有無を確認する、上部消化管内視鏡検査時は飛沫防止のためガーゼで覆ったマウスピースの使用および顔の周りをビニールカバーで覆うなどの対策を行った。また、最流行期には患者様と医師の接触時間短縮のため、従来同日で行っていた上下部消化管内視鏡検査を別日に分けて実施する対策もとった。

2022年4月1日付で中谷雅美内視鏡センター長が部長に就任した。

上記の如く、当科は主として最先端の内視鏡検査・治療を通じ、消化管および肝胆膵領域の幅広い疾患に対する診療を行っている。もちろん、それ以外にも、逆流性食道炎、胃十二指腸潰瘍、腸閉塞、肝炎、肝硬変などの一般的消化器疾患や、近年増加している潰瘍性大腸炎など幅広い分野で専門的診療を行っている。専門外来としては肝臓外来と、ピロリ菌外来を行っている。

スタッフ

現職

福田隆　（院長）
佐々木英二（消化器内科部長）
中谷雅美　（消化器内科部長）
森本謙一　（消化器内科医長）
金大裕　（消化器内科医員）
松本侑士　（消化器内科医員）
柳田剛志　（消化器内科医員）
山本一輝　（消化器内科医員）

業務実績統計

患者数年次推移

年	外来			入院	
	延患者数	1日平均患者数	1日平均新患数	延患者数	1日平均患者数
2012	14,729	49.8	6.7	12,481	34.1
2013	16,489	56.3	8.8	12,403	34.0
2014	18,343	62.4	9.9	11,804	32.3
2015	20,452	69.8	10.6	12,513	34.3
2016	20,431	69.5	10.5	11,545	31.5
2017	20,059	68.0	11.1	13,052	35.8
2018	20,213	68.8	11.1	14,736	40.4
2019	21,508	73.7	12.6	14,346	39.3
2020	19,960	67.7	11.2	13,252	36.2

当科創設以来

氏名	就任～退任	氏名	就任～退任
南條知己	2005.1～2013.9	池田大輔	2016.4～2019.3
柳生利彦	2008.4～2017.3	勝野貴之	2013.4～2015.3
東森　啓	2011.4～2013.3	田中　聡	2016.4～2018.3
野村　勉	2011.7～2013.3	前田夏美	2017.4～2018.9
勝野貴之	2013.4～2015.3	中村吉宏	2018.4～2021.3
沢田明也	2013.4～2014.3	水野雄貴	2018.4～2019.3
林　尚輝	2013.4～2016.3	橋本　篤	2019.4～2020.3
橋本　篤	2014.4～2016.3	前田夏美	2019.4～2021.3
岡本純一	2015.4～2017.3	陣内　鑑	2020.4～2022.3
田中　聡	2015.4～2015.9	杉田菜央子	2021.4～2022.3
中平智子	2015.1～2016.3	高橋駿介	2021.4～2021.8
東森　啓	2016.4～2020.3		

内視鏡件数年次推移

年	上部	下部	ERCP/EST	合計	そのうち、処置を行った件数							
					ESD	EIS	大腸ポリペク	消化管ステント	胆管ステント	イレウス管	止血術	PEG
2011	2,496	1,385	100	3,981	22	3	385	NA	NA	NA	NA	NA
2012	3,078	1,945	137	5,160	18	11	416	NA	NA	NA	NA	NA
2013	3,888	2,572	165	6,625	24	NA	637	NA	NA	NA	NA	NA
2014	4,461	2,771	131	7,363	27	9	875	7	85	32	81	73
2015	5,027	3,226	177	8,430	50	13	1,232	15	134	39	139	69
2016	5,147	3,222	200	8,569	40	10	1,371	17	122	50	126	80
2017	5,489	3,465	246	9,200	77	17	1,517	19	145	30	159	25
2018	6,043	3,572	301	9,916	72	21	1,558	25	168	66	103	65
2019	6,500	3,972	256	10,728	85	25	1,734	26	132	47	104	70
2020	6,004	3,612	264	9,880	86	19	1,747	32	120	62	79	28

※NA：詳細な件数が不明

学業業績

2012年 【学会発表】

- 下血精査での下部消化管内視鏡検査で診断しえた小腸悪性リンパ腫の1例
  柳生利彦，南條知己，東森啓，中谷雅美，野村勉，
  田中芳憲，三木高平，原田知明
  第83回消化器内視鏡学会（東京）

- 急性出血性直腸潰瘍再出血症例の検討
  柳生利彦
  第67回日本大腸肛門病学会（福岡）

2013年 【学会発表】

- 当院における急性出血性直腸潰瘍の臨床的検討
  柳生利彦，南條知己，東森啓，中谷雅美，野村勉，
  福田隆
  第85回消化器内視鏡学会（京都）

- 急性出血性直腸潰瘍の予後検討
  柳生利彦
  第68回日本大腸肛門病学会（東京）

2014年 【論文】

- 胆石イレウスの一例
  沢田明也，他
  南大阪医学 61(1):29-33,2014.

2014年 【講演】

- 胃・大腸がんにおける地域連携パスについて
  福田隆
  第5回南大阪消化器病フォーラム
  2014年11月22日（大阪）

2015年 【学会発表】

- 三次・四次除菌治療選択における抗生物質感受性検査の有用性の検討
  福田隆
  第21回日本ヘリコバクター学会学術集会
  2015年6月26-27日（神戸）

2016年 【学会発表】

- Vonoprazan の H.pylori 1次・2次および3次除菌における有効性
  福田隆
  第22回日本ヘリコバクター学会学術集会
  2016年6月24-25日（別府市）

2018年 【学会発表】

- laparoscopic bag の使用により胃 ESD 切除後の大型隆起性病変を回収できた1例
  水野雄貴，他
  第100回日本内視鏡学会近畿支部例会
  2018年5月26日（大阪）

- 当院で経験した十二指腸憩室出血4例の検討
  前田夏美，他
  第100回日本内視鏡学会近畿支部例会
  2018年5月26日（大阪）

- 高齢者に腹腔鏡下食道裂孔ヘルニア修復術を行い QOL が改善した1例
  田中聡，他
  第100回日本内視鏡学会近畿支部例会
  2018年5月26日（大阪）

- 魚骨の小腸穿孔の2例
  池田大輔，他
  第100回日本内視鏡学会近畿支部例会
  2018年5月26日（大阪）

- 非被覆自己拡張型胆管ステント破損により追加処置に難渋した症例に対して Spyglass DS が有用であった1例
  東森啓，他
  第100回日本内視鏡学会近畿支部例会
  2018年5月26日（大阪）

2018年 【座長】

- 第100回日本内視鏡学会近畿支部例会
  Young Endoscopist Session 9
  中谷雅美
  2018年5月26日（大阪）

- 第19回日本クリニカルパス学会学術集会
  一般口演「パス委員会活動」
  福田隆
  2018年10月12日（函館）

2018年 【論文】

- 魚骨の小腸穿孔により多発肝膿瘍をきたした1例
  池田大輔，他消化器内科一同
  南大阪医学 65(1):25-28,2018.

2019年 【学会発表】

- 進行上行結腸癌に対して回腸末端から上行結腸にかけて内視鏡的金属ステント留置術を行った1例
  前田夏美，他
  第14回南大阪消化器病フォーラム
  2019年6月8日（大阪）

- 進行上行結腸癌に対してスライディングチューブを併用し経鼻内視鏡を用いて内視鏡ステント留置術を行った1例
  前田夏美，他
  第102回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会 Young Endoscopist Session
  2019年7月6日（大阪）

- Low-dose rectal diclofenac for the prevention of post-ERCP pancreatitis in elderly patients
  前田夏美，他
  第27回欧州消化器病週間 poster session
  2019年10月22日（バルセロナ）

- Clinical usefulness of a conventional gastroscope for endoscopic retrograde cholangiopancreatography in patients with surgically altered gastrointestinal anatomy
  中谷雅美，他
  第27回欧州消化器病週間 poster session
  2019年10月22日（バルセロナ）

- Inflammasome drived intrrleukin1β attenuates stress induced gastric injury via the cox2/PGE2 axis.
  東森啓，他
  第27回欧州消化器病週間 poster session
  2019年10月22日（バルセロナ）

- 術後再建腸管に対する上部消化管内視鏡を用いた ERCP の有用性
  前田夏美，他
  第27回日本消化器病学会週間
  デジタルポスターセッション
  2019年11月23日（神戸）

2019年 【論文】

- 急性胆嚢炎に対して内視鏡的(経乳頭的)胆嚢ドレナージ術を施行した3例
  前田夏美，他
  南大阪医学 66(1):17-21,2019.

- 内視鏡室の紹介　南大阪病院
  前田夏美，他
  日本消化器内視鏡学会雑誌 61(8):1604-1607

2020年 【学会発表など】

- Right-sided colonic diverticula are negatively associated with constipation
  前田夏美，他
  2020米国消化器病週間
  2020年5月（シカゴ）

- Age-specific risk factors of inadequate bowel preparation for colonoscopy; a prospective questionnaire-based observational study
  東森啓，他
  2020米国消化器病週間
  2020年5月（シカゴ）

- 大腸憩室症と慢性便秘症の関連性についての検討
  東森啓，他
  第104回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会
  2020年6月（京都）

- 生活習慣と下部消化器内視鏡検査における前処置不良の関連性の検討
  ―質問紙調査を用いた前向き観察研究―
  前田夏美，他
  第106回日本消化器病学会総会
  2020年8月（広島）

- 慢性便秘症と大腸憩室症の関連性についての検討―質問紙を用いた前向き観察研究―
  森本謙一，他
  第106回日本消化器病学会総会
  2020年8月（広島）

- 大腸内視鏡検査で前処置不良となる年齢別リスク因子の検討
  東森啓，他
  第99回日本消化器内視鏡学会総会
  2020年9月（京都）

- 高齢者における ERCP 後膵炎に対する低用量ジクロフェナク直腸投与による予防効果の検討
  前田夏美，他
  第99回日本消化器内視鏡学会総会
  2020年9月（京都）

- Clinical usefulness of a conventional gastroscope for ERCP in patients with surgically altered gastrointestinal anatomy
  前田夏美，他
  第99回日本消化器内視鏡学会総会
  2020年9月（京都）

- 大腸憩室症のリスク因子についての検討
  橋本篤，他
  第99回日本消化器内視鏡学会総会
  2020年9月（京都）

- 慢性便秘症患者での大腸内視鏡検査で前処置不良となるリスク因子の検討
  ―質問紙を用いた観察研究―
  中村吉宏，他
  第99回日本消化器内視鏡学会総会
  2020年9月（京都）

- 非専門医のための内視鏡所の読み方
  中谷雅美
  大阪南部消化器 web seminar
  2020年9月

2020年 【誌上発表】

- 上行結腸癌による腸閉塞に対して経鼻内視鏡とディスポーザブルスライディングチューブを併用し回盲部ステント留置術を行った1例
  前田夏美，他
  南大阪医学 67(1):35-38,2020.

2021年 【論文】

- 極細径内視鏡を用いた経口直接胆道鏡が有用であった3例
  前田夏美，他
  南大阪医学 68(1):31-36, 2021.

今後の展望

大阪府がん診療拠点病院としての責任を全うするため、今後も ESD や ERCP、ステント留置術など各種がんに対する内視鏡治療を積極的に行い、同時に検診も含め多くの方々に安心・安全・確実な内視鏡検査を提供し、消化管がんの早期発見にも努めたい。

また、消化器内視鏡の High volume center として消化器内視鏡学の進歩に寄与する臨床研究を行い、当院から新しい情報を発信して行きたい。

今後とも、経験豊富な医師・看護師・コメディカルがチーム一丸となり、患者様に寄り添った安心・安全で質の高い内視鏡診療などを通じて地域医療に貢献して行きたい。

消化器内科

外科・内視鏡外科

副院長
外科統括部長
竹村　雅至

外科 20 年の道のりとこれから

70周年を迎えるにあたり、この20年を紐解くとともに当院外科の今後について述べる。この20年間には外科医にとっての大きなパラダイムシフトが生じた。その主なものは腹腔鏡手術の著しい進歩と抗がん剤治療を中心とする集学的治療の発達、さらにロボット支援手術の導入である。振り返れば、私が外科医として働き始めた1990年に日本で初めて腹腔鏡下胆嚢摘出術が施行され、その話が大阪市立大学医学部でも驚きを持って迎えられたことを覚えている。ただし当時の腹腔鏡手術器具や光学機器では鮮明な画像は得られず、手術時間が長く若干難しい手術として捉えられた。しかし、傷が小さく患者さんへ与える負担が少ないことは明らかであり、腹腔鏡手術器具の改良発展が急速に進むとともに、先達外科医の絶え間ない努力によりさまざまな消化器外科疾患に腹腔鏡手術が導入され術式の改良が加えられてきた。これにより腹腔鏡手術件数は急速に増加し、腹腔鏡下胆嚢摘出術の様に標準術式として認識されるようになった術式もある。当院でも歴代の外科部長とスタッフが腹腔鏡手術の安全な導入と普及に努めて来られ、経時的に手術件数が増加し、2021年では当院の全身麻酔手術の70%を腹腔鏡手術が占めるに至っている。さらに、現在では日本内視鏡外科学会が認定する技術認定医が3名在職し、当院での腹腔鏡手術の安全な遂行と指導に寄与している。2017年からは小生が内視鏡外科部長として赴任させていただき、食道良性疾患に対して腹腔鏡手術を導入し積極的に行うことで、当院での食道裂孔ヘルニア・逆流性食道炎に対する腹腔鏡手術件数は2019年・2020年の2年間にわたり全国1位となることができ、全国から患者さんが当院での手術を希望され来院されるようになった。2018年からは糖尿病内科と協力のもと、高度肥満に伴う糖尿病などのさまざまな肥満関連疾患を改善する外科的治療である減量・代謝改善手術を導入し、高度肥満患者さんのQOLや生命予後の改善に寄与している。

20年前である2001年（平成13年）の当院外科の手術をみると、総手術件数は年間413件（胃・十二指腸疾患：42例、大腸疾患：62例、虫垂炎：67例、ヘルニア：70例、その他）であり、この際の腹腔鏡手術件数の詳細は不明である。10年後の2010年（平成22年）では総手術件数は年間393件（胃・十二指腸疾患：33例、大腸疾患：92例、虫垂炎：20例、ヘルニア：78例、その他）で、腹腔鏡手術件数は146件(37.1％)となっている。2021年（令和3年）の現在、総手術件数は761件と増加し、腹腔鏡手術件数も510件(67.0%)と急速に増加している。手術の内訳は食道疾患：86件、腹腔鏡下スリーブ状胃切除術：7件、胃疾患：35件、大腸疾患：83件、鼠径ヘルニア：116件、胆嚢摘出術：92件などである。腹腔鏡手術の件数が急速に増加しており、今後もその傾向は続くと思われる。特に食道疾患に対する手術は近隣の病院には無い当院外科の特徴であり、食道裂孔ヘルニアや逆流性食道炎などの食道良性疾患に対する手術は本邦最多である。

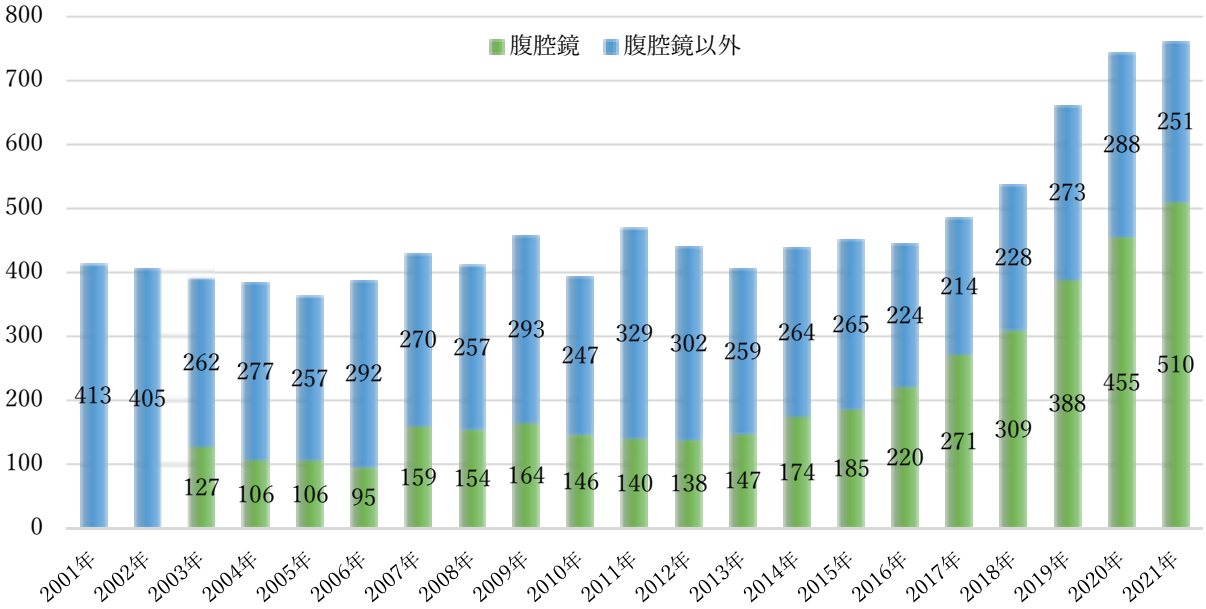
また、近年では手術の内容も大きく様変わりし、高難度手術が増加するとともに、癌治療に際してはさまざまな臨床試験の結果による集学的治療の進歩により抗癌剤治療や放射線治療が加わった後に外科的治療を行うことが増えている。その際でも詳細な術野画像が得られ繊細な手技を可能とする腹腔鏡手術が適応としているが、安全性の維持のためには内視鏡技術認定医を中心とする外科医全員の技術向上とチームワークが必要と考えている。今後とも地域の基幹病院として最先端の外科治療と安全な医療を提供できるように努力していきます。

歴代外科部長一覧

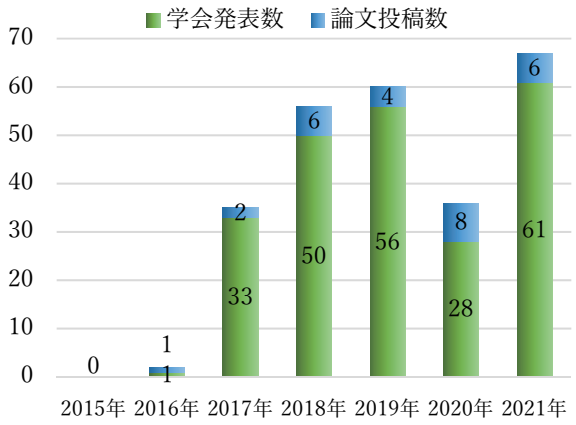
期　間	名　前
2001年（平成13年）～ 2006年（平成18年）	後藤　　司
2007年（平成19年）～ 2008年（平成20年）	藤尾　長久
2009年（平成21年）～ 2010年（平成22年）	中谷　守一
2011年（平成23年）～ 2020年（令和 2年）	藤尾　長久
2017年（平成29年）～ 2020年（令和 2年）	竹村　雅至(内視鏡外科部長)
2021年（令和 3年）～	竹村　雅至

業務実績統計

2001年から2021年までの外科の手術件数と腹腔鏡手術件数の推移



2015年から2021年の学会発表・論文投稿の推移



今後の展望

今後とも地域医療に尽力することと、患者さんにメリットのある手術を積極的に導入し全国に発信することで、全国から患者さんに来ていただける外科を目指し、先達外科部長が連綿と築き上げて来られた地域から信頼される外科としての利点を生かしつつ、地域でのオンリーワンの外科を目指し、外科医のチームワークで頑張っていきたいと考えています。さらに、近年急速に多施設で導入が進み適応疾患が増加しているロボット支援手術を当院でも導入を予定しており、さらに多彩な疾患の患者さんに対応できる外科を目指します。2022年4月からは臨床腫瘍科が開設され、難治性のがんに対しても多診療科で協力しつつ、治療を積極的に行っていく体制を構築したいと考えている。

本稿を終えるにあたり、当院外科のこの20年の中でもとりわけ大きな出来事の一つとして、30余年にわたり当院の外科部長として外科診療に尽力された後藤司先生が2010年5月に突然逝去されるという非常に悲しい出来事がありました。我々外科チームは後藤先生の培って来られた当院外科の礎を大切にしつつ、今後ますます外科を発展させていきたいと考えております。

スタッフ

竹村雅至　（副院長、外科統括部長）
田中芳憲　（下部消化管外科部長）
眞弓勝志　（肝胆膵外科副部長）
大嶋勉　（上部消化管外科部長）
山田正法　（外科医長）
形部憲　（外科医長）
瀧井麻美子（外科医長）
佐々木麻帆（外科医員）
稲津大輝　（外科医員）
菊川拓也　（外科医員）
加藤きみ佳（外科医員）

外科・内視鏡外科

乳腺外科

院長代理
乳腺外科部長
中谷　守一

2008年4月の南大阪病院乳腺外科の開設から今日までの経緯

南大阪病院乳腺外科は2008年4月に中谷守一の赴任とともに始まった。それ以前は大阪医科大学一般・消化器外科の乳腺グループが非常勤医師として外来診療に当たっていた。外科外来に乳腺疾患患者が増加するにつれて、患者を外科外来から分離し専門外来で診療したいとの意向が当時の外科部長（故　後藤司先生）にあったとのことである。

当時院長であった宮越一穂先生（現名誉院長）を介して故　後藤司先生にお目にかかる機会があり、乳腺外科開設を決めていただいたと聞く。その後、後藤先生には乳腺外科設置のため診察室や備品などいろいろな準備をしていただいた。2000年当時、乳腺腫瘍の診断にエラストグラフィが有用であるとされその黎明期を迎えていた。乳腺外来に設置の超音波検査装置は病院のご配慮で乳房エラストグラフィと超音波ドプラ検査が可能な日立製 EUB7500を設置していただけることになった。また乳腺外科の診察室は外科の近くの非常に狭い一室を改装して新たに設置された。当時、『誕生！乳腺外科』と題したポスターも作製された。また乳腺外科開設時には受付事務には医事課徳永雅美氏が、看護師は当初外科外来の江藤啓子主任が、そしてしばらくして産休明けの岩本友香看護師が配属された。もともと乳腺外科がどういうものか院内で知る方はなかったと思われ、看護部では非常に心配されたようである。しかしマンモグラフィと乳房超音波検査結果をもとにして針生検を行い病理診断したのちは、手術治療および化学療法・ホルモン療法そして放射線治療など各種の治療が実施されることが次第に周知されるようになった。

マンモグラフィについてはその当時女性技師として入職したばかりの紅一点、有賀綾子氏が頑張ってくれた。とくに乳腺診療では外来の果たす役割が非常に大きく、患者への説明もすべて外来で行うため長時間におよび看護師の就業時間は非常に稠密であったと思われる。とくに外科外来から少し離れていたため乳腺外科の診療内容が外科看護師に共有されるのに時間を要したと思われる。産休明けの岩本看護師にはあまりに過酷な外来勤務ではなかったかと今になって心配するとともに黎明期を支えていただいたことに感謝している。ちょうど本館2階では外来化学療法室も開設されており、乳癌に対するレジメン登録もいくつか存在しており化学療法も支障なく施行できた。この

ころマンモグラフィと超音波画像そして臨床経過について検討する毎週火曜日8:15からの乳房画像検討会を診療放射線技師とで開始した。これは現在も継続中で当院放射線科の歴代女性技師がマンモグラフィ技術認定A判定を取得するのに役立っているのではないかと考えている。また当時院内にはシンチグラフィ装置やリニアック装置に加えて形成外科も設置されており乳腺外科としては全く不自由ない環境であった。その後、2008年10月からわたくしは乳腺外科部長に加えて外科部長を兼務し、さらに2010年4月からは副院長に加えて地域医療連携室長さらに医療安全管理室室長を兼務することとなった。このころ外科も乳腺外科も一つのものとして運営していた。火曜日午後2:00からの病棟回診と第3水曜日8:30からは病理診断科部長小林先生のご協力により病理カンファレンス、金曜日8:15からの外科術前カンファレンスなどを開始した。

ちょうどそのころ2010年5月14日後藤司顧問が自宅で急逝された。その際には平成22（2010）年5月15日付で『後藤医師逝去のお知らせと担当医変更・業務変更のおわび』なる文書を作成した。逝去の当日には故人は3件の手術を執刀する予定であった。そのため手術予定の患者各位に仔細を説明し、担当医を坂田医師に変更するが手術をお受けになるかどうか？代理医師による手術について承諾されるかどうか？を確認したことが思い出される。いずれの患者さんも後藤医師逝去の報に当たって涙された。現役外科医師が急逝するという非常に稀な痛ましい出来事を経験した。2011年4月に大阪市立大学医学部第2外科同門の藤尾長久先生がベルランド病院外科部長から当院外科に部長として赴任し、わたくしは外科部長を免じられた。

その後、新病棟の竣工近くになると岩本看護師が病棟へ異動し、今度は藤谷淳子看護師が外科外来から乳腺外科に着任した。2011年12月新築移転した新病院棟は電子カルテを装備してはいるが外来診療は新病院棟5階（現在は地域包括病棟）の北西角部分、特室を使用することとなった。新病院棟5階での診療は現在の外来棟へ移転するまでの2013年10月まで継続した。新病院棟への移転と同時にマンモグラフィ装置はGE社製のフラットパネル式に変更されフィルムを使用しないいわゆるソフトコピー診断に移行し大きく業務変革された。また同時にマンモトーム生検装置が導入されたこともあり、新病院ではリニアック治療ができなくなったが、乳腺外科は診断のための最新装備を得たといえる。その後、2013年10月新外来棟が竣工したのに合わせて乳腺外科外来は現在の新外来棟2階南側に移転し診察室2室体制を実現した。ようやく乳腺外科が軌道に乗ると、術後患者が増加し効率よく診察する必要がでてきたため院内外来業務がある程度落ち着き、外来待合などがやや空くような水曜日の午後に術後専用外来を開設することになった。続いて藤谷看護師のHCUへの異動があり、今度は濱川悦子看護師が乳腺外科担当に変更になった。このあとも乳腺外科常勤医は中谷と原田の2名と野原丈裕非常勤医師など数名の非常勤医師で運営してきたが、2014年3月原田医師の退職と非常勤医師化を経て乳腺外科常勤医は中谷のみとなった。

2019年5月よりは荻澤佳奈医師が乳腺外科に配属され常勤医2名かつ非常勤医2名の計4名体制となった。しかし荻澤佳奈医師は2022年6月末に退職し大阪公立大学病院講師となり、当科へは水曜日、土曜日の午前の外来を担当する非常勤医師として勤務する現状となっている。

乳腺外科開設以来わずか14年であるがようやく南大阪地区での乳癌診療については一定のご評価をえたと思われ、地域の皆様にも周知されたようである。

この間、がん薬物療法の進化や遺伝子診断の流れは非常に激しい。今後もその流れに押し流されず、診療を続けていく覚悟を固めているところである。

当乳腺外科の乳癌手術数の変遷や職員の変遷については別紙資料を御覧ください。

当科では以下のような工夫を行い、患者の要求に応えられるように工夫している。

南大阪病院乳腺外科におけるいろいろな工夫

①手術説明には当科オリジナルの『乳がんの臨床』なるパワーポイント書類を用いて過不足のない説明を行っている。

②手術野展開に脳外科手術に用いられるティッシュフックを使用し、外科医の人員削減と手術野展開の迅速性および正確性を担保している。
すべての乳房手術が執刀医と第1助手の二人で可能である。
おそらくティッシュフックを利用して手術野を展開している乳腺外科は本邦で当院のみと思われる。

- 南大阪病院乳腺外科における術野展開の工夫
(会議録)
中谷守一(南大阪病院 乳腺外科・消化器外科),
野原丈裕, 原田知明, 瀧井麻美子, 大嶋勉,
田中芳憲, 竹村雅至, 藤尾長久, 飛田忠之,
柴田利彦
日本臨床外科学会雑誌(1345-2843)78増刊:816
(2017.10)など

③乳房部分切除範囲の確認には超音波検査を実施するが、その際に切除縁については油性インクを用いて皮膚に描画するかわりに細幅の粘着テープを皮膚に貼付している。これにより超音波画像中に細幅粘着テープによる画像欠損が生じて切除縁の確認が超音波検査で確認できるように工夫している。細幅粘着テープは貼り直しが可能で皮膚に油性ペンを用いて書き込むことは最小限にできる。本工夫もおそらく本邦で当施設のみと思われる。
未発表

④1995年ごろから乳房手術に菱形皮弁術を応用してきたが、乳房部分切除術における組織欠損補填に菱形皮弁術やその進化系の拡大菱形皮弁術を考案して応用している。
本術式についても本邦では当科がその臨床応用をリードしてきたと思われる。

- 乳腺外科への菱形皮弁術の応用(会議録)
中谷守一, 西山典利, 半羽宏之, 永野晃史,
月岡一馬, 森本健, 洪晶恵, 木下博明,
太田泰淳
日本外科学会雑誌(0301-4894)104臨増:699
(2003.04)

- 乳腺外科における菱形皮弁術応用の経緯
(会議録)
中谷守一(南大阪病院 外科), 原田知明, 野原丈裕,
坂田親治, 田中芳憲, 里美美和, 東野正幸,
飛田忠之, 末廣茂文
日本外科学会雑誌(0301-4894)112臨増1-2:574
(2011.05)など

⑤乳房乳頭内病変の超音波検査にあたって円筒状リングを乳頭乳輪部に装着する工夫を行い精細な乳頭内腫瘤像をえる工夫をしている。これも当科が本邦をリードしている重要な臨床研究である。

- 乳頭部超音波検査における円筒状リングを用いた撮像の工夫と乳頭内腫瘤エコー像(会議録)
中谷守一(南大阪病院 乳腺外科)
超音波医学(1346-1176)45 Suppl. S738
(2018.04)など

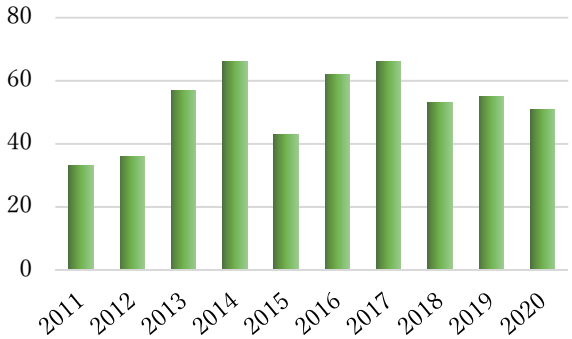
⑥全身麻酔が困難な患者については局所麻酔下の乳房切除術なども提供している。局所麻酔剤については当院薬剤部の協力により TLA 麻酔液を無菌調剤して各種乳腺手術はじめ CV ポート手術などに使用している。もちろん、出血させない手術を念頭に各種のエネルギーデバイスを駆使しているが、乳房切除術の出血量でさえ非常に少なく特筆すべきと思われる。

- 両側除脳硬直を呈する局所進展型乳癌患者に対する TLA 局所麻酔下乳房部分切除術の工夫
(会議録)
中谷守一(景岳会南大阪病院 乳腺外科・消化器外科),
原田知明, 野原丈裕, 宮岡雄太, 田中芳憲,
葛城邦, 藤尾長久, 飛田忠之, 末廣茂文
日本癌治療学会誌(0021-4671)49,3:2140(2014.06)など

業務実績統計

乳腺手術件数の推移

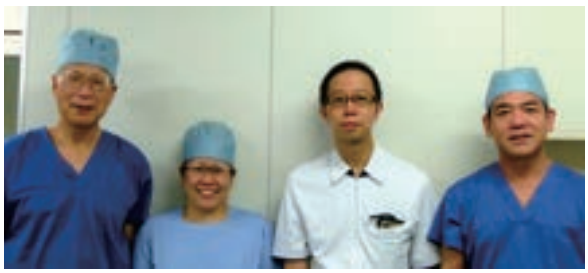
乳癌手術件数の推移



乳腺外来担当医

2008年以降

年	常勤医		非常勤医		
2008	中谷守一	原田知明	野原丈裕	岩本充彦	
2009	中谷守一	原田知明	野原丈裕	岩本充彦	
2010	中谷守一	原田知明	野原丈裕	岩本充彦	
2011	中谷守一	原田知明	野原丈裕	岩本充彦	
2012	中谷守一	原田知明	野原丈裕	岩本充彦	
2013	中谷守一	原田知明	野原丈裕	岩本充彦	寺沢理沙
2014	中谷守一		原田知明	野原丈裕	佐藤七夕子
2015	中谷守一		原田知明	野原丈裕	佐藤七夕子
2016	中谷守一		原田知明	野原丈裕	
2017	中谷守一		原田知明	野原丈裕	
2018	中谷守一		原田知明	野原丈裕	
2019	中谷守一	荻澤佳奈	原田知明	野原丈裕	
2020	中谷守一	荻澤佳奈	原田知明	野原丈裕	
2021	中谷守一	荻澤佳奈	原田知明	野原丈裕	
2022	中谷守一		原田知明	野原丈裕	荻澤佳奈



稿を終えるにあたって

当科の方針は、乳腺疾患診断には正確なマンモグラフィ診断と超音波診断、さらに他の画像診断などの結果を針生検などの乳腺穿刺術に反映し正確な病理診断を得ること。十分な治療計画と予後予測などを介して患者とその家族、医療者が納得できる治療方法を検討し、決定し実施することに尽きると考える。手を抜かずたゆまぬ工夫をつぎ込む。そして『あきらめない』をモットーに進んでいく。今後も変わらぬご支援をいただければ幸いである。

整形外科

副理事長
副院長
整形外科部長
感染制御室長
大坂　芳明

整形外科の歴史

昭和26年（1951）5月
　大阪医科大学創設者　吉津度先生の協力を得て
　南大阪病院となる
　院長　内藤景岳先生　115床　内科　小児科
　産婦人科　放射線科を標榜

昭和27年7月
　整形外科増設
　加藤守男　村上彰　大内義雄先生

昭和27年
　大阪医科大学の関連病院となりスタート

昭和35年
　京都府立医科大学の関連病院

昭和42年
　大阪医科大学の関連病院　伊藤　津田医師

昭和43年
　大阪医科大学　早子保　原　八幡医師

昭和47年
　京都府立医科大学の関連病院

昭和52年
　大阪市立大学の関連病院

昭和55年
　兵庫医科大学の関連病院

平成5年
　大阪医科大学の関連病院
　金明博　大坂芳明　小山茂和医師　赴任

その後令和4年まで大阪医科大学の関連病院として地域医療に貢献している

当院は大阪市住之江区にある400床の急性期病院である。住之江区、西成区、東住吉区、平野区には公的病院はありません。住吉区に大阪府立急性期総合医療センターがあるのみで当院は地域の唯一の基幹病院である。

手術室は6部屋（2部屋はクリーンルーム）、麻酔常勤医5人、内科や循環器内科のスタッフも充実しており、手術に対する環境は整えられている。スタッフの一部高齢化はあるものの、大学より応援をいただき、足変形を中心とした矯正骨切り術、脊椎外科、人工関節等地域より紹介が増え手術件数も増えてきている。

今後ハイブリッド手術室やダビンチの導入の計画もあるが、ハードルもかなり高いため日々努力中である。

当院整形外科の現状

2019年　中国武漢で発見された SARS-CoV-2（新型コロナウイルス）は瞬く間に全世界に広まり、日本も例外ではなく、南大阪病院にも甚大なる影響を与えています。外出制限などがありいったん外傷はかなり軽減し、手術制限、救急制限、院内クラスターと経験したことがない事態が発生しています。それに伴い手術数は少し減少しています。

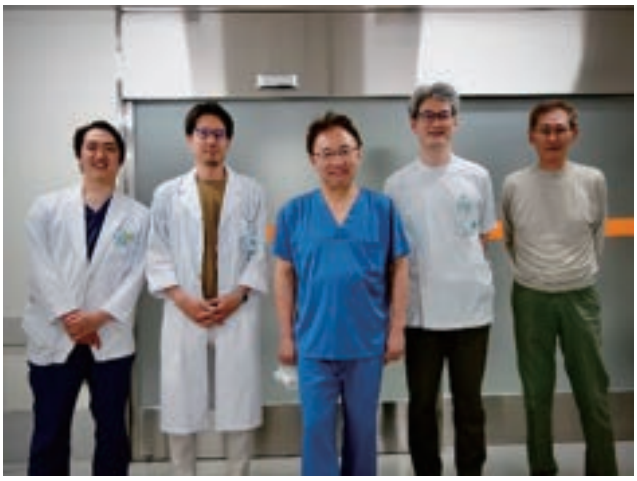
手術技術、関連機器の改良や進歩もあり　手術内容、種類が目に見えて変化しています。現在は超高齢化社会であり転倒による骨折、関節変性での脊椎疾患、関節疾患も激増し、脊椎固定術、椎弓切除術、人工関節置換術が増加しています。それに反して小児疾患手術はほとんど見かけなくなりました。整形外科医も手、足、脊椎、関節、RA 等細分化され、専門以外は治療できないなどのことが起こっています。

今後10年で今以上の変革が医師や医療関係者、医療機器に起こってくると予想しています。社会の流れに沿った医療が必要となってきます。それに対応できるよう努力していくことを目標に、日々の診療をしています。

スタッフ

（令和4年6月）

大坂芳明（副理事長　副院長　整形外科部長
感染制御室長）
森川潤一（整形外科部長　足の外科　骨矯正）
北原義大（整形外科副部長 脊椎外科 外傷外科）
大保拓也（整形外科医員　脊椎外科
2022年4月より）
岩田長瑠（整形外科後期研修医 2022年4月より）
応援医師　中川浩輔（関節外科）　木本智子



業務実績統計

入院患者数

	1日平均	新入院	延患者
平成14年度	46.0	481	16,801
平成15年度	40.1	448	14,687
平成16年度	38.4	462	14,014
平成17年度	42.2	489	15,412
平成18年度	44.2	468	16,137
平成19年度	42.6	510	15,594
平成20年度	42.2	576	15,400
平成21年度	47.6	588	17,364
平成22年度	53.6	596	19,563
平成23年度	44.8	576	16,407
平成24年度	57.5	736	20,983
平成25年度	54.1	675	19,739
平成26年度	51.2	662	18,676
平成27年度	42.4	650	15,525
平成28年度	41.9	642	15,280
平成29年度	42.4	673	15,494
平成30年度	38.2	630	13,951
平成31年度	44.5	675	16,274
令和　1年度	33.7	556	12,312
令和　2年度	31.8	543	11,612

外来患者数

時間内_計		時間外_計		合　計	
患者数	（新患）	患者数	（新患）	患者数	（新患）
24,959	2,280	695	358	25,654	2,638
22,442	2,437	440	92	22,882	2,529
21,737	2,467	448	108	22,185	2,575
19,663	2,303	525	142	20,188	2,445
18,970	2,565	533	127	19,503	2,692
19,113	2,387	669	266	19,782	2,653
20,769	2,317	793	343	21,562	2,660
20,100	2,422	815	411	20,915	2,833
				20,321	
17,350	2,108	369	159	17,719	2,267
17,243	2,074	628	361	17,871	2,435
18,704	2,377	451	278	19,155	2,655
18,151	2,266	355	215	18,506	2,481
17,930	2,277	244	138	18,174	2,415
18,065	2,119	216	126	18,281	2,245
17,757	2,201	214	136	17,971	2,337
17,384	2,449	177	84	17,561	2,533
17,535	2,514	207	126	17,742	2,640
15,525	2,129	167	100	15,692	2,229
15,254	2,081	132	71	15,386	2,152

手術件数　2009年～2012年

			2009	2010	2011	2012
入院手術	脊椎手術	頸椎手術	8	12	1	7
		胸椎手術	0	0	0	0
		腰椎手術	13	16	19	28
		側弯手術	0	0	0	0
	骨接合術	上肢	57	52	65	96
		下肢	128	110	119	145
		下肢の骨幹部骨折	6	2	5	2
		大腿骨頸部（内側）骨折	19	16	26	10
		大腿骨転子部（外側）骨折	62	54	50	78
		骨盤骨折	0	0	0	0
	関節形成術	人工骨頭	45	46	45	41
		人工関節	16	13	13	29
		骨切り術	7	7	6	7
		その他	10	4	5	1
	骨、軟部腫瘍	良性腫瘍	5	8	6	3
		悪性腫瘍	0	2	0	0
		微小血管手術	0	0	0	0
	靱帯縫合、再建術	膝関節	1	1	1	0
		足関節	4	4	2	3
		その他	0	0	1	4
		関節鏡（鏡視下手術、半月手術を含む）	14	9	13	2
		末梢神経手術	8	6	7	5
		腱手術（腱縫合、腱移行、腱剥離）	10	6	6	6
		微小血管手術	0	0	1	1
		骨長調整手術（骨延長）	0	0	0	0
		変形矯正手術	3	5	1	1
		内固定抜去術	46	31	30	34
		骨髄炎手術	7	10	3	10
		その他の手術	18	35	26	36
	合計		487	449	451	549
外来手術	手の外傷		7	12	6	6
	手の外科		23	7	20	35
	末梢神経手術		3	5	4	3
	腫瘍摘出術		10	1	3	2
	下肢の外科		1	2	1	1
	病巣郭清術		0	0	0	0
	内固定抜去術		7	2	10	8
	その他の手術		0	0	0	4
	合計		51	29	44	59
総合計			538	478	495	608

手術件数　2013年～2021年

					2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
脊椎手術	頚胸椎		直視下手術		2	6	2	5	3	2	3	1	2
	腰仙椎		直視下手術		19	19	12	15	35	21	28	30	33
			鏡視下手術、低侵襲手術		0	0	0	0	0	0	0	2	2
骨盤			骨折、外傷の手術		1	0	0	1	0	0	0	0	0
上肢手術	肩関節		骨折、外傷の手術（鎖骨、肩甲骨を含む）		21	27	13	25	17	15	21	29	32
			直視下手術		2	1	1	1	1	0	2	0	0
			鏡視下手術		15	0	0	0	0	0	0	0	0
	肘関節		骨折、外傷の手術		0	11	10	10	11	8	10	5	10
			直視下手術	肘部管症候群	0	2	1	0	1	5	2	5	0
				人工関節置換術	0	0	0	0	0	1	0	0	0
				靱帯再建術	1	0	0	0	0	0	0	1	0
				その他	1	0	1	0	1	1	0	0	1
			鏡視下手術		44	0	0	0	0	0	0	0	0
	手部、手関節		骨折、外傷の手術		7	52	57	47	47	39	55	53	46
			直視下手術	末梢神経手術	4	9	9	14	9	7	8	11	7
				関節形成術（固定術含む）	12	0	8	1	2	0	1	3	2
				腱、靱帯再建術	0	4	0	26	2	16	13	2	0
				顕微鏡下手術	18	0	0	0	0	0	0	0	0
				その他	0	28	50	15	40	22	19	31	38
			鏡視下手術	手根管症候群	0	0	0	0	0	0	0	0	2
				その他	9	0	0	0	0	0	1	0	0
	骨幹部	上腕	骨折、外傷の手術		3	9	6	4	4	12	3	4	3
		前腕	骨折、外傷の手術		58	4	2	1	1	9	3	3	4
下肢手術	股関節		骨折、外傷の手術	人工骨頭挿入術	76	48	40	28	27	28	39	26	25
				骨接合術	6	60	74	50	64	44	60	52	65
				その他	18	18	7	3	0	1	5	1	1
			直視下手術	人工関節置換術	0	8	7	15	17	10	10	11	10
				その他	0	4	4	9	0	0	0	1	5
			鏡視下手術		10	0	0	0	0	0	0	0	0
	膝関節		骨折、外傷の手術		16	22	11	7	9	7	9	10	15
			直視下手術	人工関節置換術	7	26	29	26	25	24	31	30	34
				関節形成術（骨切り術）	2	14	13	18	7	9	5	7	11
				その他	0	1	2	6	6	2	7	2	3
			鏡視下手術	靱帯再建術	9	0	0	1	0	0	1	1	3
				その他	26	9	5	2	0	1	6	10	4
	足部、足関節		骨折、外傷の手術		12	50	40	31	52	27	27	22	19
			直視下手術	矯正術	8	6	6	5	4	3	6	5	3
				関節形成術（固定術含む）	6	8	8	9	3	14	6	10	4
				腱・靱帯再建術	8	8	7	3	7	4	15	2	1
				その他	1	14	11	10	12	8	5	5	0
			鏡視下手術		8	1	5	0	5	2	5	2	0
	骨幹部	大腿	骨折、外傷の手術		2	3	5	5	6	17	6	1	5
		下腿	骨折、外傷の手術		13	3	3	2	2	3	1	0	2

		2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
腫瘍の手術（脊椎を除く）	良性軟部腫瘍手術	0	10	12	9	10	8	12	4	3
	悪性軟部腫瘍手術	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	良性骨腫瘍手術	0	4	4	2	0	1	1	0	1
①内固定材料抜去術		64	54	71	51	70	72	49	63	48
②その他の手術（上段のいずれにも分類困難な手術）		12	0	1	2	3	2	8	1	0
③外傷手術合計（各部位の骨折、外傷の手術の合計）		279	307	268	214	240	210	239	206	227
④疾病手術合計（外傷以外の手術、ただし内固定材料抜去は除く）		167	182	197	192	190	161	187	176	169
総件数（①+②+③+④）		522	543	537	459	503	445	483	446	444

余　談

現在は新型コロナウイルスの猛威や種々のハラスメント、人間関係の変化などで、宴会や酒席がほとんどありませんが、昔は結構ありました。

それが良いのか悪いのかわかりませんが、写真を見る限り、楽しそうです。

胸部外科

理事長
胸部外科
柿本　祥太郎

胸部外科は昭和60年（1985年）1月に開設され、診療分野としては心臓血管外科および呼吸器外科をあわせて診療してきました。

その前年の昭和59年（1984年）に循環器内科が開設され、それに呼応する形で大阪医科大学胸部外科学教室（武内敦郎教授）より3名の医師（森本英夫医長、柿本祥太郎医員、西本泰久医員）が派遣され胸部外科を開設しました。

その後、平成元年（1989年）に柿本が責任者となり継続して診療にあたるとともに、大阪医科大学より、多くの医師の派遣を受けて3名体制で診療を行ってきました。

お世話になった春成英之、蓑原靖一良、森田雅文、中尾圭一、堀本仁士、松山南律、森本大成、木村弘、橋本隆彦、辻井英二、田中馨、三重野繁敏、吉田正隆、湯田淳、中井康成の各先生方に深く感謝申し上げます。

開設時は旧病院の18病棟（三好婦長）が胸部外科の病棟で耳鼻科との混合病棟でした。

手術室も病棟の看護師も心臓手術はまったく未経験のため大学に研修をお願いし、昭和60年3月26日に第1例目の僧帽弁置換術を行いました。ICUが整備されるまでは、術後管理は重症病床を1名で使用し仮眠ベッドを持ち込んで数日間寝泊まりしていました。

以後虚血性心疾患に対する A-C バイパス術（CABG）、人工弁置換術、大動脈瘤の人工血管置換術、末梢閉塞性動脈疾患の動脈バイパス術、さらにペースメーカー植込み術を行ってきました。

心臓血管外科手術の1999年から2006年までの8年間の症例数の推移をみますと、虚血性心疾患に対する CABG は年間平均約16例、弁膜症に対する人工弁置換術は4例、大動脈瘤は5例ほどでほぼ変化ありませんが、ペースメーカー植込み術は30例に増加しました。その他の増加は透析患者さんの内シャント手術の増加によるものです。

しかし、平成19年（2007年）に2名の医師が各々やむをえない事情で退職し、同時期に大学の医師不足のため医師の派遣が困難となりました。

そのため平成19年（2007年）4月から心臓血管外科の手術は中止のやむなきに至りました。

またペースメーカー植込み術も令和2年（2020年）から循環器内科が行うようになりました。

現在は非常勤の医師2名とともに呼吸器外科の診療を続けています。

呼吸器外科では主に肺がんを対象として診療しています。

高齢化の進行とともに、肺がんも増加の一途をたどっています。また肺がんは早期発見が難しく治療困難ながんであり、男性のがん死亡率の第1位となっており、女性でも大腸がんについで第2位となっています。当科では外科治療や化学療法、放射線治療を組み合わせて最善の治療法を選択しています。

近年は抗がん剤の進歩が著しく、分子標的治療薬や免疫治療の新しい薬剤が次々に開発され良好な成績が得られています。しかし最善の治療は手術であり、そのためには定期的な健診などによる早期発見が非常に重要です。

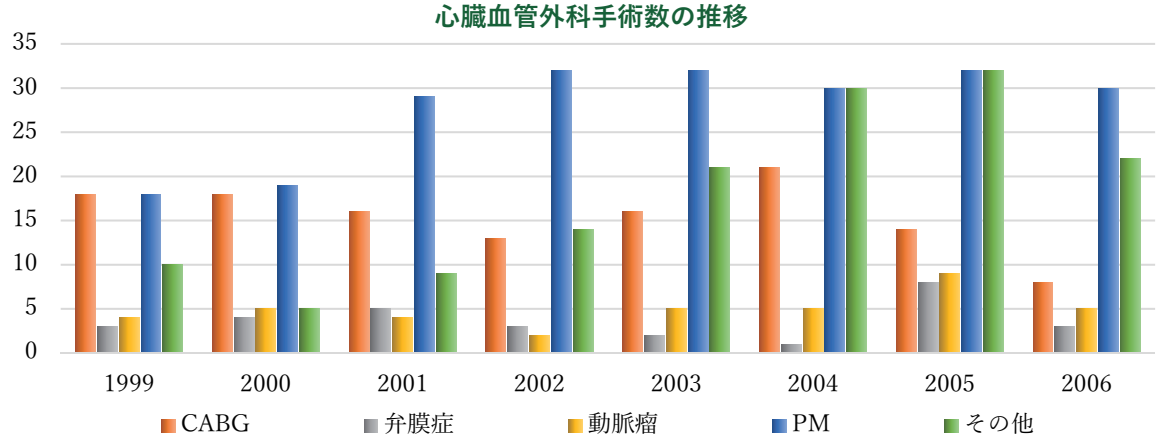
その他、胸腔鏡下の自然気胸、膿胸、縦隔腫瘍などの手術を行っています。

ここ数年、入院数も手術件数も減少していますが、肺がんの手術件数は増加傾向にあります。

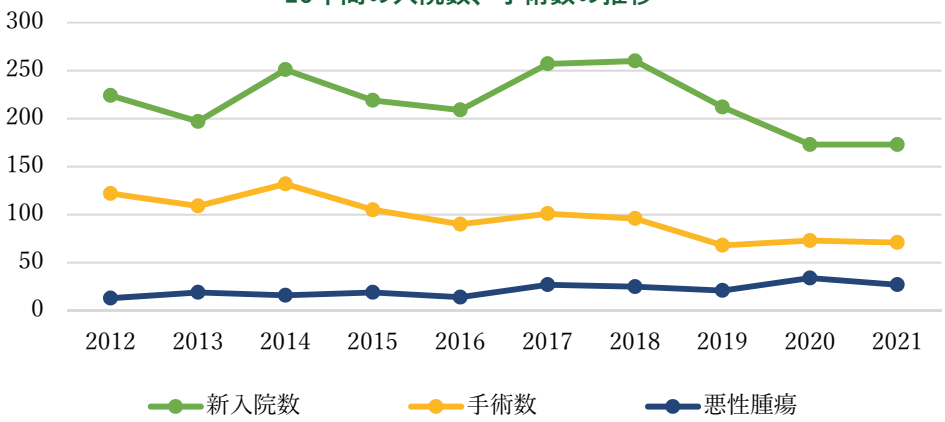
今後は常勤医師を確保し地域の肺がん治療に貢献したいと思います。

業務実績統計

心臓血管外科手術数の推移



10年間の入院数、手術数の推移



学術業績

【論文】

- 人工心臓弁の問題点
  柿本祥太郎，西本泰久，森本英夫
  南大阪医学33:177,1985.

- Duromedics 人工心臓弁の臨床使用経験
  柿本祥太郎，蓑原靖一良，森本英夫
  南大阪医学 35:167,1987.

- Rate responsive pacemaker（VVI）の適応に関する検討
  柿本祥太郎，森田雅文，森本英夫
  南大阪医学 36:1,1988.

- 心筋梗塞後左心室瘤に対する A-C バイパス術および左室瘤切除術の2治験例
  柿本祥太郎，森田雅文，森本英夫
  南大阪医学 36:174,1988.

- 悪性胸腺腫および胸腺癌の2症例
  森田雅文，柿本祥太郎，磯田幸太郎
  南大阪医学 37:1,1989.

- 大阪地下鉄リニアモーターカーのペースメーカーに及ぼす電磁障害
  柿本祥太郎，中尾圭一，森田雅文
  南大阪医学 38:28,1990.

- 空洞形成を伴った肺癌と肺結核の合併例
  中尾圭一，柿本祥太郎，磯田幸太郎
  南大阪医学 38:66,1990.

- 感染性心内膜炎に対する大動脈弁置換術術後の再手術例
  中尾圭一，柿本祥太郎，松山南律
  南大阪医学 38:140,1990.

- 肺原発平滑筋肉腫の一手術例
  堀本仁志，松山南律，中尾圭一，柿本祥太郎
  南大阪医学 39:119,1991.

- 当科におけるペースメーカー植込み症例100例の検討
  柿本祥太郎，松山南律，中尾圭一，堀本仁志
  南大阪医学 39:47,1991.

- 術後多臓器不全を来した高齢者腹部大動脈瘤の一治験例
  堀本仁志，松山南律，森本大成，柿本祥太郎
  南大阪医学 39:111,1991.

- 79 歳左房粘液腫の 1 治験例
  松山南律，柿本祥太郎，堀本仁志
  南大阪医学 39:125,1991.

- 胸腺肉腫様癌の 1 例
  森田雅文，柿本祥太郎，磯田幸太郎
  胸部外科 4:371,1992.

- Aztreonam (AZT)の胸水移行に関する臨床的検討
  堀本仁志，森本大成，柿本祥太郎
  南大阪医学 40:30,1992.

- MRSA による胸骨骨髄炎・縦隔炎に対する有茎大網充填術の 1 治験例
  森本大成，堀本仁志，柿本祥太郎
  胸部外科 46:956,199.3

- 肺絨毛癌の 1 例
  橋本隆彦，木村弘，柿本祥太郎
  南大阪医学 41:165,1993.

- ペースメーカー植込み術後の主な合併症の検討
  柿本祥太郎，橋本隆彦，辻井英二，木村弘
  心臓ペーシング 10:510,1994.

- 胸郭内進展をした孤立性良性腕神経叢原発神経鞘腫の 1 例
  辻井英二，木村弘，柿本祥太郎
  南大阪医学 42:94,1994.

- 2 つの嚢状腹部大動脈瘤を合併した血管型 Behcet 病の 1 手術例
  辻井英二，木村弘，柿本祥太郎
  南大阪医学 42:167,1994.

- 心拍動下冠状動脈バイパス術の 1 例
  田中馨，柿本祥太郎，近藤敬一郎，森田雅文
  南大阪医学 43:169,1995.

- 心不全を伴った右冠動脈左室瘻の 1 例
  山下英丸，辻井英二，柿本祥太郎，他
  南大阪医学 43:161,1995.

- Single lead systemを用いたVDDペースメーカーの使用経験
  柿本祥太郎，田中馨
  南大阪医学 44:134,1996.

- PTCA 後ガイドワイヤーによる冠動脈穿孔にて心タンポナーデをきたした 1 例
  山下英丸，田中馨，柿本祥太郎，他
  南大阪医学 44:158,1996.

- 開心術における自己血輸血について
  田中馨，森田雅文，柿本祥太郎
  南大阪医学 45:7,1997.

- 心不全を伴った右冠動脈左室瘻の 1 手術例
  田中馨，辻井英二，柿本祥太郎，他
  胸部外科 50:854,1997.

- 仮性瘤様形態を呈した真性左心室瘤の 1 例
  森田雅文，三重野繁敏，柿本祥太郎
  南大阪医学 45:142,1997.

- 気管支動脈蔓状血管腫及び肋間動脈肺動脈交通症の 1 例
  田中馨，森田雅文，柿本祥太郎
  日胸外会誌 46:1028,1998.

- 食道癌浸潤による気管狭窄に対して Self-Expanding Metalic Stent が有効であった 1 例
  三重野繁敏，森田雅文，柿本祥太郎
  南大阪医学 46:53,1998.

- 仮性瘤様形態を呈した真性左心室瘤の 2 例
  森田雅文，三重野繁敏，柿本祥太郎
  日心外会誌 28:275,1999.

- CABG 後の MRSA 縦隔炎で静脈グラフト破裂をきたした 1 例
  森田雅文，田中馨，三重野繁敏，柿本祥太郎
  胸部外科 52:398,1999.

- 緊急冠動脈バイパス術を施行した慢性透析患者の 1 例
  三重野繁敏，森田雅文，柿本祥太郎
  南大阪医学 47:39,1999.

- 動脈硬化性嚢状真性腹部大動脈瘤の 1 例
  吉田正隆，柿本祥太郎，森田雅文，磯田幸太郎
  南大阪医学 47:173,1999.

- 血胸を呈した胸壁 desmoid 腫瘍の 1 例
  森田雅文，三重野繋敏，湯田淳，柿本祥太郎
  南大阪医学 48:37,2000.

- Pacemaker 植込み術後のリード損傷の検討
  湯田淳，森田雅文，柿本祥太郎
  南大阪医学 48:145,2000.

- 低肺機能を呈した高齢者心房中隔欠損症の 1 例
  田中馨，森田雅文，柿本祥太郎
  南大阪医学 51:57,2003.

- 外側大腿回旋動脈を使用した超高齢者 CABG の 1 例
  森田雅文，田中馨，中井康成，柿本祥太郎，他
  胸部外科 56:1062,2003.

- 原発不明縦隔リンパ節癌の 1 例
  森田雅文，中井康成，柿本祥太郎，磯田幸太郎
  胸部外科 56:1154,2003.

- 急性、多発性塞栓症を契機に発見された左房粘液腫の 1 例
  森田雅文，田中馨，柿本祥太郎
  南大阪医学 51:199,2003.

- 肋間動脈肺静脈交通症に対し肋間動脈塞栓術を施行した 1 例
  田中馨，森田雅文，柿本祥太郎
  南大阪医学 52:143,2005.

- 過去 3 年間の当院での胸腺関連腫瘍の経験
  田中馨，森田雅文，柿本祥太郎
  南大阪医学 53:23,2005.

- 原発性肺多形癌の 1 例
  田中馨，森田雅文，柿本祥太郎
  南大阪医学 54:65,2006.

- 南大阪病院における腹部大動脈瘤の手術について
  森田雅文，田中馨，柿本祥太郎
  南大阪医学 54:95,2007.

- 緊急手術を施行した両側自然血気胸の 1 例
  柿本祥太郎
  南大阪医学 58:39,2010.

- 胸腺非定型カルチノイドの 2 手術例
  柿本祥太郎，田中馨，森田雅文，小林庸次
  南大阪医学 27:2011.

- 肺 MALT リンパ腫の 1 例
  柿本祥太郎，森田雅文，小林庸次
  南大阪医学 60:81,2012.

- 原発不明癌性心膜炎の 1 例
  柿本祥太郎
  南大阪医学 62:1,2015.

- 肺癌術後に脊髄梗塞を発症した 1 例
  柿本祥太郎，森田雅文，下雅意学，賀陽亮太郎
  南大阪医学 63:25,2016.

皮膚科

皮膚科医長　**清水　奈美**

皮膚科は1978年8月から一般外科より独立し診療を開始した。

今まで大阪市立大学医学部皮膚病態学同門の数々の先生方が医長を務めてこられ、2012年度より水野信之部長が着任された。水野部長は脱毛症が専門であり、赤外線、紫外線など光線療法の拡充を行った。

皮膚外科に関しては、2011年度より渡邉奈津子医長が着任され手術症例が増加した。2020年度には当院に形成外科が開設され、以降は皮膚腫瘍や皮膚潰瘍の手術は形成外科に依頼をさせて頂いている。その他外科的処置に関しても形成外科蔡顯真部長には多方面にわたり助けて頂いており、心より感謝申し上げたい。

2003年度と2021年度の皮膚科の上位疾患をそれぞれ以下に示す。

皮膚科を受診する上位疾患はこの20年の間そこまで変化はみられないが、その治療法は近年大きく様変わりしている。乾癬に対する生物学的製剤は2010年に抗 TNFα 抗体製剤であるインフリキシマブとアダリムマブが皮膚科領域でも使用可能となったのを皮切りに、現在では約10剤が使用可能となっている。また、アトピー性皮膚炎に対しても、2018年に IL-4/13受容体モノクローナル抗体であるデュピルマブが発売され、2020年にはJAK 阻害薬の外用剤も発売された。

今後も新薬が続々と登場し治療の選択肢は更に充実していくと予想されるが、知識のアップデートを常に行い、患者さん一人一人に最良の医療を提供できるよう地域の基幹病院として頑張っていきたいと考えている。

常勤医師（2000年以降）

	入職日	退職日
竹田　恵理	2000.07.01	2006.03.31
加藤　敦	2003.04.01	2006.11.30
安田　滋	2008.04.01	2009.03.31
渡邉　奈津子	2011.04.01	2014.03.31
水野　信之	2012.04.01	2019.03.31
青木　麻子	2013.04.01	2013.09.30
金城　里美	2014.04.01	2016.03.31
中達　早希	2015.04.01	
清水　奈美	2019.04.01	
水田　綾	2019.05.01	

皮膚科外来担当看護師

赤崎　直美　　2009.04.01～

上位疾患比較

2003年度　皮膚科上位疾患

順	疾患名
1	帯状疱疹
2	その他の皮膚および皮下組織の疾患
3	皮膚及び皮下組織の感染症
3	その他皮膚炎及び湿疹
5	熱傷及び腐食
5	じんま疹
7	出血性の病態並びにその他の血液及び造血器の疾患
7	接触皮膚炎
7	水痘

2021年度　皮膚科上位疾患

順	疾患名
1	皮脂欠乏性湿疹
2	皮脂欠乏症
3	足白癬
4	足爪白癬
5	脂漏性皮膚炎
6	接触皮膚炎
7	アトピー性皮膚炎
8	皮膚そう痒症
9	感染性皮膚炎
10	じんま疹

形成外科

形成外科部長
蔡　顯真

創立70周年、おめでとうございます。

今後も当科は地域、住之江区の褥瘡・難治性潰瘍治療や外傷治療の拠点として、時間外受診・救急外来診療や周囲病院・施設からの紹介を積極的に受け入れていく所存です。もちろん、術前の患者への分かりやすい手術説明、術中・術後の患者の安全と術後の満足を第一に考えております。

老舗、地域の頼れる私立病院として、益々の発展の一助になれば幸いです。

2022年　初秋のころ

南大阪病院における形成外科

Ⅰ、形成外科とは？

「組織や臓器を移動、移植することにより、先天的あるいは後天的に欠損、変形した身体部分を修復・再建し、外貌と機能の回復をはかる外科」と言われています。特定の診療臓器はありませんが、**「診療範囲は頭から足まで広範囲」**であり、**「血流を鑑みた組織移動の外科」**と言えます。

Ⅱ、当科の診療体制

当院で扱う疾患として、大別すると

①外傷：　一般的な創傷治療、新鮮熱傷治療、顔面骨折、顔面組織損傷治療、マイクロサージャリーを用いた手指損傷治療

②腫瘍：　良性皮膚腫瘍（母斑・粉瘤など）　皮膚悪性腫瘍（有棘細胞癌や基底細胞癌など）の切除後の再建も

③先天異常疾患：　唇裂口蓋裂、小耳症などの耳介変形、先天性眼瞼下垂、臍ヘルニアに対する臍形成、漏斗胸変形など

④整容外科：　醜状瘢痕に対する修正術、顔面神経麻痺に対する修正術、後天性眼瞼下垂症に対する眼瞼形成術

⑤再建外科：　乳がん術後変形に対する乳房再建術、リンパ廓清術後のリンパ浮腫に対する治療

⑥美容外科：　加齢に伴うしみ、しわに対する治療

⑦創傷外科：　糖尿病、閉塞性動脈硬化症やうっ滞性静脈炎に起因する難治性足潰瘍または褥瘡に対する治療

⑧そのほか変性疾患：　静脈瘤に対する静脈抜去術や高位結紮術、巻き爪と陥入爪に対する治療

が挙げられます。

外傷などによる急性損傷に対しては、当科が水曜日の午前中と金曜日の午前・午後帯は ER 受診や救急のファーストコール医として、初期治療に当たっています。

褥瘡や糖尿病性足潰瘍を代表とする慢性創傷においては、毎週水曜日の午後に褥瘡回診を行い、難治性足潰瘍に対しては、循環器内科・糖尿病内科・透析内科・創傷専門認定看護師・義肢装具士・リハビリスタッフと連携して、極力、大切断が免れるよう「足と歩行を守る」を目標とした院内チーム医療を実践しています。

整容外科の中でも近年特にニーズが高まっているのが加齢性眼瞼下垂の治療です。

当科では挙筋腱膜前転法と眉毛下皮膚切除を基本的術式とし、下垂の重度と患者の希望に合わせて術式を組み合わせ、より患者満足度の高い治療を目指しています。

乳がん術後変形に対しては切除時の同時再建だけでなく、過去に受けられた乳房切除術後の変形に対しても再建を行っております。術式は筋皮弁による乳房再建のみならず、乳房インプラントも対応しております。乳房インプラントを用いた乳房再建は学会からの実施施設認定を得て、保険適用で実施可能となっています。

また、当科では上下肢リンパ浮腫治療にも力を

注いでいます。

リンパ浮腫治療も多職種チーム医療の代表の1つです。

手術は当院で顕微鏡下に、リンパ液輸送機能が保たれているリンパ管を細静脈に吻合し、リンパ液を静脈系に返すリンパ管静脈吻合を行っています。まず行われるべき治療はコメディカルスタッフによる弾性着衣による圧迫やリンパマッサージで、術前術後にそれらを行い、手術療法と併用しています。

その他、再建手術に対しては、患者さんの様々な背景や要素を形成外科医が考慮して、その方に一番適した再建方法を一緒に考え、適切にアドバイスするという、態度で臨んでいます。

III、当科の特色

当院は外科のスタッフが10人以上も在籍するなど、泌尿器科、整形外科を含め手術症例の多い病院であり、それに対して、当科は「頭からつま先まで外科」として、他科依頼の再建を含め、何でも対応できるように努めています。多様化する疾患に対し、当院の特徴の1つである診療各科の横の連携が強いことを生かし、多専門的アプローチを可能としています。

南大阪病院における形成外科の歴史

当科の創設

2003年4月より、大阪市大（当時）形成外科医局より原岡剛一医師が医長として赴任し新設され、非常勤医師（原田輝一、元村尚嗣 医師）2名で外来診察・手術を担当されたのを礎として、数年間医局から新進気鋭の若手医師たちが派遣されました。

現大阪公大形成外科教授、元村尚嗣医師が非常勤で支えてくださった時期もありました。

①2003年度実績

手術件数（主に顔面骨骨折）…… 51例
論　　文 …… 1編
学会発表 …… 2回
研 究 会 …… 1回

②2004年度実績

手術件数（主に皮膚良性腫瘍）‥ 218例
＊内シャント造設術 …… 16例
論　　文 …… 3編
学会発表 …… 2回

③2005年度実績

手術件数（主に皮膚良性腫瘍）‥‥223件
＊悪性腫瘍およびその再建術…… 27例
＊内シャント造設術 …… 21例
論　　文 …… 1編
学会発表 …… 3回

④2006年度実績

手術件数（主に皮膚良性腫瘍）‥ 235件
＊内シャント造設術 …… 18例
学会発表 …… 2回
研 究 会 …… 1回

⑤2007年度実績

手術件数（主に皮膚良性腫瘍）‥ 180件
＊糖尿病性難治性足潰瘍 …… 34例
内シャント造設術 …… 33例
論　　文 …… 1編
学会発表 …… 2回
研 究 会 …… 2回

医長　原岡剛一医師を中心に、医員として、山中清孝医師（2003年10月～2005年9月）、2005年10月からは波多野隆治医師の2名の常勤医師で外来診療、手術を担当していました。2名ながら毎年数編の論文作成、数回の学会発表を行い、形成外科学会の南大阪地域の堂々たる認定施設として、認識されていたようです。

特筆すべきは内シャント造設症例数で、マイクロサージャリーを行い、アクティビティの高さがうかがい知れます。

現在、原岡剛一先生は神戸大学医学部附属病院美容外科診療科長　准教授、山中清孝医師は阪堺病院で上肢再建外科医として、波多野隆治医師は

大阪医療センター形成外科部長として、活躍しておられます。

当科の復活

令和2(2020)年5月から、蔡が部長として、入職し、形成外科が再開設しました。

外来診療は主に水～土曜日で（月火に院内依頼で診察することも)、手術は月と火曜日は終日、水曜日は午後に行います。

2021年4月から火曜日ごとに若手医師が手術支援に公大形成外科より非常勤勤務していただいています。時々、元村現形成外科教授を手術支援にお呼びすることもあります。

①入職時挨拶：

5月1日より勤務させて頂いています。

形成外科　蔡　顯真（さい　けんしん）と申します。尼崎市出身、0型、おとめ座です。韓国釜山大学を卒業し、H.10年入局です。釜山で学生時代を過ごし、医師となってからは堺、新居浜、福岡、神戸、西宮で過ごし、私にとって様々な恵まれた経験と出逢いができました。この度、私の自宅がある堺市の近くで働くことができて大変うれしく思います。ここ、住之江でもまた、新しい出逢いがあるかと思うと楽しみです。よろしくお願い申し上げます。

専門分野：乳房再建　外傷　熱傷　難治性潰瘍　変性疾患（静脈、リンパ）

眼瞼の手術も好きです。

②2020年度　就任時　挨拶

形成外科とは？「組織や臓器を移動、移植することにより、先天的あるいは後天的に欠損、変形した身体部分を修復・再建し、外貌と機能の回復をはかる外科」と言われています。

特定の診療臓器はありませんが、「診療範囲は頭から足まで広範囲」であり、「血流を鑑みた組織移動の外科」と言えます。

当科は「頭からつま先まで外科」として、再建を含め、何でも対応できるように努めています。

また、当院当科は褥瘡・難治性潰瘍治療や外傷治療の拠点として、時間外受診・救急外来診療や周囲病院・施設からの紹介を積極的に受け入れていく方針です。もちろん、術前の患者への分かりやすい手術説明、術中・術後の患者の安全と術後の満足を第一に考えております。

よろしくお願い申し上げます。

業務実績統計

2020年度実績：病院年報2020年から抜粋

【手術件数】

令和2年5月から12月までの8か月間で手術件数は223例を数えます。

その内訳は全身麻酔81例＋局所麻酔142例です。

手術内容区分では、外傷62例、先天異常3例、腫瘍112例、瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイドは3例、難治性潰瘍28例、炎症･変性疾患は15例となりました。

骨折を含めた顔面外傷、悪性を含めた腫瘍症例、また難治性潰瘍手術が多いことが当院当科の手術の特徴です。

【国内学会発表】

1) チーム医療を再考するきっかけになった88歳仙骨部褥瘡患者に対する治療経験
関西形成外科学会学術集会

2) リンパ管細静脈吻合(LVA)における蛍光イメージングシステム SPY Portable hand held imager (PHI)の使用経験
-8例から得た知見について-
日本形成外科学会総会

3) 当施設でのリンパ管静脈吻合患者25症例の積み重ねから得た知見について
日本形成外科学会総会

4）当院当科での頭皮有毛部腫瘍切除時の一工夫について
日本創傷外科学会

5）リンパ管細静脈吻合(LVA)に蛍光イメージングシステムSPY Portable hand held imager(PHI)の使用経験-導入前と比較して-
日本リンパ学会

6）エホバの証人患者の頭頂部に生じた有棘細胞癌の1例-術前・術後の経過を含めて-
日本皮膚悪性腫瘍学会

【講演】

1）「形成外科医って、いつ役に立つの？」
-総合病院における形成外科の役割とは？-
院内看護部講演

2）院外チーム医療における形成外科の役割
-慢性創傷を中心に述べて-
製薬会社院外講師勉強会

【執筆】

1）患者背景に対応した巻き爪と陥入爪に対する3段階法-マイルド・中間・シビア法について-
院内誌 もっと南大阪　2020年　秋号

＊形成外科学会に5月から12月までの実績を認定施設申請し、2021年度から形成外科学会認定施設として登録されることとなりました。

2021年度実績：病院年報2021年から抜粋

【手術件数】

令和3年1月から12月まで手術件数は348例を数えます。

その内訳は全身麻酔175例＋局所麻酔173例です。

手術内容区分では、外傷37例、腫瘍199例、瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイドは8例、難治性潰瘍57例、炎症・変性疾患は41例となりました。

当年度は糖尿病難治性潰瘍手術が多かったです。

また、炎症・変性疾患の顕著な増加は、リンパ浮腫に対するリンパ管静脈吻合手術の開始と静脈瘤手術が増えたことが反映されています。

【国内学会発表】

1）80歳女性、耳垂部メルケル細胞癌の治療経験
日本耳介再建学会

2）糖尿病足病変に対するチーム医療事始め
-新赴任先での治療チーム立ち上げに際して-
日本創傷外科学会

3）リンパ管細静脈吻合(LVA)
-新赴任先での立ち上げに際して-
日本リンパ学会

4）私が経験したリンパ管静脈吻合36症例
-市中病院における治療戦略と工夫について-
日本外科系連合学会

5）45年以上経過した右下腿難治性潰瘍を伴う慢性脛骨骨髄炎の治療経験
日本臨床外科学会

6）私が経験した乳がん術後続発性リンパ浮腫に対するリンパ管静脈吻合(LVA)について
関西形成外科学会学術集会

7）数回の合同カンファレンスが奏功した83歳女性 傍ストーマヘルニアの治療経験
関西形成外科学会学術集会

【講演】

1）総合病院における形成外科の役割
-チーム医療の一員として-
大阪南部医療連携の会　2021/1/16

【執筆】

1）リンパ浮腫患者にとって、リンパ管細静脈吻合は福音となり得る。
院内誌 もっと南大阪　2021年　秋号

【院内活動】

1）リンパ浮腫チームカンファレンス 立ち上げ
1/8～ 3回のカンファレンス開催

2）足病変治療チームカンファレンス 立ち上げ
3/26～ 8回のカンファレンス開催

スタッフ

マイクロサージャリー中の
蔡 顯真 医師
（現　形成外科部長）

形成外科外来看護師（後列）と
非常勤　**岸 麻理奈 医師**（前列・左）

手術支援に来院し、遊離広背筋皮弁挙上中の
元村 尚嗣 医師
（現　大阪公立大学　形成外科教授）

2021年4月から火曜日非常勤
野村 麻衣 医師
（2021年現在、大分岡病院　形成外科）

泌尿器科

泌尿器科部長
竹垣　嘉訓

泌尿器科は昭和59年7月から兵庫医科大学泌尿器科教室の協力のもと、週2回非常勤医が勤務され診療が開始された。その後、患者数の増加により、昭和62年9月から常勤医1人を迎え終日診療開始された。
以後、平成15年は松井孝之部長、桑江秀樹医員の常勤医2人体制、平成16年～平成21年は松井孝之部長、長井潤医員の2人体制、平成22年から松井孝之部長、丸山琢雄医員、長井潤医員の3人体制、平成24年から松井孝之部長、丸山琢雄医員の2人体制で診療に当たられた。
この間の病院年報によると、尿路結石と前立腺疾患を診療の2本柱として活動され、主な手術は体外衝撃波結石破砕術、経尿道的尿管結石破砕術、経尿道的前立腺切除術、経尿道的膀胱腫瘍切除術、経尿道的尿管ステント留置術が行われていた。また前立腺生検は年間40～70件行われていた。

平成26年4月から大阪市立大学大学院医学研究科泌尿器病態学（現 大阪公立大学大学院医学研究科泌尿器病態学）の関連病院となり、常勤医2名体制（牧野哲也医長、立花大和医員）、外来非常勤医2名で診療開始され、同年10月からは竹垣嘉訓部長、牧野哲也医長の常勤医2名、外来非常勤医2名の体制となる。
以後、大学病院や関連病院と連携して応援医を派遣してもらい、それまで当院では行われていなかった泌尿器科領域の腹腔鏡手術が行われるようになり、また開腹手術や経尿道的手術が急増した。
その当時の新体制となった泌尿器科について、当院の広報紙『もっとみなみおおさか』で下記のように紹介している。
『特殊な小児泌尿器科疾患を除く泌尿器領域全般について診療しています。尿路悪性腫瘍（腎癌、腎盂・尿管癌、膀胱癌、前立腺癌、精巣腫瘍など）に対しては手術療法、抗癌化学療法を行っています。手術療法においては、できるだけ患者さんのQOLを損ねないよう低侵襲手術を心がけ、内視鏡手術、腹腔鏡手術を積極的に行っていきます。尿路結石症に対しては、体外式衝撃波結石破砕術（ESWL）と経尿道的結石破砕術（新たにレーザーを導入予定）を用い、安全かつ確実な治療を目指しております。』

そして新体制となった後の手術実績が認められ、当時としては最新の内視鏡手術用ビデオシステム・手術器具が導入されることになり、それまで使用されていた内視鏡システム・手術器具が一新されることになる。
すなわち、平成26年12月には経尿道的結石破砕術（TUL）で用いる最新の細径硬性尿管鏡（RICHARD WOLF社製 6.5Fr、8Fr）と細径軟性腎盂尿管鏡（超小型 CCD 搭載ビデオスコープ OLYMPUS社製 URF-V2）および最新の機能を備えたレーザー破砕装置（ホルミウム・ヤグレーザー オデッセイ30）を導入。また、膀胱癌、前立腺肥大症に対する経尿道的手術（TUR）は、従来灌流液に非電解質溶液を用いていたため、合併症として低ナトリウム血症（TUR症候群）を起こす危険性があったが、灌流液として生理食塩水（電解質溶液）を使用する、当時としては最新のTURisシステムを導入し、低ナトリウム血症は起こらなくなった。さらに、このシステムを用いることで手術中の閉鎖神経反射が起こりにくくなり、TURの合併症である膀胱穿孔の危険性が減り、また切除した部位からの出血を減少させる効果や止血能力の向上により、合併症の少ない安全で確実な手術が可能となった。

そしてこのような新しい体制となったことを、

地域医療推進室の協力のもと登録医の先生方に知っていただき、また泌尿器科の現状と実績を紹介する目的で登録医の先生方を対象に研究会を主宰するなどの活動を積極的に行った。その結果、紹介患者数の増加につながり、平成27年には年間手術件数が358件に増え、そのうち開腹手術12件、腹腔鏡手術13件、経尿道的膀胱腫瘍切除術99例、経尿道的前立腺切除術10例、経尿道的結石破砕術（レーザー使用）35例の実績を上げ、さらに平成28年には年間手術件数407件に増え、開腹手術11件、腹腔鏡手術7件、経尿道的膀胱腫瘍切除術106例、経尿道的前立腺切除術18例、経尿道的結石破砕術（レーザー使用）36例の実績を上げることになった。その後の手術実績の推移は（**図1、2、3**）に示す通りである。

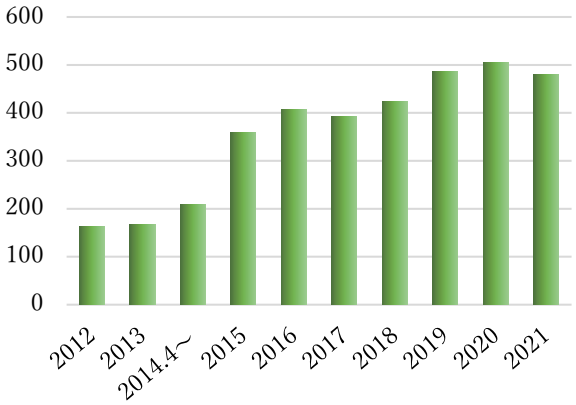


図1　総手術件数の推移（ESWL 除く）

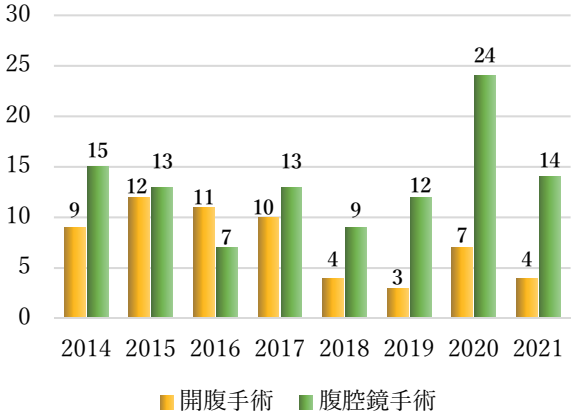
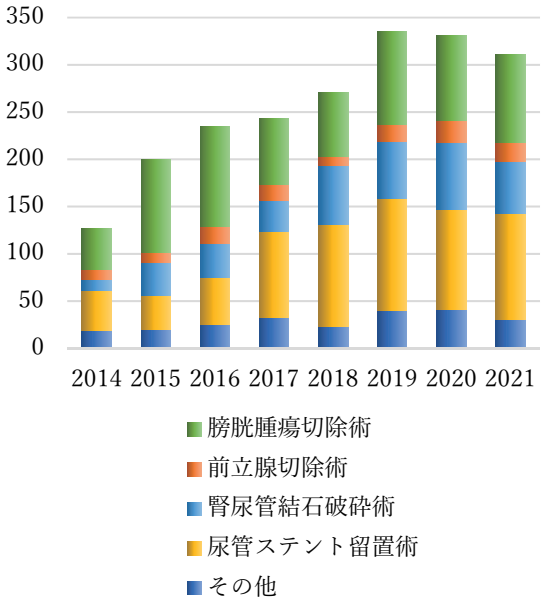


図2　開腹手術と腹腔鏡手術件数の推移



	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
膀胱腫瘍切除術	44	99	106	70	68	98	90	93
前立腺切除術	10	10	18	16	10	18	23	20
腎尿管結石破砕術	12	35	36	33	62	60	71	55
尿管ステント留置術	42	36	50	91	108	119	106	112
その他	19	20	25	33	23	40	41	31

図3　経尿道的手術件数の推移

この間、泌尿器科スタッフとしては、平成28年4月から牧野医長に代わり鎌田良子医員が赴任し、さらにその後の手術件数、入院患者数の増加にともない、平成29年4月からは新たに大原義和医員が加わり、常勤医3人体制となった。以後、平成31年4月から大原医員に代わり壁井医員が赴任、令和4年1月から壁井医員に代わり豊川起弘医員が赴任、同年10月から鎌田医師に代わり長野祐樹医員が赴任し現在に至る。

近年の泌尿器科領域における内視鏡システム、カテーテル類などのデバイスの進歩は目覚しく、当科においても新たに有用な手術器具、デバイスが発売されれば積極的に導入し、手術成績の向上

と合併症をさらに減少させるように取り組んできた。

例えば、経尿道的結石破砕術（TUL）においては、腎盂尿管ビデオスコープ URF-V2よりもさらに高画質・細径で、URF-V2の欠点であった耐久性を向上させた腎盂尿管ビデオスコープ URF-V3を平成31年2月に追加導入した。また、大きな腎結石や下腎杯の結石の場合はこれらリユースタイプの腎盂尿管ビデオスコープでは対応困難な場合がある。すなわち、大きな腎結石の場合はレーザーを照射する時間が長くなる影響で、また下腎杯の結石の場合は内視鏡の湾曲角度がきつい状態でレーザーファイバーを通すために内視鏡が故障する頻度が高くなるという問題（当然、故障した際は高額な修理費が発生する）が泌尿器科学会でも話題になった。この問題に対して、当時発売されて間もないシングルユースタイプの軟性腎盂尿管鏡（OTU社製 WiScope）を令和元年12月からいち早く導入した（当時、大阪府下の病院では当院が最初に導入）。WiScope は軽量・高画質でさらに先端が細径で湾曲角度も大きく、下腎杯の結石や大きな腎結石を破砕する際に故障の心配をすることなく使用可能で、現在も症例により使い分け、非常に有用である。また、TUL は合併症の少ない低侵襲な治療であるが、結石破砕時間が長くなると、特に腎結石の場合は術後合併症として尿路感染による発熱（腎盂腎炎、敗血症）に注意を要する。原因として、灌流液による腎盂内圧の上昇が関連しているため、圧コントロールされた送水により腎盂内圧を一定に保ちながら破砕できる最新の装置（STORTZ 社製 エンドマット SELECT）を令和2年10月より導入した。以後、術後の有意な発熱は認めていない。このような TUL の進歩にともない、さらに安全・確実に結石を破砕し摘出できるようになったため、これまで多く行われていた体外式衝撃波結石破砕術（ESWL）は減少することになった。（**図4**）

図4　経尿道的結石破砕術（TUL）と体外式衝撃波結石破砕術（ESWL）　件数の推移

このような経尿道的手術（経尿道的膀胱腫瘍切除術、経尿道的前立腺切除術、経尿道的結石破砕術、経尿道的尿管ステント留置術など）の増加に対応するため、並列で経尿道的手術を行う体制が望まれた。そこで、これまで使用してきた OLYMPUS 社製内視鏡システムに追加する形で、令和2年10月から新たに STORTZ 社製内視鏡システム一式を導入した。カメラシステムは細部の識別を可能にし、より安全で精細な手術を可能にする解像度の高い4K モニターを導入し、レゼクトスコープシステムは STORTZ 社製 AUTOCON Ⅲ 400を導入した。このレゼクトスコープシステムは高周波電流を常に適切に自動制御することにより、組織の切り始めがスムースで、組織や人体に及ぼす影響が少なく、さらに止血能に優れており、特に大きな腫瘍や繊細な切除が必要な症例に有用である。

本邦における前立腺癌の増加、前立腺癌検診の普及にともない前立腺生検の件数が増加し、当科では年間100件前後の前立腺生検を行ってきた（**図5**）。生検の結果、前立腺癌と診断された場合、治療法は前立腺全摘除術、内分泌療法、放射線治療などの選択肢があるが、近年のロボット支援腹腔

鏡下前立腺全摘除術（RALP）の普及にともない、手術を希望された患者さんの多くはRALPを行っている病院に紹介することになる。したがって当科では年間5件程度を開腹手術で行ってきたが、平成30年からは年間2～3件に減少した。

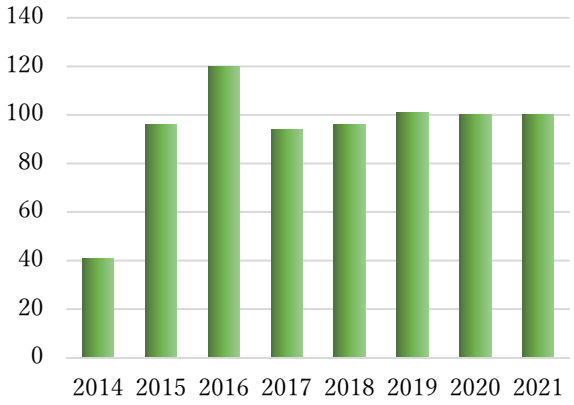


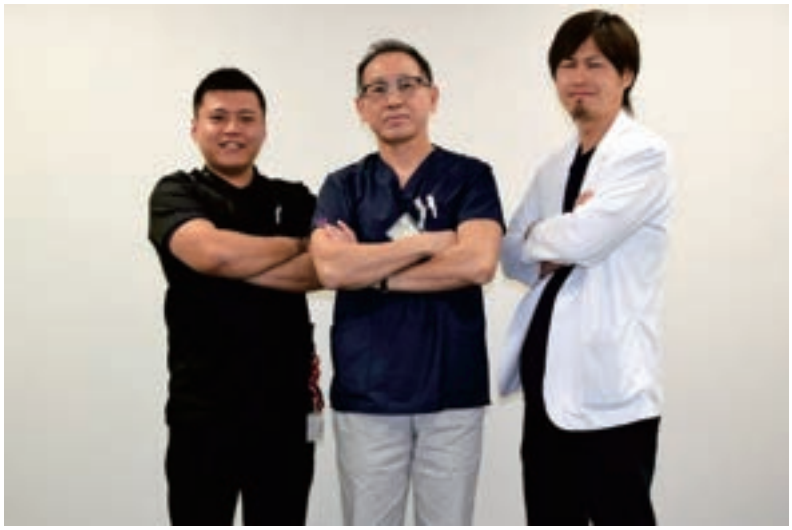
図5　前立腺生検件数の推移

現在、泌尿器科領域におけるロボット支援手術の保険適応が増加しており、前立腺癌以外にも、特に小径腎癌に対する腎部分切除術や膀胱癌に対する膀胱全摘除術に対してはロボット支援手術が非常に有用であり、多くの施設で行われるようになってきた。今後、当院においてもロボット支援手術を導入する予定である。

以上、泌尿器科の歴史と現状を紹介した。今後も引き続き、質の高い低侵襲で安全な治療を提供できるよう心がけ、地域医療に貢献できるよう努力していく所存である。

スタッフ

竹垣嘉訓（泌尿器科部長）
豊川起弘（泌尿器科医員）
長野祐樹（泌尿器科医員）



眼科

眼科医長　**米本 由美子、　板野 瑞穂**

眼科は昭和26年病院開設と同時に設置されました。近年の常勤医師は次の通りですが、他にも非常勤医師、看護師、視能訓練士など多くの方々に支えられて今日に至っております。

現在 外来患者数は1日30～50人程度、外来診察は午前診のみ平日は2診で予約制をとっており、午後は視野検査・蛍光眼底造影検査などの特殊検査・レーザー治療等を実施しています。手術は大阪医科薬科大学の大須賀翔医師にも協力いただき、白内障手術（主として1泊2日）を施行しておりの患者様を御紹介していただいており、術後は早期に御紹介いただいた先生のもとに帰ってもらうように心がけています。

近年の手術件数の動向は次の通りです。（**図１**）地域の開業医の先生方と十分に連携を取った上で少しでも外来患者数や手術件数を増やしていければと考えています。マンパワー不足で新しいことに挑戦しづらいところもありますが、さまざまな症例に対処できるよう精進したいと考えています。

眼科外来担当医

2003年以降　※常勤医のみ記載

年	常勤医			◎医長　○副医長
2003	澤田 達 ◎	渡邊 敏夫 ○	山谷 珠美	
2004	澤田 達 ◎	奥野 高司	丸一 みどり	
2005	竹安 一郎 ◎	丸一 みどり	矢舩 伊那子	
2006	竹安 一郎 ◎	丸一 みどり	矢舩 伊那子	戸成 匡宏
2007	竹安 一郎 ◎	矢舩 伊那子	戸成 匡宏	
2008	竹安 一郎 ◎	立脇 祐子	戸成 匡宏	
2009	立脇 祐子	戸成 匡宏	土師 正也	
2010	立脇 祐子	土師 正也		
2011	立脇 祐子	土師 正也		
2012	岡村 彰子	土師 正也		
2013	土師 正也	岡村 彰子	三宅 智子	
2014	土師 正也 ◎	三宅 智子		
2015	土師 正也 ◎	大野 淳子	三宅 智子	
2016	光辻 辰馬 ◎	土師 正也 ◎	大野 淳子	
2017	光辻 辰馬 ◎	米本 由美子		
2018	光辻 辰馬 ◎	米本 由美子		
2019	米本 由美子 ◎			
2020	米本 由美子 ◎			
2021	米本 由美子 ◎			
2022	米本 由美子 ◎	板野 瑞穂 ◎		

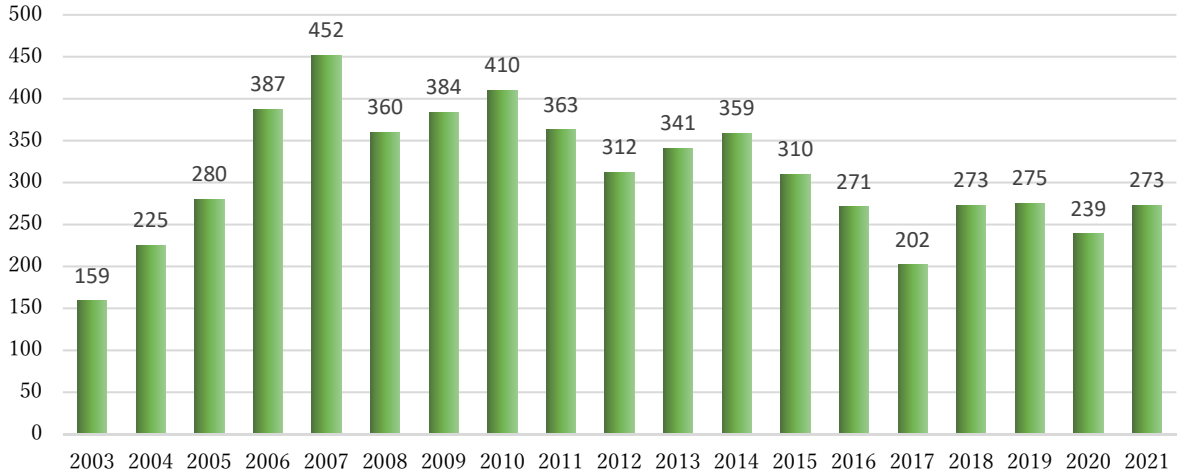


図1　手術件数

学術業績

- サイドポート前嚢切開鑷子による前嚢切開
  澤田達，渡邊敏夫，岡田康平
  南大阪医学 49(1):43-49,2001.

- Phaco Prechop 法を用いた超音波水晶体乳化吸引術
  澤田達
  南大阪医学 50(1):121-127,2002

- 再発翼状片に対する羊膜移植
  山谷珠美，澤田達，渡邊敏夫
  南大阪医学 50(1):129-131,2002

- 移植後混濁を生じ，摘出を要した眼内レンズ
  澤田達，奥野高司，山谷珠美
  南大阪医学 51(2・3):205-211,2003

- 高眼圧負荷時の家兎視神経乳頭におけるグルタミン酸濃度
  奥野高司，奥英弘，杉山哲也，池田恒彦
  第108回日本眼科学会総会
  2004年4月15日～18日　東京

- キマーゼの家兎眼圧に及ぼす影響
  丸一みどり(南大阪病院眼科, 大阪医科大学眼科学教室), 杉山哲也, 池田恒彦(大阪医科大学眼科学教室),
  高井真司，宮崎瑞夫(大阪医科大学薬理学教室),
  紺野隆(トーアエイヨー株式会社　研究部)
  第24回日本眼薬理学会
  2004年10月9日・10日　八王子市

- 挿入後14年にて沈着を生じ,摘出を要したPMMA 眼内レンズの1例(原著論文/症例報告)
  澤田達，佐藤文平，奥野高司，山谷珠美，池田恒彦
  臨床眼科 58(4):539-541,2004.04

- レーザースペックルフローグラフィーによりPDT 前後の変化を観察できたⅡ型 CNV の1例
  矢舩伊那子(南大阪病院)，石崎英介，佐藤孝樹，
  南政宏，前野貴俊，池田恒彦(大阪医大)
  第45回日本硝子体学会総会
  2006年12月1日～3日 東京　学術展示

- Faden 手術が奏功した斜視角変動を伴う成人内斜視の1例
  戸成匡宏，大西真紀子，江富朋彦，平尾真実，
  菅澤淳，池田恒彦
  第62回日本弱視斜視学会総会
  2006年６月3日・4日　浜松　学術展示

- 視神経乳頭黒色細胞腫の2例
  立脇祐子，杉山哲夫，菅澤淳，池田恒彦，奥沢康正，
  山本敏雄
  第46回日本神経眼科学会(2008)

- 全身性エリテマトーデスに合併したサイトメガロウイルス網膜炎の1例
  土師正也，小林崇俊，家久来啓吾，高井七重，
  竹田清子，多田玲，丸山耕一，池田恒彦
  第45回日本眼炎学会（スリーサム2011京都）

他多数

耳鼻咽喉科

耳鼻咽喉科部長

宮田　啓史

南大阪病院耳鼻咽喉科は、住之江区、住吉区、西成区で入院・手術が可能な病院として、大阪急性期総合・医療センター耳鼻咽喉科(旧大阪府立病院)と共に大阪市南部の耳鼻咽喉科頭頚部疾患の診断・治療に貢献しています。久保正治部長が退職される2012年3月までは常勤医3名体制で診療を行っていましたが、宮田啓史部長就任となる2012年4月からは常勤医2名体制と縮小され、それまで行っていた午後診を廃止しました。

2012年までは1日70～80人の外来患者数だったようですが、2012年以降1日40～50名と減少し、2017年以降は1日20～30名となっています。

対象疾患は耳鳴、難聴、中耳炎、顔面神経麻痺、先天性耳瘻孔、アレルギー性鼻炎、副鼻腔炎、嗅覚・味覚障害、口内炎、扁桃炎、咽喉頭炎、唾石、声帯ポリープ、頚嚢胞、頚部リンパ節腫大、嚥下障害、頭頚部腫瘍等多岐にわたっています。

手術件数は年間70～170件程度あったものが近年30～60件に減少しています。

内容は口蓋扁桃摘出術が最も多く、続いて鼻閉改善手術（鼻中隔矯正術、粘膜下下鼻甲介骨切除術、下鼻甲介切除術、鼻茸切除術)、副鼻腔手術(以前は副鼻腔根治術だったものが2012年以降は内視鏡下副鼻腔手術に移行)、声帯ポリープ切除術が主で、あとは唾液腺腫瘍摘出術、頚嚢胞摘出術、耳瘻孔摘出術、気管切開術、鼓室換気チューブ留置術、等です。

旧病院には放射線治療設備があった為、悪性腫瘍の手術もしていましたが、2012年以降はほぼ実施していません。

手術件数は減少傾向ですが、急性炎症の疼痛・腫脹による摂食困難やめまい、鼻出血、内科で血糖管理をして頂きながらの短期のステロイド治療等地域に必要な病院であることは変わらないと思います。

また大阪市中央急病診療所の耳鼻咽喉科後送病院として、年2回だけですが大阪市救急医療事業団の活動に協力しています。

学業業績

- 頸部亜急性壊死性リンパ節炎2症例について
  三木祐一郎，久保正治，奥田文幸
  南大阪医学 48:53-59,2000.
- 耳下腺唾石症例について
  三木祐一郎，久保正治，奥田文幸
  南大阪医学 48:61-65,2000.
- 髄膜炎を合併したHunt症候群および喉頭帯状疱疹例
  三木祐一郎，久保正治，安田大作
  南大阪医学 48:164-167,2000.
- 鰓性嚢胞の一例
  安田大作，久保正治，三木祐一郎
  南大阪医学 48:169-175,2000.
- 眼窩下壁吹き抜け骨折(blowout fracture)整復の一症例
  安田大作，久保正治，三木祐一郎
  南大阪医学 49:51-60,2001.
- 小児急性乳様突起炎手術施行3症例
  三木祐一郎，久保正治，安田大作
  南大阪医学 49:61-64,2001.
- 最近の耳鼻咽喉科領域の結核3症例について
  三木祐一郎，久保正治，安田大作
  南大阪医学 50:107-113,2002.
- 経口的に摘出し得た下咽頭脂肪腫の一例
  安田大作，久保正治，三木祐一郎
  南大阪医学 50:201-207,2002.

- 全国抽出66看護学校における喫煙事情
  山家康嗣
  南大阪医学 51:1-8,2003.

- 看護学校での禁煙教育
  禁煙教育講演と学生のアンケート調査から
  山家康嗣
  南大阪医学 51:9-15,2003.

- 右急性耳下腺炎に起因した右深頸部から上縦隔膿瘍への進展例
  久保正治，高山靖史，岡部宇彦
  南大阪医学 51:69-77,2003.

- 過去5年間の当科における異物症統計
  高山靖史，久保正治，岡部宇彦
  南大阪医学 51:93-105,2003.

- 右口蓋扁桃に発生したカンジダ症の1例
  岡部宇彦，久保正治，高山靖史
  南大阪医学 51:213-219,2003.

- 左頸部腫瘍を合併したvon Recklinghausen氏病の1例
  岡部宇彦，久保正治，天津久郎
  南大阪医学 52:167-175,2004.

- 当科における軒症、閉塞性睡眠時無呼吸症候群(OSAS)症例に対する術後アンケート調査
  久保正治，天津久郎，森彰之，山内一浩
  南大阪医学 53:113-121,2005.

- Epstein-Barr virus(EBV)感染が契機となって発症した急性小脳炎の1例
  古下尚美，久保正治，森彰之
  南大阪医学 54:145-150,2006.

- インプラント異物による一側性上顎洞炎の一例
  久保正治，森彰之，古下尚美
  南大阪医学 54:151-156,2006.

- 白斑を主病変とした喉頭疾患5例について
  久保正治，森彰之，古下尚美
  南大阪医学 55:137-149,2007.

- 南大阪病院耳鼻咽喉科における過去30年間の鼻中隔彎曲症矯正術施行症例の統計的検討
  久保正治，森彰之，常川宜子
  南大阪医学 57:25-33,2009.

- 突発性難聴が疑われた心因性難聴の1例
  恒川宜子，森彰之，久保正治
  南大阪医学 57:41-44,2009.

- 縦隔鏡検査で診断できた縦隔小細胞神経内分泌癌の1例
  久保正治，森彰之，恒川宜子
  南大阪医学 59:41-49,2011.

- 診断に苦慮した血管免疫芽球性Ｔ細胞リンパ腫の症例
  森彰之，恒川宜子，宮田啓史，久保正治
  南大阪医学 60:153-158,2012.

- 頚部リンパ節腫脹を初発症状とした精巣腫瘍例
  河相裕子，他
  耳鼻咽喉科臨床 110(8):545-550,2017.

- 難聴と補聴器
  宮田啓史
  南大阪病院公開医療講座　2014.09.20

- 難聴と認知症
  宮田啓史
  南大阪病院公開医療講座　2020.01.25

スタッフ

常勤医師（2002年以降）

久保正治，三木祐一郎，中木義浩，岡部守彦，
天津久郎，古下尚美，　恒川宜子，森彰之，
宮田啓史(※)，河相裕子，後藤孝和(※)　(※)現職

非常勤医師は大阪市立大学(現大阪公立大学)耳鼻咽喉科からたくさんの方に来て頂いていました。

放射線科

放射線科部長
中島　秀行

最初に20年史・30年史・40年史を引用します。平成元年（1989年）より33年分を出来る範囲で記載いたします。

昭和26年5月
大阪医科大学放射線科教授柴田先生を医長として迎え南大阪病院放射線科の診療が始められた。当時のレントゲン機械は三栄製作所の100ミリアンペア、油冷式、エル型透視台、間接撮影用として島津製作所100ミリアンペア報国号の装置で診療が行われていた。
診療内容としては胸部撮影が多く消化管透視及び特殊撮影等は数少なかった。
昭和28年9月柴田先生健康が退職される，2代目医長として大阪大学医学部放射線科教室より杉山先生が勤められた。この頃からレントゲンの利用度も日増しに増加し、当時のエル型透視台では仰臥位の透視が出来ず、又、特殊撮影をするには、すべて最新型のレントゲン機械が必要となった。

昭和28年9月
島津製作所9万5千ボルト500ミリアンペア柱号3型X線装置、新型透視台が設置されたことにより消化器の透視、特殊撮影が日増しに多くなった。

昭和29年5月
島津製の横面断層装置と愛国号30ミリアンペアポータブルX線装置を購入した。
レントゲンの医学的利用度も高まるにつれ消化管の透視、撮影件数も目立って多くなってきたので、大阪大学医学部放射線科門脇先生を迎えた頃から現像方法もパット現像法からタンク現像法に変更し、操作室を設け暗室ともで4室を使用し作業の効率化を図った。

昭和32年6月
患者数の増加の伴い撮影枚数が増え、各診療科に早く撮影結果を回付する必要が生じたので、三打掛乾燥器を購入し乾燥作業の迅速化を図った。

昭和34年2月
レントゲン線の被曝等の問題も高まり、完全防護の鉄筋コンクリートによる放射線科が新設され、巨額を投じて島津製作所20万ボルト25ミリアンペア信愛号X線深部治療装置も設置され、同年4月から大阪物療専門学校実習指定病院となった。この頃から特殊技術による造影撮影が多くなった。

昭和34年12月
東芝製蓄電器放電式300ミリアンペアX線装置を購入し同時に3人の撮影が可能である設備を行い患者の待ち時間の短縮を図った。又二打掛乾燥機を追加購入。

昭和36年7月
島津製作所9万5千ボルト500ミリアンペア柱3号型新型X線装置を増設し、同時に透視台も電動式新型X線装置を設置した。透視台電動式新型に各X線管も回転陽極管球に新装し、乾燥器を設置し当時の放射線科としては最高の撮影治療が出来るようになった。

昭和41年7月
柱号3台の内2台は15万ボルトの高圧X線装置、又、新しく病室用40ミリアンペアポータブル1台、間接撮影用蓄放式装置1台、蓄放式直接撮影装置1台、島津X線松下電工のX線テレビ1台、深部治療用信愛号1台、横面断層撮影装置（新型）1台、高圧撮影用格子往復式ブッキ1台、平面ブッキ1台、天井走行管球保持器、冷暖房自動現像タンクを備え、操作室も完全防護室とした新設備による放射線科が完成した。

昭和43年1月
世界最新のレントゲン透視台及び自動現像機を設置、透視台は世界でも最も有名なドイツ製「シー

メンス、パントスコープⅡ型」を設置、又、自動現像機はアメリカのコダック社製「コダックRIPメーオマット自動現像機M4―BIN 型」で現像から乾燥まで90秒で処理出来る関西で第1号の現像機を設置した。

昭和43年2月

機器設備の充実とともに大阪医科大学放射線科教授赤木弘昭先生を顧問に迎え、同教室から専任医長として有田良治先生並びに各専門分野の担当に福森先生、新井先生、太田先生の協力により放射線科医局の充実強化を図った。診療内容も、月曜日と金曜日は一般消化器透視、火曜日と土曜日は消化器の精密検査、水曜日は大腸透視と気管支造影、木曜日は腎盂造影、胆嚢造影、ガストロカメラ（ファイバースコープ）等として業務の内容を充実させた。

昭和43年7月

東芝製の病室用ポータブルX線装置を購入し、動けない患者に対し病室で撮影が出来るよう便宜を図った。当時放射線科の業務も軌道に乗り撮影枚数1日400枚を越す日が多かった。

昭和44年11月

東病棟地上6階地下1階が完成し、放射線科は東病棟地階にコバルト60（2000キュリー）用1室、ラジウム照射用2室、輪切断層、照射照準用テレビ1室、及び島津製ラルストロン室を設けた。当時放射線科は20年を迎え、将来、速写装置（エレマシナンデル）にX線テレビを組み合わせた装置及び診療用RI測定装置の設置について企画していたが昭和45年1月にこれらを設置し、山中先生及び斎藤先生の指導を得て一層の充実を図った。

昭和46年1月

東芝製4CH動態機能検査装置レノグラム、及び形態学検査装置ガンマカメラを購入、又、同年9月にはドイツ製シーメンス高速連続撮影装置AOTを購入し、血管造影を目的として1秒間に数枚の撮影が可能となった。

昭和47年3月

東芝外科用X線テレビ装置を設置し、手術しながら透視及び撮影が出来るよう技術の向上を図った。同年5月には、X線TV装置の技術の進歩に伴い本院も新型の東芝DC－15U型X線テレビ装置を設置し、いままでの暗室透視から、明室透視による診断が可能となった。

昭和51年5月

CO60治療装置を新設した。東芝製CO60回転治療装置及び回転横断撮影装置、照射照準装置（シミュレータ）を設置した。ポータブルX線装置及び4CH動態機能検査装置を新型に変更し、放射線科の充実を図った。

昭和52年12月

各撮影室及び検査室の大改造を行い、一般撮影室を内科系、外科系に分け2管球式、天井走行型として同体位で2方向の撮影が出来るようにした。又、腎盂造影室を設け、高速撮影室のAOTを改造、東芝3相12パルス（KXO-100015A）X線を設置した。X線テレビも第Ⅱの室を設置し、東芝AM-10型を購入、同時に2室でテレビ透視が出来るようにした。当時コンピュータトモグラフィーがイギリスで開発され医学誌上にて論表され、当院もその真価を評価し、昭和52年9月EMI社製5005ホールボディを購入、当時大阪府内では設置病院は数少なく、他の医療機関からの依頼患者の利用にも供した。又、脳神経外科を充実さすため、プリセットチェンジャー（PC-L型）を購入した。

昭和53年7月

東芝X線TV装置を全機カセットレスとし、新装、AM-10型2台によりテレビ透視を行い現像もオートフィーダを採用し、全自動運転現像機富士X－レイプロセサーを購入、2台の90秒現像により作業の充実を図った。断層撮影も患者の体格が大きくなり、又部分的な断層像から広い部位の断層像が要望されるようになったため東芝製（LGI-1型）を新規購入した。

昭和54年2月

IPの利用度が高まり腎盂撮影室（特殊撮影室）を改造し、同時に2人の検査が可能となった。又、血管造影も頭部、腹部、上肢、下肢に及び長尺のフィルムを使用した血管撮影を可能とした。
近年放射線分野ではX線、RIからCT・ECHOの時代に映像情報化が進み、当院でも、昭和25年7月29日SSL-53H東芝高速心臓断層装置を、昭和55年1月24日SAL20A東芝ソノレヤ-L型装置を購入し、新しい映像情報化に取り組んでいる。

昭和60年

従来の血管撮影装置に東芝製DSA装置を加えたことにより被検者に大きな負担をかけず外来患者や術後観察にも使用可能となった。X線テレビ装置については検査件数の増加及び検査の高度化により昭和61年、昭和63年、平成元年にそれぞれ最新式三相X線テレビ装置を設置、特に昭和62年に導入した富士写真フィルム（株）製FCR装置の充実を図るため昭和63年購入のX線テレビはFCR専用X線テレビとした。
また、昭和62年に設置した軟部撮影装置もFCRとの組み合わせにより鮮明かつ微細な石灰化までも写し出すマンモ像が得られ乳癌発見に強力なものとなった。

昭和63年4月

大阪市立大学医学部放射線科小野山靖人教授のご指導により根本裕医長、赤土みゆき医員が常勤医として着任された。東芝製磁気共鳴撮影装置（MRI）を導入し、整形外科領域等の診断に大きく役立っている。同年RI診断部門に設置されたガンマカメラ（東芝製GCA-901）は各臓器の輪切りのRI像（SPECT）が得られる画期的なものであった。
※昭和64年（1989年）1月7日から平成1年（1989年）1月8日と元号が改元される。

平成2年

東芝製最新鋭のX線CT（X-force・X-peed）を2台設置し検査待ち日数を1週間以内にするとともにキャノンレーザーフォーマットとの組合せにより鮮鋭度、解像力ともにすばらしい写真となり診断には欠かすことの出来ないものとなった。（40年史まで）

平成7年（1995年）1月17日

淡路神戸大震災があり、病院の一部職員も被災者となった。当日は地下鉄等が一部不通となり、当科でもAM8:30の出勤時間に間に合った職員は2名であった。その後12時ごろまでに徒歩等の手段により11名が職務に就いた。放射線科の被害は一部の壁がひび割れとなったが機器は全て通常運用が出来た。

平成8年（1996年）～

赤土医長が異動となり、中島部長が着任し江村医員との2人体制となった。
RIについては平成23年まで、形態学検査装置ガンマカメラとガンマカメラ（東芝製GCA-901）および4CH動態機能検査装置を使用し検査をおこなった。
放射線治療についてはCO60回転治療装置RCR-12001型を平成5年（1993年）まで使用し平成6年（1994年）よりライナック治療装置　メバトロン67-6300を使用し治療をおこなった。
病院の建替えにより、RI・放射線治療については平成23年（2011年）に閉鎖となった。
MRI装置については昭和63年に導入された東芝製MRT-50Aを平成8年（1996年）にバージョンアップをおこないFLEXARTとして平成19年まで使用した。その後に東芝製MRI EXCELART　Vantage MRT-2003を購入し病院建替え後も移設し新病院で2018年まで使用した。
CT装置については平成8年（1996年）に1台を東芝製CT　X-visionに入替えをおこない、2004年にもう1台を東芝製CT Asteionに入替え2台とも2011年まで使用した。
血管造影装置については平成4年（1992年）に東芝製バイプレーン撮影装置に入替え、2001年にフィリップス社製　インテグリスH5000に入替え2011年まで使用した。
X線テレビ装置については第1TV室に平成9年（1997年）にFinescope300に入替えし、こちらは2007年に第2TV室へ移設をおこない2011年まで使用した。第1TV室に2007年のFinescope300移設後、東芝製X線テレビ装置KXO-80Z（ZEXIRA）

に入替をおこなった。Finescope300移設とZEXIRA導入により、X線フィルムの自動現像機が無くなり、全てドライイメージャーとなった。これにより当放射線科の暗室は倉庫となった。また、それに伴う廃液処理、現像液・定着液等の管理から解放された。ZEXIRA購入は東芝製MRI EXCELART Vantage MRT-2003と同時におこなわれ、放射線科としては毎月の自動現像機運転の必要経費と管理の時間が大幅に削減となり、他の仕事に時間を割り振ることとなり非常に意義があったと考えられる。

ZEXIRAは平成23年（2011年）新病院に移設をおこなった。

乳房X線撮影装置（軟部撮影装置）については平成9年（1997年）に東芝製MGU-100Aに入替え、2006年に東芝-コニカPCM装置MGU-100B/K1（mermaid）に入替えた。こちらも2011年新病院に移設となった。

骨密度測定装置については平成3年（1991年）にHOLOGIC社製 QDR1000/Wを導入した。2008年に同社製のExplorerに入替えた後2011年に新病院に移設となった。

一般撮影装置については、X線高電圧発生装置および撮影装置については平成7年（1995年）に導入後、2011年まで使用した。1台のみ新病院に移設となった。またコダックのCR装置、ドライイメージャーを平成19年（2007年）まで使用し、平成18年（2006年）コニカREJIUS等に入替え、こちらも新病院に移設となった。

ポータブルX線撮影装置については、島津製作所ポータブルX線撮影装置 MobileArt Evolutionを2009年・2010年に導入し新病院に移送した。

また、2011年末、病院移転のため2010年より東芝製PACS装置TFS-01を導入し先行で画像の保管をおこなった。PACSの導入により多量の画像フィルムをシャーカステンにかける必要がなくなり、またペンを持って所見や診断を書く必要もなくなり、おかげで指のペンだこが消えた。現在はキーボード操作も簡略化し、アミボイスという音声認識装置を診断に利用している。

「2011年12月24日 新病院に」

新病院の本館が完成し旧病院よりPACS装置、MRI装置、骨密度測定装置、TV装置東芝製KXO-80Z（ZEXIRA）、TV装置日立製DHF-155VⅡ（medix130DR）（健診センターより移設）、一般撮影装置CR部分、乳房撮影装置、ポータブルX線装置2台、結石破砕装置、外科用イメージBVLibraを移設し、東芝製CT装置AquilionCX、東芝製血管造影装置INFX-8000V、一般撮影装置島津製X線発生装置RADspeed-Pro一式2台、コニカミノルタ製CS-7・AeroDR・検像システム、東芝製画像観察装置TPC-7000、東芝放射線部門情報管理システムRapideveAgentを導入した。

2011年までの旧病院では紙カルテとフィルムが主体であったが、新病院となり電子カルテ（HIS）・放射線情報管理システム（RIS/PACS）となりシャーカステン・フィルム移送、フィルム保管、フィルム管理から解放されるかに見えたが、実際は一部カルテが残り、過去10年分のフィルムの管理、移送、保管 紹介用のフィルム出し、持参されたフィルムの管理（シャーカステン要）、また整形外科OP計画用のフィルムが必要であった。これら全てから解放されるのにほぼ10年を要した。2017年RIS/PACSを更新PACS/REPORT（RapideyCore）RIS（RapideyeAgent）となる。

2012年外科用イメージBV-Endura導入、2013年外来棟完成に伴い、内視鏡センターが外来棟へ移転となりTV装置日立製DHF-155VⅡ（medix130DR）も外来棟に移設となった。その移転に伴った空室に2013年12月25日、新規にGE社製乳房X線撮影装置Senographe Essentialを導入し、マンモ撮影だけでなく、マンモトモシンセシス、マンモトーム検査が可能となった。2016年1月25日内視鏡センターのTV装置を東芝製DREX-ZX80（ZEXIRA）に更新した。

平成31年（2019年）3月

Canon製MRI装置VantageGalan 3T MRT-3020にMRI装置を更新した。こちらは3か月の更新期間が必要であった。次回の更新は令和14年（2033年）前後と考えられる。

※平成31年（2019年）4月30日から令和1年（2019年）5月1日に元号が改元となる

令和1年（2019年）10月

コニカミノルタ製ポータブル用フラットパネルシステムを導入、ノートPC1台FPD半切1枚四切1枚の少数であったが、病室やOP室等で撮影後、瞬時に画像の確認が出来ることになり、ポータブル撮影業務の効率化となった。

令和2年（2020年）4月1日

診療用放射線の安全管理に係る医療法施行規則が改正となり施行された。中島部長のもと医療放射線安全管理委員会とMRI安全チームが発足することになり、指針の策定、院内で研修の実施、線量の記録と管理、MRI安全管理規定の策定、MRI安全研修をおこなうことになった。

2020年春よりコロナ感染症が全世界に広まる。病院全体、当科でも対応に迫られ、マスク、メガネ、手袋の装着、必要に応じてガウンの装着等が必須となる。2022年夏に原稿を書いているが、現在はワクチンも8割以上の国民が接種をおこない、治療薬も随時開発されwithコロナの時代となる。(2022年8月18日現在、日本の現感染者数1,988,333人　新規感染者数255,534人　累計感染者数16,465,281人　死亡者数36,288人　大阪の現感染者数208,987人　新規感染者は24,323人である。)日本ではほぼ全国民がマスクをしているが、欧米ではマスクをしなくなっている。中国では2020年1月24日から現在までコロナ感染者が出れば、都市ごとに封鎖をおこない「コロナ0」の政策をおこなっている。

令和3年（2021年）

診療放射線技師法が改正となり、平成27年（2015年）の診療放射線技師法改正とともに、令和4年（2022年）卒業までの診療放射線技師が研修を受講することで、CT/MRIでの造影剤注入装置を接続する際に静脈路の確保（静脈血管確保）と抜針・止血が出来ることとなった。また核医学検査での放射線医薬品の投与のための静脈路確保・抜針・止血も出来ることになった。(これ以後は学校のカリキュラムに入っている。)

令和4年（2022年）1月5日

放射線科設置のTV装置をCANON製Astorexi9に更新した。同年9月22日にCT装置をAquilion PrimeSPに更新をおこなった。

（ロシア連邦が2022年２月24日に開始したウクライナへの軍事侵攻は、1年経った今も続いている。）

● MRI装置について

・・・どのような装置を購入するか、必要とされる検査の種類はどうか、ワークステーションをどうするか、検査室の設備変更が必要か、機器の重量（床が耐えられるか)、電源の負荷はどうか、高周波の許可証の申請、装置を入れる際の間口の広さ、MRI検査が出来ない期間どうするか、2019年の書類を参考にメーカーとよく相談して頑張ってください。MRI装置はあまりに高額です、補助金の申請が少しでも可能なら申請をしてください。

― 文責　髙木　中島 ―

業務実績統計

2012年～2021年　検査集計（検査依頼数）

年	単純撮影	CT	MRI	ANGIO	TV	MMG	骨密度
2012年	21,899	9,910	3,269	492	744	1,139	649
2013年	22,294	10,211	3,460	520	839	1,304	792
2014年	22,292	10,513	3,579	561	745	1,358	1,069
2015年	22,021	10,801	3,579	458	1,249	1,589	1,266
2016年	21,679	11,290	3,583	440	1,193	1,494	1,476
2017年	21,373	11,476	3,335	384	1,464	1,371	1,564
2018年	21,551	11,372	3,714	306	1,723	1,357	1,748
2019年	21,956	11,848	2,904	301	1,842	1,249	1,850
2020年	21,487	12,029	3,570	313	1,533	1,094	1,798
2021年	22,434	12,176	3,820	525	1,521	1,247	1,642

放射線科

病理診断科

病理診断科医長

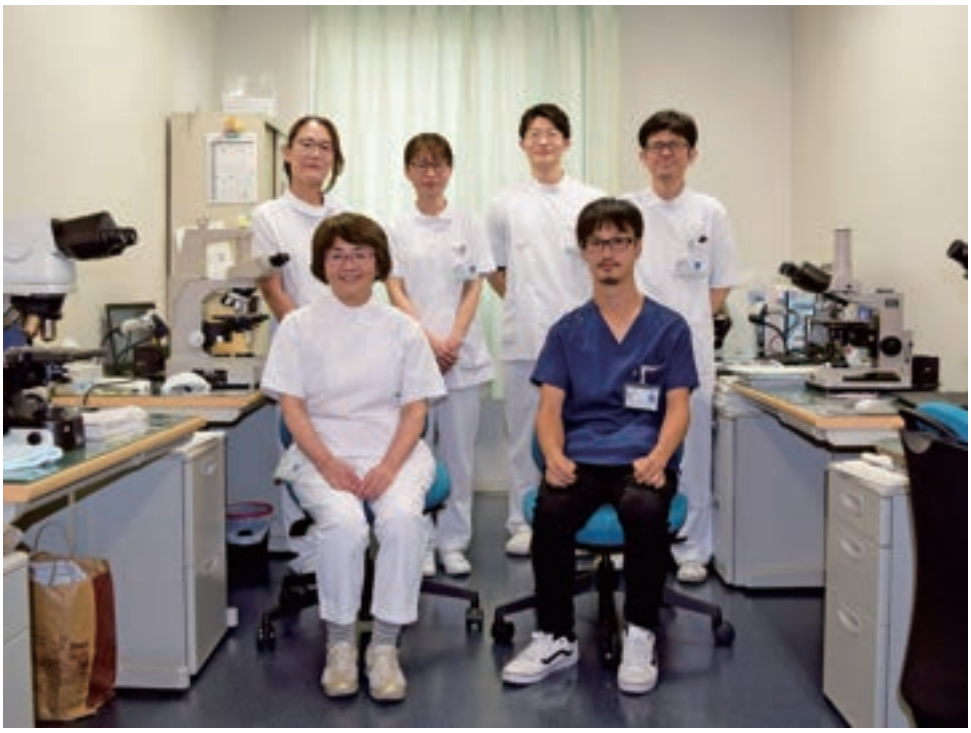
奥野　高裕

当院が創立70周年を迎えるにあたり、病理検査、病理診断の歩みを振り返ってみたい。当院での病理検査は臨床検査科の中で開始されており、記録の残る最も古いもので30周年記念誌に1957年に臨床検査科の中で病理検査が行われていることが記載されている。40周年記念誌にも1960年に6件の病理検査が記載されているが、その詳細は不明である。当院で病理組織標本が作製されはじめたのは1970年頃であり、当時は作製した病理標本を大阪市立大学第一病理学教室（現大阪公立大学分子病理学教室）に持っていき診断を行っていた。その後、小林庸次先生や川井一男先生が非常勤医師として勤務し、病理診断を担当されていた。1987年から2002年までは礒田幸太郎先生が赴任され、病理診断に尽力された。2003年からは小林先生に加え、菊井正紀先生、櫻井幹己先生、堤啓先生が病理診断を担当され、2005年から小林先生が顧問に就任され、常勤医師として勤務されるようになった。小林先生は就任後、「病理診断科」として業務にあたっており、2006年の年報からこれまで臨床検査科の中に含まれていた病理部門とは別に、「病理診断科」としての活動が報告されている。2008年に医療法に基づく厚生労働省通知によって病理診断科の標榜が可能となり1つの臨床科として認知されるようになった以前から、「病理診断科」として診療を行っていた点は特筆に値する。

病理診断科の主な業務としては、①病理組織診断、②細胞診断、③病理解剖がある。2011年の新館竣工に伴って、切り出し台や病理解剖室の新規更新、スライドガラスのバーコード管理システム導入といった設備の充実が図られ、院内でこれらの業務を行う十分な設備を備えている。当院は日本病理学会研修登録施設、日本臨床細胞学会施設認定病院となっており、外部精度管理として日本臨床検査技師会ならびに日本臨床細胞学会のサーベイに参加している。病理組織診断に関しては生検検体や手術検体に対する通常の組織診断に加え、院内で免疫染色の実施が可能であり、術中の迅速診断も行っている。また、近年増加しつつあるEGFR や ALK、PD-L1等のコンパニオン診断については外部委託にて対応している。その他の業務として、2009年より外科を中心とした他の臨床科とのカンファレンスを月1回実施しており、臨床科との連携を深めることで適切な病理診断に寄与していると考えられる。また、2004年より実施された新医師臨床研修制度で、研修医の CPC レポート作成が必須化されたことに伴い、研修医に病理解剖症例について発表や考察を担当してもらい、貴重な教育の機会としている。

主要統計

年	組織診	術中迅速	細胞診	解剖
2001	2,811	65	6,641	1
2002	2,892	56	7,483	2
2003	2,939	49	7,432	2
2004	3,267	61	7,016	2
2005	2,715	32	4,379	5
2006	2,569	45	3,857	8
2007	2,383	39	3,871	3
2008	2,526	43	4,039	4
2009	2,499	49	3,755	7
2010	2,238	74	3,541	2
2011	2,398	72	3,604	5
2012	2,785	86	3,535	3
2013	3,279	94	3,537	3
2014	3,469	94	1,509	4
2015	4,174	98	1,371	5
2016	4,318	99	1,670	6
2017	4,439	129	1,690	4
2018	4,716	105	1,688	1
2019	4,830	84	1,824	3
2020	4,709	95	1,717	3



病理診断科

麻酔科

麻酔科部長
賀陽　亮太郎

スタッフ

2009年9月賀陽亮太郎が麻酔科部長として常勤医となった。
それ以前は2005年に1名1年間、2007年に3名1年間常勤麻酔科医が在籍していたらしい。

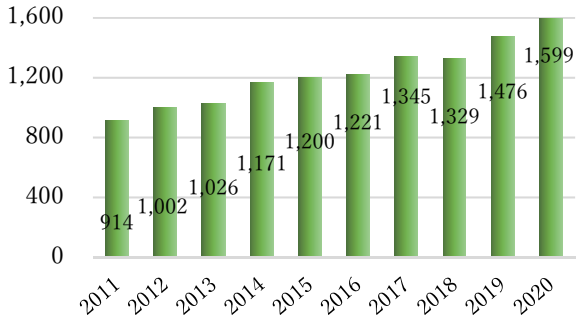
現職

賀陽亮太郎（麻酔科部長）
吉岡　直樹（麻酔科医長）
草野真悠子（麻酔科医員）
阪下　直美（麻酔科医員）

氏名	就任～退任	氏名	就任～退任
山内　順子	2003. 4～2006.3	木下みやび	2016.10～2018.3
茂山　泰樹	2006.10～2008.8	谷戸　康人	2018.4～2021. 1
宮本　達人	2007. 5～2008.8	和田　盛人	2019.3～2020. 2
嘉山　邦彦	2007. 5～2008.3	ﾄﾗﾊﾞﾘｰ ﾌｧﾗ	2019.6～2020.11
下雅意　学	2011. 7～2018.3	蘆原　知子	2021.1～2022. 7
楠　大弘	2014. 4～2015.3		

業務実績統計

麻酔科管理手術数



学術業績

- 判例からみた麻酔科領域の医療訴訟
  安部剛志，木内順子，野坂修一，川口正明，賀陽亮太郎
  日本麻酔科学会第57回学術集会 2010年6月3日

- 術後悪心・嘔吐に対するジフェンヒドラミン・ジプロフィン配合薬とデキサメタゾンの併用による抑制効果
  下雅意学，賀陽亮太郎
  日本臨床麻酔学会第33回大会　2013.11.1-3（金沢）

- 心房細動と中等度三尖弁閉鎖不全を合併した腹腔鏡下直腸定位前方手術後に右心負荷が増大した1症例
  下雅意学，賀陽亮太郎
  第35回日本臨床麻酔学会　2015.10.22（横浜）

- 腹腔鏡下胃切除術中における2種の温風式加温装置を用いた体温変化の相違
  下雅意学，賀陽亮太郎
  第３６回日本臨床麻酔学会　2016.11.03（高知）

- 術後悪心・嘔吐に対するジフェンヒドラミン・ジプロフィリン配合薬とデキサメタゾンの併用による抑制効果
  下雅意学，賀陽亮太郎
  南大阪医学 63(1):17-20,2016.

今後の展望

常勤医を確保し手術症例の増加に対応したい。

地域包括ケア病棟

名誉院長
宮越　一穂

地域包括ケア医長
別所　俊哉

在宅・生活復帰を目指すため、2014年8月診療報酬改定に伴い新設されたのが地域包括ケア病棟です。通常では急性期治療を終了し病状が安定すると退院となりますが、すぐには在宅復帰、または施設へ戻る方が困難な患者さまが、当病棟の入院適応患者さまです。ただし、在宅・生活復帰を目的としているため、7割以上の患者さまが自宅や居宅系介護施設への退院となるように基準が定められ、また当病棟での入院期限は60日を上限とすることが求められています。

従って、①当院急性期病棟から、もしくは他院急性期病棟からの受け入れとしては、急性期治療が終了してもまだ在宅復帰するには体力的に無理がありリハビリや療養が必要な患者さま、退院後の施設入所はきまっているものの待機が必要な患者さま、自宅に退院する予定であるが自宅の環境が整っておらず整備が終了するまでの待機期間が必要な患者さま、ストマケアやインスリン自己注射手技の習得が必要な患者さまなどになります。②在宅からの受け入れとしては、急性期病棟に入院していただく程ではない患者さま③レスパイト入院の患者さま、上記の3通りの入院パターンがあります。開設から8年間の延べ入院患者数は、年間平均13,000人でした。入院経路は当院急性期病棟から73%、他病院急性期病棟から10%、在宅から16%、その他各種施設から1%の割合でした。

2014年に新設された病棟であり、当院を含めた様々な医療従事者・コメディカルには、まだ療養型病棟と地域包括ケア病棟との違いが十分に周知されておらず、悪性腫瘍のterminalや、老衰による摂食障害でのterminalの患者さまなどのご紹介を多々いただくのですが、上記の理由により受け入れを断らざるをえないのが実情です。

当院の地域包括ケア病棟は開設時から、長らく宮越一穂先生、濱田偉文先生を中心とし、病棟管理を行っておりましたが、2021年6月より濱田先生は南大阪総合健診センターへと移動となりました。現在は、宮越先生、2022年1月より別所俊哉先生、2021年4月より私、市原弘善の計3名の医師で病棟管理を行っています。

南大阪病院の地域包括ケア病棟の疾患内訳は、約7割は整形外科領域の患者さまで、大腿骨頸部骨折などの手術後でリハビリを行い2か月以内の在宅復帰を目指す患者さま、腰椎圧迫骨折などの疼痛で在宅生活が困難であり、疼痛コントロールを行った後に在宅復帰を目指す患者さまです。約2割の患者さまは、肺炎などでの入院加療で廃用が進行し2カ月の入院のうちに在宅復帰・施設入所を目指す患者さまです。残りの1割程度が、レスパイト入院です。上記3名の医師でそういった患者さまの全身状態を安定させつつ、リハビリを行いADLの向上を計っています。

在宅復帰を目指せるもののもう少しリハビリが必要な患者さまや、レスパイト入院の必要な患者さまのご紹介をお待ちしております。2022年7月より地域包括ケア専門外来を毎週水曜日の午後に行っています。その外来では、在宅から入院されている患者さまに対して、外来で状態を把握し、スムーズな入院生活、リハビリ等への移行を目指

しています。レスパイトを考えている患者さま、来院できない患者さまの場合はそのご家族の方の代理受診の外来予約も受け付けていますので、この点に関してもご紹介をどうぞよろしくお願いします。

文責　市原弘善

地域包括ケア病棟

回復期リハビリテーション病棟

回復期リハビリテーション病棟の前身は、2006（平成18）年7月1日に37床にて開設した療養病床である当時の11病棟が始まりである。施設基準は居室面積が6.4平方メートル以上で、1室4人以下・廊下幅1.8m以上、必要な施設の他に40㎡以上の機能訓練室や1人㎡以上の食堂、談話室、浴室が必要な基準であった。医療を中心とした療養病床の運営を行っていた。

その後、2009（平成21）年2月1日に37床の回復期リハビリテーション病棟を開設した。診療報酬改定により2010（平成22）年には365日リハビリテーションを実施する休日リハビリテーション加算および1日最低2単位の個別リハビリテーションを提供する充実リハビリテーション加算への対応を開始した。理学療法士・作業療法士・言語聴覚士のセラピストが日曜・祝日に勤務する体制をとり、患者サービスの向上につながった。

2014（平成26）年に当院新病院の竣工時に42床にて再スタートをすることになった。医師及び社会福祉士の専従1名の配置や休日リハビリテーション加算が包括化され配置が義務づけとなったのである。また、当院2016（平成28）年まで当病棟では回復期リハビリテーション病棟入院料1を取得していたが、診療報酬の改定により実績指数が導入され入院料2の取得に変更となった。2018（平成30）年の改定を機に、管理栄養士の実質3名が担当することにより看護師も含めた専門職の関わりに多様性が生まれてより充実したサービスの提供が行うことができた。

回復期リハビリテーション病棟は、施設基準ごとにアウトカム効果が問われている。資料にも示したように、当病棟では在宅復帰率は70%以上であり、病床利用率も80%後半～90%台となっている。このことは，長年リハビリテーションを通じて、当病棟が365日の医療サービス提供を行うことで、患者や家族と真摯に向き合い地域社会に貢献できたものと考えています。今後も患者本位や家族本位のリハビリテーション病棟として地域に貢献をして参ります。

回復期リハビリテーション病棟実績　（2012年1月～2021年3月）

年	入院			退院										在宅	病床
（月平均）	入院	転入	計	自宅	施設				他院	他病棟		計		復帰率	利用率
2012	40	192	232	177	28	—	—	—	4	12	—	221		80.1%	90.1%
（月平均）	3.3	16.0	19.3	14.8	2.3	—	—	—	0.3	1.0	—	18.4			
2013	21	218	239	194	28	—	—	—	4	15	—	241		80.5%	91.8%
（月平均）	1.8	18.2	19.9	16.2	2.3	—	—	—	0.3	1.3	—	20.1			
2014	35	204	239	181	27	—	—	—	11	18	—	237		76.4%	93.6%
（月平均）	2.9	17.0	19.9	15.1	2.3	—	—	—	0.9	1.5	—	19.8			
年	入院			退院										在宅	病床
（月平均）	入院	転入	計	自宅	特養	有料老人ホーム	小計	老健	他院	他病棟	死亡	計		復帰率	利用率
2015	29	218	247	192	3	6	201	25	6	20	0	252		79.8%	89.9%
（月平均）	2.4	18.2	20.6	16.0	0.3	0.5		2.1	0.5	1.7	0.0	21.0			
2016	29	225	254	217	4	4	225	19	1	13	0	258		87.2%	91.7%
（月平均）	2.4	18.8	21.2	18.1	0.3	0.3		1.6	0.1	1.1	0.0	21.5			
2017	35	208	243	221	5	2	228	0	5	9	0	242		94.2%	87.2%
（月平均）	2.9	17.3	20.3	18.4	0.4	0.2		0.0	0.4	0.8	0.0	20.2			
2018	35	189	224	178	0	3	181	17	4	14	0	216		83.8%	90.0%
（月平均）	2.9	15.8	18.7	14.8	0.0	0.3		1.4	0.3	1.2	0.0	18.0			
2019	31	206	237	201	0	0	201	18	6	13	2	240		83.8%	93.2%
（月平均）	2.6	17.2	19.8	16.8	0.0	0.0		1.5	0.5	1.1	0.2	20.0			
2020	42	169	211	189	8	0	197	9	3	6	1	216		91.2%	83.7%
（月平均）	3.5	14.1	17.6	15.8	0.7	0.0		0.8	0.3	0.5	0.1	18.0			
2021	6	38	44	37	2	2	41	0	0	1	1	43		95.3%	81.5%
（月平均）	2.0	12.7	14.7	12.3	0.7	0.7		0.0	0.0	0.3	0.3	14.3			

小児科

昭和26年5月　南大阪病院発足とともに中川章三医長を中心として産声を上げた。南大阪病院の創立間もない頃で病院の建物は木造2階建て、病床数145床、診療科も7科（小児科、内科、外科、産婦人科、耳鼻科、放射線科、眼科）であった。以後京都府立医科大学小児科からの医師の派遣を受けて順調に発展した。

昭和28年　南大阪病院医学雑誌が創刊された。

昭和29年10月　第1回南大阪病院健康優良児審査会が発足し乳幼児の疾病予防や早期発見がいかに大切であり、健康な乳幼児に育てることの重要さを普及することに努力が傾けられた。
平成3年には38回を数え参加者総数は15,000名に達した。

昭和30年 第2回健康優良児審査会入賞者の記念写真

昭和32年　南大阪病院友の会（内藤景岳院長：会長）が結成され、当院産科出産の赤ちゃんを始めその趣旨に賛同される方のお子達（0歳～満6歳未満）に対して無料で健康診断・育児指導を行うこととなり近接地域から堺市に及ぶ大阪南部医療圏の乳幼児健康増進の一助としてお母様方にも喜ばれた。

さらに離乳期の食事をいかに指導するかに心を砕き昭和35年から離乳食調理講習会を毎月１回開催しそれぞれ離乳前期、中期、後期に区別して指導しその時期に合致した育児指導を小児科医師が担当した。

昭和35年　離乳食調理講習会

昭和45年には南大阪病院付属准看護学校が開学。

昭和45年年末南病棟5期鉄筋化工事竣工に伴い従来の小児科外来診察室も改装され冷暖房完備の第1、2、3診察室及び処置室が設置された。これと同時に混合病棟を使用していた小児科入院を6病棟36床の小児病棟として整備し観察室も設置された。これにともない未熟児科医長に就任された田中健治医師により病的新生児の治療も開始された。昭和35年から開始された離乳食調理講習会は昭和46年9月からは毎週２回（火・金曜日の午後）になり、育児相談とともに栄養相談（栄養士による個人的・専門的な指導）が開始された。

昭和46年　小児白血病を専門とする三宅宗隆医師の南大阪病院赴任にともない南大阪病院は大阪府成人病予防協会指定の白血病治療病院12施設のうち唯一の私立病院として指定を受けた。

その頃X線高速撮影装置やポリグラフなどが完備され先天性心疾患を始めその他の循環器疾患が小田部英助医長らにより精密に診断・治療されるようになった。

昭和46年9月には病床数は650床となり診療科も小児科はじめ内科、循環器内科、アレルギー科、呼吸器科、産婦人科、外科、胸部外科、整形外科、耳鼻科、眼科、放射線科、皮膚科、泌尿器科と多彩になった。また増加するてんかんや熱性けいれん患児の診療には小児神経疾患の専門医である若泉悟医師があたっていたが昭和52年９月に導入されたEMI社製CT装置5005型が威力を発揮した。

昭和53年11月　南大阪検診センター開設。

昭和54年　南大阪病院は基準看護を実施するようになった。またこのころ関連施設である南大阪学園は昭和45年開校の南大阪看護専門学校に加えて昭和55年南大阪臨床検査技師専門学校が開学し医療スタッフの育成の新しい時代に突入した。昭和58年には木崎善郎・長谷川巧医員が着任し小児科当直はそれまでの月10～12回から毎日当直に変更になった。

昭和58年から大阪の新生児診療相互援助システム（NMCS）の第18番目の参加病院になり地域の代表的小児科として新生児小児科診療活動を続けてきた。

昭和62年　南大阪総合健診センター（南大阪ファンクス）開設。その後も順調に小児科診療を継続してきた。

しかし南大阪医学113-119、48 (2-3) 2000　『南大阪病院における1999年の小児救急受診患者について　総合病院　南大阪病院小児科　西機哲夫、羽場哲法、和泉守篤、中平昭平、菊池　顕、安野哲也』によれば南大阪病院小児科における1999年の救急受診患者は1年間で6,252名でその8%にあたる503名が入院した。月別の受診者数の変動は大きく、最も少ない月と多い月では2.4倍の差がみられた。また救急受診の時、どこで診てもらえるかの情報が不十分の場合は、患者さんと家族は病院への距離と交通の流れを意識して行く病院ないし休日診療所等を選択する傾向にあることが判明したとされた。その当時でさえ小児救急を受け入れている病院や診療所が少ないことや、重症救急患者への対応が不十分であること、また小児救急を担当する小児科医不足や小児救急が保険診療上赤字部門である　等が問題とされていた。かくなる時代に大阪市とくに南部地域（住之江、住吉、西成、大正、阿倍野、東住吉、平野各区）では夜間に小児が受診可能な病院は南大阪病院小児科しかなく、公的病院を含めて他の小児科のある病院は夜間対応をしていない現状であった。しかし医師に2年以上の臨床研修が必須化される「新医師臨床研修制度」が始まるのは2004年（平成16年）のことではあるが、それを踏まえて平成15年12月26日、当時の京都府立医科大学小児科教授が当院を訪れ、今までの御礼と共に平成16年3月31日をもって当院小児科医員4名中2名を、さらに平成16年8月31日をもって他の2名の引き上げを行うことが宣告されたとのことである。奇しくも平成15年年報が当院小児科の最終の年報記載となった。そのなかで当時の院長で現在名誉院長である宮越一穂先生は南大阪病院の小児科の特徴は小児救急に重点を置いてきたことにあり、このことは当直や休日の仕事が多くなり重症患者を多く入院させ診療することにつながったこと、南大阪病院の小児科救急の活躍は大阪市内では特筆すべきことで住之江区・西成区などの近接区だけではなく堺市や大正区などより広い大阪南部医療圏の住民・子供達にとっても安心できる病院であった　と記載されている。当院小児科最後の外来を担当した西機哲夫先生は患者さんのお母さんから『この病院があったから子供の命が助かりここまで大きく成長してくれた』と言ってもらえたのがとても嬉しく思います　とのコメントを残されたと締めくくられている。

南大阪病院小児科の経緯をまとめるにあたって各時期ごとに作成された詳細な『小児科』記録が非常に参考になったことを申し添える。

記載：中谷守一

産婦人科

昭和26年1月　内藤病院産婦人科として開設され、その後昭和26年5月南大阪病院産婦人科として受け継がれた。開設当初は院長が責任者として診療を担当し院長の出身大学である大阪医科大学から小島秋教授が顧問に就任された。

昭和28年10月　産婦人科病棟が新築され、南大阪病院附属産院と共に一大飛躍の基礎づくりができた。産婦人科病棟は木造ながら煉瓦色の屋根瓦に白壁造りのモダンな建物として当時話題となった。

左側：新築になった産婦人科病棟

新築になった産婦人科病棟前にて職員記念写真

産科の患者さん送迎には自家用車を使用した

昭和29年1月　大阪医科大学より畑　孝雄医員、昭和30年には宮崎吉平医員が派遣され産婦人科としての体制が整った。

昭和31年7月　畑医員と交代に上田利一医員が就任、昭和36年上田医員退任の後、同年5月中坪本治医師が産婦人科医長に就任した。

その後昭和41年8月より谷川泉医員就任、その頃病院の建物は鉄筋化工事が進められており、昭和41年中央病棟東の竣工と同時に外来診療診察室はその1階に移転し面目を一新した。

雪印乳業KK北海道支店から毎年6月スズラン嬢がお祝いに訪問される（1966発行 15周年記念史より）

中坪医長退任に伴い昭和42年1月より段武夫医員が就任。昭和43年3月退任後、三上護医長が就任した。また内藤啓三医員が昭和43年3月より就任。その間大阪医科大学産婦人科教室より笠松、関島、長谷川、渡辺克、柚木、土居、菊山医員の協力を得て産婦人科の伝統を受け継いだ。病院の鉄筋化改築工事は引き続いて行われ昭和45年南病棟の完成に伴って診察室を移転し待合室、内診室、治療室、着帯室、静養室（ベッド6床）、がん精密検査室を置き産婦人科病棟は第10病棟に病室のほか、第1、第2分娩室、陣痛室、沐浴室、人工蘇生室、治療室、指導室、搾乳室、調乳室、乳摩室、新生児室、未熟児室等を設置し文字通り代表的な産婦人科の態勢を整えることができた。

その後昭和47年3月より渡辺一医長が就任、三上医長退任、その後昭和50年2月より岡村多恵子医員

が就任した。渡辺医長退任後の後任として大阪医科大学客員教授濱田春次郎博士が副院長兼産婦人科部長として昭和50年9月就任、田中、松本、庄田、内藤勝義医員の構成で診療にあたった。大阪医科大学婦人科教室の都合により昭和61年3月末で常勤医師派遣が困難となったため昭和61年4月兵庫医科大学産婦人科教授磯島晋三教授のご厚意により兵庫医科大学産婦人科から船内洋司医長が赴任された。

濱田春次郎副院長兼産婦人科部長とともに診療を開始し、以後、産婦人科診療は大阪医科大学から兵庫医科大学に引き継がれた。5月には松田医員が就任。6月には澤井医員が就任。昭和62年7月には澤井医員退任に伴い、後任として伊田医員が就任された。昭和63年3月には南大阪病院顧問となられていた濱田春次郎産婦人科部長が高齢のため退職。昭和63年12月には井田医員と交代に緒方医員が就任された。この間外来では昭和42年1月より開設されていたがん精密検査室は昭和61年4月大阪医科大学名誉教授小島秋顧問が退職されるに伴い廃止された。病棟では昭和61年9月に新生児室、授乳室の移転改装により清潔で明るい新生児室となった。

昭和62年11月　南大阪総合健診センター（南大阪ファンクス）が南大阪病院の南隣に新設されたのに伴い婦人科外来を拡張整備し同時に子宮鏡検査用機器、腹腔鏡検査用機器の導入を行った。平成元年には下平式電気凝固器械、経腟式超音波断層装置を設置し不妊症治療、子宮外妊娠の診断、子宮膣部ビランの治療、卵巣癌のフォローアップと幅広い診療が行えるようになった。

平成元年7月には塩谷医員が就任し産婦人科医師4人となり南大阪看護専門学校の講義、母親学級の講師、妊婦水泳の指導等、産婦人科活動に幅と余裕ができた。平成2年8月には松田医員と交代に小林医員が就任し、これに伴って外来診察にはハイリスク妊婦外来、不妊症外来を新設。船内医長がハイリスク妊婦外来を担当、小林医員が兵庫医科大学で不妊症外来を担当していた経緯もあり不妊症外来を担当し、より地域に密着した喜ばれ信頼される産婦人科として歩んだ。

分娩件数の推移は20年前には年間約650件あったものが年々減少傾向を示してきた。以上のように産婦人科は歩んできたが診療は、妊娠・分娩の管理、そして婦人科疾患全般に及んでいた。とくに産科診療においては、妊婦さんの定期健診に加え、助産婦外来を設け、安心してお産をむかえていただくために助産婦が一対一で、きめ細かく対応していた。出産に際しての助産婦や看護婦のやさしい対応は好評で希望に応じて立ち会い出産も可能であるとされていた。

婦人科では、不妊症、性感染症、子宮内膜症、子宮筋腫等の良性疾患の検査治療（手術も含めて）を実施していた。手術では膣式手術や腹腔鏡下手術もとり入れＱＯＬを考慮した治療が提供されていた。子宮癌、卵巣癌などの悪性疾悪に対しては手術、放射線治療、抗癌剤による治療など、外科や放射線科の協力を得て、集学的な治療を積極的に行っていた。また子宮脱などの性器脱の手術や更年期障害にたいするホルモン補充療法なども増加し順調に経過していた。

南大阪病院といえば初代理事長、院長である内藤景岳先生に代表される産婦人科がその根本であり、大阪医科大学および兵庫医科大学と産婦人科医師の派遣元こそ変遷したが順調に発展してきたといえる。

そのような産婦人科ではあったが小児科医の退職により新生児内科管理が困難になった平成16（2004）年8月26日から産科診療が休診となり、さらに継続されていた婦人科診療も**平成17年（2005）年3月末日**をもって休止するにいたった。分娩数の減少に加えて新生児内科管理を担当する小児科医を失ったことが伝統ある南大阪病院産婦人科の命脈を絶ったように感じられる。医師に2年以上の臨床研修が必須化される「新医師臨床研修制度」が開始された平成16年（2004）に当院の小児科診療が停止し引き続いて平成17年（2005）に産婦人科診療も停止するにいたったといえる。

作成担当：中谷守一

医師事務サポート係

概要

平成26年

10月　医師の事務的作業負担軽減を目的に医師事務サポート係を新設
　　2名で施設基準取得に向けて準備等を開始

11月　9名体制で業務開始

12月　医師事務作業補助体制加算2
　　50対1補助体制加算取得

平成29年

4月　医師事務作業補助体制加算2
　　40対1補助体制加算取得

令和4年

4月　医師事務作業補助体制加算1
　　30対1補助体制加算取得　　現在14名体制

今後の展望

医師事務の専門性を発揮するため、勤務環境の改善やタスクシフト・タスクシェアできるよう尽力していきます。

業務内容

診断書等の文書作成業務4名・診察室2名・内視鏡センター1名・予約センター2名

平成26年

11月　医療要否意見書作成の多い医師より作成補助業務開始

12月　全医師の医療要否意見書作成開始
　　内視鏡検査伝票入力業務を開始

平成27年

4月　消化器内科より保険会社診断書作成補助業務を開始

平成28年

12月　消化器内科の診療情報提供書作成補助業務開始

令和元年

10月　人工透析内科更正医療判定書作成補助業務開始

令和3年

　　消化器内科・外科・整形外科・乳腺外科・形成外科の文書作成業務を担当
　　予約センター業務、診療記録への代行入力や診療業務は継続して行います。

医師事務サポート係

教育研修センター

教育研修センター長
新藤　光郎

医学博士
日本蘇生学会指導医、評議員
日本救急医学会専門医

教育研修センターの紹介

2004年からの新医師臨床研修制度導入後、2006年4月に初期臨床研修を円滑に実施し、将来にわたる医療人材育成目的で教育研修センターが設立された。センター長として大阪市立大学卒後医学教育学から新藤光郎が赴任し現在に至っている。診療部門は総合内科外来診療を担当し、受診診療科を特定できない初診患者や地域診療所からの紹介患者に対する外来診療を行っている。総合内科外来は初期臨床研修医が基本的な医療面接、身体診察を中心とした一般外来研修を経験できる貴重な場となっている。

初期臨床研修医に対する臨床教育

毎週火曜日の早朝講義および毎週金曜日の早朝医学英語勉強会、研修医の診療レビューカンファレンスなど多くの機会で継続的な指導を行っている。システム運用面で臨床研修プログラムの管理、研修評価、研修医へのフィードバックとりまとめなどを通じ心身両面から日常的な研修支援を行っている。また2015年度から大阪市立総合医療センター臨床研修管理委員会外部委員として初期臨床研修システムに対する助言を行っているが、得られた知見を当院研修プログラム改定にも活用している。

医学部学生に対する卒前医学教育

2007年からは大阪市立大学医学部（現　大阪公立大学）および大阪医科大学（現　大阪医科薬科大学）6年生の卒前臨床実習の受け入れも開始し現在に至っている。また医学部4年生の臨床実習入門（バイタルサイン）の講義、実習指導にも継続的に参加し卒前医学教育に積極的に関与してきた。

看護スタッフに対する教育

看護部教育委員会と提携し、看護現場の要望に応じた症例基盤型学習会、フィジカルアセスメント研修、心電図研修など多彩な看護教育プログラムを提供している。また2008年から南大阪看護専門学校で微生物学や解剖生理学、病態生理学など複数科目の講義を担当し、次世代の医療人材育成にも深く関与してきた。

院外での社会教育活動

2006年度から大阪府医師会 ACLS 大阪ワーキンググループ委員を務め、救命処置コース運営や5年ごとの蘇生ガイドライン改定（2010年、2015年、2020年）に際し ACLS 大阪コンセンサスおよびコースガイド改定作業を分担してきた。2017年9月7日に大阪府医師会長『救急医療功労者』表彰を受け、2021年9月9日救急の日に大阪市長感謝状を授与された。

ブログ（清心事達-日々の学び in 南大阪病院）やFacebook（南大阪病院教育研修センター）を活用して積極的に教育内容に関する情報発信を行っている。

主要統計

（2006年4月～2021年5月）

①2006年以降の大阪市大協力型初期臨床研修医受け入れについて

年度別および出身大学別一覧（**表1**）および後期研修診療科一覧（**表2**）

2021年5月1日までに大阪市立大学医学部附属病院の“たすきがけ”初期臨床研修医を71名受け入れた。初期臨床研修を修了した63名中11名が当院に勤務し各診療科医師、非常勤応援医師として地域医療に貢献してきた。

表１　2006年(平成18年）以降の初期臨床研修医受け入れ状況（協力型臨床研修）

採用年度	コース	内定	研修	平成18年以降の研修医出身大学（五十音順）
2006年	Bコース（定員4）＊	4	4	大阪市大3、独協医大１　（＊平成17年採用Aコース2年目）
2007年	Bコース（定員4）＊	4	4	大阪市大3、和歌山医大１（＊平成18年採用Aコース2年目）
2008年	Bコース（定員3）	3	2	大阪市大１、関西医大１
2009年	Bコース（定員4）	4	4	大阪市大4
2010年	Ⅰコース（定員5）	5	5	大阪市大3、金沢医大1、川崎医大1
2011年	Ⅰコース（定員5）	5	4	大阪市大3、宮崎医大1
2012年	Ⅰコース（定員5）	5	5	大阪市大5
2013年	Ⅰコース（定員6）	6	6	大阪市大1、香川医大１、近大１、鳥取大１、山口大１、和歌山医大1
2014年	Ⅰコース（定員6）	4	4	大阪市大2、川崎医大１、久留米大１
2015年	Ⅰコース（定員6）	3	3	大阪市大1、近大2
2016年	Ⅰコース（定員5）	5	5	大阪市大4、関西医大１
2017年	Ⅰコース（定員5）	5	3	大阪市大2、福島県立医大 １
2018年	Ⅰコース（定員5）	5	5	大阪市大4、関西医大１
2019年	Ⅰコース（定員5）	5	5	大阪市大4、和歌山医大１
2020年	Ⅰコース（定員4）	4	4	大阪市大3、和歌山医大１
2021年	Ⅰコース（定員4）	4	4	大阪市大3、川崎医大１
2022年	Ⅰコース（定員4）	4	4	大阪公大4
合計		75	71	

表２　初期研修終了後の後期研修診療科一覧（63名）

	大阪市大（現大阪公大）	その他医療機関
消化器内科	12	3
外科	7	1
産婦人科	6	
小児科	4	
整形外科	4	
麻酔科	3	
肝胆膵内科	3	
循環器内科	3	
糖尿病内科	3	

	大阪市大（現大阪公大）	その他医療機関
皮膚科	3	1
泌尿器科	2	
総合診療科	1	
眼科	1	
呼吸器内科	1	
精神神経科	1	1
耳鼻咽喉科	1	
形成外科	1	
病理診断科	1	
合計	57	6

②医学部卒前医学教育

- 医学部6回生　臨床実習受け入れ総数（**表3**）
  臨床実習受け入れ診療科の調整を担当し、希望者に対し総合内科外来で患者さんの協力を得て外来臨床実習を指導した。
- 医学部4回生　臨床実習入門（**表4**）
  臨床実習入門（バイタルサイン）の講義、実習指導を担当し卒前医学教育に継続的に関与してきた。

表3　大阪市立大学医学部（＊大阪医科大学）6回生臨床実習受入

年度	期間	受け入れ人数
2007年度	2007年4月～5月　前期6週間	2
	2007年5月～7月　後期6週間	1
2008年度	2008年4月～5月　前期6週間	2
	2008年5月～7月　後期6週間	2
2009年度	2009年4月～5月　前期6週間	2
2010年度	2010年4月～5月　前期6週間	2
	2010年5月～7月　後期6週間	2
2011年度	2011年4月～5月　前期6週間	1
	2011年5月～7月　後期6週間	2
2012年度	2012年4月～5月　前期6週間	2
2013年度	2013年4月～5月　前期6週間	1
2014年度	2014年4月～5月　前期6週間	2
	＊2014年5月　2週間 大阪医科大学学生	1
	2014年5月～7月　後期6週間	2
2015年度	2015年5月～7月　後期6週間	2
2016年度	2016年4月～5月　前期6週間	1
2017年度	2017年4月～5月　前期6週間	2
2018年度	2018年5月～7月　後期6週間	2
2019年度	2019年4月～5月　前期6週間	2
	2019年5月～7月　後期6週間	1
	＊2019年6月　2週間	1
2020年度	新型コロナのため実習中止	
2021年度	2022年2月　4週間	1
	合計受け入れ人数	36

表4　大阪市立大学医学部４回生卒前医学教育臨床実習入門“バイタルサイン”

年度	日時	内容
2006年度	2006年11月 9日	講義、実習
2007年度	2007年11月 8日	講義、実習
2008年度	2008年11月13日	講義、実習
2009年度	2009年11月12日	講義、実習
2010年度	2010年11月11日	講義、実習
2011年度	2011年11月24日	講義、実習
2012年度	2012年11月 8日	講義、実習
2013年度	2013年11月14日	講義、実習
2014年度		
2015年度	2015年10月30日	実習指導
2016年度	2016年10月14日	実習指導
2017年度	2017年10月10日	実習指導
2018年度	2018年10月12日	実習指導
2019年度	2019年10月24日および11月 7日	実習指導
2020年度	2020年 9月17日および10月22日	実習指導
2021年度	2021年10月14日および10月22日	実習指導

2017年10月

③臨床研修指導医養成のためのワークショップ

タスクフォース参加実績（**表5**）

表5 **大阪市立大学臨床研修指導医のためのワークショップ**

年度	日時	
2006年度	2007年 1月27日	第 4回
2007年度	2008年 2月 9日 ～10日	第 5回
2008年度	2009年 2月 7日 ～ 8日	第 6回
2009年度	2010年 2月 6日 ～ 7日	第 7回
2010年度	2011年 2月 5日 ～ 6日	第 8回
2011年度	2012年 2月 4日 ～ 5日	第 9回
2012年度	2013年 2月 9日 ～10日	第10回
2013年度	2014年 1月25日 ～26日	第11回
2014年度	2015年 2月 7日 ～ 8日	第12回
2015年度	2016年 2月 6日 ～ 7日	第13回
2016年度	2017年 2月 4日 ～ 5日	第14回
2017年度	2018年 2月 2日 ～ 3日	第15回
2018年度	2019年 2月 8日 ～ 9日	第16回
2019年度	2020年 2月14日 ～15日	第17回
2020年度	2021年 2月12日 ～13日	第18回
2021年度	2022年 2月 3日 ～ 4日	第19回

表7

年度	日時	指導内容
2006年度 第3回	2006年 9月28日	運動実践専門研修 救急処置 （講義実習）
2006年度 第6回	2007年 2月 8日	
2007年度 第3回	2007年 9月27日	
2007年度 第5回	2008年 3月13日	
2008年度 第3回	2008年 9月18日	
2008年度 第5回	2009年 3月15日	
2009年度 第3回	2009年 9月17日	
2009年度 第5回	2010年 3月11日	
2010年度 第3回	2010年 9月30日	
2010年度 第5回	2011年 3月10日	
2011年度 第3回	2012年 3月 8日	
2012年度 第3回	2013年 3月14日	

④救命処置コース指導実績（2006年以降）

- 日本救急医学会および大阪府医師会認定 ICLS コース指導実績（**表6**）
- 大阪労働衛生総合センター救急処置（講義実習）実績（**表7**）

表6

年度	参加回数	指導実績
2006年度	8 回	大阪府医師会コース大阪市大研修医コース3回を含む
2007年度	9 回	大阪市大・南大阪病院合同コース2回を含む
2008年度	10 回	大阪市大・南大阪病院合同コース2回を含む
2009年度	10 回	大阪市大・南大阪病院合同コース2回を含む
2010年度	11 回	大阪市大・南大阪病院合同コース2回を含む
2011年度	10 回	大阪市大・南大阪病院合同コース2回を含む
2012年度	9 回	第一回南大阪病院コースを含む
2013年度	8 回	南大阪病院コース3回を含む
2014年度	7 回	南大阪病院コース2回を含む
2015年度	5 回	南大阪病院コース2回を含む
2016年度	6 回	南大阪病院コース2回、指導者養成ワークショップ1回を含む
2017年度	4 回	南大阪病院コース2回、指導者養成ワークショップ1回を含む
2018年度	4 回	南大阪病院コース2回を含む
2019年度	4 回	南大阪病院コース2回を含む
2020年度	2 回	南大阪病院コース
2021年度	2 回	南大阪病院コース

学業業績

【学会発表および座長】

1) 学内 LAN を活用した PBL チュートリアルと組み合わせた自作診察ビデオ提示による臨床技能教育
新藤光郎，三浦克之，日野雅之，中村肇
第38回日本医学教育学会
2006年7月29日（奈良市）

2) 南大阪病院における総合診療外来について
新藤光郎，宮越一穂
日本プライマリ・ケア学会第20回近畿地方会
2006年11月19日（茨木市）

3) 学内 LAN を活用した PBL チュートリアルと組み合わせた自作診察ビデオ提示による臨床技能教育
新藤光郎，中村肇，三浦克之，日野雅之
第1回 IT ヘルスケア学会
2007年5月27日（東京）

4) 病院職員の意識調査に基づいた院内救急蘇生法（AED）普及活動について
新藤光郎
日本蘇生学会第26回大会
2007年10月5日（岡山）

5) ワークショップ 3：プライマリ･ケア（医）のための一次救命処置
新藤光郎
第22回日本プライマリ･ケア学会近畿地方会
2008年11月16日（大阪）

6) Skills Simulation Center(SSC)を活用した若手医療人の育成
首藤太一，奥幸子，岡田明子，森村美奈，
津村圭，新藤光郎，廣橋一裕
第44回日本医学教育学会
2010年7月27日（横浜）

7) 特別講演 II　元 ICU 専従医からみた初期臨床研修における集中治療研修の意義
新藤光郎
第5回兵庫大阪集中治療懇話会
2011年6月7日（大阪）

8) 高齢者医療を支える大阪市域における臨床研修制度の問題点
新藤光郎
大阪南部高齢者医療研究会
2011年7月30日（大阪）

9) 蘇生法新ガイドライン説明会を通じた病院職員の蘇生に対する意識調査
新藤光郎
日本蘇生学会第30回大会
2011年11月17日（福島）

10) 教育講演
『医学教育からみた集中治療と初期臨床研修』
新藤光郎
第58回日本集中治療医学会近畿地方会
2013年7月6日（神戸）

11)『看護師に対する人工呼吸器警報対応講習について』
新藤光郎
日本蘇生学会第33回大会
2014年12月5日（浜松）

12) P5救急医療3　セッション座長
新藤光郎
日本蘇生学会第34回大会
2015年11月5日（秋田）

13) 初期研修医に対するフィードバックシステムの問題点
新藤光郎
第48回日本医学教育学会
2016年7月30日（大阪）

14) P11 セッションコメンテーター
新藤光郎
日本蘇生学会第35回大会
2016年11月12日（久留米）

15)『教育』セッション座長
新藤光郎
日本蘇生学会第36回大会
2017年11月26日（東京）

16) 口演21　臨床実習3　座長
新藤光郎
第50回日本医学教育学会
2018年8月4日（東京）

【論文】

1) 南大阪病院における総合診療外来について～開設後3ヶ月間の総括と今後の展望
新藤光郎，宮越一穂
南大阪医学 55 (1):1-8,2006.

2) 病院職員の意識調査に基づいた院内救急蘇生法（AED）普及活動について
新藤光郎，渡邊美津江，銅銀清美，他
南大阪医学 55(1):1-7,2007.

3) 一般市民のための急変時対応の話
2006年新しい救急蘇生ガイドラインのあらまし
新藤光郎
KANSAI 健康安全 第2号:5-9,2007.

4) 看護師に対する呼吸フィジカルアセスメント講習会について
新藤光郎，渡邊美津江，銅銀清美，他
南大阪医学 56(1):47-52,2009.

5) 学校現場での心肺蘇生法研修を支援するための自主学習支援教材について
新藤光郎，後藤拓哉，芝野加代子，他
南大阪医学 57 (1):19-23,2010.

6) 医療手技教育とシステム構築　大阪市立大学医学部附属病院スキルスシミュレーションセンターの取組みを中心に
首藤太一，奥幸子，岡田明子，小林正宣，
巳波真希，津村えりか，海野貴史，衣畑成紀，
岡崎博敏，島田健永，森村美奈，津村圭，
新藤光郎，溝端康光，廣橋一裕
救急医学 35:1688-1694,2011.

7) 総合診療外来からみた糖尿病診療
―開設後52ヶ月間の総括
新藤光郎，澤絢，廣渡要，他
南大阪医学 58 (1):1-6,2011.

8) 蘇生法新ガイドライン説明会を通じた病院職員の蘇生に対する意識調査
新藤光郎，橋本佳典，升絵実，他
南大阪医学 59(1):21-25,2012.

9) 看護師に対する人工呼吸器警報シナリオ対応シミュレーション講習について
新藤光郎，佐々野澄子，安田知世，他
南大阪医学 60(1):101-107,2013.

10) 『呼吸不全の患者にバッグ・マスク換気を行ったら、さらに SpO2が低下し心停止に！』特集１急変対応中の急変はこう乗り切れ！
新藤光郎
月刊ナーシング 33:34-35,2013.

11) 南大阪病院初期臨床研修医に対するフィードバックシステムの問題点（第一報）
新藤光郎
南大阪医学 61 (1):9-14,2014.

12) 人工呼吸器警報対応研修の改善の試み
新藤光郎，他
南大阪医学 62(1):31-36,2015.

13) 右胸部打撲3週間後に緑色連鎖球菌群細菌による左膿胸をきたした一症例
新藤光郎，柿本祥太郎
南大阪医学 63 (1):31-35,2016.

14) 南大阪病院初期臨床研修医に対するフィードバックシステムの問題点（第2報）
新藤光郎
南大阪医学 64(1):9-15,2017.

15) 経口プレドニゾロン治療を行ったリウマチ性多発筋痛症14症例の診断および治療経過についての検討
新藤光郎，森川潤一，久米田靖郎
南大阪医学 67(1):7-13,2020.

16) 慢性リンパ性白血病との鑑別にフローサイトメトリーが有用であったサイトメガロウイルスによる単核球症類似疾患の1例.
新藤光郎，市川弘善
南大阪医学 69(1):1-6,2022.

【著書】

1) 循環不全/ショックの初期治療；改訂版
写真と動画でわかる二次救命処置
新藤光郎
（平出敦，小林正直　監修）学研 東京2012:92-96

【講演会講師】　新藤光郎

1) スポーツ現場における AED 使用について
第86回和歌山臨床整形外科医会春期研修会
2006年6月10日（和歌山市）

2) 新しい救急蘇生ガイドライン
（2005年 ILCOR 基準準拠）について
平成18年度大阪府医師会大阪市ブロック救急医療研修会
2006年7月13日

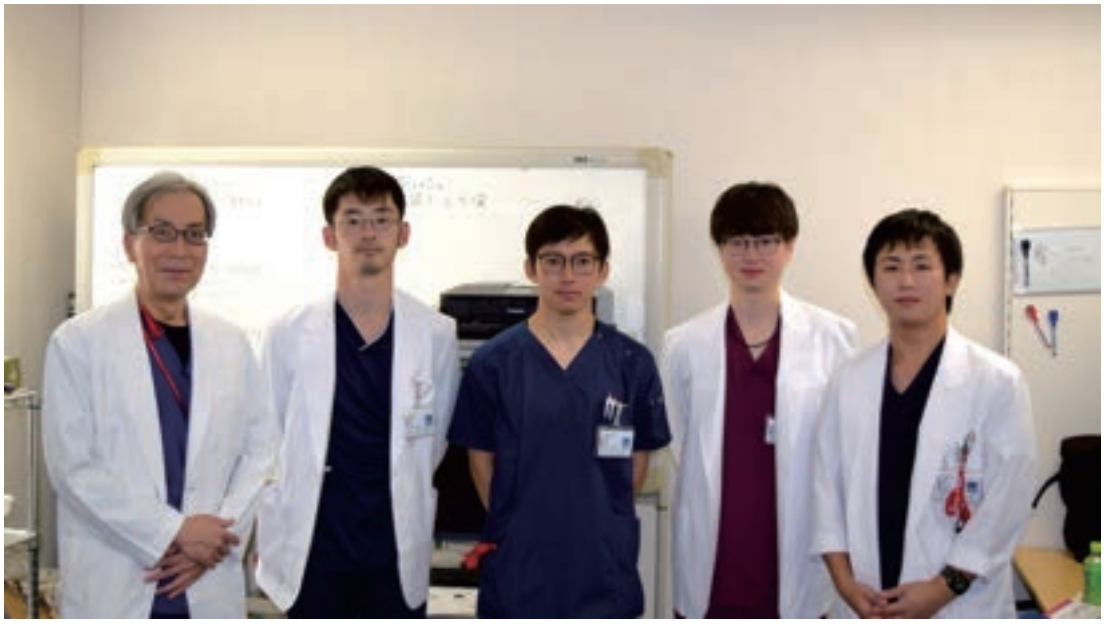
3) ストレスからくる生活習慣病
平成18年度住之江区女性学級
2006年8月3日

4) 蘇生法新ガイドライン（2010）に基づく
救急処置について
第18回スポーツ指導者講習会
2011年5月15日（大阪）

5) 『武道教育における安全対策について』
大阪府教育委員会学校教育における武道指導者研修会
2013年11月11日大阪（エルおおさか）

今後の展望

初期臨床研修医に対する一般外来研修での指導を充実させ、さらに医学部学生の学外臨床実習受け入れや教育情報の発信強化を通じて研修医確保に努め、将来の診療を担える人材育成を継続してゆくことが必要である。また院内の医療スタッフ育成のため診察技法やコミュニケーション能力向上の実技教育コースを企画運営し円滑なチーム医療の実践に貢献する。
“臨床教育”を通じて院内各部署の交流を促進し、安心安全なチーム医療を実践するための基盤を強化するため、次世代の教育研修センター担当医師確保が必要である。



医療安全管理室

1999年以降、重大な医療事故が連続して発生し社会問題になったことを契機に、医療安全の土台となる法制度が整備されました。医療安全管理体制の整備に加え、2006年には、医療安全・医薬品・医療機器それぞれの安全管理責任者の設置が定められました。当院は、1993年に設置した医療事故予防対策委員会から形を変え、2004年に医療安全管理室を設置し、専従の医療安全管理者を配置しています。

院内の医療安全文化の醸成、組織横断的な活動と職員への支援を行い、安全で質の高い医療の提供につなげていきます。

組織体制の変遷

期間	名称
1993年8月～2002年3月	医療事故予防対策委員会
2002年4月～2004年3月	リスクマネジメント委員会
2004年4月～現在	医療安全管理委員会 医療安全管理室

医療安全管理室の歴任者

期間	室長	安全管理者	医薬品	医療機器	事務員
2004年	柿本祥太郎	森　雅子	杉野恭子	岩橋雅延	－
2008年	庄司繁市	〃	〃	〃	－
2010年	中谷守一	〃	〃	〃	－
2012年	〃	〃	〃	〃	藤田ゆり
2013年	〃	〃	川岸恵子	〃	－
2015年	〃	〃	〃	〃	徳永雅美
2019年～現在	竹垣嘉訓 中谷守一(顧問)	香西瑞穂	〃	橋本佳典	〃

主な活動

- 関連委員会運営・事務局（医療安全管理委員会、医療安全推進者会、室検討会）、チーム活動管理（薬剤・転倒防止・Good Job）、看護部医療安全管理委員会運営支援
- ヒヤリハットや気付き報告などからの未然防止活動
- 医療事故発生時のサーベイランス、報告支援、分析、対策立案などの再発防止活動
- 重大事故発生時対応（事故調査委員会設置、調査、外部報告、分析、対策立案等）
- 組織横断的改善活動への介入・支援
- 定期院内ラウンド
- 定期データ分析（事故報告件数、内訳、診断結果未読件数など）
- 院内への安全情報発信（レター、事故件数、ヒヤリハット気づきの報告、外部通達など）
- Good Job 表彰
- 医療安全管理マニュアルの作成・改訂、関連文書の作成・改訂支援
- 医療安全に関する院内研修（定期研修、KYT、分析研修、看護部ラダー研修など）
- 診療報酬加算連携施設との相互チェックやコンサルテーション
- 患者相談、外部からの調査依頼対応など

感染制御室

副理事長・副院長
感染制御室室長
大坂　芳明

薬剤耐性菌やSARS(重症急性呼吸器症候群)、MERS(中東呼吸器症候群)、新型インフルエンザなど、新興再興感染症の流行によって感染管理の重要性はより評価され、2012年診療報酬改定では、感染防止対策加算1の施設基準として専従の感染管理者の配置が求められるようになりました。

当院では、1975年（昭和50年）から院内感染予防対策委員会を定期開催、2001年（平成13年）に感染対策チームを編成、2003年（平成15年）に感染管理を担う部門として感染制御室を設置し、感染対策といった概念が広く認知される以前から、院内感染対策に積極的に取り組んできました。

現在は、SARS-CoV-2が世界的な流行となり、日本国内においても2020年2月に初めてSARS-CoV-2感染者が確認されてから2022年10月時点で、累計感染者数は約2100万人、死者4500人を超える感染症となっています。当院は、最大41床のSARS-CoV-2専用病床を設け、380名の入院患者を受け入れてきました。この間、マニュアルの制定や入院病床・発熱外来のゾーニングなどの受け入れ体制の整備、クラスター対応、行政との連絡・調整など、SARS-CoV-2対応の中心的な役割を担ってきました。感染管理を担うものとしては苦難の時期となり、未だ終息が見えない中ではありますが、今後も感染対策の向上に取り組んでいきます。

主な業務

- 関連委員会（ICC・リンクナース)、チーム活動（ICT、AST）事務局
- 感染症に関するサーベイランス
- 定期的な院内ラウンド
- 感染対策に関する院内外教育
- 院内感染予防対策マニュアルの作成及び改訂
- 感染症診療、対策に関するコンサルテーション
- 職業感染防止(ワクチン接種、血液曝露後対応等)
- 診療報酬加算連携医療機関の院内ラウンドやコンサルテーション
- その他(感染症に関する行政機関との連絡窓口等)

歴任者

専任医師	期間
福本　進	2003年4月～2005年7月
大坂　芳明	2005年8月～現在
専従看護師	**期間**
藤田裕美子	2003 年 6 月～2005 年 7 月
渡邉美津江	2005 年 8 月～2008 年 10 月
小成　瑞穂	2008 年 10 月～2012 年 5 月
夜久　直也	2012 年 3 月～現在

TQM 推進室

医療機関では、提供する医療の質向上が求められています。質は、皆様に提供する医療サービスの質に留まらず、組織の質、職員の質、環境の質まで包含して捉えられるようになり、それらを担保するために、総合的質経営（TQM：Total Quality Management）の実践が必要であると言われています。

当院でも、2014 年 4 月に院長直轄の部門として『TQM 推進室』を設置し、医療の質改善委員と共に、医療の質向上に向けた継続的改善活動に関する活動を企画・運営しています。今後も、自立した改善風土の構築と、さらなる質向上に向けた活動を目指して取り組んでいきます。

歴任者

2014 年 4 月～現在	室長	福田　隆
	専任者	香西　瑞穂

主な業務

1. 院内の改善活動の推進

▶病院機能評価受審対応

事務局として、医療の質改善委員と共に、受審前後に内部監査を活用した改善提案や是正管理の実施。第三者評価の効果的な活用に向けた推進活動。

◇2015年2月　更新審査（3rdG:Ver.1.0）
◇2017年4月　期中確認
◇2020年2月　更新審査（3rdG:Ver.2.0）
◇2022年4月　期中確認

▶内部監査

1～2年に1回程度全部門対象に、改善の提案や是正管理を実施。

▶文書管理

2018年4月から文書管理システムを導入し管理。電子文書管理委員会を運営し、同意書を含めた電子文書類の管理、長期署名システムの導入準備などの実施。

2. 方針管理

進捗管理による目標設定や実行計画立案支援。成果報告会として全部門による発表会を開催。2022年第8回より表彰制度を導入。

3. QI（Quality Indicator）

各種団体に参加しデータを抽出。各指標のベンチマークデータを現状把握や業務改善につなげてもらうため、当該業務実施部門にフィードバックしている。

看護部

看護部長
渡邉　美津江

【看護部モットー】

▶ 笑顔で!!　▶ 元気良く!!
▶ Positive に（積極的・肯定的）!!
▶ Pride を持って!!　▶ 自己実現を目指そう!!

【看護部理念】

地域包括システムの中核的な役割と使命を自覚し、地域の皆様と社会のニーズに対応できる看護を実践します

【基本方針】

1. 患者様の命の尊厳と人権を尊重します
2. 安全で質の高い看護を実践します

【目標】

1. 説明と納得に基づく患者さま中心の看護を実践します
2. 知識と技術を磨き、豊かな人間性を有する看護職を育成します
3. 経営への参画意識を高め、効率的な看護業務を遂行します
4. 職員満足度が高まるよう、職場環境の充実を図ります

2010年（平成22年）3月、前任中原かつ枝看護部長の退職に伴い、同年4月より渡邉美津江が看護部長代行、2011年より看護部長として管理業務を行っています。

2010年に引き継いだ時点での看護要員は300名弱でしたが、徐々に看護師を増員し現在は350人～360人で推移しています。急性期一般入院基本料4、ハイケアユニット入院医療管理料1、回復期リハビリテーション病棟入院基本料2、地域包括ケア病棟入院基本料2で、2交替の勤務体制をとっています。

2011年12月25日、病院新築移転においては、許可病床数を463床から400床へ減床、現地建て替えのため、外来部門を本館内で運用する必要があり病棟編成を8単位から7単位としました。それに伴い病棟受入れ診療科の再編が行われました。

病院移転での患者移送は、命を預かる一大イベントですが、安全第一に移送することが大原則です。1回に100名～150名の職員が参加し、3回の患者移送シミュレーションを実施しました。350名近い入院患者を徐々に減らし、当日は一部の患者は外泊とし、163名を3つのルートで事故なく移送することができました。

また、2013年10月には外来棟が完成し、本館5階で運用していた外来機能を移転、5階部分を改装し、2014年1月20日より、5階病棟（亜急性期病棟）として運用開始、8月には地域包括ケア病棟として届出、認可を受けました。また6床で運用していたHCU を8床に増床しました。

2019年からの新型コロナ感染症においては、2020年より7階病棟を新型コロナ対応病棟としての運用をしています。病院移転から短期間で病棟再編が何度もあり、人事異動が一番大変でしたが、各部署協力のもと円滑に遂行することができました。

認定看護管理者、認定看護師、安全管理者、実習指導者などの育成も強化しています。また、学会や外部研修にも積極的に参加し、学会への演題提出は毎年5題以上で、優秀演題にも選ばれています。（年報に記載）

これからも、職員が笑顔で働きやすい職場環境づくりに努め、患者にとって安全・安心で、地域、社会のニーズに対応できる看護が実践できるよう努めていきます。

【専門看護師】がん看護
【認定看護師（6 分野）】

- 感染管理　● がん性疼痛看護　● 救急看護
- 透析看護　● 皮膚・排泄ケア
- がん薬物療法（特定行為含む）

文責：渡邉　美津江

師長会

看護部　5階病棟

つなげます！みんなの力で！

2011年末に外来として使用していた5階フロアーを2013年の12月、旧病院より運営していた亜急性病棟（5階病棟）として再開しました。その後病状が安定している患者の中で、自宅または施設等での療養に少し不安の残る患者を対象に2014年、地域包括ケア病棟として届出、認可されました。

地域包括ケア病棟では医師2名、看護職員22名、（13:1の看護体制、看護師配置加算）と看護補助10名が配属されています。職員は新人、子育て世代からベテランナースが在籍し、MSW・セラピストなどの多職種と連携し、病棟全体で患者が安心して地域で生活できるようサポートしています。

入院患者のうち院外からの入院を４割以上受け入れ、人工呼吸器装着のレスパイト入院にも対応しています。また病床を活用するために短期入院も受けており療養型と急性期が混在した高いスキルが求められる病棟です。

2019年からはACPにかかわる「看取りの指針策定」「患者の意思決定支援」が施設基準に明示され、看護部全体の学習会とは別に病棟内でACPの勉強会を開催しました。その結果、積極的にACPに取りくむことができ少しずつ成果が出ています。

今後も地域完結型の一助として、貢献できるように努力していきたいとおもいます。

師長
松元　直子

主任：長瀬　英子

看護部　6階病棟

患者の視点に立ち、寄り添い、信頼される看護を提供！

6階病棟は、消化器外科、消化器内科、乳腺外科の50床の急性期病棟です。主に、消化管主要である、食道がん、胃がん、大腸がん、直腸がん、すい臓がんや肝臓がんなどの胆肝膵領域腫瘍に対して、消化器内科では侵襲の少ない内視鏡検査、治療を行い、大腸ポリープ切除は1泊2日の短期入院も増えています。

また、高齢化人口の急激な増加に伴い消化器外科手術においても、侵襲の少ない鏡視下手術の需要も高まり、腹腔鏡下での手術が上位を占めています。さらに、食道裂孔ヘルニア、逆流性食道炎などの食道良性疾患に対する治療にも力を入れ、全国からの患者も増えています。

そこで患者自身と家族が治療内容を把握しやすくすることで、安心して検査や治療に臨めるようにクリニカルパスの作成にも力を入れ取り組んでいます。

高齢者の合併症予防やQOLの低下を招かないために早期離床の重要性を意識し離床援助を実施しています。また、転倒転落の危険性のある患者に対して注意喚起札を用い本人および他職種も危険性があることを共通認識できるよう手順を作成し、安全な療養環境の調整にも努めています。

当病棟では、がん薬物療法認定看護師をはじめ看護師として専門的な知識や技術を発揮し、周術期から終末期と様々な患者の看護を多職種と連携し患者のニーズに合わせながら、気持ちに寄り添い信頼できる看護の提供を目指し、日々努力しています。

師長
浦田　真由美

主　任：黒坪　瑞恵、久米　真司
主　任：野尻　由紀（がん薬物療法認定看護師）
副主任：廣瀬　新司

看護部　7階病棟

明るく元気に、そしてポジティブに！

7階病棟は消化器内科・消化器外科・眼科を専門とする50床の病棟として運用していました。地域の基幹病院として2020年よりコロナ患者を受け入れ、陰圧室も2床から5床に増床しました。

コロナの発生状況に応じて2021年6月までは一般入院患者の対応も行いながら、コロナ専用病棟運用に向けて転棟・退院調整を他病棟・多職種の協力を得ながら行いました。そして2021年9月には、コロナ専用病床を20床に増床し、2022年1月の第６波では23床、2022年8月の第7波では41床のコロナ専用病床となりました。

看護師勤務体制は、固定チームナーシング2チームから1チームでの体制に変更し、医師・看護師・薬剤師・栄養士・MSW・臨床工学士・PT・OTと連携しコロナ患者の治療・看護に努めています。当初は未知のウイルスとされたコロナ患者に対し、不安と恐怖が先立ちましたが、看護師という使命感のもとで私たちにできることは何かというところに視点を置き、必ず生きて家に帰すことを目標としていました。そしていつの日か通常の患者と変わりないケアを行えている自分たちに気づくこともできました。

今までに経験したことがないコロナ患者の看護から多くのことを学び、今の私たちの看護に繋げていくことができています。患者の回復に向け、スタッフ一人ひとりが良好なコミュニケーションと情報共有を図り、患者とその家族が安心できるようこれからも真心を込めた看護を心がけ、医療・社会背景に柔軟に対応できる看護を提供できるよう努めていきます。

副部長・師長
池永　美智子

主　任：赤井　えり
副主任：小寺　一輝

看護部　8階病棟

倫理的視点を持った
心に寄り添う温かな看護!

8階病棟は、一般内科、耳鼻咽喉科、形成外科、整形外科の混合病棟です。2020年5月より形成外科が開設され、6月より当該病棟が入院病床として稼働を開始しました。形成外科では、「頭からつま先まで」の広範囲の外科診療を行い、その取り扱う疾患は様々です。中でも、近年、糖尿病の増加に伴い、糖尿病性足病変を患う患者も増え、その治療においては日常生活やボディイメージに影響を及ぼすことも少なくありません。病棟看護師は、“倫理的視点を持った心に寄り添う温かな看護”をモットーに、身体的・精神的ケアを通して患者さんの身体の回復、心のケアに努めています。また、毎週水曜日に、医師、理学療法士、薬剤師、病棟看護師が参加する形成外科カンファレンスを行い、それぞれの職種の視点で治療や療養上の問題に対する解決策や課題などを検討しています。

内科においては主に誤嚥性肺炎、また整形外科では大腿骨頸部・転子部骨折、耳鼻咽喉科では扁桃炎など様々な疾患をもつ患者の看護にあたっています。超高齢化が進む中、入院する患者の約8割が高齢者と多く、また老々介護といった社会背景の中、退院支援に関わる看護師の役割も大きく、その能力も高く求められます。前述した疾患においては、退院後の生活を見据えあらゆる問題に配慮していかなければなりません。患者、家族が最良な退院後の生活が送れるよう、意向を確認し多職種と協働し退院支援に努めています。

病棟スタッフは、皮膚・排泄ケア認定看護師が在籍し専門知識を活かし患者のケア、またスタッフ教育を行っています。子育て中の看護師も多く、その豊富な経験から柔軟な対応ができ、元気で、明るく、また思いやりのあふれる病棟です。これからも多職種と情報共有・連携をとり、安全で質の高い看護が提供できるよう努めていきます。

師長
西森　恭子

主　任：村上　巌（皮膚・排泄ケア認定看護師）
副主任：溝脇　亜実

看護部　9階病棟

明るく、元気で、思いやりを大切に！

9階病棟は、旧病院、新病院ともに整形外科単科の病床運用でした。当院のある地域は、特性として高齢化率が全国平均よりも高く、多くの高齢者が在住しています。そのためか、転倒による脆弱性骨折が非常に多く、なかでも大腿骨骨折により入院加療が必要となるケースが多数あります。そこで、手術件数は近年500件以上になり、年々増加しています。整形外科における看護は、術前後の急性期だけでなく回復期に至るまでの幅広い介入が必要となります。そのため、早期からMSWと協働し、患者が少しでも早く社会復帰ができるよう退院支援を行い、回復期リハビリテーション病棟や地域包括ケア病棟への転棟など円滑に行えるよう、日々取り組んでいます。

また、2021年5月には、コロナ禍病棟再編成により、眼科が併設され、年間240件を超える白内障の手術が行われました。受入れ当初は前眼科病棟からの応援体制によりスタッフ教育を行いました。現在は1日7名の日帰りや1泊2日の手術にも対応しています。クリニカルパスの活用で業務の効率化を図っています。

2021年度は、管理者、スタッフにともに、著しい職場環境の変化はありましたが、自分達のキャリアアップに繋がりました。これからも、変化を柔軟に受け止め、少しでも質の高い看護サービスを提供できるよう努力していきます。

師長
宇崎　真由子

副主任：柳楽　貴大

看護部 10階病棟

患者さん中心の看護を温かい心で！

10F病棟は2014年新病院移転に伴い旧病院から継続した診療科である糖尿病・内分泌内科・泌尿器科と透析室(血液浄化センター)の混合病棟です。

糖尿病や透析患者など慢性疾患とともに生活していく患者の支援に努めています。

また、透析看護認定看護師を中心に専門病棟としてのスキルUPを目指し、勉強会やカンファレンスも実施しています。

周手術期の泌尿器患者に対しては早期離床と回復促進を目的としたケアの実践を行っています。がんの進行や、末期腎不全などの疾患により人生の最終段階にある患者に対しては、意思を尊重して緩和チームをはじめ他職種と連携しACPを実践しています。

高齢者や介護の必要な患者の入院においても入院時から患者と家族の意向を確認の上、MSWと連携し退院計画を実践しています。

コロナ禍においては、面会制限によって生じる患者と家族の繋がりへの影響を検討しました。安心して入院いただけるよう、定期的に家族へ連絡し状況をお伝えしています。

看護要員は20代～60代と幅広いですが、温かい心で患者に対応できるよう、チームワークとワークライフバランスを意識し勤務しています。また、地域の中核病院としての役割と急性期一般病棟の特性を理解し緊急入院においても柔軟に対応できるよう日々努めています。

師長
小成　瑞穂

主　任：高田　佳奈、菊池　庄祐
副主任：市川　裕美（透析看護認定看護師）

看護部　11 階病棟

みんなで力を合わせて、安心して働ける病棟！

胸部外科と循環器内科を主とする51床（4人部屋11室・個室7室）の混合病棟です。
旧病院では、胸部外科と循環器内科以外に心臓血管外科と耳鼻科の病棟でした。病棟再編成に伴い、耳鼻科は他病棟へ移ったが、冠動脈疾患・弁疾患・大血管疾患・下肢動脈疾患・不整脈疾患の検査、手術を担当していました。

現在では、循環器・胸部外科を中心とした循環器センターであり、急性期と慢性疾患の急性増悪、肺癌などの周術期患者、緩和の患者を対象とした病棟です。2021年の心臓カテーテル検査169件・治療は159件、下肢血管の治療は58件、肺がん・気胸などの手術は36件、化学療法は39件でした。カテーテル治療から退院後の生活指導まで、幅の広い看護を学ぶことができます。患者・家族の方々が望む生活が送れるように、多職種と協働し退院支援を行っています。チーム医療を推進し、今後も患者・家族の心に寄り添う看護を提供していきたいと思います。20～30歳代のスタッフが中心になり、忙しい中でも声をかけ、助け合える、チームワークのよい病棟です。新人教育では、「みんなで育てる」をモットーに教育委員・実地指導者を中心にスタッフ全員で教育に携わっています。和気あいあいとしていますので、キャリア入職の方も安心して働ける病棟づくりを行っています。

師長
加山　聖泰

主任：上大田　清香、新家　千春

看護部 12階病棟

何事も全力で！

12階病棟は、旧3階東病棟に2003年開設された回復期リハビリテーション病棟を引き継ぐ42床の専門病棟です。脳血管疾患・整形外科疾患・廃用症候群など、急性期の治療後の患者を、院内のみでなく２次医療圏、さらには他府県からの転院も受け入れています。

専任医師2名、リハビリテーション科（理学療法士・作業療法士・言語聴覚士）・専任のMSW1名ほか、薬剤師・管理栄養士らと多職種連携で、患者・家族が安心して生活の場に戻ることができるよう支援しています。また、リハビリテーションが円滑に行えるよう、セラピスト・看護補助者と共にベッドサイドカンファレンス・ADL変更評価などを全患者に実施しています。転院・転入前の患者受け入れ判定会議、入院中に患者・家族、医師・担当セラピスト・MSWと地域の介護支援者参加のもと、多職種カンファレンスを行い、患者・家族の意向を尊重した退院後の生活を支援しています。

子育て期やベテランナースも在籍し、ワークライフバランスに取り組んでいます。また月1回セラピストと合同勉強会を開催し、質の高いリハビリテーション看護の提供に努めています。

現在はコロナ禍で、食堂での食事や活動療法など集合したリハビリテーションや面会が制限されています。感染管理を徹底し、日常を取り戻せるよう多職種連携で患者が生活へ戻る支援を継続していきます。

師長
林　さゆり

主任：生駒　嘉代

看護部　ＨＣＵ

元気に明るくていねいに！
チームワークを大切に！

2011年の病院建て替え時に中央診療部門としてHCUが設立されました。室長（麻酔科医）を管理責任者として運用しており、病床数8床の4：1看護体制の固定チームナーシング方式の看護を機能させています。

主に外科系の手術後入室から内科系の重症患者など、あらゆる診療科に対応しており2021年度は病床利用率：43.8%、手術後入室は全体の57.8%でした。

HCUの目標は1.看護の質向上　2.環境の整備　3.チーム医療の推進　4.コストに対するスタッフの意識向上を掲げ、隔月でスタッフによる勉強会の開催、インシデント検討会を実施し、知識・情報の共有による自己研鑽や危険予知に対する意識向上に努めています。また、術前患者にオリエンテーションを実施しHCUの環境を知ってもらうことで不安の軽減を図っています。

近年は特にカンファレンスの充実に取り組み、【看護ケア】だけでなく【倫理的視点】で患者を全人的に捉え、医師、看護師、多職種も含め患者が主体となる意思決定が話し合えるようアプローチしています。

師長
藤谷　淳子

主任：根本　志津、瀧　昌代、樋口　亜弓

看護部　手術室

つなげます！みんなの力で！

2011年に新病院の移転に伴い、手術室は本館4階フロアに配置されました。クラス1000が2室、クラス10000が４室の合計６室が新設されました。年間の手術件数は、20年前の2002年は1,700件台、診療科数の変化、新病院設立にともない手術件数は増加し、2021年度には年間2500件を超えるまでになっています。対応している診療科は外科・乳腺外科・整形外科・泌尿器外科・胸部外科・形成外科・眼科・耳鼻咽喉科・内科・消化器内科の10科です。看護師23名、看護補助１名、中央材料室スタッフ1名、臨床工学技士5名が配属されています。夜間・日祝日はオンコール体制で24時間緊急手術に対応しています。

当院は大阪府がん診療拠点病院の認可を受けており、各種がんの手術件数は増加しています。さらに、日本で増加している逆流性食道炎や食道裂孔ヘルニアに対する鏡視下手術も積極的に行われています。近年、女性外科専門外来の設置により麻酔から手術まで女性の医師・麻酔科医師・看護師で患者の立場に立った看護、医療を提供しています。

私たち看護師は、手術を受けられる患者に対し、安心・安全な手術室看護を実践するため、各科医師・麻酔科医師・看護師・臨床工学技士・薬剤師・放射線技師・病理検査技師と連携し、チーム医療・看護の提供に心掛けています。局所麻酔以外の手術に対しては術前術後訪問を行い患者や家族の手術に対する不安を軽減することに努めています。

今後も患者の安全を守り、目的の手術が円滑に遂行されるように日々自己研鑽に努めて参ります。

副師長
沖野　明美

主　任：夜久　里早
副主任：中村　真美

看護部　外来

笑顔で対応、安心・安全な外来！

2011年11月に新病院の病棟が完成し、外来は新外来棟が完成するまで本館5階フロアーを外来として運用しました。2014年9月に新外来棟が完成し4階建ての外来棟に引っ越し、外来は13の診療科（内科、整形外科、消化器外科、消化器内科、循環器内科、乳腺外科、総合内科、皮膚科、形成外科、胸部外科、泌尿器科、耳鼻科、眼科）と、内視鏡センター、外来点滴・処置室、外来治療室、放射線科、救急外来からなっています。2019年10月には外来棟4階に新たに通院での透析ベッド30床が開設されました。

2021年度の外来患者数は一日平均約450人でした。診療や検査などをスムーズに受けていただけるように、他職種との協働のもと日々の業務が実施されています。フットケアなどの指導外来の充実も図りながら患者対応を行っています。大阪府がん診療拠点病院であり、がん看護専門看護師を中心に緩和ケア活動を行っています。また、2018年に入退院支援が始まり、入院前問診を行い外来からの情報を病棟へ共有できています。2018年には救急看護認定看護師が中心となり院内トリアージが開始され、救急外来受診患者の緊急度を判定・選別し診療治療の優先順位を決定し対応しています。COVID-19流行下により発熱外来も救急外来での対応となっています。

これからも、地域の皆様に安心して受診いただけるようをモットーに、安全で質の高い看護を提供できるよう努めていきます。

師長
永易　ゆり子

主任：神崎　美和　（がん看護専門看護師
　　がん性疼痛看護認定看護師）
主任：樋口　雄之輔（救急看護認定看護師）
主任：堀野　祥子、下川　浩美

薬剤部

薬剤部部長
髙尾　豊

2000年10月　医薬分業開始、薬剤師数は半数となったが、高山薬剤部長の下で病棟活動を中心に業務展開、全病棟で薬剤管理指導業務を実施する。

2001年9月　無菌製剤処理の施設基準の承認を受け、クリーンベンチ及び安全キャビネットを導入し混注業務開始

2007年4月　梶原薬剤科長就任、薬剤師数13名、事務員2名、又薬剤科より病院の医薬品安全管理責任者を選出する事になり、2007年7月診療支援部薬剤科から薬剤部へ変更、薬剤部長は柿本院長が兼任となる。

2009年4月　梶原薬剤部長就任、薬剤師数16名、事務員2名の部署となる。

2010年　院内に創薬センターを設置し、治験業務が本格化、医師・治験コーディネーターと連携を図りながら治験薬管理、調剤を行う。

2010年5月　2006年4月より薬学部が6年制に移行して初めての薬学生長期実務実習が始まり、病院への55日間実習が必須となった。2021年5月までの11年間で29名の薬学生が当院で実務実習を行っている。

2011年5月　大阪府医師会の JMAT（日本医師会災害医療チーム）の一員として東日本大震災の医療支援に薬剤部長が参加、岩手県大槌町で5日間の支援活動を行う。9月にリーダーの医師と院内で医療支援の活動報告を行う。

2011年12月　新病院開院、薬剤部は2階に設けられ、調剤室、注射調剤室、無菌製剤室、医薬品情報管理室がワンフロアにある機能的な構造になる。各セクションの状況に応じて薬剤師が容易に往来できるため、効率的に業務を遂行することができ、電子カルテの導入により、どの部署からも医療情報の入力・参照が可能となり情報の共有化と伝達の迅速化が図られ業務の効率化が可能になった。

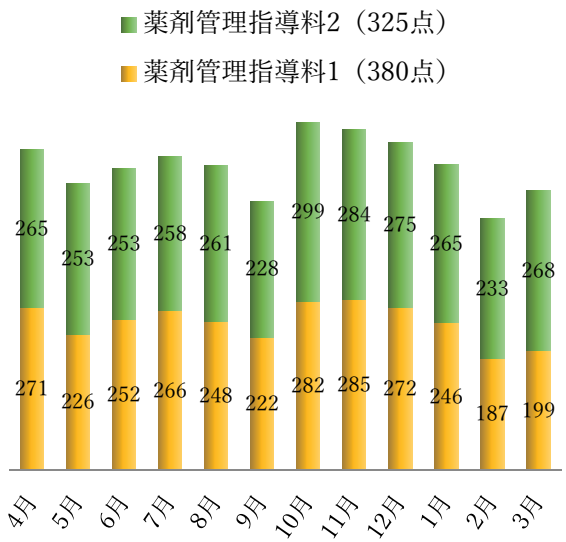
2012年4月　病棟薬剤業務実施加算の施設基準の承認を受け、各病棟へ専任薬剤師を配置、週20時間以上の病棟業務を開始する。これにより、薬剤師が病棟において、医療従事者の負担軽減及び薬物療法の有効性・安全性の向上に貢献できるようになった。

2021年1月　髙尾薬剤部長就任、薬剤師数22名、事務員2名の部署となる。

業務紹介

薬剤部では、調剤・服薬指導/薬歴管理・製剤・注射剤の無菌調製・医薬品情報・医薬品管理・治験管理等の多岐にわたる業務を行っている。薬剤師にも専門性が求められており、病棟薬剤業務や各種チーム医療への参加を積極的に行い、患者様に最良の医療が提供できるよう日々努力を重ねている。チーム医療推進によって各種委員会活動にも積極的に参加し、院内感染対策委員会、医療安全管理委員会、NST 委員会をはじめ2007年6月発足の化学療法委員会、2007年8月発足の緩和ケア委員会等、薬剤師の立場から安全かつ有効な医療活動が行えるよう努めている。又、薬剤部の目標の一つである認定・専門薬剤師の育成にも力を入れており、感染制御認定薬剤師、がん薬物療法認定薬剤師、栄養サポート（ＮＳＴ）専門療法士等が質の高い医療を実践している。

薬剤管理指導業務件数（2021年度）



今後の展望

近年、医療崩壊の危機が社会的な問題になり、個々の患者に最適で安心かつ安全な医療を行うためには、チーム医療の一員として薬剤師がこれまで以上に積極的に患者の薬物療法に関わることが求められている。

振り返るとこの20年間､51名の薬剤師を採用し、そのうち33名が退職している。薬剤師数の一番少ない時期は10名で、現在は20名をキープしているが、病院薬剤師を志す卒業生が少ないためか、ここ数年募集をしても採用ができない状態が続く。より良い医療を維持・発展させていくためにも後輩の育成は、今後の重要な課題である。

薬剤部

【診療支援部】リハビリテーション科

診療支援部部長
リハビリテーション科科長
山川　智之

1998年10月より質の高い本格的なリハビリテーションを地域に提供することを目標に組織再構築を行ってきました。当初は、理想とするリハビリテーションとはかけ離れたサービス提供を行っておりましたが、やっと本格的なリハビリテーションへの一歩を踏み出しました。理学療法士5名から2001年には理学療法士9名、作業療法士4名となり、セラピストは増加することとなりました。特に、理学療法士は2001年からの10年では微増しながら、その後35名前後の人員となりました。作業療法士および言語聴覚士は人員確保が難しく一桁台にとどまっています。この20年間で当科に就職したセラピストは延べ731名となり、年平均35名の実働数となりました。専門分野教育に力を入れてきた多くの人材が席を同じくしたことは誇りに思います。整形疾患、心臓疾患、呼吸器疾患、脳血管疾患、がん疾患など多くの疾患を対象とするリハビリテーションの実現に向けて努めてきました。セラピストの認定取得は、心臓リハビリテーション指導士6名、呼吸療法認定士8名、日本糖尿病療養指導士5名、腎臓リハビリテーション指導士4名、日本臨床栄養代謝学会栄養サポートチーム（NST）専門療法士1名、がん患者リハビリテーション研修修了者8名と多岐にわたり取得をしています。

当科にて臨床を行った患者数は年間平均9,168名の延べ192,522名でした。院内では入院患者、外来患者と訪問リハビリテーションを中心に行っていましたが、リハビリテーションクリニック開設後は入院患者を中心に施行することとなりました。またリハビリテーションクリニックでは、医療保険の外来患者や介護保険での通所リハビリテーションを施行する院内とクリニックでの役割分担の運営を行いました。

2003年2月の病棟変更以来、回復期リハビリテーション病棟に施設基準として理学療法士2名、作業療法士1名をそれぞれ専従者配置しました。また、2014年8月より地域包括ケア病棟へセラピスト1名の専従配置を行いました。

2006年診療報酬改定では疾患別リハビリテーション料及び日数制限が開始され、リハビリテーションにとっては大きな改革であり、これより外来のあり方を考えることになりました。その後2012年に新病院及びリハビリテーションクリニックの開設をきっかけにリハビリテーション運営を改革することになりました。これらにより、2014年8月よりリハビリテーションクリニックにて短時間・通所リハビリテーションを開設。1～2時間の短時間での通所リハビリテーションは、本格的なリハビリテーションを継続して希望される利用者の方々のニーズにより開設したものであります。自動車による送迎を総務部所属の運転手の方々とともに行った実績は、開設後8年間で延べ5,038名の利用者へのリハビリテーション提供を行ったものであります。

訪問リハビリテーションは、2001年4月～2020年3月まで南大阪地域支援センター訪問看護ステーションの手伝いとして実施しました。しかし地域でのニーズは高く、当科セラピストが月～金曜日で1日6名の利用者を対象にセラピストが3名でチームを組み実施しました。延べ289名で全体のセラピストの40%がこの訪問リハビリテーションに関わっていました。しかし、セラピストの負担が大きく訪問リハビリテーションを中止することとなりました。

実習を受け入れている学校数は延べ247校であり、学生数は延べ675名となりました。実習には、見学実習、検査測定実習、評価実習、臨床実習が各学年カリキュラムにより規定されています。当科では、各校の実習方針に基づいて臨床現場に準じた経験的実習を行っています。特に理学療法士及

び作業療法士には、免許取得後5年目以上であることを条件に実習を受け入れ指導を行うために必要不可欠な講習会があります。当科でも2019年度より開始されたこの厚生労働省主催の臨床実習指導者講習会を7名が修了し、今後も5年目以上の経験者の受講を随時予定しています。

最後に、この20年間は質の高い本格的なリハビリテーションをこの地域に提供するための当科成長の時代でありました。今後も法人や当院でのリハビリテーションがこの地域に根付き地域に役立ち貢献のできる質の高いリハビリテーションを提供できるよう、努めて参ります。

リハビリテーションクリニック

業務実績統計

セラピスト職員実績

（単位：名）

年	理学療法士	作業療法士	言語聴覚士	計	訪問リハビリテーション担当者数	割合
2001	9	4	0	13	3	23%
2002	12	4	0	16	5	31%
2003	11	3	1	15	3	20%
2004	13	3	1	17	5	29%
2005	12	2	2	16	4	25%
2006	16	4	1	21	6	29%
2007	15	5	2	22	3	14%
2008	16	5	2	23	3	13%
2009	21	5	1	27	17	63%
2010	27	7	3	37	22	59%
2011	28	5	4	37	22	59%
2012	28	7	6	41	24	59%
2013	31	6	5	42	22	52%
2014	37	6	5	48	27	56%
2015	34	8	6	48	22	46%
2016	34	10	7	51	21	41%
2017	36	8	7	51	20	39%
2018	45	8	6	59	21	36%
2019	42	7	5	54	21	39%
2020	33	6	5	44	18	41%
2021	36	8	5	49	−	−
計	**536**	**121**	**74**	**731**	**289**	**40%**

患者件数実績

（単位：件）

年	入院	外来	訪問リハビリテーション	リハビリテーションクリニック	通所リハビリテーション	計
2001	2,494	5,354	319			8,167
2002	2,541	6,145	694			9,380
2003	2,593	6,052	750			9,395
2004	2,813	5,423	1,056			9,292
2005	3,366	4,112	1,075			8,553
2006	3,041	3,450	1,054			7,545
2007	2,714	3,116	1,105			6,935
2008	3,450	3,594	1,136			8,180
2009	3,911	3,921	1,220			9,052
2010	4,666	3,659	1,268			9,593
2011	3,924	2,777	1,286			7,987
2012	3,675	110	1,248	5,010		10,043
2013	3,902	143	1,214	5,085		10,344
2014	3,920	224	1,203	5,074	50	10,471
2015	3,814	202	1,197	4,766	139	10,118
2016	3,979	174	1,157	4,978	360	10,648
2017	4,269	169	951	4,639	430	10,458
2018	4,163	171	1,140	4,289	432	10,195
2019	4,199	146	1,207	3,126	1,033	9,711
2020	3,509	119	1,222	2,868	1,283	9,001
2021	3,195	156	－	2,792	1,311	7,454
計	**74,138**	**49,217**	**21,502**	**42,627**	**5,038**	**192,522**

実習受け入れ学校数及び学生数

年	理学療法士		作業療法士		言語聴覚士		計	
	学校数（校）	学生数（名）	学校数（校）	学生数（名）	学校数（校）	学生数（名）	学校数（校）	学生数（名）
2001	3	10	2	4			5	14
2002	4	16	1	6			5	22
2003	7	17	1	2			8	19
2004	9	21	1	1			10	22
2005	10	18	2	2			12	20
2006	7	18	3	5			10	23
2007	7	18	2	4			9	22
2008	9	21	4	8			13	29
2009	11	31	3	7			14	38
2010	10	28	3	9			13	37
2011	9	37	3	6	1	1	13	44
2012	8	26	3	7	1	2	12	35
2013	11	38	4	9	1	4	16	51
2014	10	30	4	10	2	7	16	47
2015	9	30	3	11	2	5	14	46
2016	8	30	4	10	2	5	14	45
2017	8	27	5	13	2	3	15	43
2018	11	30	5	20	1	3	17	53
2019	9	16	5	14	2	3	16	33
2020	8	16	3	9	1	1	12	26
2021	2	5	0	0	1	1	3	6
計	**170**	**483**	**61**	**157**	**16**	**35**	**247**	**675**

【診療支援部】臨床検査科

臨床検査科顧問
南大阪看護専門学校
学校長
小味渕　智雄

臨床検査科科長
桑山　和哉

はじめに

昭和26年5月（1951年）の南大阪病院開設時と同時に細菌免疫学、病理学の研究を目的とした研究室が立ち上げられた。70年前が臨床検査科のルーツとなり、昭和33年（1558年）に研究室から検査室へ名称変更され、昭和45年（1970年）に現在の臨床検査科の名称になった。

検査の自動化への対応は昭和42年（1967年）に自動血球計算機、蛋白分画泳動装置を導入した。昭和44年（1969年）には血液ガス、昭和50年（1975年）に生化学自動分析装置を導入し、平成元年（1989年）から一般検査、血液検査、生化学免疫、微生物検査、生理検査において検体数増加の対応と検査結果報告の迅速化を強化するため院内検査の強化を進めた。平成8年（1996年）には検体検査システムLIS（A&Tクリニラン）と生化学分析装置（TBA-80FR×2、502ｘ×1、電解質×2）を搬送システムLAS（A&Tクリニログ）に接続して業務の効率化を図った。平成16年（2004年）に業務動線を見直し、搬送システムから生化学免疫連結装置（TBA-ci8200）と生化学分析装置（TBA-200FR）を導入して結果報告時間の短縮と測定忘れゼロを確立した。

新病院移転以降～

平成23年（2011年）12月に新病院への移転に伴い、電子カルテに伴う検査システムLIS（電子カルテ・検査システム共にソフトウエアサービス）に変更してオーダーリングの運用を開始した。検体検査システムだけでは無く、輸血検査システム、微生物検査システム（ソフトウエアサービス）、生理検査システム（ソフトウエアサービス）でPACSはフクダ電子（波形）と東芝メディカル（現キャノンメディカル・画像）を導入した。システム更新と移転に伴い多くの検査機器や今まで導入していなかった採血管準備システム（テクノメディカBC-ROBO）も導入した。旧病院では外来採血を3カ所で行っていたものを臨床検査科採血室1カ所に集約し、尿検査も泌尿器外来や内科処置室で行っていたものを検体検査室1カ所にした。これにより業務の集中が可能となった。生理検査も旧病院では主要な外来がある1階フロアではなく、2階フロアにありとても不便で検査スペースも狭かった。新病院では採血室、放射線科と同じフロアにあり、検査スペースも病棟ベッドをそのままエコー検査室まで入ることができ、業務効率が良くなった。聴力検査も生理検査で行うようになり、臨床検査技師の人員配置も効率的になった。微生物検査室はクラスPⅡレベルで設計され、陰圧室で出入り口は2重扉になっており、隣接する検体検査室側に排菌しない構造である。新型コロナウイルス感染拡大で、通常業務以外にSARS-CoV-2ウイルスの検査が激増した。SARS-CoV-2抗原定量検査（ルミパスルG600Ⅱ）とPCR装置（GeneXpert GX-IV、2台）を導入し、24時間365日検査対応している。

新病院に移転して10年が経過した。令和3年（2021年）2月に全自動輸血検査装置（オーソ ビジョン）を導入し、4月に装置での採血管開栓機能や測定検体の振り分けできる機能、その他にも患者検体の測定結果のトレーサビリティの情報が保存される機能を持った生化学免疫装置（シーメンス Atellica Solution）に更新した。令和3年（2021年）4月時点の臨床検査技師数は27名（新人1名とパート1名含む）

学術業績

日本医学検査学会（日本臨床衛生検査技師会主催）、日本臨床検査自動化学会（現 日本医療検査科学会）、日本超音波医学会、近畿臨床検査学会（現日臨技近畿支部医学検査学会）、大阪病院学会等での発表を行い、学会発表以外に各検査領域の資格取得を積極的に行っています（認定輸血検査技師、二級臨床検査士、緊急検査士、超音波検査士、糖尿病療養指導士、医療情報技師、日臨技認定技師資格制度、POCコーディネーター、NST専門療法士）。

業務実績統計

昭和32年(1957年)9月の検査物集計表（**図1**）と63年後の令和2年(2020年)9月の検査件数（**表1**）を表示。63年という時代の流れを感じます。

図1 昭和32年9月検査物集計表

表1 令和2年（2020年）9月検査件数

検査区分	検査依頼項目	件数
検体検査	全ての検体検査	7,165
	院内検査	6,909
	血液一般	5,928
	血液凝固	816
	生化学検査	6,301
	ＨｂＡ１ｃ	2,556
	免疫検査	2,286
	尿一般検査	3,276
	便潜血検査	853
微生検査	新型コロナウイルス検査	169
検査区分	**検査実施項目**	**件数**
微生検査	微生物迅速検査	201
	微生物塗抹鏡検	239
	微生物一般･抗酸菌塗抹	243
	微生物培養	510
	微生物感受性検査	194
	微生物その他検査	25
輸血検査	クロスマッチ（単位数）	204
	輸血実施単位数	192
生理検査	心臓超音波検査	207
	腹部超音波検査	201
	甲状腺超音波検査	34
	頸動脈超音波検査	7
	乳腺超音波検査	73
	表在超音波検査	21
	血管超音波検査	154
	心電図検査	681
	マスター心電図	9
	トレッドミル検査	3
	心肺運動負荷(CPX 検査)	0
	ホルター心電図	17
	動脈硬化検査（CAVI）	74
	肺機能検査（VC+FVC）	130
	皮膚灌流圧測定（SPP）	6
	運動神経伝導速度	3
	睡眠時無呼吸検査	4
	簡易睡眠時無呼吸検査	4
	標準純音聴力検査	35
	気道聴力検査	1
	簡易聴力検査（検診）	2
	ティンパノメトリー	25
	標準語音聴力検査	3

今後の展望

新病院移転で臨床検査科の検査体制が大きく変わった。すべての検査でシステムを導入、処理能力や精度を向上させた検査機器の更新が検査の迅速化に貢献した。採血や検査を集約することにより、業務効率もよくなった。移転後10年が経過し、今後は安定した検査結果体制を維持する為に検査機器の適時適切に更新する予定である。それとは別に臨床検査科を大きな変換点として新型コロナウイルス感染拡大である。早いタイミングでSARS-CoV-2抗原定量装置を導入し24時間365日対応とした。翌年にはPCR検査も稼動し同様に対応した。院内感染の対応や他施設のクラスターにも院内検査で対応し、コロナ対応するすべての部下たちに感謝の気持ちでいっぱいである。患者対応する採血室や生理検査はもちろん、すべての検査で感染対策の徹底を行った。これからも感染対策を継続していきます。

病院のある住之江区は高齢化と人口減少の傾向にある（全国的な傾向と同じ）。医療政策による患者の受診機会も減ると思われる。5年、10年先に臨床検査科も大きく変化することが求められるだろう。それに臨機応変に対応していきます。医師の働き方改革のひとつであるタスクシフト/シェアを推進していき、臨床検査科のスタッフのひとりではなく、南大阪病院のひとりのスタッフとして検査室内だけではなく、検査室の外での業務を広げるように努力していきたいと思います。

（文責　桑山 和哉）

臨床検査科

【診療支援部】栄養科

栄養科科長補佐
大出　佑美

栄養科科長補佐
野崎　幸

概要

＜スタッフ＞

2001年　科員6名、2016年　科員7名、
2018年　科員9名、2019年　科員7名、
2020年　科員8名、2021年　科員10名
（2021年：科長補佐2名、管理栄養士7名、栄養士1名）

＜認定資格＞

・日本糖尿病療養指導士……5名
・病態栄養専門管理栄養士……1名
・NST 専門療法士……1名
・臨床栄養代謝専門療法士……1名
　（摂食嚥下専門療法士）
・日本臨床栄養代謝学会認定
　教育施設臨床実施修練受講修了…3名

＜施設認定＞

2007年 2月　日本臨床栄養代謝学会
　　NST 稼働施設認定取得
2007年 9月　日本栄養療法推進協議会
　　NST 稼働施設認定取得
2010年 2月　日本臨床栄養代謝学会
　　栄養サポートチーム専門療法士
　　認定教育施設取得
2012年 7月　日本健康栄養システム学会
　　臨床栄養師研修施設認定取得

＜活動内容＞

【給食管理】

● 院内食事箋規約改定

2002年10月　食種の見直し、新食種の追加
2009年 9月　オパール食の追加
2015年 5月　やわらか食の新設
　　嚥下訓練食の見直し
2021年 2月　やわらか食の廃止
　　一般食の食塩相当量：8g 未満→7g 未満
　　たんぱく質割合の引き上げ

● 給食会社変更

2001年 7月　日清医療食品㈱→㈱南テスティパル
2005年 4月　㈱南テスティパル→㈱魚国総本社
2008年 1月　㈱魚国総本社→㈱日米クック
2009年 4月　㈱日米クック→イフスコヘルスケア㈱
2021年 4月　イフスコヘルスケア㈱→富士産業㈱

● 給食業務

2003年 9月　朝食でパン食・米飯・全粥から
　　選択メニューを導入
　　10月　毎週木・金曜日の昼食で
　　選択メニューを導入
2005年 4月　給食システム変更　東芝→㈱タス
2006年 4月　選択メニュー実施日数変更（9日/月）
2010年 4月　夕食配膳時間を18時以降へ変更
2010年 6月　選択メニュー実施日数変更（12日/月）
2011年12月　新病院へ移転、ブラストチラーと
　　真空包装機、電磁調理器の導入

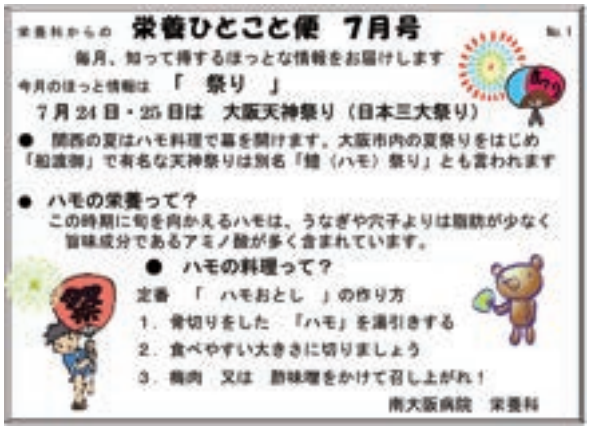
2012年 5月　一部クックチル導入開始
朝食で和食洋食選択制開始

【臨床栄養管理】

2006年 4月　診療報酬改定　栄養管理実施加算開始となり、栄養管理計画書作成開始
2012年 4月　診療報酬改定
栄養管理実施加算廃止に伴い、入院時栄養管理体制の見直し
2016年 4月　南大阪クリニック　透析センターにて栄養指導開始（2020年6月まで）
2018年 4月　診療報酬改定
栄養指導料　点数見直し
10月　減量手術チームへの参加開始
2020年 3月　外来透析室にて栄養指導開始

【その他】

2002年 4月　事務部門（栄養課）から診療支援部部門へ組織改編
2004年 8月　厨房天井・壁面ペンキ塗り
10月　厨房床補修工事
11月　厨房入り口パーテーション工事
2006年 4月　診療報酬改定
・入院時食事療養費Ⅰ
1日単位→1食単位へ変更により食数集計方法変更
・選択食加算、食事管理加算廃止
健康保険法等規定に基づき患者自己負担額も1食単位へ変更（260円/食）
2010年 9月　第22回　全国栄養改善大会・全国栄養士大会「優良特定給食施設」
厚生労働大臣賞受賞
2013年10月　新外来棟に栄養指導室の設置
2016年 4月　健康保険法等規定に基づき患者自己負担額変更（360円/食）
11月　大阪府知事表彰受賞
（食品衛生関係優良施設の集団給食の部）
2018年 4月　健康保険法等規定に基づき患者自己負担額変更（460円/食）


栄養科からの　栄養ひとこと便　7月号　No.1
毎月、知って得するほっとな情報をお届けします
今月のほっと情報は　「　祭り　」
7月24日・25日は　大阪天神祭り（日本三大祭り）
● 関西の夏はハモ料理で幕を開けます。大阪市内の夏祭りをはじめ「船渡御」で有名な天神祭りは別名「鱧（ハモ）祭り」とも言われます
● ハモの栄養って？
この時期に旬を向かえるハモは、うなぎや穴子よりは脂肪が少なく旨味成分であるアミノ酸が多く含まれています。
● ハモの料理って？
定番　「　ハモおとし　」の作り方
1．骨切りをした　「ハモ」を湯引きする
2．食べやすい大きさに切りましょう
3．椀物　又は　酢味噌をかけて召し上がれ！
南大阪病院　栄養科

- 大阪市　食品衛生関係施設優秀標　受贈（2020年まで）
- 2004年7月　ひとこと便発行開始
（2021年5月時点　No.203まで発行）
- 2016年12月 糖尿病患者のためのおせち料理バイキング開催（年1回、2019年12月まで）

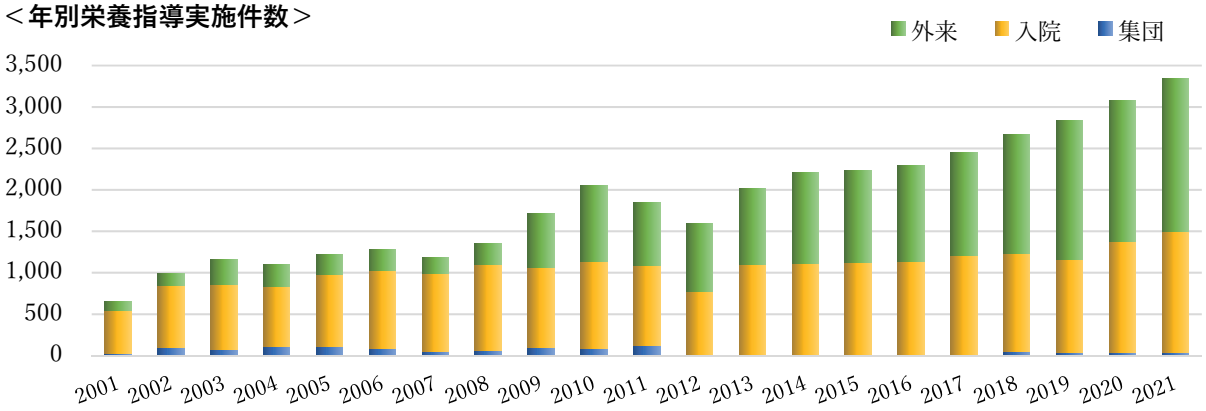
【NST】

2003年12月　NST稼働準備のため、院内勉強会開催開始
（2004年3月までに計6回開催）
2005年 2月　病院長承認のもと、NST委員会発足
7月　外科病棟と主治医からの依頼患者に対しNST回診開始
10月　診療部会にて院長よりNST活動が承認
2006年 1月　整形外科病棟に対してNST回診開始
7月　NST特別講演開催
（講師：若草第一病院 外科部長 山中英治先生）
2007年 4月　全科型NST回診開始
2008年11月　病院ホームページにNSTコーナーを新設
2010年 5月　NST実地修練　受入れ開始
2012年 4月　NST加算算定開始
11月　NST介入方法を医師依頼型からリスク抽出型へ変更
2015年 3月　NST稼働10周年を記念し、10周年記念誌を発刊
NST10周年記念講演会開催
（講師：若草第一病院 院長 山中英治先生）

2016年 3月　NST 研修会開催
（講師：済生会中津病院
NST 専従看護師　山廣芳枝先生）
12月　胃瘻管理マニュアル完成
2017年 3月　NST 研修会開催
（講師:わかくさ竜間リハビリテーション
病院　歯科医師　糸田昌隆先生）
2018年 1月　体組成分析装置：InBody S10を購入
3月　NST 研修会開催
（講師：みどりケ丘病院
リハビリテーション科医師　森脇美早先生）
8月　リフト式体重計を購入
2019年 2月　NST 研修会開催
（講師：蘇生会総合病院
副院長・外科部長　土師誠二先生）

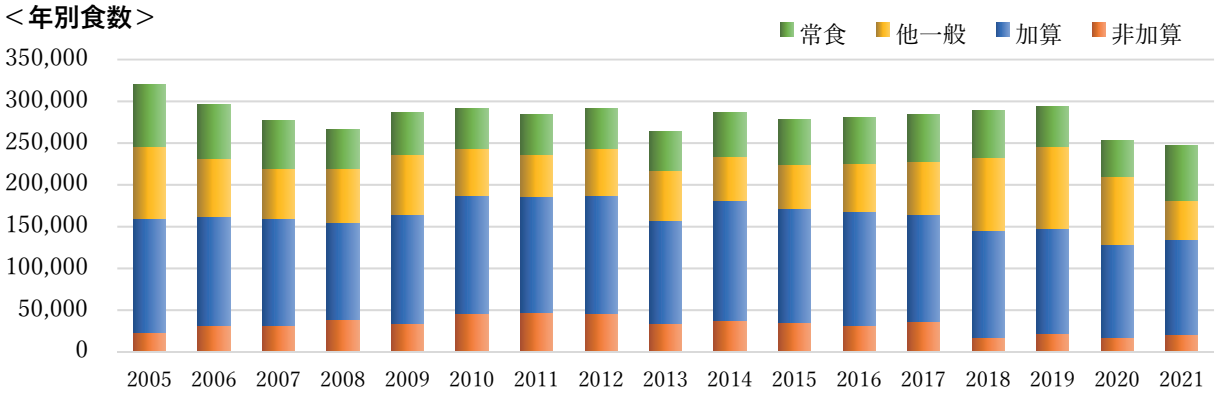
主要統計

＜年別栄養指導実施件数＞



	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
外来	100	142	304	273	239	252	195	254	653	910	761	813	913	1,100	1,104	1,164	1,237	1,444	1,685	1,709	1,844
入院	519	756	784	725	869	942	939	1,040	970	1,057	966	758	1,093	1,090	1,113	1,116	1,206	1,184	1,119	1,336	1,462
集団	29	95	74	106	108	86	49	61	93	85	124	19	8	18	16	20	8	43	38	38	36

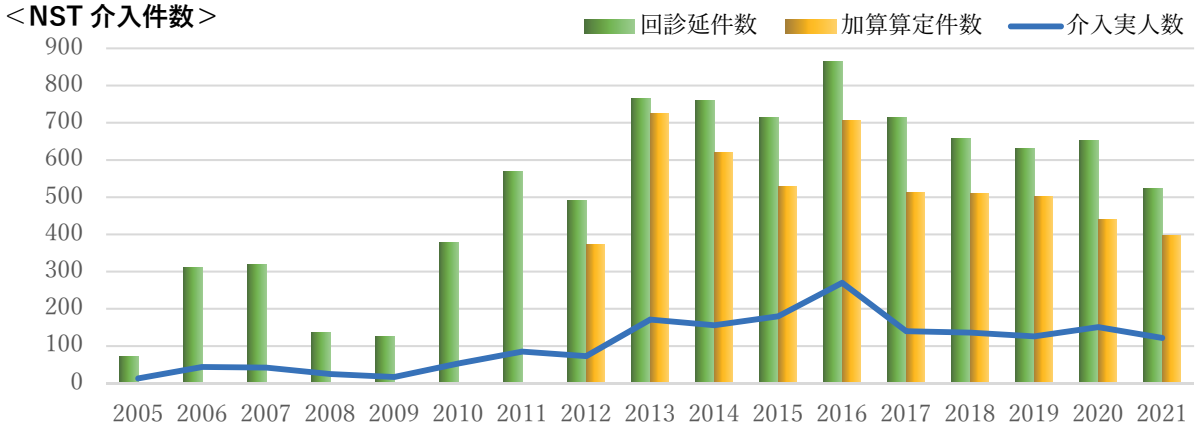
＜年別食数＞



	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
常食	73,810	64,076	56,928	46,130	49,707	47,911	47,918	47,911	45,762	52,533	54,240	54,802	55,868	56,545	47,826	43,573	65,368
他一般	86,020	69,649	59,447	65,266	71,914	56,091	50,498	56,091	60,288	53,493	52,962	57,359	63,902	87,187	98,856	81,657	46,777
加算	137,653	129,863	128,193	115,415	131,265	140,300	138,213	140,300	123,517	143,106	136,693	136,419	127,906	127,920	125,439	110,544	113,961
非加算	22,678	32,226	32,159	39,049	33,691	46,633	47,754	46,633	33,996	37,948	34,750	31,975	36,441	17,786	21,818	17,734	20,959

【NST 関連実績】

＜NST 介入件数＞



	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
回診延件数	71	312	320	137	126	377	570	490	765	760	715	866	714	657	631	652	524
加算算定件数	0	0	0	0	0	0	0	374	725	620	530	706	513	510	503	441	396
介入実人数	13	44	42	25	17	53	85	73	171	156	180	270	140	136	126	151	122

＜NST 実地修練受入れ実績＞　　※（　）内は院内スタッフ受講人数

	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
受講人数	7 (5)	4 (0)	9 (2)	11 (1)	11 (2)	14 (2)	14 (3)	16 (2)	9 (0)	12 (1)	0 (0)	4 (2)

学術業績

『病態栄養レシピコンテスト』糖尿食部門　優秀賞
第17回日本病態栄養学会年次学術集会
2014.1.11.大阪

『病院給食における患者満足度に関わる要因の検討』
仲谷鈴代記念賞受賞
萱原璃緒
第22回大阪府栄養士会研究発表会
2018.3.10.大阪

今後の展望

この20年間で栄養に関する状況は大きく変化してきています。食事摂取基準では、日本人の栄養所要量から日本人の食事摂取基準へとその概念を全面的に取り入れた名称への変更となり、2020年の改定では食塩摂取量の引き下げやたんぱく質の割合の引き上げ等、病態にも配慮した記載となってきています。

ここ数年は食材料費の高騰が続いており、また新型コロナウイルス感染症の拡大により入院食数の変動も大きく、給食経営としては厳しい状況となっていますが、給食委託会社と協力の上、使用食材や献立などの見直しを行いながら、安全で質を維持した食事提供を継続できるよう努めています。

診療報酬改定により、栄養指導・栄養管理の対象が拡大してきており、栄養指導件数は年々増加傾向にあります。またチーム医療への参画も増えてきており、科員の増加もあってより多くの患者への介入が必要であると感じています。必要な患者により適切な栄養管理を提案できるよう、個々人の資質を高め、多職種とより一層の連携を図り、患者の病態改善に寄与してまいります。

文責：大出 佑美、野崎　幸

栄養科

富士産業株式会社

臨床工学科

臨床工学科科長
血液浄化センター
事務長
野口　浩一

臨床工学技士の成り立ち

昨今の医療現場において高精度な医療機器の導入は不可欠であり、既存の医療機器も含め不適切な使用方法や整備不良機器の使用は重大な医療事故につながる。

医療事故を防止し国民に対し安全な治療を行うことを目的に、臨床工学技士法が1987年6月に成立、翌年4月に施行され、1988年12月9日に厚生労働大臣の免許を受ける第1回国家試験により2760名の臨床工学技士が初めて誕生した。

その後、日本各地に臨床工学技士養成学校（大学・専門学校）が設立され、医療機器に関する学会が設立し認定資格制度開始、全国の医療施設において「MEセンター」や「医療機器管理室」などの名称の医療機器管理専任部署の設置が広まった。

臨床工学科設立（1992年4月）

当時、南大阪病院に在職中の特例期間に臨床工学技士国家資格を取得したスタッフにより医療機器管理専任業務が開始され、1992年4月岩橋雅延らの尽力により「診療支援部 臨床工学科」が設立され旧病院管理棟4階にMEセンターを開設した。

MEセンターの業務内容は医療器管理に限らず「人工心肺補助」「急性血液浄化」「心臓カテーテル補助業務」など医療現場で求められるあらゆる操作や補助業務などの要望に対し、当時少数の科員数ながら献身的に実施され、現在の臨床工学科業務の基礎となり医療技術の向上と安全に大きく貢献された。

「医療機器安全管理責任者」の設置（2007年4月）

第五次改正医療法に新たに「医療機器安全管理責任者」設置が定められ、(1) 医療機器の安全使用のための責任者　(2) 従事者に対する医療機器の安全使用のための研修の実施　(3) 医療機器の保守点検に関する計画の策定及び保守点検の適切な実施　(4) 医療機器の安全使用のために必要となる情報の収集　その他医療機器の安全確保を目的とした改善のために必要となる方策の実施が求められ、岩橋雅延が初代医療機器安全管理責任者を就任し、2021年より橋本佳典科長補佐が歴任し、現在も ME センターの運営ならびに景岳会関連施設の医療安全に貢献している。

透析部門の設置（2008年1月）

野口浩一が赴任し「透析室（旧病院管理棟3階）」へ専任臨床工学技士4名を配置し「血液浄化部門」として運営開始。南大阪クリニック透析センター開設計画に参加し建設図面作成ならびに運営実務に至るまで、その後の外来透析室開設・血液浄化センター設立までつながる維持透析関係事業に向けての計画・準備を開始した。

診療支援部より独立（2009年4月）

維持透析事業やその後に拡大し部門化する臨床工学技士参加業務の拡大に備え、大幅な科員の増員が必要となる。臨床工学科独自の運営判断と実行の必要のため、臨床工学科は診療支援部より独立することになり、臨床工学科科長に野口浩一が就任した。

南大阪クリニック透析センター開設（2009年12月）

景岳会の外来維持透析の拠点として南大阪クリニック透析センターが大阪市西成区南津守7丁目14番32に開設した。

野口浩一臨床工学科科長が同施設の事務長を兼務し、七野裕美をリーダーとする7名の臨床工学技士を配置し、南大阪病院外来透析室および10階透析治療室（入院専用）との連携を図り透析センターの運営に参加している。

手術室部門の設置（2011年4月）

「手術室部門」を設置し、磯貝貴文をはじめ現在は5名専任の臨床工学技士の配置し、それまでの手術室配備医療機器の管理に加え術中治療機器の操作、間接介助、清潔介助、HCU 業務を行っている。

日常的に医療機器の点検を術前、術中、術後を臨床工学技士がすることで手術における重大な事故がなく安全性の向上に貢献している。

また、術中治療機器の操作、間接介助、清潔介助も術前準備から治療に参加することで臨床工学技士の目線から医療技術や安全性向上に貢献している。

内視鏡部門の設置（2014年4月）

橋本佳典の担当により「内視鏡部門」を設置し、現在は岡本誠一をはじめ4名の専任の臨床工学技士を配置。

内視鏡室では年間約10,000件の内視鏡診療を行っており、主に臨床工学技士は上部・下部内視鏡検査や治療の介助を担当している。また、食道・胃・大腸での早期癌に対して ESD 治療(内視鏡的粘膜下層剥離術)を行う際は、臨床工学技士が準備から治療の介助までを一貫して管理する事で医療技術や安全性向上に貢献している。

2021年1月からは ERCP(内視鏡的逆行性胆管膵管造影検査)に介入し、使用デバイスの管理や治療が円滑に進むようサポートを行っている。

外来透析室の開設（2019年10月）

外来棟4階に「外来透析室：30床」が開設され、これまで入院および急性期血液浄化のみであった透析部門において、外来維持透析を新たに担当することになった。

従来の南大阪クリニック透析センター配属の透析部門臨床工学技士と連携し、羽田野亜弓をはじめ3名の技士をローテンションにより定数配置を開始。

「外来透析室」～「透析センター」の透析技術および維持透析に関する業務および患者情報の共有など情報連携など、血液浄化センターの運営に重要な業務を担う部門となる。

心・血管カテーテル治療部門の設置（2020年4月）

「心・血管カテーテル治療部門」を設置。専任臨床工学技士を配置し、西田絵実をリーダーとする計4名を専任配置とした。従来の心臓カテーテル業務や下肢 PTA に加え、清潔分野での介助、ペースメーカ植込み術や交換、ペースメーカ外来、維持透析治療に必要なブラッドアクセス管理にかかわるシャント拡張術（PTA）等、業務を拡大した。

血液浄化センター開設（2021年8月）

景岳会における外来透析維持透析事業促進を目的とし「南大阪病院 外来透析室」および「南大阪クリニック透析センター」を統括管理し、患者サービスの向上および維持透析関連事業の拡大と安定的運営を目的とした「血液浄化センター」を開設し、血液浄化センター長に久米田副院長、野口浩一科長が血液浄化センター事務長の兼務となった。

スタッフ

臨床工学科職員名簿　29名（2022年6月現在）

野口浩一　(2009年入職)　　科長　兼　血液浄化センター事務長
橋本佳典　(2014年入職)　　科長補佐（医療機器安全管理責任者）
磯貝貴文　(2007年入職)　　科長補佐（手術室担当）
岡本誠一　(2010年入職)　　主任　　（内視鏡部門担当）

＜ME 部門＞

岩橋雅延　(1984年入職)

＜透析部門＞

羽田野亜弓(2007年入職)　七野裕美　(2009年入職)　長野万純　(2015年入職)　上田大地　(2018年入職)
松田直樹　(2020年入職)　川崎修平　(2020年入職)　釜谷未来　(2021年入職)　村上咲彩　(2021年入職)
小林雄一　(2022年入職)　村山卓　(2022年入職)　松永みずほ(2022年入職)　坂上恭司　(2022年入職)
曽佳荷　(2020年入職)

＜手術室部門＞

渡辺将史　(2011年入職)　岩本孝史　(2021年入職)　柴田隆博　(2021年入職)　大島祐輝　(2022年入職)

＜内視鏡部門＞

土肥原悠介(2018 年入職)　丸山智之　(2019 年入職)　辻野健二　(2022 年入職)

＜心・血管カテーテル部門＞

西田絵実　(2010年入職)　滝本将大　(2021年入職)　田中祐樹　(2019年入職)　原口孝幸　(2022年入職)

【医療情報部】システム管理課

概要

医療情報部システム管理課は、新病院建設の際に、電子カルテ導入を主な目的とし医事課コンピュータ室から独立し誕生しました。

電子カルテ導入時は7名でスタートし、現在は4名のスタッフが所属しています。

電子カルテはすべての職種が利用するシステムであるため、部署間を超え横断的に活動しています。

＜スタッフ＞

課長：堀部　昌司
主任：中村　勝利、　山口　恵美
課員：中村　洋平

今後の展望

日々の業務の中で医師やスタッフが円滑に電子カルテを使用できるよう、より安全で快適なシステム環境を提供していきたいと考えています。

また、IT技術の進化に伴い各スタッフのスキルアップや、昨今の医療機関へのサイバー攻撃の増加に対応すべく情報セキュリティの強化へも取り組んでいきたいと考えています。

業務内容

業務内容としては主に院内のシステム管理を行っており、電子カルテの導入・管理・保守・運用、各部門システムの導入・管理、サーバー・端末・モニタ・ネットワークなど情報機器の管理、情報セキュリティ管理、ホームページの管理、利用者支援等に取り組んでいます。電子カルテや各部門システムとの連携不具合や障害などにも対応し、各部門と協力し取り組んでいます。また、各部署の業務支援、データ管理や公的機関へのデータ提出等も行っています。具体的には、主要な会議の運営、各部署の業務改善効率化のサポート、診察や検査、事務作業等、現場から得られる膨大なデータを収集・管理するなど病院全般に係る幅広い業務に関わっています。

また同法人内の南大阪病院付属リハビリテーションクリニックや南大阪クリニック透析センターのシステム管理も行っています。令和２年には南大阪ハッピーセンター、南大阪訪問看護ステーション、南大阪ヘルパーステーションに介護システムを導入しました。診療報酬の改定に踏まえ、介護報酬の改定にも対応しています。

【医療情報部】診療情報管理課

診療情報管理課主任

山本　一美

概要

＜スタッフ＞

主任：山本　一美

四病院団体協議会認定　診療情報管理士
・DPCコース修了
・医師事務作業補助者コース修了
国立がん研究センター認定　院内がん登録
中級認定者
日本医師会認定　医療安全推進者
日本外傷診療研究機構認定　AISコーディングコース修了

主任：田邉　貴広　　事務

課員：泉　　美紀　　事務

診療情報管理課のこれまでのあゆみ

当課が活動を開始したのは**2002年5月**頃であった。宮越名誉院長のご指示により第一回の病歴管理準備委員会を2002年5月14日に開催し、診療情報管理室の設置、入院診療録と外来診療録の分離、診療録記載の標準化に向けた取り組み、全科統一された退院サマリー様式の作成、退院診療録の一元管理、診療情報管理士による病名のICDコーディング等、診療録にまつわることについて議論を重ねた。院内で運用している全ての文書を収集し、入院診療録にファイルするものについてチェックした。そのような経緯を経て、**2003年1月1日**、院長直轄部署で診療情報管理を開始し、**同年10月**より診療録管理体制加算が算定可能となった。**同年10月8日**には日本病院機能評価を受審した。

2005年5月、当院の2003年の活動状況を集約した年報を手作りで創刊する運びとなった。初めての作成で、当時は色々と苦労したが、とても良い経験となった。

2008年、事務部所属となったが、**2010年**病院機能評価更新受審の際、位置づけが不適切との指摘を受け、医療情報部　病歴管理課へ組織変更された。

2013年2月、医療情報部　診療情報管理課へ名称変更された。

現在、診療情報管理課のスタッフは、診療情報管理士1名を含む3名体制で業務を行っている。診療情報の管理を専門的に行う診療情報管理士を中心に記録の点検等の業務を行い、診療情報の開示や疾病統計、死因統計、がん患者統計などの各種統計資料を作成するとともに、それらを活用し、医療の質向上に努めている。

診療情報の開示請求も増加傾向で、電子カルテシステム導入後の開示業務は、紙媒体の開示とは違った対応が必要となり、出力された文書の確認には手間と時間を要する。診療情報は、患者さまにとって大切な情報であり、また病院および医療従事者にとっても医療の質向上と安全確保のため、貴重な財産である。安全かつ正確な運用・管理を行い、情報を必要とする時には迅速に提供できるよう努めている。

2012年に電子カルテを導入。電子カルテ導入以前の紙媒体の入院診療録は適切に保管管理しており、患者さまの継続的な診療や医学研究・教育のために各部署からの要請に応じて迅速に対応できるよう体制を整えている。

2014年4月からは厚生労働省が定める施設基準に適合した、診療録管理体制加算1を算定している。

また診療情報管理業務のほか、大阪府がん診療拠点病院の認定に伴い、**2012年**より院内がん登録を開始した。**2016年**には、がん登録等の推進に関する法律（がん登録法）が施行され、がん登録は義務化された。

院内がん登録数は年々増加しており、2020年診断症例は868件であった。院内がん登録を行うこと

で、当院でのがん診療の実態把握と、国のがん対策や大阪府の医療計画に寄与している。都道府県がん診療連携拠点病院連絡協議会・がん登録部会（国立がん研究センター）と大阪府の院内がん登録を活用したQI（医療の質）研究にも参加している。

院内がん登録業務は、電子カルテ等に蓄積された情報に基づき、国立がん研究センターの院内がん登録実務中級認定者研修を修了した診療情報管理士が登録を行っている。登録には、がんの種類、進行度、治療内容など詳細かつ正確にデータ収集する必要があるため専門的な知識が必要となる。実務者は国立がん研究センターの継続研修やセミナー等を受講し、スキル向上およびがん診療拠点病院要件の認定資格維持に努めている。

がん登録QI研究（院内がん登録とDPCを使ったQI研究）において、DPCコーディング精度の問題が浮き彫りになったことが契機となり、2020年5月よりDPCコーディング監査を開始した。

当課を取り巻く環境の変化に伴い、業務は増加の一途である。

年月	主な出来事
2001 年 11 月	四病院団体協議会認定　診療情報管理士取得（山本）
2002 年　5 月	第 1 回病歴管理委員会開催
2002 年　9 月	病歴管理室設置　　退院時要約を各科独自の様式で作成運用 医局会などで退院時要約完成状況を報告 診療情報管理士（山本）による退院時要約の管理を開始
2002 年 10 月	病歴管理室より診療情報管理室へ名称変更
2003 年　1 月	院長直轄部署で診療情報管理開始（現　宮越名誉院長）
2003 年　8 月	診療情報管理システム導入（富士通エフアイピー製）
2003 年 10 月	診療録管理体制加算取得
2003 年 10 月	日本病院機能評価受審（初回）
2004 年　7 月	臨床試験施設データマネージャー養成講座課程修了　（山本）
2005 年　1 月	日本医師会認定　医療安全推進者取得　（山本）
2005 年　5 月	年報初回創刊　（2003 年のまとめ）
2008 年	事務部　医療情報課　診療情報管理係　へ組織変更
2009 年 11 月	日本医療情報学会　医療情報基礎知識推奨水準到達認定　（山本）
2010 年　3 月	日本病院会　診療情報管理士通信教育　DPC コース修了　（山本）
2010 年　3 月	病院機能評価 更新受審
2010 年	地域がん登録を診療情報管理士主導で開始　（医師の負担軽減目的）
2010 年	医療情報部　病歴管理課　へ組織変更 （2010 年 3 月病院機能評価機構より、位置づけが“事務部”では不適切との指摘を受け、 事務部医療情報課診療情報管理係より医療情報部　病歴管理課へ組織変更）
2010 年 12 月	国立がん研究センター認定　院内がん登録　初級実務者認定　（山本）
2011 年　4 月	大阪府がん診療拠点病院認定
2012 年　1 月	電子カルテシステム導入（SSI）
2012 年　1 月	院内がん登録開始
2012 年　3 月	日本病院会　診療情報管理士通信教育　　医師事務作業補助者コース修了　（山本）
2012 年 10 月	院内がん登録システム導入　（大阪府推奨システム　CCHospital）
2012 年 10 月	日本外傷診療研究機構認定　AIS コーディングコース修了　（山本）

年月	主な出来事
2012 年	大阪府がん診療拠点病院　がん登録・情報提供部会　活動開始
2013 年　2 月	医療情報部　診療情報管理課　へ組織変更
2014 年　4 月	診療録管理体制加算 1　届出取得
2014 年 12 月	国立がん研究センター認定　院内がん登録　中級実務者認定　（山本）
2015 年　2 月	病院機能評価更新　受審
2015 年 10 月	院内がん登録システム更新 （大阪府推奨システム　CCHospital の終了に伴い　富士通エフアイピー製に移行）
2016 年　1 月	がん登録等の推進に関する法律（がん登録法）施行
2016 年	がん登録 QI 研究　都道府県がん診療連携拠点病院連絡協議会・がん登録部会　参加 「院内がん登録と DPC を使った QI 研究」
2017 年	大阪市がん診療ネットワーク協議会　がん登録部会活動開始
2017 年	大阪がん診療実態調査事業　大阪府がん診療連携協議会　がん登録・情報提供部会 QI 研究参加　「大阪府のがん診療拠点病院におけるがん医療の現状把握」
2018 年　1 月	国立がん研究センター認定　院内がん登録　中級実務者更新　（山本）
2018 年　9 月	院内がん登録　予後調査開始
2019 年　2 月	全国がん登録実務者研修会開催　大阪市内医療機関対象に講師サポート （大阪市立大学医学部附属病院）
2019 年　9 月	日本病院会　医師事務作業補助者コース受講　（田邉）
2020 年　2 月	病院機能評価 更新受審
2020 年　5 月	ＤＰＣコーディングチェック開始　ＩＣＤコーディング妥当性の検証 （がん登録ＱＩ研究において、ＤＰＣコーディング精度の問題が浮き彫りとなったことが契機となり監査開始）
2020 年　8 月	厚生労働科学研究　参加 「わが国におけるＩＣＤ-11 コーディング導入に関する問題点の抽出と解決及び先進国における疾病統計に係る情報分析」
2020 年 11 月	国立がん研究センター認定　院内がん登録　中級実務者更新　（山本）
2021 年	国際診療情報管理士・レセプト管理士　取得準備 大学院　医療福祉マネジメント研究　医療情報学受験準備　（山本） 院内がん登録初級実務者　取得準備　（泉） 医師事務作業補助 実務研修中　（田邉）

飛田会長へ学会発表報告（山本）

診療情報管理の導入　宮越名誉院長

業務内容

診療情報管理業務

- 入院診療録数　104,801冊保管
- 入院診療録の整理、保管管理(原本文書含む)
- 入院診療録の監査、不備項目の完成依頼
- 入院診療録貸出、閲覧、返却管理
- 国際疾病分類（ICD-10)、手術処置の分類（ICD-9-CM）によるコーディング
- 退院患者情報のデータベース作成・管理
- DPCコーディング監査
- スキャン業務
- 退院患者統計作成、情報提供
- 診療情報開示に関わる事務業務
- 院外情報提供
- 診療録監査に関わる事務業務
- 診療情報管理システム管理

がん登録業務

- 院内がん登録
- 全国がん登録、全国集計へのデータ提出
- 予後調査、大阪府がん登録届出・補充調査
- 大阪府がん診療連携協議会 がん登録・情報提供部会委員
- 大阪市がん診療ネットワーク協議会　がん登録部会委員
- がん登録部会QI（医療の質）研究、大阪がん診療実態調査事業参加
- 院内がん登録システム管理

委員会他

- 診療情報管理委員会（事務局）
- がん診療連携調整会議
- DPC管理委員会
- 電子文書管理委員会

業績・主要統計

2021年　主要業務内容

退院サマリー点検 （患者ファイル、サマリー登録更新リスト等）	19,962 件
退院サマリー・検閲督促	13,540 件
電子カルテ点検（診療録・手術記録・入退院情報等、記載不備督促）	782 件
診療情報管理システム登録 （入退院履歴、サマリー情報他）	6,176 件
DPC コーディング監査	8,071 件
全国集計（国立がん研究センター）	868 件
全国がん登録・遡り調査（大阪府）	869 件
がん登録候補抽出	14,930 件
予後調査	7,100 件
診療記録開示	38 件
開示等、カルテ印刷作業	3,869 枚
診療情報等の調査、資料作成、データ提供	64 件
入院患者ファイル整理 （原本文書仕分け作業）	53,660 枚
スキャナ取込（入院患者文書）	15,185 枚
紙媒体診療録利用対応	21 件

その他

- 退院サマリー完成率、検閲率調査
- 入院診療録医師同僚監査、多職種監査の状況調査
- 監査結果の管理システム構築（診療情報管理システム）
- 大阪府がん診療拠点病院　指定更新対応
- 大阪府がん登録連絡協議会、大阪市がん診療ネットワーク協議会委員活動
- ホームページ更新（院内がん登録実績まとめ）
- がん登録部会QI研究、大阪がん診療実態調査事業参加
- ICD-11勉強会（厚生労働科学研究）

学術業績

【学会発表】

- 当院の院内がん登録への取り組み

  山本一美
  社会医療法人景岳会　南大阪病院　医療情報部　診療情報管理課
  第39回　日本診療情報管理学会学術大会　2013年9月5日　茨城

- 院内がん登録データからみた当院の特徴

  山本一美[1)]，泉美紀[1)]，田邉貴広[1)]，又江順一[2)]，土井淳[2)]，古川尚暉[2)]
  [1)]社会医療法人景岳会　南大阪病院　医療情報部　診療情報管理課
  [2)]富士通エフ・アイ・ピー九州株式会社（QFI）
  第43回　日本診療情報管理学会学術大会　2017年9月21日　北海道

- 院内がん登録データと電子カルテを用いた疾病調査～がんと糖尿病～

  山本一美[1)]，泉美紀[1)]，田邉貴広[1)]，久米田靖郎[2)]，又江順一[3)]
  [1)]社会医療法人景岳会　南大阪病院　医療情報部　診療情報管理課
  [2)]社会医療法人景岳会　南大阪病院　副院長
  [3)]富士通エフ・アイ・ピー九州株式会社（QFI）
  第45回　日本診療情報管理学会学術大会　2019年9月20日　大阪

- 診療録監査～電子カルテを活用した監査の仕組みの構築～

  山本一美[1)]，泉美紀[1)]，田邉貴広[1)]，久米田靖郎[2)]，　宮越一穂[3)]，又江順一[4)]
  [1)]社会医療法人景岳会　南大阪病院　医療情報部　診療情報管理課
  [2)]社会医療法人景岳会　南大阪病院　副院長
  [3)]社会医療法人景岳会　南大阪病院　名誉院長
  [4)]富士通Japanソリューションズ九州株式会社（QFI）
  第47回　日本診療情報管理学会学術大会　2021年10月7日　愛知Web

【研究】

【山本　一美】

- 院内がん登録と DPC を使った QI 研究

  2016年度　がん登録 QI 研究　都道府県がん診療連携拠点病院連絡協議会・がん登録部会
  ※2016年度以降、毎年参加

- 大阪府のがん診療拠点病院におけるがん医療の現状把握

  2017年度　大阪がん診療実態調査事業　大阪府がん診療連携協議会　がん登録・情報提供部会
  ※2017年度以降、毎年参加

- 大腸癌 cStage に対する治療の選択状況

  2020年度　大阪市がん診療ネットワーク協議会
  がん登録部会参加

- わが国における ICD-11コーディング導入に関する問題点の抽出と解決及び先進国における疾病統計に係る情報分析

  2021年度　厚生労働科学研究参加
  （日本診療情報管理学会）

- コロナ禍におけるがん医療への影響

  2021年度　大阪市がん診療ネットワーク協議会
  がん登録部会参加

学会研究会・院外活動

2021年　活動内容

日本診療情報管理学会　学術大会、生涯教育研修会
日本診療情報管理士会　全国研修会、地域ミーティング
近畿病歴管理セミナー
院内がん登録中級認定者研修会
大阪府がん登録連絡協議会　がん登録情報部会
大阪市がん診療ネットワーク協議会　がん登録部会
大阪府院内がん登録実務者研修会
大阪市三島医療圏がん登録部会 実務者研修会
兵庫県診療情報管理研究会
川崎医療福祉大学　医療情報セミナー
長野県がん登録研修会
DPC 研究班セミナー
医療経営セミナー
病院中堅職員育成研修　医事管理コース

今後の展望

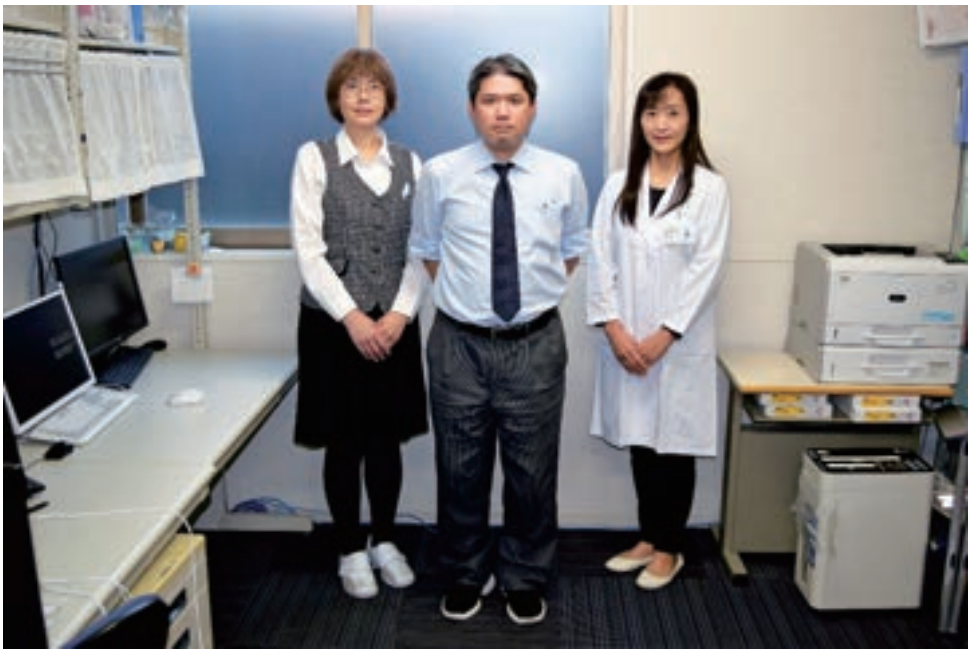
2020年後半よりDPCコーディング監査に注力しており、今年もDPCにおけるデータ精度向上や診療記録の精度向上に努め、不適切コーディングの指摘、診療報酬の適正化により経営改善に繋げることができた。

診療情報管理学会等においてICD-11コーディング導入に関する研究が進められており、円滑導入するためにはどうするべきか理解を深める必要がある。

業務は増える一方だが、診療情報管理士の有資格者不足や規定人数以下のマンパワー不足は改善されておらず、スキャン業務の負担も軽減していないことは、病院機能評価でも指摘を受け続けている。

多岐に渡る業務の中で、診療情報管理の一環として適正なDPCコーディング監査を行い、ICD-11に関する研究、国が要求する予後調査を優先して進め、本来業務に注力し、現状のマンパワーで最大限の取組みを進めていく。

文責　山本 一美



診療情報管理課

【地域医療部】医療福祉相談室

概要

＜スタッフ＞　社会福祉士　６名

＜業務内容＞

療養中に生じる経済的・心理的・社会的問題の解決、調整に必要な援助を行い、社会復帰へ向けての支援を行う。

また、がん相談支援センターを併設し、がんにまつわる様々な相談に対応している。

変遷

2007年、既存の医療社会事業科が地域医療推進室に統合され、社会福祉士３名、事務員4名体制となった。

2008年4月より医療ソーシャルワーカー（MSW）の急性期病棟担当制を導入した。

2009年3月、療養型病床を亜急性期病床へ転換した。準備委員会のメンバーとして参加し、病棟運用のマニュアルの作成に従事した。

同年10月には地域医療部が新設され、主に前方支援は地域医療推進室が担当し、医療福祉相談や後方支援については医療福祉相談室が担当する体制となった。

2011年4月、当院が大阪府がん診療拠点病院の指定を受けたことにより、がん相談支援センターの業務も行うこととなった。

2012年、病院の第二期工事で外来棟建設中は地域医療部が旧館の一部に移転した。

2013年10月、外来棟の完成に伴い、地域医療部が新病院3階に移転した。

2014年1月より5階病棟の運用を開始し、3月1日より亜急性期病棟として認可を受け、8月1日からは地域包括ケア病棟へ転換した。

2015年、がん相談支援センターへ法人本部所属の保健師1名の協力体制が整い、6月より乳がん患者サロンを開始した。乳がん患者サロンでは医師等医療従事者による講演やアピアランスケア、レクレーション、外部の患者会とのつながりづくりなどを行った。

2016年、前年に開始した乳がん患者サロンは2月より、「輝く会」と名称を定め、月1回のペースで開催した。

また**同年5月**より、退院支援加算2（入院時より計画を立てて退院支援を行った場合退院時に190点を算定）の算定を開始した。

2018年7月に入退院支援加算1（2病棟に1人の看護師または社会福祉士を配置し、入院時より計画を立てて退院支援を行った場合退院時に600点を算定）の施設基準を取得し、算定を開始した。

2020年2月以降、新型コロナウィルス感染防止対策のため、乳がん患者サロン「輝く会」は現在まで中止している。

今後の展望

相談件数の推移は主にMSWの人員数に左右されてきたが、2020年は新型コロナウィルス感染症の影響による低迷と考えられる。

がん相談支援センターの乳がん患者サロン「輝く会」の活動も中止となっているが、新型コロナウィルスの感染状況も踏まえて再開へ向けた準備を進めなければならない時期を迎えている。

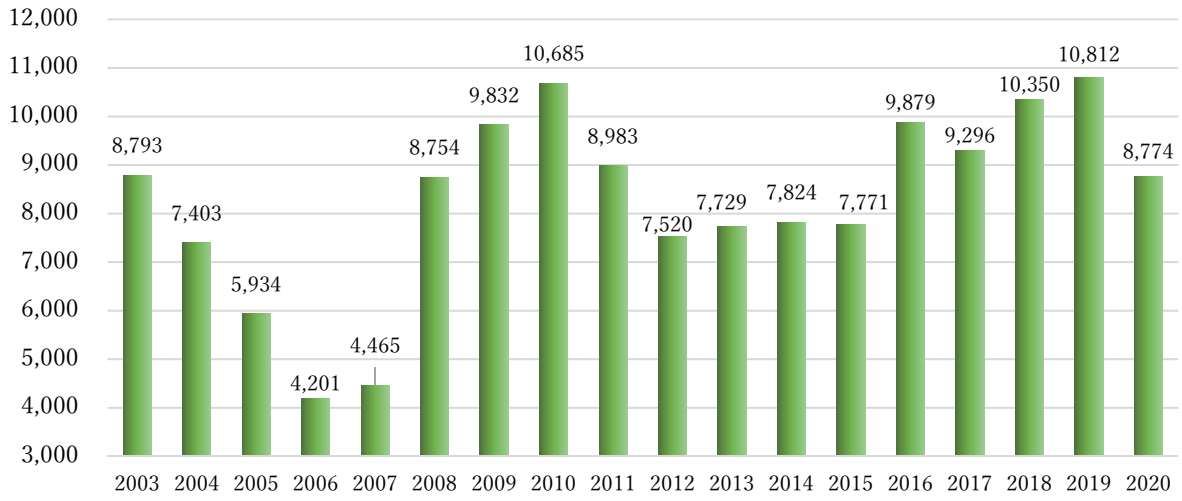
コロナ禍においてMSWの研修会もリモートを中心とした形態に変化を余儀なくされたが、だからこそ現在よりもより積極的に多方面の研修に参加し、スキルアップに努める機会としたい。

また今後に向けた重大な課題はスタッフの確保である。近年MSWの担い手となる学生の減少傾向がみられ、各医療機関も新入職者の確保に苦慮する事態となっている。

当院でもその打開策の一環として昨年より社会福祉士の相談援助実習の受け入れに取り組んでいる。MSWとして自らの学びの積み重ねと同時に後進の育成が求められる時代でもある。

主要統計

年別相談件数の推移



医療福祉相談室

【地域医療部】地域医療推進室

概要

＜スタッフ＞　事務職員　4名　看護師　1名

＜業務内容＞

他の医療機関から紹介を受けてお越しになる患者様に、診察や入院等スムーズに医療をお受けいただくための窓口である。

他の医療機関からご紹介のある患者様について、診療や検査等の事前予約を行い、様々なお問い合わせに対しての連絡・調整、症例検討会・勉強会の開催を行っている。

変遷

医療の連携を一層推進する為、1999年6月に地域医療推進室が開設された。

開設当初は2名の事務員が配置され、地域の医療機関との連携を基に、地域住民に良質な医療を提供することを目的に開放型病院の施設認定取得を計画し、1999年9月より認可を受け運用を開始した。

2001年より事務員1名を増員し充実した患者サービスや各医療機関からの紹介患者数の増加を図るため、副院長が室長を兼任した。また、地域の医療機関への訪問活動を充実させる為、さらに事務員2名が増員された。

2005年より、地域医療推進室は院長直轄の部署となり、構成メンバーも一部事務員の退職、交代に加え、看護師並びにMSW（医療ソーシャルワーカー）を配置した。今後の地域医療の在り方として、他の医療機関からの受診依頼や検査依頼といった、いわゆる前方支援から、紹介いただいた医療機関のニーズに応えながらスムーズに逆紹介を行う後方支援が重要視される時代となり、その意味からも専門職を配置した。地域医療推進室の今後を模索していた時期であった。

2006年より、前年度、新たに看護師並びにMSWを配置し連携強化を試みるも、MSWの退職に続き看護師の異動で元の構成メンバーでの運用となる。

2007年より、地域医療推進室は、医療社会事業科と統合することとなりMSW3名と事務員1名を迎えた。前方支援から後方支援にかけ一連の流れの中で、情報の共有化とよりスピーディーな退院支援を目標に連携強化を図る目的であった。しかし、内科医師の相次ぐ退職並びに検査機器の機種変更による新規受付停止が重なり、順調に数字を伸ばしてきた紹介患者数が激減してしまい低迷の年であった。

2008年には、前年の低迷を打破すべく20回に及ぶ地域の先生方や住民の皆様を対象とした勉強会や講演会を開催し、紹介患者数増加に微力ながら貢献した。開催を通じて、地域の方々はもちろんのこと、ご紹介をいただいている先生方にも当院の持つ機能や当院医師の専門領域を認知いただけておらず、いかに地域へ向けての情報発信が不十分であったかを認識し今後の課題となった。その反省点を翌年に生かす意味においても、その糸口がつかめたことは大きな収穫を得た年であった。また、近隣病院の廃止も重なり開設以来最多の紹介患者数を更新した年であった。

2009年には、より綿密な前方支援、後方支援を行うために地域医療部が発足し、地域医療推進室と医療福祉相談室が所属することとなった。前年に引き続き、地域の先生方や住民の皆様に向けて情報を発信すべく20回を超える勉強会や講演会の企画・運営・サポートを行った。その結果、開設以来最多の紹介患者数を更新した前年には及びはしなかったものの、症例に合わせて適切な診療科への紹介をいただける流れを構築できた。それまでの内科中心の情報発信から、南大阪病院の機能・設備を含め他科の情報も積極的に発信していくようになった。そして、以前から地域の先生方より要望のあった営業時間の延長を行い、夜間帯のご依頼にも対応できるようになった。

2011年から**2013年**にかけては新病院移転に伴い、紹介受診、検査依頼を制限したことにより紹介患者数が減少した。また、電子カルテ導入により紹介患者様の受け入れ業務や統計業務にかかる処理時間が大幅に短縮され大きな業務改善につな

がった。しかし、それまで行ってきた業務の中には電子化できない項目も多々あり現在も課題の部分を残している。

2014年より、南大阪病院の主力である消化器内科の特色を地域の先生方に発信すべく、南大阪消化器病フォーラムを年に2回の定例開催とした。多数の先生方にご参加いただき当院の先生と地域の先生方が対面して、直接言葉を交わすことにより、顔の見える連携につながった。また、地域の住民の皆様に向けて市民公開講座も開催した。

2015年から、業務改善を目標にスタッフの増員を要望していたが、人員の確保が難しい状況であり課題の残る時期であった。

2017年より、新たに看護師1名が配置され前方支援の受け入れ態勢の強化が行われた。緊急入院などの受け入れに対し、病状の把握や病床の確保を担当しスムーズな受け入れ態勢を構築した。

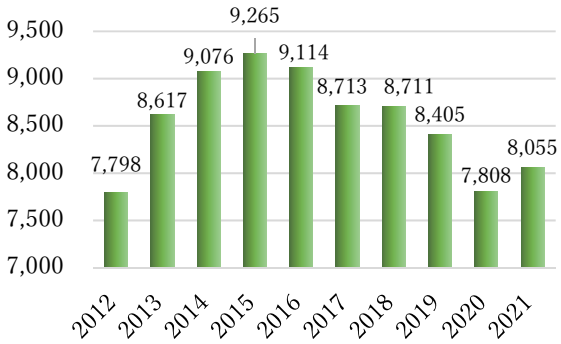
2020年より、新型コロナウィルスの感染拡大の影響によって、それまで開催していた講演会や医療公開講座がすべて休止となった。また、通常診療が行えない中、患者様の通院を自粛する傾向もあり地域の先生方も病院への紹介を控えていた。この状況が長く続き紹介患者数は減少していた。

2021年より、消化器病フォーラムの名称を変更し、大阪市南部病診連携の会として、Web会議形式での開催を再開した。感染対策を徹底し、ご参加いただいた先生方にリアルタイムで配信され、直接ご対面できないこのような状況でも今までと同様の質を確保した。

2022年より、渉外担当として事務職員を1名増員した。地域医療コーディネーターとして、他の医療機関への訪問や地域の先生方への情報発信を行っている。

主要統計

過去10年間の紹介患者数の推移



今後の展望

業務の拡大を目標に人員の確保を行う。

今後は、感染対策を徹底しながら、市民公開講座なども含め徐々に元の形式で再開できるように計画をする。

最後に、地域医療推進室は患者様と直接ご対面して業務を行う部署ではありませんが、他の医療機関からのご依頼に対してスムーズに医療連携がおこなえるように今後とも努力する所存です。

【事務部】医事課

医事課課長
徳永　雅美

概要

＜スタッフ＞　課長、課長補佐、主任、課員、
委託職員
大阪府肝炎コーディネーター2名
診療情報管理士1名
施設基準管理士1名

＜学術業績＞
2019年10月　第20回大阪病院学会
病院管理「施設基準ワーキンググループの取組について」優秀演題表彰

業務内容

①入院・外来診療報酬請求業務
生保、労災、公害、自賠、治験請求、国保・社保の増減点管理、返戻処理、異議申請等
取りまとめ
日報

②入退院業務
入院・退院手続き、予約入院

③各諸法関係届出
各種検診、難病指定、施設基準

④受付・保険証確認・書類・会計業務
初診・再診受付、各種書類預かり
入院・外来会計

⑤救急外来業務
平日・日・祝日救急受付、入院手続、医療費収納

外来部門

平成15年（2003）より各外来診療科に医事課員を2名～4名配置し、当日受付名簿の順に紙カルテを準備していました。外来カルテは診療科ごとに紙カルテが存在していましたが、一元化するためにチームが立ち上がりました。

平成17年（2005）1月より外来カルテが一元化され、カルテ室を設置。1患者1ファイルとなり、ID管理としました。自動開閉棚に一元化された紙カルテを収納することとなりました。
収納方法はプラスチック製の30穴のバインダー式を使用し、患者基本情報（患者番号、氏名、性別、生年月日、住所、保険情報）などは、コンピューターにより外来カルテ表紙（1号用紙）に出力表記となりました。次に診療科別外来カルテ表紙と傷病名欄とし、医師記録及び医師指示票を1セットとして準備し、カルテとしました。カルテが肥厚すると分冊カルテとして別保管としました。アリバイ管理は「カルテ管理システム」を導入し、管理することになりました。

また、診察についても予約制となり、診察前日の予約患者リストを出力しカルテを出庫、各診療科外来受付まで届ける運用としました。併科受診の際は診察が終わると外来からの連絡により、メッセンジャーと呼ばれる係が次の診療科へ届け、診察を行えるようにしました。

外来患者受付方法、医療費計算場所も変わりました。外来受付は再来受付機を2台設置し、予約のある患者さんは並んでいただき、外来受付を機械により行うことになりました。

予約外患者さんは一元化前同様の対面受付を行いました。医療費計算場所は、各診療科受付で受付・請求を行っていた医事課員を医事課内の1か所に集約し集中入力とし、外来には1名～2名の医事課員配置となりました。

平成23年（2011）12月　入院棟が完成し、12階建ての本館になりました。許可病床数400床のうち、1病棟50床を休床とし350床で運用となりました。

平成24年（2012）1月4日　外来は本館5階病棟部分を仮設外来とし、病室を各診察室に置換え仮設外来が始まりました。新病院での仮設外来では電子カルテ、オーダリングシステム、自動精算機が導入され、患者さんの動線も大きく変更となりました。

本館1階で再来受付機(3台)による受付を行い、検査などは3階で行われ、検査後は5階へ移動。5階にて各診療科の受付を行い、患者さんは各診療科の診察室前でお待ちいただいておりました。また、予約外や紹介状をお持ちの方は、本館3階で受付を行いました。外来医療費計算場所は、5階の1か所で集中入力としました。

仮設外来が始まってからは、電子カルテシステムや運用、不具合など各部門の職員が集まり、ミーティングを行いました。患者動線は患者さんにとって迷路のようで分かりにくく、フロアー係をエレベーター前に配置するなどし、対応しました。

平成25年（2013）7月　医療情報デジタルサイネージが導入され、医事課は外来医師休診・代診のお知らせ、外来診療担当表の情報提供を行いました。
また、同月、診断書作成業務「Papyrus」システムを導入し、医師の書類作成負担軽減を目的とし、診断書類の作成や書類のアリバイ管理ができるようになりました。

同年10月12日外来診療終了後、新外来棟へ引っ越しの準備をし、**10月15日**新外来棟オープンとなりました。

入院部門

旧病院の入院部門は一般病床と療養病床があり、建物の所在方角により南病棟、東病棟、中央病棟の3つに分かれていました。南病棟には４病棟、東病棟に3病棟、中央病棟には3病棟ありました。病棟担当者は各病棟に2名程度配置し、担当病棟の請求業務等を行っていました。新病院への移動後、しばらくは6階から12階の各病棟内にて業務を行っていましたが、まもなくして仮設であった3階医事課内で集中入力へ業務変更を行いました。

平成18年（2006）DPC準備病院となり、2年間のデータ提出の末、**平成20年（2008）**、厚生労働省の認定を受けDPC対象病院となりました。

これに伴い、入院医療費は診療行為ごとの点数を基に計算する「出来高方式」から、入院中に治療した中で最も医療資源を投入した病名とその診療内容に応じて厚生労働省が定めた 1日当たりの定額からなる「包括評価部分」と「出来高評価部分」を合わせて計算する方法へと変更となりました。

教育・研修

病棟連絡会、外来連絡会を月1回ずつ開催。
全体では医事課連絡会を月1回開催し、法改正や制度変更、患者接遇、診療報酬請求上の注意点、勉強会、スケジュール報告等情報共有しています。

外部研修等

平成24年
10月23日　平成24年度診療報酬改定の影響と今後の増収対策
11月22日　医事研究会

平成25年
2月23日　医療トラブルへの対策、対応
7月18日　医事研究会
11月21日　医事研究会

平成26年
1月16日　大阪府広域災害・救急医療情報システムに係る研修
1月24日　平成26年度診療報酬改定について
2月28日　「平成26年度診療報酬改定影響度・取組」に関する研修会
3月11日　平成26年度診療報酬改定説明会
4月16日　平成26年診療報酬改定のポイントと対策・電子レセプト審査強化の現状と対策セミナー

7月17日　「労災保険の仕組みと現状」「自賠責保険制度と治療費の請求について」実践レクチャー
8月27日「大阪府傷病者の搬送及び受入れの実施基準」改正案
9月26日　査定・施設基準等適時調査への対策

平成27年

7月　1日　事務職員のための現場ですぐ活用できる患者対応マナー研修
7月16日　医事研究会
8月27日　「マイナンバー法の医事課実務対応」実務者研修会
10月28日　最新の肝疾患治療に関する研修会
11月　1日　労災診療費算定実務研修会
11月　2日　地域医療構想対策セミナー
11月　9日　最新の肝疾患治療に関する研修会
11月25日　第1回　2016年診療報酬改定セミナー
11月26日　医事研究会

平成28年

3月　6日　医療経営管理セミナー
3月15日・23日・25日・30日
診療報酬改定説明会
7月　6日　平成28年度第1回地域連携クリティカルパス部会
11月22日　医事研究会

平成29年

3月25日　在宅医療説明会
4月20日　医事研究会
6月23日　施設基準管理セミナー
7月28日　平成29年度大規模地震時医療活動訓練
7月29日　施設基準事例検討会
9月14日　自賠責算定研修会
10月　7日　「なにわのトラブルバスターの患者トラブル解決術」講演会
11月　1日　労災診療費算定実務研修会
11月　9日　最新の肝疾患治療に関する研修会

平成30年

1月29日　大阪府救急・災害医療情報システムに係る説明会
3月13日・29日　平成30年度診療報酬改定説明会
4月26日　医事研究会
7月　7日　施設基準事例検討会
9月19日　肝がん・重度肝硬変治療研究促進事業
11月16日・17日　施設基準管理講習会
11月22日　医事研究会

平成31年

3月22日　DPC研修会

令和元年

11月20日　施設基準管理士協議会
11月21日　医事研究会

令和2年

3月13日・17日・25日
令和2年度診療報酬改定説明会
10月23日・24日　施設基準セミナー

実習受入状況

平成27年

7月17日～9月　4日　大阪医療技術学園専門学校　5名

平成28年

8月15日～8月 27日　広島国際大学医療経営学部　2名

平成29年

6月19日～7月 15日　大阪医療秘書福祉専門学校　2名
8月　7日～8月 19日　大阪医療技術学園専門学校　2名
9月11日～9月22日　広島国際大学医療経営学部　1名

平成30年

6月18日～7月 13日　大阪医療秘書福祉専門学校　1名
8月13日～8月 24日　広島国際大学医療経営学部　1名

令和元年

8月19日～8月31日　広島国際大学医療経営学部　1名

令和2年

8月　広島国際大学医療経営学部　1名
コロナ禍によりWebでインタビュー形式にて実施

今後の展望

現在医事課は、南大阪病院職員と委託職員とで業務を行っています。

患者満足度・職員満足度の向上を目指し、毎年医事課の目標に掲げ研修や勉強会を開催しています。実践に繋げられるよう努めてまいります。

また、2年毎に改定される診療報酬や厚生労働省より発出される事務連絡や疑義解釈等をいち早く情報収集し、院内で共有することで、医療の質の向上をめざし、増収に繋げていきます。

外来事務

病棟事務

南大阪病院　外来受診のご案内

㋑：**予約**された再診の患者さま

診察券が必要です。
お忘れの方は総合案内まで
お越しください。

再来受付機で受付お願いいたします。

外来患者カードをお受け取りください。

診察前に**検査**（レントゲン・
採血・採尿等）のある方は
本館３階の各検査受付窓口
までお越しください。

㋺：㋑以外の患者さま

総合案内にある**受付待発券機**にて番号札をお取りください。

番号が表示されましたら、
お呼びいたします。それまで
しばらくお待ちください。

㋑：紹介状をお持ちの方
予約済の方

㋺：㋑以外の方

外来受付へお越しください。

外来受付にて外来患者カードをお渡しいたします。

各診療科受付 A～E の窓口（外来棟２階または３階）に外来患者カードをご提示ください。

外来棟2階
受付 A・総合内科、循環器、乳腺外科
受付 B・皮膚科、形成外科、胸部外科、泌尿器科
受付 C・耳鼻咽喉科、眼科

外来棟3階
受付 D・内科、整形外科
受付 E・外科、消化器内科
内視鏡センター

診察　・　検査　・　点滴　・　指導

同日に別の科を受診される方

終了後、もう一度各診療科受付 A～E の窓口に外来患者カードをご提示ください。
会計待番号札をお渡しいたします。

１階会計案内モニターに番号が表示されましたら、自動精算機にてご精算お願いいたします。

「請求書兼領収書」にお薬番号のある方は、会計窓口のとなりにて院外処方せんをお渡しいたします。

院内処方の方は、**本館２階薬剤部窓口**にてお薬をお渡しいたします。

2023 年 3 月現在

法人本部

平成20年7月にそれまで特定医療法人事務局であったのを法人経営改革本部と組織変更し、新たなスタートを切った。病院の老朽化に伴い、新病院の建築計画が何度も検討され、平成20年に現在地での建替えが決まり独立行政法人福祉医療機構の融資も認められた。ところが、それまで長期の赤字経営が続いており、当時のメインバンクが融資に難色を示し、福祉医療機構としても与信能力の関係から銀行融資が決まらないと融資決定を取り下げて欲しいという事を告げられた。年内にメインバンクを変更し融資を取りつけ、年内に建替え工事の着工が絶対条件となった。現在の当法人のメインバンク2行の銀行が融資の決定を決めてくれた結果、12月に何とか着工することができた。

新病院の病床数は、将来を見据えた病院機能、計画している敷地面積、建築予算、補助金の活用等を勘案して400床とした。余談であるが、病床数を10%以上削減する条件で大阪府医療施設近代化施設整備費補助金を申請し大きな補助金が交付される予定だったが、当時の民主党政権における補助金等の減額等で約4億5千万円が不交付となったのは今も忘れられない。

その後、経営改革を進め1年後には、経常利益を黒字にすることができた。

新病院建築を進めるには、現在の病院本館部分に健診センターの建物があり運営していたので移転が必要で、南大阪看護専門学校の敷地を分筆し新築することとした。1階2階を南大阪クリニックとし、1階に健診センター、2階に透析センター（40床）を開設した。また3階・4階は社会福祉法人白寿会が運営する有料老人ホームとした。同時に南大阪看護専門学校の建物老朽化に対応するため西側部分の5階以上を解体し4階建ての建物とした。さらに外来患者のリハビリテーションをクリニックで診療することとし、近隣の看護師寮を解体し南大阪病院附属リハビリテーションクリニックを建築開設した。別の近隣看護師寮には、法人職員が利用する保育所、南大阪訪問看護ステーション、南大阪ハッピーセンター（居宅介護支援事業所）南大阪ヘルパーステーションなどの事業所、看護学校の実習生控え室等の建物を建築し現在の運営に至っている。

次に、法人経営改革本部として目指したことは医療法人の模範となる社会医療法人の認定取得であり、経営的にも税制面からの優遇もあり平成22年1月に認定取得することが出来た。その後、一定の経営の安定が進んできたので、組織名を法人経営改革本部から法人本部に変更した。

南大阪病院の建替えに関しては、平成23年12月に本館の運営を開始、平成25年10月に外来棟の運営を開始し、その後駐車場、外構の整備を行い着工から約5年6カ月を要して平成26年6月末に建替え事業が完了した。その後、南大阪病院内に外来透析治療に対応するため、令和1年3月に旧サウスタワーパーキング跡地に景岳会本部事務所を建築し外来棟4階にあった管理部門を移転し、その場所に外来透析室を30床設置し令和1年10月に開設した。

今後については、建替え後10年以上が経過し様々な医療提供体制に対応していくため増築計画を早急に進めていく必要があり、「地域からよろこばれ信頼される病院をめざします」の経営理念のもと、これからもこの地域の皆さんが安心して暮らせるよう運営してまいります。

法人本部

総務部・経理課

総務部の業務内容は、

- 人材確保として求人募集･学校訪問･各就職説明会への参加・採用試験・面接
- 職員の採用・退職・昇格・昇給・表彰・懲戒
- 入職者オリエンテーションの計画・実施
- 職員の出退勤管理･時間外管理･ストレスチェックなどの労務管理
- 職員の給与計算・賞与計算・年末調整
- 社会保険・雇用保険の諸手続き・職員健診の実施・予防接種の実施・福利厚生施設の管理
- 職員の健康管理及び労災に関する手続き・管理
- 院内保育園（南大阪保育所）の運営

などが主なものである。

今後は、医師の働き方改革、医療従事者の働き方改革に対応した労働時間管理の把握と適正化を行うために、人事管理・出退勤管理システムの見直しや就業規則等諸規則の見直しを行い対応していく必要がある。また、人材確保と育成をより一層強化することを目的として令和4年5月に総務部内に人材確保・育成室を設置し専任の室長を採用した。職員教育については、職員育成実践計画を作成し新人教育と勤務年数や職位に応じた到達目標を示し一貫性のある職員教育を実施していくことで、働きがいのある職場づくりを目指していきたい。

経理課の業務内容は、

法人全体（病院・健診センター・透析クリニック・リハビリテーションクリニック･看護学校･訪問看護ステーション・居宅介護支援事業所・ヘルパーステーション）の事業の窓口の入出金や会計処理、現金出納管理、預金管理、仕訳作業とデータ入力、給与･賞与計算データの振込み、経費の支払い、各月の事業所毎の損益計算書の作成などを主に日常業務として行っている。

また、決算期には各事業所の決算書と法人全体決算書の作成（貸借対照表・損益計算書・財産目録・附属明細書・勘定科目内訳明細書)、税務申告に必要な書類の作成、社会医療法人定期提出書類の作成、独立行政法人福祉医療機構への決算状況の報告、公認会計士による外部監査の受審などを行っている。今後は、令和5年10月から開始されるインボイス制度や令和6年1月から開始される電子帳簿保存法に対応したシステム更新を行っていき、確実な財務諸表を作成し健全な財務体質の構築に貢献していきたい。

総務部・経理課

管理課・物品管理課・施設課・保育所

管理課（図書係・ＣＳ係・医局秘書係）

物品管理課

保育所

施設課

施設課（運転手）

委託会社

国際セーフティー株式会社

株式会社ソラスト

国際ハートサービス株式会社

ワタキューセイモア株式会社

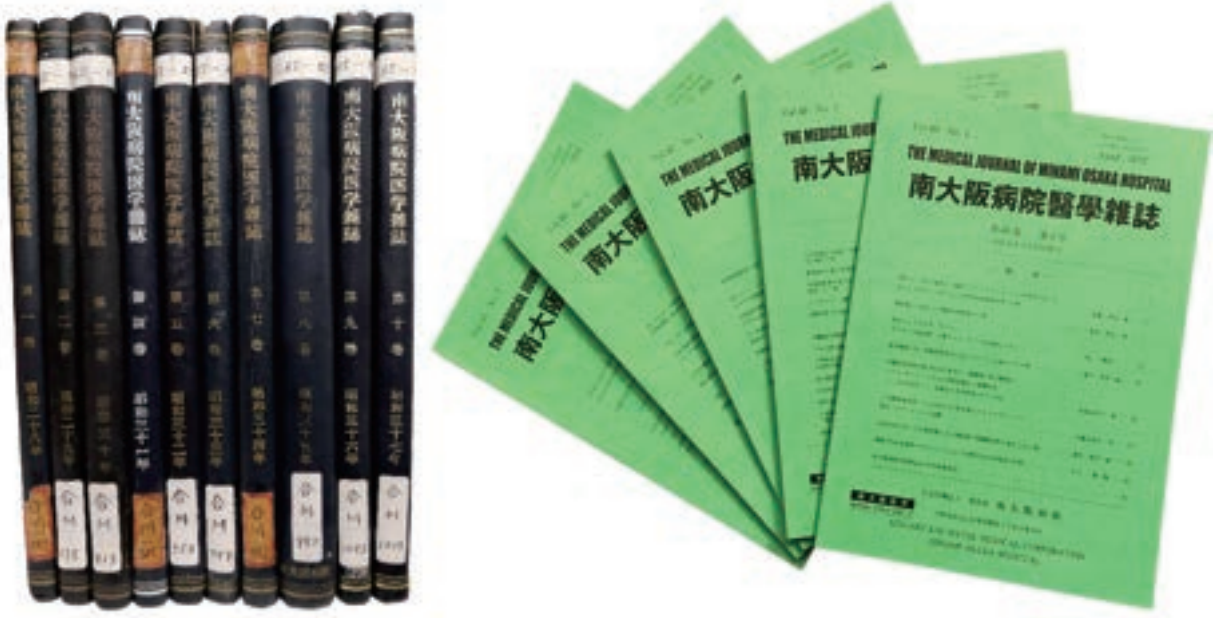
南大阪病院医学雑誌の発刊

南大阪病院医学雑誌は昭和28年に創刊され、当初は年3回刊行、昭和38年第11巻から合併号とし年2回刊行、平成21年第56巻から年1回刊行し、令和5年には第70巻を記念号として発刊を迎えることができました。

本誌は全国の医科大学と交換している他、国会図書館、国内の医学教育関係者、総合病院、第一線の医師諸兄にも送付しています。

創刊は昭和28年であり、その当時教育機関である大学といえども医学雑誌を刊行しているところは少なかったので、創立間もない一私的病院が刊行したことは衆目を集めました。以後一度も休刊することなく今日に至っています。

南大阪病院は、『地域からよろこばれ信頼される病院づくり』を理念として設立・運営され、同時に最先端の医療を提供できるよう努めております。そして南大阪病院医学雑誌はその医学上の成果を発信する重要な役割を担っております。今後もこの体制を崩すことなくわが国の医学・医療界に貢献できるよう精進してまいります。



学術懇話会

南大阪病院学術集談会から南大阪病院学術懇話会へ

昭和28年に創刊された南大阪病院医学雑誌は連綿と発刊され、令和5年には第70巻を発刊しております。昭和30年1月からは南大阪学術集談会が毎月開催されました。これは各診療科、薬剤部、診療支援部（臨床検査科、放射線科、リハビリテーション科、栄養科）、看護部及び事務部が輪番制で主催し、診療、学術研究、業務報告・改善などの成果を全職員対象に発表し共有する場として設けられたものです。ただし平成20年5月第609回開催時から『南大阪病院学術懇話会』と改称するとともに、3ヶ月に一度の開催に変更されましたが、医療から事務管理まで幅広く網羅することで、職員教育に役立てております。また発足時より地域医師会を通じて診療所の先生方にも広く呼びかけ、南大阪学術集談会には多くの医療関係者にご参加いただき、地域医療の向上にも資してまいりました。

平成18年4月に新藤光郎先生を迎えて教育研修センターが設立されたのを機に、平成19年より毎年3月開催時には、研修医が当院での研修期間でもっとも印象に残った患者さんの臨床経過についてまとめて報告する貴重な発表の機会ともなっています。

昭和30年1月の第1回開催以来、現在、第685回（現第77回南大阪病院学術懇話会、令和5年3月22日開催）に及んでいます。その演題目次は南大阪病院医学雑誌末尾に掲載し、論文の主要なものは全文を南大阪病院医学雑誌に掲載し、発表しておりますのでご参照ください。

各種統計

2020年　退院患者統計

診療科別・月別・性別　退院患者数

診療科	分類	総数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	死亡	剖検
総数	計	5,481	466	484	513	371	382	382	437	472	459	531	459	525	240	3
	男	3,000	259	270	291	206	204	199	254	250	246	296	237	288	147	1
	女	2,480	207	214	222	164	178	183	183	222	213	235	222	237	93	2
内科	計	761	85	77	78	49	50	43	45	68	70	69	52	75	71	1
	男	427	55	46	40	22	31	24	27	31	39	43	27	42	44	0
	女	333	30	31	38	26	19	19	18	37	31	26	25	33	27	1
消化器内科	計	1,365	125	137	129	78	90	91	110	124	110	140	117	114	48	0
	男	719	68	72	75	48	49	40	66	63	56	76	50	56	35	0
	女	646	57	65	54	30	41	51	44	61	54	64	67	58	13	0
循環器内科	計	357	29	29	32	26	25	23	38	27	17	30	34	47	26	0
	男	225	14	19	20	20	14	13	24	18	8	21	23	31	10	0
	女	132	15	10	12	6	11	10	14	9	9	9	11	16	16	0
外科	計	865	60	84	66	61	66	66	74	70	67	83	94	74	48	1
	男	548	38	60	44	42	37	37	48	47	40	57	52	46	32	1
	女	317	22	24	22	19	29	29	26	23	27	26	42	28	16	0
乳腺外科	計	147	10	10	11	10	18	12	10	16	10	9	15	16	7	1
	男	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	女	146	10	10	11	10	17	12	10	16	10	9	15	16	7	1
泌尿器科	計	598	50	41	57	49	47	47	40	47	60	53	45	62	10	0
	男	450	37	32	45	35	38	35	31	36	44	38	31	48	7	0
	女	148	13	9	12	14	9	12	9	11	16	15	14	14	3	0
胸部外科	計	164	9	10	17	11	8	20	18	9	17	17	13	15	17	0
	男	95	7	8	10	5	7	7	11	5	6	8	10	11	11	0
	女	69	2	2	7	6	1	13	7	4	11	9	3	4	6	0
形成外科	計	59	0	0	0	0	1	5	11	13	5	8	7	9	1	0
	男	34	0	0	0	0	0	4	7	7	3	2	4	7	0	0
	女	25	0	0	0	0	1	1	4	6	2	6	3	2	1	0
整形外科	計	365	25	29	43	23	17	27	32	24	33	34	29	49	2	0
	男	176	9	12	28	10	6	20	14	12	17	16	13	19	2	0
	女	189	16	17	15	13	11	7	18	12	16	18	16	30	0	0
耳鼻咽喉科	計	65	10	10	8	5	1	1	3	8	7	6	5	1	0	0
	男	38	7	5	4	2	1	1	3	4	4	3	3	1	0	0
	女	27	3	5	4	3	0	0	0	4	3	3	2	0	0	0
眼科	計	240	25	17	32	19	8	20	21	13	22	23	18	22	0	0
	男	105	12	4	13	10	3	8	10	5	9	10	9	12	0	0
	女	135	13	13	19	9	5	12	11	8	13	13	9	10	0	0
皮膚科	計	7	1	0	0	0	0	0	1	2	1	1	1	0	0	0
	男	4	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	1	0	0	0
	女	3	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0
地包括ケア病棟	計	278	15	26	21	19	29	15	20	33	23	31	21	25	9	0
	男	121	10	9	7	8	11	6	8	15	13	12	11	11	6	0
	女	157	5	17	14	11	18	9	12	18	10	19	10	14	3	0
回復期リハビリテーション	計	210	22	14	19	21	22	12	14	18	17	27	8	16	1	0
	男	57	2	3	5	4	6	4	5	5	6	10	3	4	0	0
	女	153	20	11	14	17	16	8	9	13	11	17	5	12	1	0

退院患者数　（2003年より診療情報管理を開始）

年	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
実退院数	6,286	5,452	5,115	4,826	4,808	4,891	5,321	5,178	5,260	5,364
総退院数	6,687	5,882	5,573	5,291	5,315	5,331	5,730	5,654	5,730	5,708

年	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
実退院数	5,432	5,765	5,913	5,823	6,137	5,989	6,067	5,481
総退院数	5,802	6,318	6,553	6,477	6,748	6,607	6,669	5,981

院内がん登録数　（2012年診断症例より院内がん登録を開始）

診断年	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
登録数	508	520	658	750	964	940	804	842	868

2020年　疾病統計

国際疾病大分類別　退院患者数

国際疾病大分類		総　数			死　亡		
		計	男	女	計	男	女
総　数		**5,481**	**3,000**	**2,480**	**240**	**147**	**93**
Ⅰ章	感染症及び寄生虫症	102	50	52	—	—	0
Ⅱ章	新生物	1,175	737	438	113	77	36
Ⅲ章	血液及び造血器の疾患並びに免疫機構の障害	16	7	9	—	—	0
Ⅳ章	内分泌，栄養及び代謝疾患	182	98	84	—	—	0
Ⅴ章	精神及び行動の障害	7	5	—	0	0	0
Ⅵ章	神経系の疾患	84	53	31	0	0	0
Ⅶ章	眼及び付属器の疾患	240	102	138	0	0	0
Ⅷ章	耳及び乳様突起の疾患	15	7	8	0	0	0
Ⅸ章	循環器系の疾患	433	265	168	29	15	14
Ⅹ章	呼吸器系の疾患	362	215	147	50	31	19
ⅩⅠ章	消化器系の疾患	1,465	784	681	20	12	8
ⅩⅡ章	皮膚及び皮下組織の疾患	59	26	32	—	0	—
ⅩⅢ章	筋骨格系及び結合組織の疾患	150	66	84	—	0	—
ⅩⅣ章	腎尿路生殖器系の疾患	562	322	240	16	6	10
ⅩⅤ章	妊娠、分娩及び産褥	0	0	0	0	0	0
ⅩⅦ章	先天奇形，変形及び染色体異常	7	5	—	0	0	0
ⅩⅧ章	症状、徴候及び異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの	4	—	—	0	0	0
ⅩⅨ章	損傷、中毒及びその他の外因の影響	333	156	177	4	—	—
ⅩⅩⅠ章	健康状態に影響を及ぼす要因及び保健サービス	278	98	180	—	0	—
ⅩⅩⅡ章	特殊目的用コード	7	—	5	—	0	—

注）実退院患者で集計　　※4件未満の件数は個人情報の特定が懸念されるため“—”（ハイフン）で表示しています。

防災と減災への取り組み～防災力は想像力～

防火・防災担当顧問

西本　達恭

1　始めに

当院では、防火・防災管理業務の確実な実践を図るため、防火管理者を委員長とした、14名体制で常任「防火・防災管理委員会」を設置しています。

又、各部署からは、16名のメンバーが選任され、防火・防災管理小委員会を毎月第3火曜日に定例会として開催しています。

議題は、① 事前計画修正、② 訓練関係、③ 研修関係、④ 防災資器材購入等です。

2　具体的な取り組み

① **事前計画**には、消防計画、災害対応マニュアル、ＢＣＰ（事業継続計画）が作成されていますが、状況の変化に合わせて、加筆・修正を加え、災害時に活用できるマニュアルを目指しています。

② **訓練**の柱は、6月実施の消防（火災）訓練、9月実施の防災（地震）訓練ですが、コロナ禍のため、総合訓練を中止して、救護班による「トリアージエリア訓練」を実施しています。この訓練には、毎回、住之江区医師会から3名のドクターの派遣を頂き、エリア内での、受付選別、トリアージタッグ記入、搬送要領等についての訓練を実施しています。

③ **研修**は、新入職員研修、防災講演など、集合研修が中心でしたが、コロナ禍で、集合研修が困難になったため、受講者が、自分のタイミングで視聴できる「オンデマンド配信」での研修スタイルに移行しています。

具体的には、作成済みのパワーポイント（音声ファイル）資料を動画ファイルに変換して配信する方法です。院内ポータルサイトを活用しての配信です。

又、「出前講座」は、各部署が希望する、日・時間に、実施している研修です。

④ **防災資器材購入**は、災害時に必要と思われる資器材を、計画的に購入して、病棟階、各部署に「防災器材設置場所」を定め保管しています。又、東側階段１階の防災器材設置場所には、担架６脚、災害対策本部用機材等を保管しています。

3　院内消防設備見学

年に2回、屋上から消防設備の説明を受けながら地上までのツアーです。

屋上の非常用発電設備、12階の排煙口から、順次、非常用エレベーター、排煙設備、非常ベル、スプリンクラー制御弁の操作など、消防用設備について説明を受けながら、地上に到達です。

2019年　G20 大阪サミット開催に向け「テロ災害合同訓練」実施

～　南大阪病院・消防・警察・区役所・医師会　～

1　住之江区で「G20 大阪サミット」開催

連日、マスコミで報道されております、「G20大阪サミット（20カ国と地域、首脳会議）」が、大阪市住之江区大阪見本市会場（インテックス大阪）で、2019年6月28（金）・29日（土）の2日間、各国の首脳が一堂に会し、世界経済や、国際社会の共通課題について幅広い議論がなされます。

世界各国から約3万人の方々が大阪を訪れ、日本が主催するサミットとしては史上最大規模となる国際会議となるそうです。

2 「テロ・災害特別警戒態勢」実施

日本政府は、大規模イベント開催期間の危機管理体制の整備や強化の推進として、期間中に官民一体で「テロ・災害特別警戒態勢」を実施します。

その背景には

① 現在も、世界各地で「国際テロ組織」による爆弾テロ事件が、相次いで発生していることから、日本に対するテロの脅威の現実化が懸念されること。

② 今後、G20大阪サミット、ラグビーワールドカップ、東京オリンピック・パラリンピック競技会、大阪・関西万国博覧会等国際的な大規模イベントが続くこと。

③ 国を挙げて、外国人観光客の集客に向けた取り組みを強化していること。

このようなことから日本政府は、テロ対策を強化しています。

開催国として、あらゆる災害・事故に万全を期して、訪日された方々が無事に帰国されるまでは、国際的にも大きな責任があるからです。

3 過去の主なテロ災害

① 地下鉄サリン同時多発テロ事件

1995年（平成7年）3月20日に東京で発生した、同時多発テロ「地下鉄サリン事件」は平時の大都市において、無差別に化学兵器が使用されるという世界にも類例を見ないテロリズムであったため、世界的に大きな衝撃を与えました。

※ 鉄道テロ防止のため車内放送で「不審なものがあれば、お手を触れずに、車掌・係員に連絡して下さい。」のアナウンスを耳にすると思います。この放送は、地下鉄サリン事件発生後から、テロに対しての啓発用に全国で放送されています。又、国際的なイベント毎に、公共施設からゴミ箱が撤去されたり、透明なゴミ箱に置き換えられたりされていることも、テロ防止対策の一貫です。

② アメリカ同時多発テロ事件

アメリカ合衆国では、2001年（平成13年）年9月11日に、ニューヨークでは、ワールドトレードセンター・ ツインタワー（110階建）に、航空機が突入し爆発炎上・建物が崩壊した「アメリカ同時多発テロ事件」が発生しました。

③ オリンピックテロ事件

平和の祭典「オリンピック」でもテロが発生しています。

・1972年9月5日に西ドイツで行われた「ミュンヘンオリンピック」

・1996年7月27日にアメリカのアトランタで行われた、近代オリンピック開催100周年記念大会でも発生しています。

テロ災害合同訓練実施

当院では、2019年2月23日（土）に、G20大阪サミットを見据え、テロ災害時における連携した活動の再確認と、突発的に発生した、事件・事故時の多数傷病者（集団災害）対応について、各機関がスムーズな連携と傷病者対応が出来るかを目的として合同訓練を実施しました。

1 参加機関

南大阪病院、大阪市消防局、大阪府警察、
住之江区役所、住之江区医師会

外来棟1階多目的ホール

2　参加車両及び人員

（1）大阪市消防局　……55名
　　消防車両15台1機（内ヘリ1機）
（2）大阪府警　……15名
　　警察車両4台　警備犬2頭
（3）南大阪病院　……101名
　　自衛消防隊20名　医師3名　看護師9名
　　事務部7名　在館避難者15名
　　負傷者30名(訓練人形3体・消防職員1名)
　　コーディネーター21名(写真5名・ビデオ1名)
（4）住之江区役所　……6名
（5）住之江区医師会　…. 医師10名

合計　参加車両19台　ヘリ1機　参加人員187名

3　訓練想定

① G20大阪サミット特別警戒実施中に、当院外来棟において爆発テロが発生した。

② 外国人を含めた来院者30名（重症10名、中等症10名、軽症10名）の負傷者が発生した。
爆弾テロ災害に対する、病院自衛消防隊の活動、消防、警察の誘導・救助活動、医師、救急隊、看護師等による、応急救護所内での「トリアージ」「応急処置」及び「病院搬送」までの手順の確認訓練を行いました。

4　訓練内容

（1）自衛消防隊の活動

① 爆発火災発生で、館内に非常ベルが鳴動して、「フィフィ・フィフィ・火事です・火事です」と火災断定自動放送が繰り返し流れる中、自衛消防隊が、自動通報装置による119通報・避難誘導・初期消火活動等事前命令による初動活動を実施しました。

② 外国人在館者に対しては、避難誘導フリップボードを活用しての誘導を行いました。

③ 災害対策本部長から「全館避難命令」の発令により、各階の自衛消防隊員が、2階の負傷者5名を救出しながら館外へ避難しました。

（2）災害対策本部の活動

災害対策本部長、自衛消防隊長、本部員が災害状況を把握し救護班を指揮しました。

北側駐車場

（3）応急救護所

医師13名、看護師9名、事務7名、救急隊による応急救護所内活動

西側公開空地

※トリアージ・・・災害発生時などに多数の負傷者が同時に発生した場合、傷病者の、緊急度や重症程度に応じて適切な処置や搬送を行うために傷病者の搬送順位を決定すること。

※応急処置・・・トリアージされた傷病者を災害現場で治療すること。ここは、根本的な治療でなく、災害現場から病院へ搬送する間、安全に搬送するための応急処置です。

※搬送・・・傷病者を災害現場から病院へ、安全管理に配慮して搬送すること。

(4) 消防・警察合同指揮本部

① 警備犬による建物内探索

G20に向け、大阪府警察が飼育する「直轄犬」が館内に入り爆発物探索をしました。

嘱託犬でなく、警察直轄で警備犬を持っているのは、警視庁と大阪府警、千葉県警、北海道警、埼玉県警、愛知県警だそうです。

② 窓からの救出活動

消防車両積載の梯子を活用して救出活動。

③ 屋内進入による救出

④ 消防隊進入　　北側駐車場

⑤ はしご車による放水（消火活動の様子）

⑥ ヘリによる上空からの情報収集

⑦ 訓練現場全体風景

5　訓練検討会

訓練終了後、関係機関の情報共有や、応急救護所内の、① 指揮と連携活動、② トリアージタッグの記入要領と流れ、③ 傷病者一覧表の作成と共有等について、今後の検討課題として終了しました。

不審物を発見した場合の三原則

1　不審物を発見したら

不審物を発見・何か変だと感じたら、近づかないで、警察や係員に連絡することが、二次被害の防止と自身の安全確保につながる重要な初動行動です。

① 触らない　② 踏まない　③ 蹴とばさない

液体でしたら、

① 触らない　② 嗅がない　③ 動かさない

これが世界共通の三原則です。

2　テロ・NBC災害における現場医療活動

専門的になりますが、消防、警察等が安全宣言するまでは、災害現場に近づかないこと。又、避難する場合は、原則として①風に向って（風上）、②高い場所へ避難することも重要です。

平成 17 年大規模災害訓練　～ニュートラム事故を体験して～

平成5年（1993年）10月5日（火）午後5時半ごろ、新交通システム・ニュートラム南港ポートタウン線住之江公園駅で無人運転の電車が暴走。車止めに衝突し、215名の乗客が負傷した「集団災害列車事故」が発生しました。

当日、当院の医師、看護師が事故現場に駆け付け、負傷者対応に奔走したことから当院では、この経験を今後に生かすために、毎年、集団災害トリアージ訓練を実施しています。

当時、集団災害時の医療体制、傷病者・トリアージタッグの取り扱い等について、明確な基準はありませんでしたが、「ニュートラム事故」・「阪神・淡路大震災」を契機に、官民一体となって、これらについて検討され、その一つとして「標準的なトリアージタッグ」が公表され現在に至っています。

写真は、平成17年に南大阪病院、住之江消防署、住之江区医師会が合同で実施しました集団災害対応訓練風景です。

特殊メイクを施した負傷者を、災害現場での一次トリアージ、応急手当、病院搬送、病院での二次トリアージと一連の流れの検証訓練でした。

当院は、例年9月第3土曜日を「総合防災（地震対応）訓練」実施日と定めています。訓練の柱として、住之江区医師会（昨年は医師3名参加）と合同で、トリアージエリア訓練を継続実施しています。

これからも、平時の医療は勿論ですが、災害時の医療救護活動には、ニュートラム事故で得た教訓を生かし、地域から信頼される病院を目指します。

当時の新聞

特殊メイク風景

看護学生特殊メイク

病院到着

病院二次トリアージ

電子カルテ導入経緯

和暦	西暦	月	イベント
平成 19 年	2007	3	電子カルテ準備委員会発足
		12	電子カルテ準備委員会発足一時中断（病院建替計画見直しのため）
平成 21 年	2009	1	電子カルテ準備委員会再開
		1	電子カルテメーカー決定（SSI）
平成 22 年	2010	1	医療情報システム管理委員会改名
		8	SSI 電子カルテ導入病院へ見学（10 月にかけて複数病院）
		12	PACS 先行導入（電子カルテ稼働に向けて画像保存開始）
平成 23 年	2011	3	外来ワーキング発足
		4	電子カルテサーバー稼働
		7	SSI 医事システム先行稼働（東芝情報システムズ HAPPY からリプレース）
		10	新病院本館完成
		10	外来ワーキングシミュレーション（12 月までに数回）
		11	電子カルテ・PACS サーバー移設（旧病院→新病院本館）
		12	旧病院から新病院本館へ引っ越し
平成 24 年	2012	1	電子カルテ稼働、仮設外来(本館 5F)運用開始
		1	リハビリクリニック電子カルテ運用開始
		5	南大阪クリニック（透析センター）電子カルテ運用開始
平成 25 年	2013	7	診断書作成支援システム（MEDI-Papyrus）運用開始
		8	外来棟完成
		10	外来棟運用開始
平成 26 年	2014	1	本館 5 F 病棟運用開始
		8	リハビリクリニック SSI 介護システム稼働
平成 28 年	2016	2	リハビリクリニック SSI 介護システムリプレース
		9	SSI リハビリ評価システム運用開始
平成 29 年	2017	10	端末管理システム（SKYSEA）運用開始
		12	電子カルテ・部門システムサーバーリプレース
平成 30 年	2018	4	文書管理システム（ASTRUX）運用開始
		6	SSI データセンター（外部バックアップ）利用開始
		10	SSI 新版電子カルテシステムリプレース
令和元年	2019	10	外来棟 4 F 透析室運用開始
		11	SSI 眼科システム稼働
令和 2 年	2020	10	SSI 介護システム（訪問看護・ヘルパーステーション・ハッピーセンター）稼動
令和 3 年	2021	7	SSI 給食システム稼働
		12	SSI 薬剤禁忌バージョンアップ
令和 4 年	2022	4	オンライン資格確認システム運用開始
		10	SSI 長期署名システム・電子処方せん構築中

新病院外来リハーサル（第１回　2011/11/25）

スケジュール

日時		全体スケジュール	場所	進行	担当責任者
リハーサル日	17:00	参加者集合	新病院医局	参加者受付（名簿チェック）	各部署
	17:05	院長挨拶 or 外来 WG 委員長			
	17:10	オリエンテーション		①資料説明 ②リハーサルの進め方 ③模擬患者への説明 ④職員役への説明	
	17:20	職員配置	各部署		
	17:30 ～ 19:00	リハーサル開始	新病院（各部署）		
		リハーサル終了	新病院（各部署）	①参加者集合 ②終了宣言	
	19:15	問題点整理	各部署	部門内で問題点取り纏め	各部署責任者
	19:30 ～ 20:00	反省会	新病院医局	①問題点発表 ②リハーサルシートを医療情報部回収 ③リハーサル検証会の日時・場所確認し解散	
後日	16:00 ～ 18:00	リハーサル検証会		外来 WG メンバー	

リハーサルの目的

① 新病院、仮設外来での電子カルテシステムの運用を確認する。
② それぞれの職種が現時点での外来運用の確認をする。
③ 未整備な部分を検討し、出し合い至急解決につなげる。

新病院でのリハーサルを3回実施する過程で、第１回目として問題点を早急に解決し、診療開始・患者受け入れに向けて、万全の体制で稼働を迎えることができる。

リハーサルの内容

- 模擬患者がリハーサルシートに沿って実施する（交代制）
- 各部署は、現時点での担当者が対応する（交代制）
- 評価者方法：各部署に評価者を配置し、チェックシートとメモを使用する。

外来ワーキングの発足

病院建替えにともない電子カルテ導入が決定され2011年3月に各部門代表者からなる『外来ワーキング』が発足した。電子カルテ導入に際して外来運営をどのように行えば患者に優しく業務が効率化できるか、いわゆる電子カルテシステムを現在の病院業務にどのように適応させるのがよいかを検討し、課題を見つけては解決する職員チームがいわゆる『外来ワーキング』である。

伝票と紙カルテから電子カルテへの移行

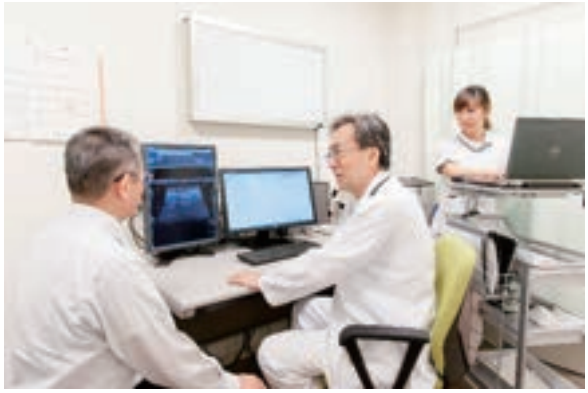
電子カルテがどのようなものなのか？伝票と紙カルテで業務するのが当たり前の院内職員には電子カルテシステムがまったく未知の存在であり、伝票から電子オーダーさらに検査予約業務そしてカルテ記載そのものがキーボード入力となり多くの検査や診療が予約制となるなど非常に大きな変革であった。とくに患者動線と業務の動線についてこれらを矛盾や破綻なしに電子カルテに落とし込む必要があり外来ワーキングでは業務を頭の中に浮かべて場所と時刻、患者の動線、業務の動線を確認しあう非常に形而上的な作業が必要とされた。幸い2008年にはすでに宮越名誉院長により紙カルテ上で全科カルテ合冊が実施されており、その電子化には障壁が低かったと思われる。

外来機能は新病院棟の5階に集約

さらに新しい病院では新外来棟が竣工するまでの期間、外来棟機能を新病棟5階に集約することが決定された。そこですでに病棟として設計・施工された4人部屋や個室を各科外来ブースに仕様変更しさらに病棟中央部に位置する本来の看護師詰所を医事課業務や外来看護師などの待機所などとして対応することとなった。新患受付は新病院棟3階の現在の地域医療部の場所を当てることとなった。そのため新病院棟３階の乗用エレベーターホールは新患受付場所としても検査部門導入路とも重なり大変な混雑場所となった。１階では新病院棟乗用エレベーターホールの奥に再来受付発券機を2台設置するなど乗用エレベーターで５階、３階に上がる患者さんと再来受付発券機に並ぶ患者さんの動線重複が生じてやはり非常な混雑が避けられなかった。さらに外来患者待合は5階の病棟東北側の談話室のみとなり、各診療科待合は5階病棟廊下の両側に長椅子を並べてその間が通路という非常に窮屈な環境となった。

新病院外来リハーサル

電子カルテシステムを用いた診療とはどのようなものかを新病院外来棟を用いて2011年11月から数回リハーサルした。各科ごとにいろいろな模擬患者さんを設定し新患受付から診察前移動、呼び込み、病状聴取、検査予約や検査実施と確認、処方や処置さいごは医事課での請求と支払いなどを実際の診療に疑似させて行う一大イベントであった。電子カルテシステムに習熟していないために一人の模擬患者さんの診療に1時間近くも必要とする場合もあった。診療所見を電子カルテにタイプ入力するということだけでも大変ではあるが、電子カルテの各メニューから目的の項目に達するまでやはり習熟が必要であるとすべての職員が覚悟を決めた。新病院外来リハーサルに参加希望する職員は非常に多く盛況であった。



電子カルテの稼働

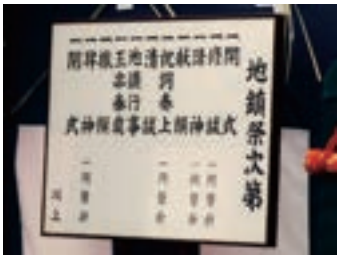
2011年12月に新病院棟への入院患者の移送が終了し2012年1月電子カルテシステムが稼働した。診療が始まってみると電子カルテシステムによる診療業務は比較的速やかに安定稼働した。医療情報部の活躍は言うに及ばず当院職員の適応力の大きさを思い知ることになった。2013年10月、現在の4階建ての新外来棟が完成して病棟5階の外来業務を現外来棟4階建てに移す際にもやはり業務の円滑化と患者動線についての検討を外来ワーキングで実施した。

締めくくるにあたって

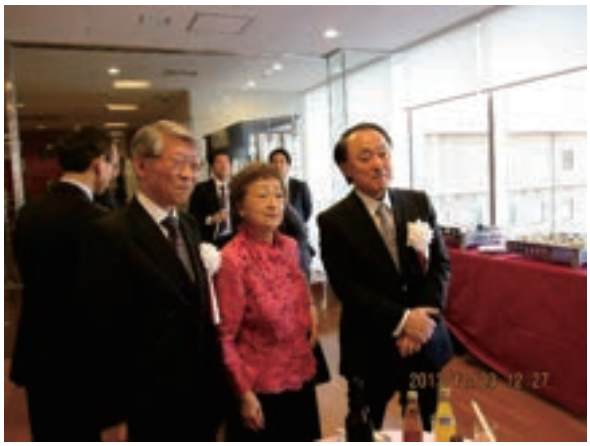
電子カルテに自分たちの仕事をどのように移行するのか、それは患者さんの診療にどのように役立つのか？安全で確実な医療を効率よく提供し患者、従業員そして病院の三方によりよい結果をもたらすべく努力した昔日を懐かしく思い出すのはわたくしだけではないと思われる。電子カルテシステム導入に『外来ワーキング』の果たした役割は非常に大きく、長時間の会議に積極的に参加し検討していただいた外来ワーキング各部門担当者に改めてこの場を借りて感謝し締めくくりたいと思う。

外来ワーキング委員長　中谷守一
（現　外来業務等検討委員会）

新病院地鎮祭　2010年2月4日



外来棟竣工式



2013/11/23 13:39

祝 祝賀
11/23 12:12

立替工事

この場所に医局棟ができる

旧病院と新病院本館

旧病院
この場所に外来棟ができる

ファンクス
この場所に 12 階建て本館ができる

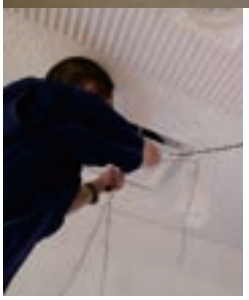
病院機能評価受審

2003(平成15)年10月8日～10日

2010(平成22)年3月25日～27日

新入職員入職式・研修・歓迎会

クリスマスシーズン



キャロリング

第1回開催　2014年12月22日午後5～6時頃

入院患者さんの気持ちを少しでも癒やすことを目的にして、看護師さんをはじめとした医療従事者がキャンドルを持ってクリスマスソング（“きよしこの夜”、“諸人こぞりて”など）を合唱しながら病棟をまわる行事です。

南大阪看護専門学校・小味渕校長の指導の下、看護学生も加わり、美しい歌声が病棟に響き渡ります。

2014年に第1回が行われて以来、2018年まで毎年12月に行われ、病院の年末の恒例行事として定着してきておりました。

入院の患者さんの中には、少し涙ぐみながらクリスマスソングを口ずさんでおられる方もおられ、この行事の目的を果たしつつありました。

ところが残念ながら2019年以降は、新型コロナ感染拡大防止のため中止せざるを得ない状況で今日に至っております。

病院の行事として相応しいこのキャロリングが復活できる日を心待ちにしております。

南大阪看護専門学校長　小味渕智雄

かがやき会（糖尿病患者）ウォークラリー

看護フェア

第１回開催　2005(H.17)年5月10日

当時の案内

看護の日 フェア　開催のお知らせ

南大阪病院は看護の日（5月12日）にともない、地域の方々と交流を深めたいと思っております。病院の理念である“地域から喜ばれ信頼される病院”をモットーに私達は“看護の心をみんなの心に”をテーマにして皆様の「健康相談」を企画しました。皆様のご参加をお待ちしております。

2010 年以降　加賀屋商店街にて

近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日である5月12日は「看護の日」、全国の看護協会や施設で、色々なイベントが開催されています。2010年より、近くの加賀屋商店街で毎年行っています。

2005年（第1回）～2019年（第15回）開催　　2020年以降コロナ感染拡大のため一時中断

自衛消防出初式
住之江競艇場

皆様、新春恒例行事として親しまれている「大阪市消防出初式」のことは、ご存じだと思います。当院、自衛消防隊も1年の「無火災、無災害」を祈願して、住之江競艇場を会場とした「住之江自衛消防出初式」に参加しています。例年住之江区内の事業所から、25隊50名が参加して開催されます。

病院火災新聞報道及び院内写真
2004年9月25日

平成16年9月25日、旧病院の病棟内で火災が起こりました。患者さんのタバコの不始末が原因です。当時から院内は全面禁煙になっていましたが、隠れて喫煙し吸い殻をゴミ箱に捨て発火。医師・看護師の的確な救助・避難によりほとんど人的被害はありませんでした。

物故者慰霊祭
毎年11月

毎年11月霊安室に於いて、病院で亡くなった方々に祈りを捧げる物故者慰霊祭が行われています。

ニュートラム住之江公園駅車両暴走事故　1993年10月5日

ニュートラム暴走
激突、194人重軽傷
無人運転システ
コンピューター制

手術着、スリッパで現場治療
ニュートラム事故
「南大阪病院」医療チーム
近く感謝状「無我夢中だった」

真価見せた"病診連携"
中核病院構想を始動
女房には長生きして欲しい

南大阪病院 日赤府支部に感謝状
迅速な応急手当てありがとう
ニュートラム暴

【記事内容】

午後六時過ぎ。テレビ画面で刻々と事故現場の様子が伝えられ、「とにかく現場へ行こう」と、外科部長の後藤司副院長(56)ら九人の医師、看護婦らが飛び出すのと同時だった、という。

後藤副院長ら三人の医師は入院患者の手術が終わったばかりで、緑色の手術着と手術帽、スリッパのまま。頭から血を流し、骨折した負傷者で現場はごった返していたが、一時間にわたって約百人を応急処置、病院への搬送を指示した。

この事故で、消防局は府の救急医療センター（吹田市）を通じて府医師会や大阪赤十字病院（天王寺区）に応援を要請したが、結局、現場に間に合ったのは同病院のチームだけだった。

大腸がん患者の摘出手術を終えたばかりだった外科の北村彰英さん(44)は「大事故の現場は初めてだったので、無我夢中だった。もっと早く連絡態勢が機能していたら、負傷者に不安をあたえず、スムーズに搬送できたのですが」と話している。

福利厚生　たくさんの笑顔

ビアパーティー

スキー・スノボーツアー

稲荷神社祭礼

屋上の薬力大明神　御劔(みつるぎ)大明神
（創立15周年記念史（1966.11.24発行）掲載）

2004年2月撮影

稲荷神社祭礼とその由来（創立40周年記念誌より引用）

中央病棟屋上に稲荷神社が奉ってありました。この社には京都伏見稲荷神社の分身として、薬力大明神、御劔大明神のご神体が奉ってあり、毎年、初午の日（2月上旬）に祭礼を行っていました。祭礼は赤白ののぼりを立て、神酒や供物ではなやかに飾り、宮司の祝詞とお祓いを受け、理事長、院長はじめ職員一同が玉串を捧げ、患者様の早期ご回復、又、職員及び家族の祈願を込め参拝、続いて護摩焚きを行います。平成24年に旧病棟の解体工事が始まる年まで受け継がれてきました。

当院に稲荷神社が奉ってある由来は、昭和25年、現在の病院敷地を入手したとき、日本冶金工業株式会社が所有していた神社をそのまま引き継ぎ改修して、前述のご神体を奉ったものです。昭和44年に病院敷地にあった社を、病棟改築の時病院屋上に移転しました。なお、鳥居は昭和53年に内藤景岳先生（病院開設者）が藍綬褒章受章を記念して改築されたものです。又、昭和53年より加賀屋天満宮宮司のお祓いを受けていました。

さまざまな風景

朝礼の風景・理念唱和（旧病棟時）

朝礼風景（現在）

さす又講習会（2005年5月）

看護部人命救助表彰式（2016年11月）

16病棟（旧療養病棟）盆踊り

16病棟（旧療養病棟）クリスマス

院内保育所クリスマス（2005年12月）

院内保育所発表会（2009年2月）

ふれあい看護体験（2013年6月）

ふれあい看護体験（2014年6月）

住吉踊り（2007年7月）

住吉踊り（2018年7月）

森ノ宮医療大学との相互連携協定 調印式

全国交通安全運動

左：2009年ビアパーティーにて

さまざまな行事準備に携わり、病院の隅々まで知り尽くす“困った時の堀部さん”で多くの職員から頼りにされる施設課・堀部氏。

数多くの写真を撮りためてくださった元総務部の川西氏。

本史作成にあたり、多大な功績を残してくださったお二人に心より感謝申し上げます。

南大阪病院附属リハビリテーションクリニック

クリニックの歩み

当院では昭和37年ころより整形外科の後療法部門として物理療法室が併設された。昭和41年整形外科より独立しリハビリテーション室と改め、整形外科疾患のみならず内科小児科等各科の機能障害患者に対する機能訓練にあたった。また健康体操指導や鍼灸士による鍼治療がおこなわれた時代もある。

昭和40年ころからわが国において理学療法士法、作業療法士法により国家資格が認定され(言語聴覚士は平成9年)　現在のリハビリテーション医療はこれらの有国家資格者によっておこなわれている。

当リハビリテーションクリニックの開設は平成24年1月であり、クリニックの1階、2階において各種器具，機械、低周波、牽引器具などをもちいておこなわれている。また通所リハビリは平成26年8月より開始されている。

南大阪病院内では12階の回復期リハビリテーション病棟の南東側に広いリハビリテーション室があり、11階病棟の東南側には心大血管リハビリテーション室が設置されている。

令和4年現在、在籍のリハビリ担当療法士は科長1名、理学療法士38名、作業療法士9名、言語聴覚士5名、産休育休2名の計55名であり、アシスタント8名、事務員1名の計64名のスタッフが在籍している。この中でリハビリテーションクリニック専属の療法士は7名であり適宜院内の療法士の応援をえて運営されている。

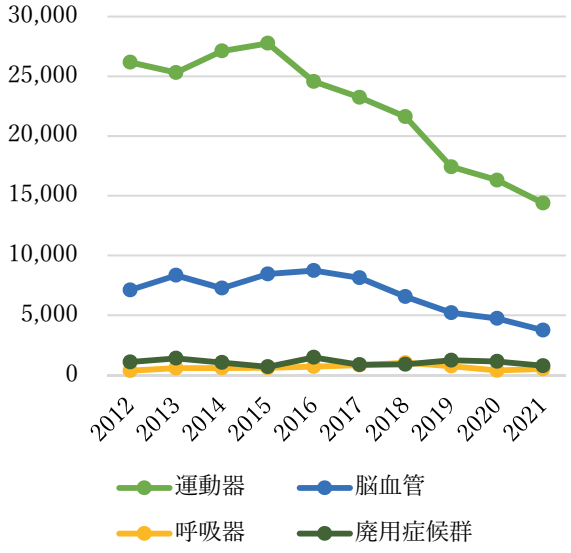
当科のリハビリテーションは　回復期、維持期の医療であり、機能の回復、能力低下の最小化、活動の積極的な改善と改善した活動の維持、そして家庭、社会活動への積極的なアプローチを目指しています。

リハビリテーション医療の主な対象は脳血管障害、頭部外傷、運動器の疾患、外傷、脊髄損傷、神経系疾患、下肢の切断後、循環器疾患、呼吸器疾患、糖尿病、肥満、周術期の身体機能障害、摂食嚥下障害、顔面神経麻痺、音声障害、骨粗鬆症、熱傷、サルコペニア、ロコモティブシンドロムなどがあげられ広範な疾患が対象になります。

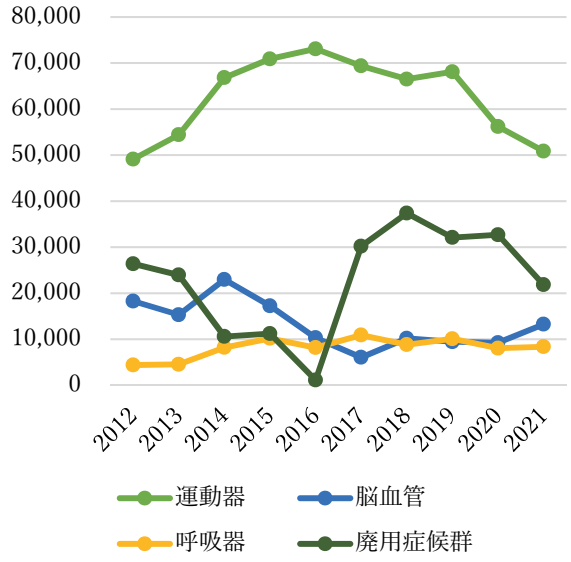
文責：飛田忠之

業務実績統計

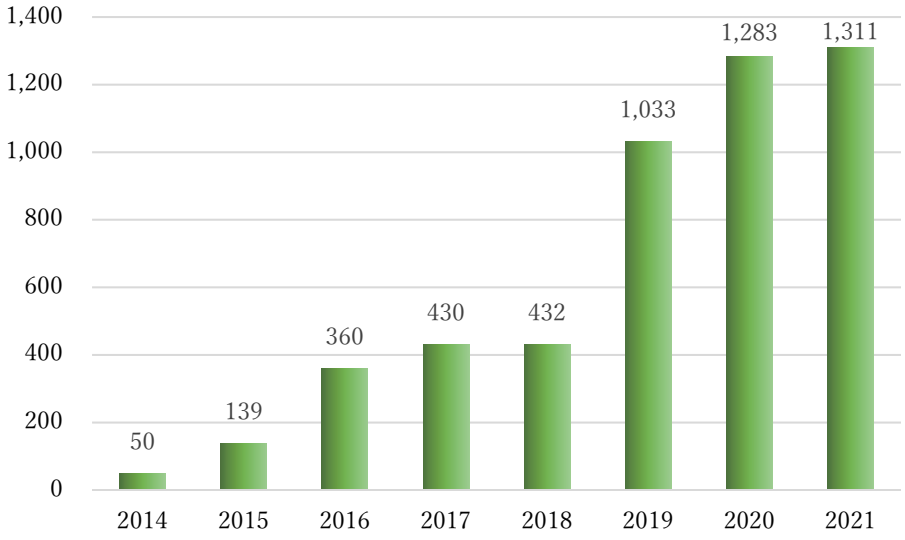
リハビリテーションクリニック（単位数）



南大阪病院全体リハビリ（単位数）



通所リハビリテーション（件数実績）



南大阪総合健診センター

所長
濱田　偉文

南大阪総合健診センターの沿革

1954（昭和29）年11月
老年医学研究所(南大阪病院難波分院併設)開設
予防医学・老年病の研究開始
（国内第2号の人間ドック）
・所在地；大阪市南区久左衛門町8番地

1978（昭和53）年11月
南大阪健診センター開設
（3時間ドック・成人病健診を実施）
・所在地：大阪市南区久左衛門町8番地

1981（昭和56）年9月
南大阪健診センターを南大阪病院本院に移設
（一泊・3時間ドック）
・所在地：大阪市住之江区東加賀屋1-18-18

1987（昭和62）年11月28日
南大阪総合健診センター開設
（所長　小畑大吉先生）
健康管理部（南大阪クリニック）
健康増進部（南大阪ファンクス）
＊厚生省認定健康増進施設第1号認定(第890001号)
・所在地：大阪市住之江区東加賀屋2-11-18
（本院南隣）

1992（平成4）年4月
大阪市国民健康保険加入者の健診開始

1998（平成10）年4月
政府管掌健康保険指定施設となる

1999（平成11）年4月
午後の健診も開始

2001（平成13）年9月30日
健康増進部（南大阪ファンクス）を廃止

2002（平成14）年4月1日
南大阪総合健診センター（健康管理部）所長に
鈴木榮太郎先生就任

2009（平成21）年9月30日
南大阪病院横（住之江区東加賀屋2-11-18）の営業中止

2009（平成21）年11月2日
南大阪総合健診センターとして業務再開
（南大阪クリニックとして新築移転、
1階：総合健診センター、2階：透析センター）
・所在地：大阪市西成区南津守7-14-32

2016（平成28）年12月
マンモグラフィ装置入れ替え

2018（平成30）年1月
上部消化管X線TVシステム2台入れ替え

2022（令和4）年 2月
無散瞳型眼底カメラ装置入れ替え

南大阪総合健診センターの概説

南大阪総合健診センターの歴史は、当法人創始者内藤景岳先生により1954（昭和29）年11月に国内第2号の人間ドック施設として老年医学研究所が開設され、予防医学・老年病の研究が開始されたのが始まりでした。その後1978（昭和53）年11月に南大阪健診センターが開設され、3時間ドック・成人病健診が本格的に行われるようになりました。1987（昭和62）年11月28日には、『人間の幸福は健康に在り』という設立理念により、健康管理部（南大阪クリニック）と健康増進部（南大阪ファンクス）を備えた南大阪総合健診センター（所長　小畑大吉先生）が厚生省認定健康増進施設第

1号認定（第890001号）施設として南大阪病院南隣（大阪市住之江区東加賀屋2-11-18）に独立した専門施設として開設されました。その後2001（平成13）年9月30日、健康増進部（南大阪ファンクス）は廃止されました。

2002（平成14）年４月、同センター所長は鈴木榮太郎先生に引き継がれ、その後2009（平成21）年11月2日、大阪市西成区南津守7-14-32に南大阪クリニック（1階：総合健診センター　2階：透析センター）として新築移転（所長；鈴木榮太郎先生2009年11月～2021年8月、2021年9月～濱田偉文：文責者）し、現在に至っています。

当センターでは、午前8時から熟練した事務職員が受付を開始し、安全かつスムーズに健診が進むように受診者に丁寧な説明をした上で、８時30分から健診業務を開始し、約1時間30分程度で内科診察後健診が終了します。健診の個々の結果報告書は当センター職員の手で当日に作成され、翌日には受診者に発送されます（オプション検査や細胞診など結果に日数が必要な場合を除く）。

この20年間の2002年度から2021年度の当センター受診者件数は9,751人から10,701人でした。

当センターでは、鈴木榮太郎前所長及び和泉放射線科専門医、溝口産婦人科専門医の指揮の元、がん等の早期発見に重点を置き、胸部Ｘ線検査、上部消化管検査（胃部Ｘ線検査、胃部内視鏡検査、ABC 検診）、便潜血検査、腹部超音波検査、乳房検査（マンモグラフィ検査、乳房超音波検査）、子宮頸部細胞診の項目で要精密検査・要治療・要再検となった受診者に対して、青木看護主任を中心に医療機関の受診勧奨と受診後の追跡調査を行っています。健診受診日から３か月毎に２回、該当者に対して精検結果を返信いただく文書と未受診者に対する受診勧奨文を送付しています。返信いただいた追跡調査の結果により精検受診率・がん件数等を分析し現状の把握を行うとともに未受診者の医療機関受診に繋がるよう努めています。

上記方針により行った2019年度と2020年度の追跡調査の結果の要約は、別表③の通りです。健診受診者全体では要精検判定者は２年間の平均では4.9%（2019年度：5.0%、2020年度：4.7%）でした。検査別要精検判定とした受診者は、２年間平均では ABC 検診が22%と一番高く、便潜血検査6.5%、乳房超音波検査が5.2%、子宮頸部細胞診3.8%、腹部超音波検査3.1%、マンモグラフィ検査2.0%、胃部内視鏡検査 0.6%、胸部Ｘ線検査0.4%、胃部Ｘ線検査0.2%の順でした。

人間ドック健診に限って調べても、要精検受診者は2年間の平均では4.8%であり、検査別要精検判定率も受診者全体でほぼ同様の順番でした。

要精検者で精検受診された方は、全体では2019年度68.1%、2020年度68.0%で、2年平均は68.1%でした。その中でもマンモグラフィ検査の要精検者については、2019年度100%、2020年度92.9%と受診率が一番高く、乳房超音波検査や子宮頸部細胞診の要精検者における精検受診率がそれに続き高率でした。しかし、胃部Ｘ線検査、便潜血検査の要精検者における精検受診率は48.1%、57.2%と低く、今後の課題を要する事項であります。

当センターの直近2年間のがん発見率は、2019年度、2020年度ともに0.11%であり、２年間平均の検査別がん発見率は、乳がんに関してはマンモグラフィ検査例の0.39%、乳房超音波検査例の0.09%、マンモグラフィ＋乳房超音波検査例の0.75%に見つかり、子宮頸部がんは頸部細胞診施行例の0.03%に見つかりました。大腸がんは便潜血検査例の0.18%で見つかり、胃がんは胃部Ｘ線検査例の0.02%、胃部内視鏡検査例の0.20%、ABC検診例の0.20%に見つかりました。肺がんは胸部Ｘ線検査例の0.02%に見つかり、腎臓がんや前立腺がんは腹部超音波検査例で計0.03%に見つかりました。

実際のがん発見件数は２年間で59件（大腸がん26例、乳がん19例、胃がん7例、肺がん4例、子宮頸がん1例、腎臓がん1例、前立腺がん1例）であり、厚生労働省の「平成29年度地域保健健康増進事業報告」と同等の結果でありましたが、要精検受診者で精検受診されてない方をゼロに近づけるように、より積極的な勧奨方法を作り上げることが、今後早期にがんを発見し、生命を守るために必要

と考えています。

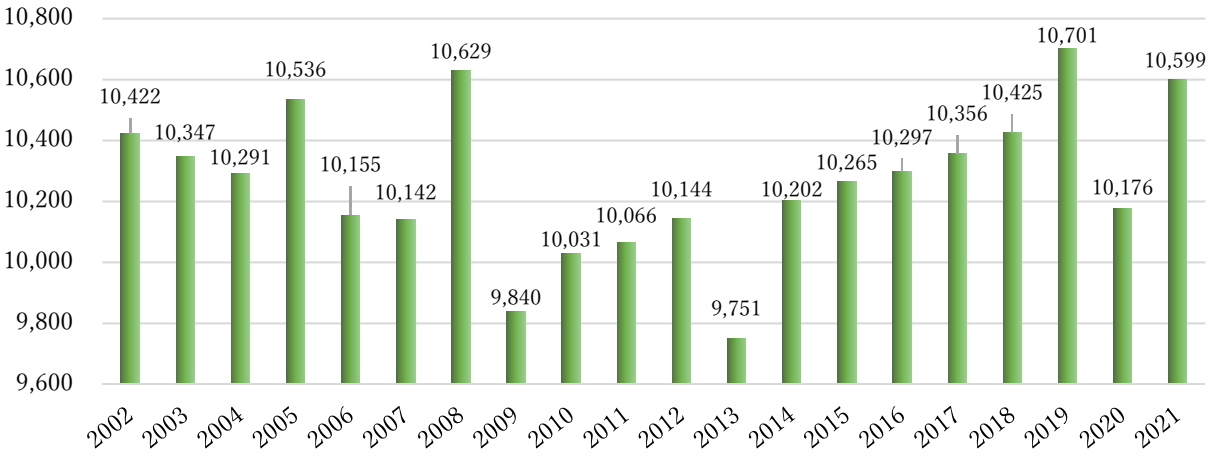
その他、生活習慣病である諸検査の要治療率、要精密検査率等は、別表④－1、2の通りであり、脂質異常症の要治療者率が20％と一番高く、高血圧症が5.6％、高尿酸血症5.2％、糖尿病が4.3％と続きました。生活習慣病の多くは、初期は自覚症状がないサイレントキラーであり、健診後の面談時等において、医師や看護師等により放置したらどのような合併症が生じてくるか等、治療の必要性の十分な説明が必要となってくると考えています。

文責：濱田偉文

南大阪総合健診センター建物外観（ファンクス１階）

健診統計資料

① 受診者数（2002～2021年度）



上記のうち、放射線科関連検査受診者数[再掲]（2017～2021年度）

年度	胸部X線	胃部X線	胃部内視鏡	マンモグラフィ	頭部 MRI	頭部 CT	胸部 CT	胸腹部CT セット
2017	9,644	5,607	614	1,793	135	23	75	15
2018	9,698	5,602	850	1,771	140	36	41	71
2019	10,010	5,755	992	1,853	141	23	58	44
2020	9,491	5,351	972	1,799	112	15	44	39
2021	9,879	5,438	1,123	1,878	122	23	62	52

② コース別、年齢・男女別受診状況（2019年度・2020年度）

健診コース		2019年度			2020年度		
		受診者数	（内　訳）		受診者数	（内　訳）	
			男	女		男	女
人間ドック		2,115	1,150	965	1,899	1,025	874
（内訳）	39歳以下	131	67	64	130	75	55
	40歳代	589	334	255	500	265	235
	50歳代	675	362	313	619	340	279
	60歳代	520	265	255	467	232	235
	70歳以上	200	122	78	183	113	70
生活習慣病予防健診		6,017	3,604	2,413	5,858	3,443	2,415
（内訳）	39歳以下	1,072	595	477	1,028	560	468
	40歳代	2,093	1,264	829	1,884	1,111	773
	50歳代	1,807	1,069	738	1,893	1,106	787
	60歳代	887	561	326	886	550	336
	70歳以上	158	115	43	167	116	51
定期健康診断		2,048	1,100	948	1,883	971	912
（内訳）	39歳以下	1,486	791	695	1,388	710	678
	40歳代	199	114	85	168	87	81
	50歳代	178	95	83	150	72	78
	60歳代	128	67	61	117	66	51
	70歳以上	57	33	24	60	36	24
特定健診（単独）		302	64	238	281	62	219
（内訳）	39歳以下	4	0	4	1	1	
	40歳代	82	6	76	88	17	71
	50歳代	96	15	81	68	12	56
	60歳代	70	19	51	86	17	69
	70歳以上	50	24	26	38	15	23
大阪市民検診（※）		122	1	121	120	0	120
（内訳）	39歳以下	11		11	5		5
	40歳代	45		45	45		45
	50歳代	32	1	31	27		27
	60歳代	23		23	26		26
	70歳以上	11		11	17		17
その他の健診		97	23	74	135	22	113
（内訳）	39歳以下	47	13	34	56	9	47
	40歳代	19	2	17	28	2	26
	50歳代	23	7	16	38	8	30
	60歳代	8	1	7	13	3	10
	70歳以上	0	0	0	0	0	0
合　　計		10,701	5,942	4,759	10,176	5,523	4,653
（内訳）	39歳以下計	2,751	1,466	1,285	2,608	1,355	1,253
	40歳代計	3,027	1,720	1,307	2,713	1,482	1,231
	50歳代計	2,811	1,549	1,262	2,795	1,538	1,257
	60歳代計	1,636	913	723	1,595	868	727
	70歳以上計	476	294	182	465	280	185

※大阪市保健事業における子宮頸がん・乳がん検診、風疹抗体検査

③ がん発見に関するフォローアップ（2019年度・2020年度）

【全件】

項目	年度		マンモグラフィ	乳房超音波	子宮頸部細胞診	胃部X線	胃部内視鏡	ABC検診	胸部X線	腹部超音波	便潜血	平均(%)
受診者数	2019		1,853	563	1,930	5,755	991	444	10,010	3,470	7,620	
	2020		1,796	583	1,872	5,357	974	252	9,490	3,244	7,262	
要精密検査	2019	人数	31	32	90	13	6	95	39	134	513	5.0%
		率(%)	1.7	5.7	4.7	0.2	0.6	21.4	0.4	3.9	6.7	
	2020	人数	42	27	55	10	6	57	38	70	458	4.7%
		率(%)	2.3	4.6	2.9	0.2	0.6	22.6	0.4	2.2	6.3	
要治療	2019	人数	0	0	0	6	41	0	0	0	0	0.5%
		率(%)	0.0	0.0	0.0	0.1	4.1	0.0	0.0	0.0	0.0	
	2020	人数	0	0	0	7	31	0	0	0	0	0.4%
		率(%)	0.0	0.0	0.0	0.1	3.2	0.0	0.0	0.0	0.0	
再検査	2019	人数	0	44	0	0	0	0	0	33	0	1.0%
		率(%)	0.0	7.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	
	2020	人数	0	13	0	0	0	0	0	24	0	0.3%
		率(%)	0.0	2.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	
合計	2019	人数	31	76	90	19	47	95	39	167	513	6.5%
		率(%)	1.7	13.5	4.7	0.3	4.7	21.4	0.4	4.8	6.7	
	2020	人数	42	40	55	17	37	57	38	94	458	5.4%
		率(%)	2.3	6.9	2.9	0.3	3.8	22.6	0.4	2.9	6.3	
フォローアップ受診	2019	人数	31	59	71	7	33	59	24	110	296	67.9%
		率(%)	100.0	77.6	78.9	36.8	70.2	62.1	61.5	65.9	57.7	
	2020	人数	39	33	37	8	26	35	28	41	259	66.1%
		率(%)	92.9	82.5	67.3	47.1	70.3	61.4	73.7	43.6	56.6	
精密検査受診	2019	人数	31	28	71	6	3	59	24	93	296	68.1%
		率(%)	100.0	87.5	78.9	46.2	50.0	62.1	61.5	69.4	57.7	
	2020	人数	39	23	37	5	4	35	28	41	259	68.0%
		率(%)	92.9	85.2	67.3	50.0	66.7	61.4	73.7	58.6	56.6	

《看護科：2019年度、2020年度フォローアップ（追跡調査）統計資料より抜粋》

③ がん発見に関するフォローアップ（2019年度・2020年度）

【人間ドック（内数）】

項目	年度		マンモグラフィ	乳房超音波	子宮頸部細胞診	胃部X線	胃部内視鏡	ABC検診	胸部X線	腹部超音波	便潜血	平均(%)
受診者数	2019		501	189	500	1,611	352	166	2,060	2,113	2,067	
	2020		452	186	432	1,389	337	68	1,850	1,897	1,842	
要精密検査	2019	人数	4	11	16	6	1	36	4	86	147	4.8%
		率(%)	0.8	5.8	3.2	0.4	0.3	21.7	0.2	4.1	7.1	
	2020	人数	9	12	7	3	1	16	12	42	119	4.8%
		率(%)	2.0	6.5	1.6	0.2	0.3	23.5	0.6	2.2	6.5	
要治療	2019	人数	0	0	0	0	15	0	0	0	0	0.5%
		率(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	
	2020	人数	0	0	0	1	10	0	0	0	0	0.3%
		率(%)	0.0	0.0	0.0	0.1	3.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
再検査	2019	人数	0	16	0	0	0	0	0	20	0	1.0%
		率(%)	0.0	8.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	0.0	
	2020	人数	0	2	0	0	0	0	0	16	0	0.2%
		率(%)	0.0	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	
合計	2019	人数	4	27	16	6	16	36	4	106	147	6.4%
		率(%)	0.8	14.3	3.2	0.4	4.5	21.7	0.2	5.0	7.1	
	2020	人数	9	14	7	4	11	16	12	58	119	5.4%
		率(%)	2.0	7.5	1.6	0.3	3.3	23.5	0.6	3.1	6.5	
フォローアップ受診	2019	人数	4	22	10	3	10	20	4	79	105	73.1%
		率(%)	100.0	81.5	62.5	50.0	62.5	55.6	100.0	74.5	71.4	
	2020	人数	8	12	3	3	6	10	10	23	85	67.1%
		率(%)	88.9	85.7	42.9	75.0	54.5	62.5	83.3	39.7	71.4	
精密検査受診	2019	人数	4	9	10	3	0	20	4	67	105	66.6%
		率(%)	100.0	81.8	62.5	50.0	0.0	55.6	100.0	77.9	71.4	
	2020	人数	8	11	3	2	0	10	10	23	85	62.5%
		率(%)	88.9	91.7	42.9	66.7	0.0	62.5	83.3	54.8	71.4	

《看護科：2019年度、2020年度フォローアップ（追跡調査）統計資料より抜粋》

④-1 諸検査の異常頻度（2019年度）

検査種別		受診者数 (A)	（内訳）							
			異常なし	軽度異常	要経過観察・再検査	要治療 (B)	% (B/A×100)	要精密検査 (C)	% (C/A×100)	治療中
血 圧		10,231	6,912	733	509	571	(5.6%)			1,506
（内訳）	39歳以下	2,660	2,379	131	66	54	(2.0%)			30
	40歳代	2,893	2,126	226	138	176	(6.1%)			227
	50歳代	2,629	1,533	221	154	200	(7.6%)			521
	60歳代	1,584	732	119	118	107	(6.8%)			508
	70歳以上	438	134	33	32	34	(7.8%)			205
安静時心電図		9,154	2,315	5,408	605			715	(7.8%)	111
（内訳）	39歳以下	2,026	526	1,302	77			120	(5.9%)	1
	40歳代	2,738	746	1,645	139			193	(7.0%)	15
	50歳代	2,478	666	1,401	186			198	(8.0%)	27
	60歳代	1,501	316	845	141			155	(10.3%)	44
	70歳以上	411	61	215	62			49	(11.9%)	24
尿一般		10,452	6,483	2,944	711			271	(2.6%)	43
（内訳）	39歳以下	2,667	1,389	1,078	143			51	(1.9%)	6
	40歳代	2,962	1,767	876	239			72	(2.4%)	8
	50歳代	2,754	1,884	588	185			86	(3.1%)	11
	60歳代	1,604	1,126	311	115			41	(2.6%)	11
	70歳以上	465	317	91	29			21	(4.5%)	7
血液・貧血		9,736	6,832	1,479	1,237	142	(1.5%)	25	(0.3%)	21
（内訳）	39歳以下	2,261	1,625	334	263	27	(1.2%)	8	(0.4%)	4
	40歳代	2,863	1,979	452	364	58	(2.0%)	4	(0.1%)	6
	50歳代	2,655	1,869	431	321	20	(0.8%)	8	(0.3%)	6
	60歳代	1,543	1,091	202	224	19	(1.2%)	3	(0.2%)	4
	70歳以上	414	268	60	65	18	(4.3%)	2	(0.5%)	1
腎機能		9,446	8,045	17	1,297	42	(0.4%)			45
（内訳）	39歳以下	2,122	2,025	1	89	1	(0.0%)			6
	40歳代	2,786	2,553	6	209	9	(0.3%)			9
	50歳代	2,540	2,103	5	410	10	(0.4%)			12
	60歳代	1,543	1,098	4	415	15	(1.0%)			11
	70歳以上	455	266	1	174	7	(1.5%)			7
尿酸		9,061	7,445		853	491	(5.4%)			272
（内訳）	39歳以下	1,805	1,507		179	110	(6.1%)			9
	40歳代	2,755	2,234		297	165	(6.0%)			59
	50歳代	2,525	2,073		218	140	(5.5%)			94
	60歳代	1,534	1,263		130	59	(3.8%)			82
	70歳以上	442	368		29	17	(3.8%)			28
脂質代謝		9,924	4,563	339	2,059	1,898	(19.1%)	22	(0.2%)	1,043
（内訳）	39歳以下	2,243	1,499	74	399	233	(10.4%)	11	(0.5%)	27
	40歳代	2,912	1,463	102	634	566	(19.4%)	5	(0.2%)	142
	50歳代	2,716	978	95	612	681	(25.1%)	3	(0.1%)	347
	60歳代	1,591	474	52	328	360	(22.6%)	2	(0.1%)	375
	70歳以上	462	149	16	86	58	(12.6%)	1	(0.2%)	152
肝機能		9,924	6,680	502	1,452			1,253	(12.6%)	37
（内訳）	39歳以下	2,243	1,698	66	219			260	(11.6%)	
	40歳代	2,912	1,931	144	427			407	(14.0%)	3
	50歳代	2,716	1,656	163	490			393	(14.5%)	14
	60歳代	1,591	1,073	101	235			167	(10.5%)	15
	70歳以上	462	322	28	81			26	(5.6%)	5
糖代謝		10,004	7,971	62	1,092	428	(4.3%)			451
（内訳）	39歳以下	2,492	2,317	14	109	34	(1.4%)			18
	40歳代	2,864	2,434	24	263	84	(2.9%)			59
	50歳代	2,604	1,938	9	353	153	(5.9%)			151
	60歳代	1,579	1,004	10	293	110	(7.0%)			162
	70歳以上	334	204	2	52	34	(10.2%)			42

④-2 諸検査の異常頻度（2020年度）

検査種別		受診者数 (A)	（内訳）							
			異常なし	軽度異常	要経過観察・再検査	要治療 (B)	% (B/A×100)	要精密検査 (C)	% (C/A×100)	治療中
血 圧		9,901	6,618	669	451	553	(5.6%)			1,610
（内訳）	39歳以下	2,525	2,273	102	65	49	(1.9%)			36
	40歳代	2,640	1,947	175	126	148	(5.6%)			244
	50歳代	2,730	1,584	224	154	201	(7.4%)			567
	60歳代	1,558	673	131	82	123	(7.9%)			549
	70歳以上	448	141	37	24	32	(7.1%)			214
安静時心電図		8,872	2,349	5,153	584	1	(0.0%)	649	(7.3%)	136
（内訳）	39歳以下	1,926	555	1,207	65			93	(4.8%)	6
	40歳代	2,483	722	1,462	119			161	(6.5%)	19
	50歳代	2,604	710	1,471	188			199	(7.6%)	36
	60歳代	1,461	304	818	152	1	(0.1%)	138	(9.4%)	48
	70歳以上	398	58	195	60			58	(14.6%)	27
尿一般		9,901	6,134	2,753	671			297	(3.0%)	46
（内訳）	39歳以下	2,530	1,336	1,004	144			38	(1.5%)	8
	40歳代	2,638	1,551	786	203			92	(3.5%)	6
	50歳代	2,730	1,852	574	191			102	(3.7%)	11
	60歳代	1,556	1,088	305	102			51	(3.3%)	10
	70歳以上	447	307	84	31			14	(3.1%)	11
血液・貧血		9,232	6,367	1,519	1,183	122	(1.3%)	20	(0.2%)	21
（内訳）	39歳以下	2,166	1,580	322	239	17	(0.8%)	3	(0.1%)	5
	40歳代	2,536	1,747	409	308	57	(2.2%)	9	(0.4%)	6
	50歳代	2,648	1,753	506	363	15	(0.6%)	6	(0.2%)	5
	60歳代	1,480	1,032	218	208	17	(1.1%)	1	(0.1%)	4
	70歳以上	402	255	64	65	16	(4.0%)	1	(0.2%)	1
腎機能		9,187	7,834	17	1,246	42	(0.5%)			48
（内訳）	39歳以下	2,052	1,961	3	78	2	(0.1%)			8
	40歳代	2,536	2,310	5	208	6	(0.2%)			7
	50歳代	2,650	2,210	5	412	12	(0.5%)			11
	60歳代	1,516	1,100	1	390	14	(0.9%)			11
	70歳以上	433	253	3	158	8	(1.8%)			11
尿酸		8,825	7,276		788	445	(5.0%)			316
（内訳）	39歳以下	1,751	1,456		171	115	(6.6%)			9
	40歳代	2,513	2,069		242	138	(5.5%)			64
	50歳代	2,639	2,150		227	132	(5.0%)			130
	60歳代	1,503	1,247		119	52	(3.5%)			85
	70歳以上	419	354		29	8	(1.9%)			28
脂質代謝		9,407	3,956	281	2,034	2,043	(21.7%)	13	(0.1%)	1,080
（内訳）	39歳以下	2,146	1,352	75	413	280	(13.0%)	4	(0.2%)	22
	40歳代	2,591	1,196	79	626	541	(20.9%)	3	(0.1%)	146
	50歳代	2,690	870	62	612	764	(28.4%)	3	(0.1%)	379
	60歳代	1,541	410	49	310	384	(24.9%)	2	(0.1%)	386
	70歳以上	439	128	16	73	74	(16.9%)	1	(0.2%)	147
肝機能		9,407	6,360	484	1,324			1,208	(12.8%)	31
（内訳）	39歳以下	2,146	1,618	65	224			238	(11.1%)	1
	40歳代	2,591	1,715	142	361			368	(14.2%)	5
	50歳代	2,690	1,669	179	427			402	(14.9%)	13
	60歳代	1,541	1,053	70	237			169	(11.0%)	12
	70歳以上	439	305	28	75			31	(7.1%)	
糖代謝		9,680	7,695	53	1,057	417	(4.3%)			458
（内訳）	39歳以下	2,365	2,209	13	92	36	(1.5%)			15
	40歳代	2,612	2,208	14	246	83	(3.2%)			61
	50歳代	2,707	2,000	14	368	147	(5.4%)			178
	60歳代	1,549	1,017	5	272	107	(6.9%)			148
	70歳以上	447	261	7	79	44	(9.8%)			56

⑤ 南大阪病院及び他医療機関への紹介状況

医療機関名	科	2019 年度	2020 年度	合計
南大阪病院	消化器内科	222 名	223 名	445 名
	乳腺外科	51 名	70 名	121 名
	循環器内科	24 名	27 名	51 名
	泌尿器科	16 名	20 名	36 名
	総合内科	12 名	16 名	28 名
	内科	12 名	7 名	19 名
	呼吸器外科		12 名	12 名
	呼吸器内科	10 名		10 名
	眼科	4 名	3 名	7 名
	外科		1 名	1 名
小　　計		**351 名**	**379 名**	**730 名**
大阪市立大学医学部・附属病院		2 名	3 名	5 名
大阪急性期・総合医療センター		2 名	1 名	3 名
関西医科大学附属病院		2 名		2 名
堺市立総合医療センター		2 名		2 名
育和会記念病院		2 名		2 名
大阪国際がんセンター		1 名	1 名	2 名
市立豊中病院		1 名		1 名
市立貝塚病院		1 名		1 名
りんくう総合医療センター		1 名		1 名
近畿中央呼吸器センター		1 名		1 名
大阪医療センター		1 名		1 名
大阪労災病院		1 名		1 名
大阪府済生会野江病院		1 名		1 名
府中病院		1 名		1 名
浅香山病院		1 名		1 名
オーク住吉産婦人科		1 名		1 名
大阪府済生会中津病院			2 名	2 名
大阪はびきの医療センター			1 名	1 名
北野病院			1 名	1 名
倉敷成人病センター			1 名	1 名
小　　計		**21 名**	**10 名**	**31 名**
総　　計		**372 名**	**389 名**	**761 名**

概要

- 名　　称　南大阪クリニック　南大阪総合健診センター
- 所 在 地　大阪市西成区南津守７丁目１４番３２号
- 敷地面積　1,919.57㎡
- 建築面積　873.09㎡
- 延床面積　816.16㎡
- 施設認定　日本総合健診医学会「優良健診施設」
  日本乳がん検診精度管理中央機構「マンモグラフィ健診施設画像認定施設」
  健康評価施設査定機構「特定健診　優良施設」

- 健診センター設立理念

主要な使用機器等

種　別	メーカー　※購入時	機　種	個数
総合型健診情報システム	キヤノンメディカルシステムズ㈱	AsosiadoIV（ソフトウエア）	-
胸部X線装置	〃	KXO-32S/J3及びCXDI	1
胃透視用X線テレビ装置	〃	DREX-RF80	2
マンモグラフィ装置	〃	MGU-1000D	1
超音波装置	〃	Xario200	2
〃	〃	XarioXG	1
自動血圧計	オムロンコーリン㈱（※）	HBP-9030	2
PWV（脈波）	〃	BP-203RPEⅢ	1
自動身長・体重計	㈱エー・アンド・デイ	AD-6228A	1
心電計	日本光電工業㈱	ECG2550	2
肺機能検査装置	㈱チェスト	HI-801	1
聴力検査計	リオン㈱	AA-47	2
自動視力計	㈱ニデック	NV-300	2
無散瞳眼底写真装置	㈱トプコンメディカルジャパン	NW400	1
非接触眼圧計	キヤノンメドテックサプライ㈱	TX-20P	1
骨密度測定装置	富士フイルム ヘスルケアシステムズ㈱	AOS-100SA	1
パルスオキシメーター	スター・プロダクト㈱	オニックス Vantage 9590	1
AED	フクダ電子㈱	ハートスタート FRx	1

職員数

（2022.8.1現在）

職　種	正職員	嘱託・非常勤
内科診察医	2	
婦人科医	1	2
放射線科医	1	
乳腺外科医		1
眼 科 医		1
看 護 師	3	
臨床検査技師		3 ＊
診療放射線技師		2 ＊
事務職員	6	8
施 設 員		2
計	**13**	**19**

＊母体病院（南大阪病院）より派遣

前所長について

（2002年4月～2021年8月）

職　種	役　職	氏　名
医　師	所　長（前）	鈴木 榮太郎

備考

日本総合健診医学会評議員

人間ドック健診専門医・指導医

職員

（2022.8.1現在）

職　種	役　職	氏　名	備　　考
医　師	所　長	濱田 偉文	社会医療法人 景岳会 理事・循環器専門医
医　師	副所長	和泉 正幸	放射線診断専門医・人間ドック健診専門医
医　師	部　長	村上 康弘	総合内科専門医
医　師		溝口 静子	産婦人科専門医
看護師	主　任	青木 香織	
		篠﨑 智美	
		田尻 晴香	

職　種	役　職	氏　名			
事　務	事務長	岡浦 隆則			
	参　与	宮本 孝幸			
	主　任	宮家 加代子			
	リーダー	千葉 佳恵	平原 佳代子	栄 幸美	
		高野 敏子	谷山 律子	種子田 寿美	新居 満
		三好 真紀子	村尾 和代	田中 久美子	東野 和代
施　設		河野 功	白尾 眞博		

南大阪総合健診センター

血液浄化センター

南大阪病院における血液浄化の歴史

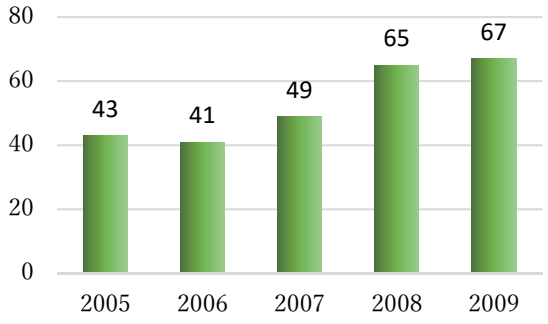
日本の人工腎臓を用いた血液透析は1967年に広島大学、新潟大学の附属病院において国内で初めて実施され、南大阪病院においては翌年の1968年10月に外科 伊香雅文先生、福田義人先生、山川 眞先生らによって人工腎臓による血液透析が初めて実施された。以後、術後や急性腎不全などに対してHCUや病棟個室内での急性期に対する透析や吸着などの血液浄化療法が実施された。

透析室の開設（慢性腎不全に対する維持透析開始）

2004年5月：庄司繁市先生（現白鷺病院院長）が赴任。腎内分泌・代謝部門を担当し、腎臓病教室（第1回：同年12月6日）を開催。腎不全保存期から透析導入、維持透析まで慢性腎不全に対する治療体制整備に着手され、2005年4月に「透析室（15床）」を旧病院管理棟3階に開設した。同年の透析導入患者数は43名であった。

2006年：透析ベッド5床を増設し計20床とし維持透析患者増加に備えたが、患者数増加の勢いは収まらず引き続き更なる透析設備拡張が検討された。また、ブラッドアクセス（シャント）管理において、当院循環器内科によるカテーテル治療として「内シャント造影検査」及び「シャントＰＴＡ」が実施されるようになりその実施件数が増加した。

透析室 維持透析患者数の推移（人）



南大阪クリニック透析センターの開設

2009年12月：鈴木榮太郎先生を施設長とし「南大阪クリニック」を開設。1階を南大阪総合健診センター、2階に透析センターの合同施設となった。南大阪病院透析室の外来維持透析患者67名すべてが転医し診療が始まった。また、「送迎サービス」は透析センター開設と同時に開始された。

＜概要＞

（2022年9月現在）

名称：景岳会　南大阪クリニック透析センター

所在地：大阪市西成区南津守7丁目14番32号　2階

施設長：濱田偉文

透析センター事務長：野口浩一

看護主任：塩田美加

透析ベッド数：40床（個室1床含む）

透析室（外来）の閉鎖、入院維持透析の継続

南大阪クリニック透析センターを開設し、2009年12月：新病院改築のため入院透析を除くすべての外来透析患者を透析センターへ転院とし、南大阪病院の外来維持透析室は閉鎖となった。以後、入院維持透析は旧病院管理棟3階透析室にて治療を継続し、新病院完成後は10階透析治療室（7床）にて入院透析を実施した。

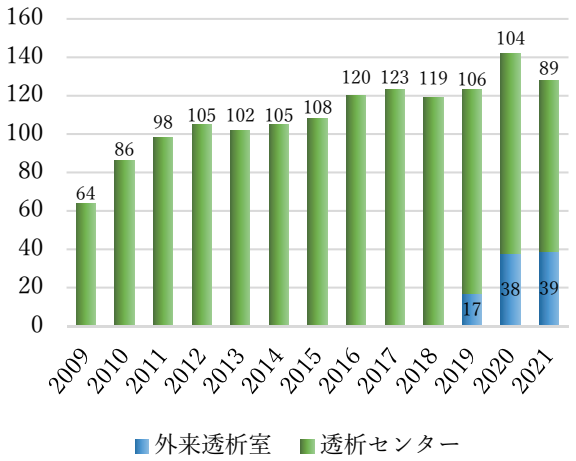
外来透析室開設

2019年10月「外来透析室（30床）」を南大阪病院外来棟4階に開設。
透析センターより維持透析患者17名が転医し、2009年12月以来、約10年ぶりに外来維持透析診療再開となった。

＜概要＞

名　　称：外来透析室
開 設 日：2019年10月1日
開設場所：南大阪病院 外来棟4階
室　　長：川口祐司 内科副部長
副 室 長：増本晃治 内科
透析ベッド数：30床（午前・午後 2クール）
治療内容：血液透析
　　血液透析ろ過（On-Line HDF）
　　血液ろ過、吸着療法各種
治療時間：午前8時30分～午後6時00分

維持透析患者総数（2009年～2021年）



血液浄化センター開設

2021年8月「外来透析室」および「南大阪クリニック透析センター」を統括管理し、患者サービスの向上および維持透析関連事業の拡大と安定的運営を目的とした「血液浄化センター」を開設した。

＜概要＞

血液浄化センター長　久米田靖郎（副院長・内科）
同　事務長　野口浩一
（臨床工学科科長・透析センター事務長 兼務）

＜設置目的＞

景岳会グループにおける外来血液浄化に係る医療の安全と信頼を高めるため、専門的学術技能の研鑽および各部門の連携を強化し、血液浄化部門の安定的運営に協力する。

- 血液浄化部門における安全対策に関する事
- 血液浄化に関する学術技術の研鑽に関する事
- 各血液浄化・透析部門および他部署の連携および効率的運営に関する事
- 人員確保および環境整備に関する事
- その他、病院管理目標を達成するに必要な事業に関する事

今後の展望

当院に通院中の維持透析患者数は2009年以降も年々増加傾向となり、透析導入年齢も高齢化している。また、透析管理技術の向上から透析患者の平均年齢も高齢化している。

現在、慢性腎不全患者に対する維持透析以外にも、特殊血液浄化として持続的血液透析濾過やエンドトキシン吸着療法、顆粒球吸着療法、自己血回収、腹水濾過濃縮再静注血漿交換療法などを行っている。また、皮膚潰瘍を有する閉塞性動脈硬化症患者の末梢血液循環の改善を目的に、血液吸着療法も行っている。

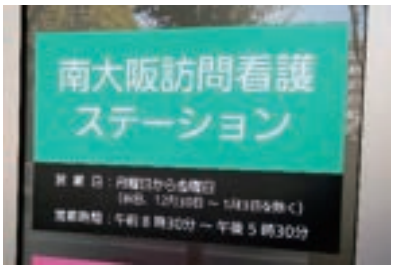
今後は、自院はもとより、他院での血液浄化療法の要求にも対応して、透析患者の受け入れも積極的に行っていく方針である。

外来透析室

南大阪クリニック透析センター

南大阪地域支援センター

地域支援センターとして、療養生活を24時間サポートする**南大阪訪問看護ステーション**、ケアプランの作成や施設入所の紹介などを行う**南大阪ハッピーセンター**、介護保険サービスを提供する**南大阪ヘルパーステーション**がございます。



南大阪訪問看護ステーション

利用者のご希望にそって、住み慣れた我が家で安心した療養生活がおくれるよう24時間サポート致します。

寝たきりや医療処置が必要な方に限らず、要支援介護度1、2の方も要介護状態の悪化を予防するために、日常生活の過ごし方などを一緒に考え支援致します。

■南大阪訪問看護ステーションの特徴

シャワー・入浴介助が全体の10%を占め、利用者の障害及びお風呂の構造設備に応じ、いろいろ工夫をこらし取り組んでいます。

在宅での看取りのお手伝い、利用者及び介護者の身体的・精神的ケアに努めています。

■サービス内容

- 全身状態の観察（血圧・脈拍・体温などの測定）
- 日常生活の援助・指導（洗髪・清拭・入浴介助・食事・排泄のお世話）
- カテーテルの管理（尿の管、経管栄養）
- 褥瘡（とこずれ）の予防・処置
- リハビリテーション（日常生活の訓練と指導）
- 介護相談や介護指導

南大阪ハッピーセンター

介護サービス計画（ケアプラン）を作成し、在宅サービス事業者との連絡調整や施設入所の紹介などを行います。

専門的な知識を持ち、所定の研修を終えた介護支援専門員（ケアマネージャー）が利用者との相談業務を担当します。

■南大阪ハッピーセンターの特徴

多数の医療スタッフに囲まれ、利用者の皆様のお身体についての悩み事も、どこよりも早く対応できます。

また、介護支援専門員たる専門知識はもちろんのこと、それ以外の幅広い知識を持った職員を配置しております。

南大阪ヘルパーステーション

当ステーションでは介護保険サービスのもと、高齢者のご家庭へお伺いして日常生活の支援をさせて頂きます。

明るく元気いっぱいのスタッフが皆さんとの出会いを楽しみにしております。みんな新しい出会いが大好きな元気な仲間たちです。在宅介護をお手伝いさせていただく為に、日々、技術と笑顔をみがいてお待ちしております。

■南大阪ヘルパーステーションの業務内容

私たちヘルパーは、在宅生活をお手伝い致します。有資格者ヘルパーがお伺いし、通院・外出・入浴・排泄・食事等の日常生活上の介護からなる身体介護と買物・調理・掃除・洗濯等を支援する家事援助、相談・助言などがあります。

お問い合わせ

住所：大阪市住之江区中加賀屋２丁目１－１９

施設	電話	FAX	営業時間
南大阪訪問看護ステーション	06-6685-6001	06-7664-3939	訪問日　月曜～金曜 訪問時間　8:30～17:30 24時間、緊急連絡体制を取っていますので、いつでも連絡できます
南大阪ハッピーセンター	06-4702-5518	06-4702-5517	月～金　9:00～17:00 （但し、祝日はお休み）
南大阪ヘルパーステーション	06-6685-7800	06-6685-7800	月～金　9:00～17:00 （但し、祝日はお休み）

地域支援センター

南大阪看護専門学校

学校長
小味渕　智雄

南大阪病院創立70周年に際して
南大阪看護専門学校の歩み

昭和48年（1973年）、南大阪高等看護学院（3年課程）として開設されて以来、令和5年（2023年）に開学50周年を迎えるにあたり、その経過を概説する。

昭和45年（1970年）、医学の急速な進歩、医療技術の多様化、専門化に伴い医療従事者の中でも看護職の重要性に配慮され、地域医療にも貢献する考えから、南大阪病院附属准看護学院を開設されたのが、南大阪病院創設者の内藤景岳氏である。

その後、昭和48年（1973年）、南大阪高等看護学院（3年課程）を開設、昭和51年（1976年）南大阪看護専門学校に改称、平成19年（2007年）に昭和59年（1984年）以来併設されていた准看護学科を廃止し今日に至っている。

本校の教育方針は、開設者内藤景岳氏による知育（技術専門教育の徹底）、徳育（人間教育の充実）、体育（スポーツによる体力造り）を柱にしている。

先ず知育に関しては、看護専門学校のカリキュラムに沿って解剖生理学、病態生理学、薬理学等を南大阪病院の診療部、診療支援部、看護部に講師を依頼し、徳育に関しては基礎分野の教育学、倫理学、社会学等は学外からそれぞれの専門講師を招き、徹底的な充実した教育を行っている。体育に関しては本校独自の科目として、健康とリクリエーションを取り入れ、また音楽、手話も特徴のある科目として継続している。

少し過去の学生生活に触れてみる。開学当初の学校の全景を写真で見ると、正門の右手に7階建ての学生寮がそして左手に2面のテニスコートがみられる。開学以来基本的には全寮制であり、寮内には立派な茶室や談話室もあり生活の場としてのほぼすべてが備わっていた。その当時は年内行事として“ひな祭り”や“成人式”も学校職員も参加して盛んに行われており、体育祭は住吉公園運動場を借り切って盛大に開催されていた。

時代を経て、この学生寮の取り壊しを含めて校舎全体の大改修が行われたのが平成21年（2009年）である。更に同年に学校のテニスコート、臨床検査技師学校の跡地に南大阪健診センター、透析センターを含む施設が完成し、現在は比較的コンパクトな学舎の外観を呈している。

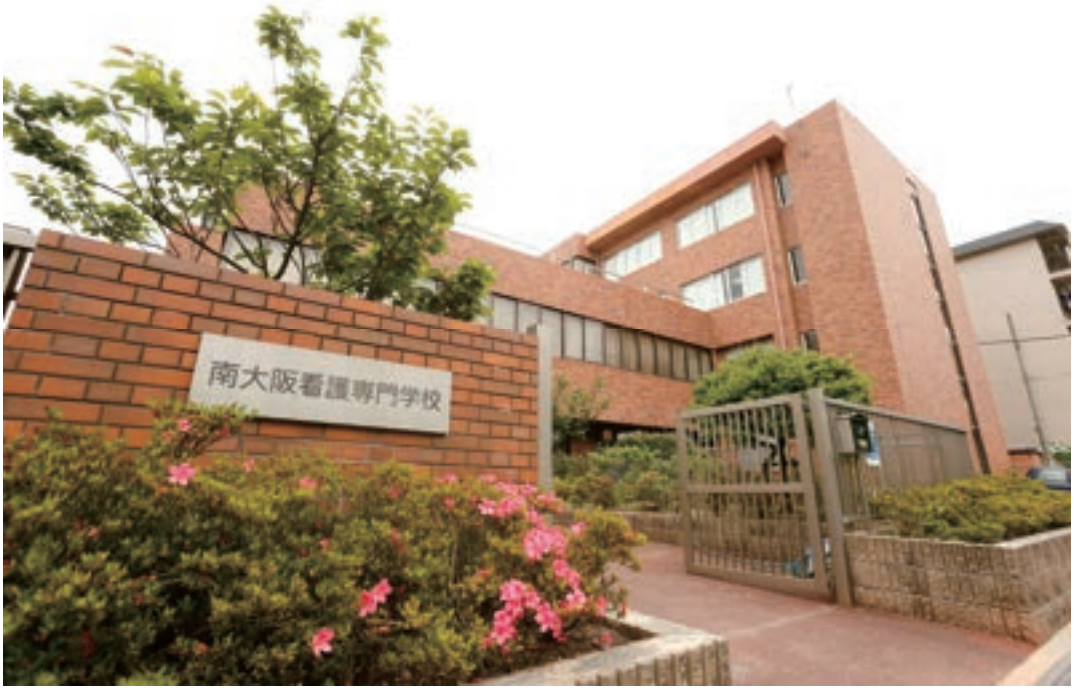
学校長は内藤景岳氏を初代とし、その後に福本圭士氏、久保正治氏、宮越一穂氏に次いで平成19年から小味渕智雄が担当し現在に至っている。

学校行事としては入学式、戴帽式、卒業式が看護専門学校の三大式典であり、学内の講堂で以前からほぼ同じ形式で行われてきた。いずれの式典でも国家、校歌を斉唱し、戴帽式にはナイチンゲール誓詞の宣誓、ナイチンゲール讃歌の合唱、卒業式には「蛍の光」など何らかの別れの歌が合唱され、比較的旧来に準じた厳粛な式典が受け継がれている。

その他の行事として体育祭は半日間と以前と比べて縮小はしたが、学内の講堂で開催され、3学年交流会も、それなりの創意工夫をこらして活発に行われている。1年生の教育キャンプは、残念ながらこの3年ほどは行えていない。

近年、多くの4年制大学に看護部が開設され、本校を含む看護専門学校にとっては受験生の確保にも工夫を要する状況が生まれてきており、更に閉校を余儀なくされた学校も少なくない。しかしながら本校は、専門学校の特色を生かして、臨床現場で即戦力として活動のできる人間性豊かな看護師の育成に努めていくことが開設者内藤景岳氏の意志に沿うものと考える。

当初に記したように、本校は令和5年（2023年）に開学50周年を迎える。学校としても記念誌を発刊する予定にしている。皆さま方にはその際に記念誌に目を通していただければ、別の視点からの学校を知ってもらえるかと思われる。



社会福祉法人　白寿会

理事長
総合施設長
新田　正尚

白寿会の設立

景岳会初代理事長　内藤景岳先生は「人の幸せは、健康に在り」をモットーに、地域医療や医療人材の育成に努めてこられました。昭和50年代後半からの著しい高齢化の加速もあり、高齢者は病院を退院したくても家族がいない為、家に帰れず、さらには、福祉サービス（ヘルパー・ショートステイ・施設入所等）の利用を希望しても当時の福祉サービスは措置であり、ヘルパー派遣に半年待たなければならない状況がありました。また、特別養護老人ホームは、低所得で身寄りがないという入居要件が設けられ、利用しづらいものでした。そこで、内藤景岳先生は、地域への貢献には医療だけではなく、福祉サービスの提供も必要であると痛感され、病院職員の駐車場として使用していた土地を社会福祉法人設立の基本財産として寄付されました。

平成6年3月31日には大阪府より社会福祉法人の認可を受け、地下１階・７階建ての特別養護老人ホーム　120床、軽費老人ホームケアハウス　40床の建築をし、　白寿苑は阪神・淡路大震災1ヶ月後の平成7年2月22日に、無事施設開設を迎える事が出来ました。当時、特別養護老人ホームとケアハウスの合築した複合施設としては大阪府下で初めての施設となりました。

白寿会の変遷

平成12年4月に少子高齢化や日本経済の破綻を契機とした、社会福祉基礎構造改革の一環として介護保険制度が導入され、福祉サービスは「措置から契約へ」変更となり、「介護の社会化」「利用者保護」「権利擁護」が謳われ、地域においては、地域住民自らの自助や互助・共助が求められました。

そのような状況下で、白寿会は、地域ニーズに応えるべくサービスを提供して参りました。

平成17年には10周年事業として隣接地に、40床のユニットタイプの特別養護老人ホームを増築し、平成22年には、南大阪病院の建て替えに伴い健診センターを移築し、1階と2階を景岳会が運営する健診センターと透析センターにしました。また、3階と4階は、白寿会が運営する介護付有料老人ホーム　つむぎ苑を開設しました。

白寿会の今後

現在、地域包括ケアシステムの構築がすすめられています。後期高齢者を中心とした単身者の増加、要介護高齢者の増加に伴い、地域のニーズに応えていくために、疾病予防・早期発見・早期治療は社会医療法人景岳会で、介護・住まいは社会福祉法人白寿会で、より一層の連携強化を図って参ります。今後も内藤景岳初代理事長、二代目飛田忠之理事長の思いを引き継ぎ、前進していく所存であります。

沿革

平成　6年　3月 31日　社会福祉法人白寿会設立認可
平成　7年　2月 22日　特別養護老人ホーム白寿苑開設(100床)
　　軽費老人ホームケアハウス白寿苑開設（40床）
平成　7年　3月　1日　玉出地域在宅介護支援センター開設
平成　7年　5月　1日　特養に短期入所生活介護開設（20床）
平成　7年　6月　1日　デイサービスセンター白寿苑開設（B 型）
平成 11年　3月　1日　高齢者訪問介護事業開始
平成 11年　7月 30日　ライフサポートセンター白寿苑（居宅介護支援事業）開設
平成 12年　1月　4日　ホームヘルパー養成講座（2級)開設
平成 12年 10月　1日　短期入所生活介護定員変更　（特養14床、短期16床）
　　デイサービスセンター白寿苑利用者数拡大（50名）
平成 13年　3月 15日　訪問看護ステーション白寿苑開始
平成 14年　4月　1日　食事サービスセンター白寿苑（生活支援型）開始
平成 15年　6月 16日　身体障害者・知的障害者訪問介護事業開始
平成 15年　9月 30日　『ケアマネジャーの挑戦』（せせらぎ出版）発刊
平成 16年　5月　1日　視覚障害者ガイドヘルパー養成講座開設
平成 17年　2月 22日　10周年記念誌『いっしょに紬ぐ暮らし』発行
平成 17年 10月　1日　特養に新館（ユニットタイプ40床）開設
平成 18年　4月　1日　介護予防短期生活介護事業、介護予防通所介護事業、介護予防訪問介護事業、
　　介護予防訪問看護事業　開始
平成 19年 10月　1日　認知症対応型通所介護デイサービスぽかぽか開所
平成 21年　4月　1日　玉出地域包括支援センター開設
平成 22年　1月　1日　介護付有料老人ホームつむぎ苑開設
平成 23年 10月　1日　大阪市西成区と「西成区における災害時に福祉避難所等として介護・高齢福祉施設
　　を使用することに関する協定」を締結。(区内第1号の「福祉避難所」に指定される）
平成 25年　4月　1日　白寿会研修センターの開設
平成 26年　4月　1日　談支援事業所はなめ開設、西成区高齢者地域見守り事業（つながりサポート事業）
　　の受託
平成27年　2月　22日　20周年記念誌『感謝』発行
平成28年　1月　　7日　くるみんマーク★１つ（厚生労働省）認定
平成28年12月　　1日　認知症初期集中事業（にしなりオレンジチーム）開始
令和元年　5月　25日　ユースエール認定企業に認定（厚生労働省）
令和　2年　2月　　1日　大阪市女性活躍リーディングカンパニー認証（大阪市）
令和　2年　6月　　9日　大阪府男女いきいき元気宣言事業所登録（大阪府）
令和　2年　6月　18日　くるみんマーク★★２つ（厚生労働省）認定

※平成30年～31年　白寿苑本館改修を実施　～プライバシー確保のための大規模修繕

介護付き有料老人ホーム　つむぎ苑

運営方針

安心して生活できる環境を提供することで、高齢になっても地域で安心して生活でき、自己実現の支援ができるように入居者と職員が「こころの“わ”」を紬(つむ)いでいきます。要介護状態の利用者に対し、入浴、排せつ、食事等の介護その他の日常生活上の世話、機能訓練及び療養上の支援及び世話を行うことにより、要支援・介護状態となった場合でも、その有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるよう必要な援助を行います。

1　要支援状態の利用者に対し、入浴、排せつ、食事等の介護その他の日常生活上の支援、機能訓練及び療養上の世話を行うことにより、要支援状態となった場合でも、自立した日常生活を営むことができるよう、利用者の心身機能の維持回復を図り、要支援者の生活機能の維持又は向上を目指すものとします。

2　介護は、利用者の心身の状況に応じ、利用者の自立の支援と日常生活の充実に資するよう適切な技術をもって行うものとし、漫然かつ画一的なものとならないよう配慮して行います。

3　事業は、利用者の意思及び人格を尊重し、常に利用者の立場に立ったサービス提供に努めるものとします。

4　事業の実施に当たっては、事業所の所在する市町村、協力医療機関に加え、居宅介護支援事業者、他の居宅サービス事業者、保健医療サービス及び福祉サービスを提供する者との連携に努めるとともに、常に利用者の家族との連携を図り、利用者とその家族との交流等の機会を確保するよう努めるものとします。

介護予防および介護度進行予防に関する方針

自分でできることを職員と一緒に生活の中で見つけ、役割を持ち達成感を持てる生活を支援したいと考えています。そのため、ケアプラン・サービス計画の中に生活リハビリも位置づけ、入居者がたとえ小さなことでも自分でできることを実感していただき、さらにできることを増やしていくことを生活の目標とします。これらは、我々の使命である入居者と職員が「一緒に紬ぐ暮らし」の実現です。

施設概要

施設名称：つむぎ苑
施設種別：介護付き有料老人ホーム
所在地：大阪府大阪市西成区南津守7-14-33
開設年月日：平成22年1月1日
敷地面積：1,920m²
延床面積：2,837m²
入居定員：30名
居室総数：30室
対象者：60歳以上の方で、要介護認定がない方や要支援・要介護認定を受けている方すべてが対象となります。
（但し、特定施設入居者生活介護（介護予防含む）の場合は、要支援・要介護認定が必要になります。）

編 集 後 記

南大阪病院創立70周年史（以下本史）について作成が決定され、わたくしに制作の指示がなされたのは2022年の初めで、病院年報発行担当者の図書係浅野朱美氏とともに本史の発刊を目指すこととなった。約1年を要する事業ではあったが、各部署の協力を得て本史を発刊できることに感謝を申し上げる。本史は50周年記念史発刊後20年ぶりとなるが、この間には当院創立時からの看板科目であった小児科や産婦人科が病院からなくなり、病院機能評価受審や病院建替事業などの大きな変革が渦巻く激動の時代であった。俯瞰するとこのような時代の激流を渡り続けて病院は進んでいくのだと感慨深い。かつて内藤景岳先生が本院を創立された1951年からの70年を振り返り、これからの当院の未来を展望するために本史が少しでも役立つなら幸甚である。さいごに、病院年報と南大阪病院医学雑誌の定期発刊に加えて本史編集に労を厭わず多大な貢献をいただいた浅野朱美氏に感謝申し上げる。

南大阪病院発刊担当
中谷守一

南大阪病院 70 周年史編集委員会

委 員 長　中谷守一
委　　員　柿本祥太郎／福田　隆／飛田忠之／宮越一穂／大坂芳明／濱田偉文／久米田靖郎
竹村雅至／新田正尚／渡邉美津江／原田　聡／山川智之／酒井哲雄／山名琢薫
高尾　豊／野口浩一／小味渕智雄／浅野朱美／川西幸夫
発 行 日　2023 年 7 月 1 日
発 行 者　社会医療法人景岳会　南大阪病院
大阪府大阪市住之江区東加賀屋 1 丁目 18 番 18 号
印 刷 所　株式会社ケーエスアイ
大阪府大阪市西成区南津守 7 丁目 15 番 16 号

南大阪病院医学雑誌の発刊

南大阪病院医学雑誌は昭和28年に創刊され、当初は年3回刊行、昭和38年第11巻から合併号とし年2回刊行、平成21年第56巻から年1回刊行し、令和5年には第70巻を記念号として発刊を迎えることができました。

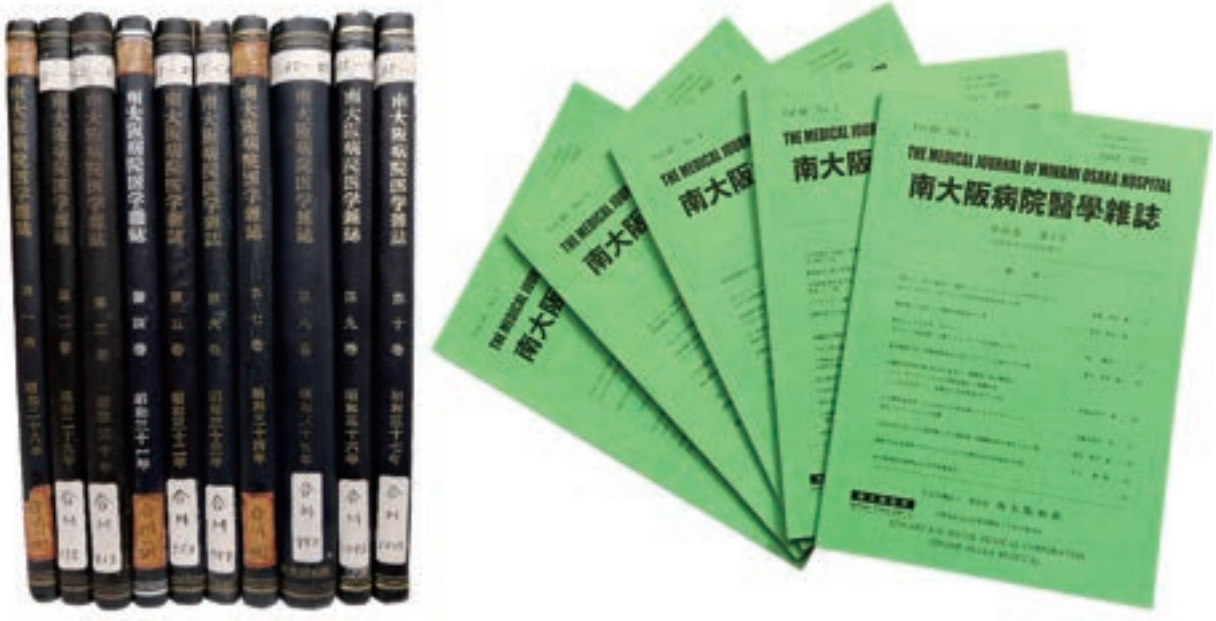
本誌は全国の医科大学と交換している他、国会図書館、国内の医学教育関係者、総合病院、第一線の医師諸兄にも送付しています。

創刊は昭和28年であり、その当時教育機関である大学といえども医学雑誌を刊行しているところは少なかったので、創立間もない一私的病院が刊行したことは衆目を集めました。以後一度も休刊することなく今日に至っています。

南大阪病院は、『地域からよろこばれ信頼される病院づくり』を理念として設立・運営され、同時に最先端の医療を提供できるよう努めております。そして南大阪病院医学雑誌はその医学上の成果を発信する重要な役割を担っております。今後もこの体制を崩すことなくわが国の医学・医療界に貢献できるよう精進してまいります。

ここに創刊号に祝辞をよせられた当時の大阪医科大学松本信一学長の「発刊の辞」を掲載します。

なお論文の詳細は南大阪病院医学雑誌にゆずり、総合病院南大阪病院創立40周年記念史(平成3年5月1日発刊)掲載以後の既刊の演題と研究者を次に記します。



〔創立40周年記念史　351頁より〕

〔資料〕

南大阪病院医学雑誌発刊の辞

大阪医科大学学長 松本信一

昭和26年5月、南大阪病院の開設に際し、その創業の経緯と経営の抱負を知り得たわれわれは他日この種の計画あることを想像しなかったわけではないが、それがこうも早く実現しようとは予想しなかったのである。

抑々、病む者の受療に於ける希求は、あらゆる医術を遺憾なく尽されることにあり、医師の患者に対する務めは、夫々の痼を審かにし、その病態に応ずる最善の治謦を施して悔を残さないことにある。この貴い愛の奉仕こそ仁術と呼ばれるものであり、済生の道もここにあるが、このことをいつの世にも高く唱われるのは事実むつかしい証拠になる。凡そ病は苦悩を心身に斎すに止らず、あまりにも煩を経済に及ぼすのを常とする、しかも現下社会保障制度の欠陥は大衆をして汎く医学の嘉恵に浴せしめるに難く、他方また、適正な医療の報酬さえ得られない医業の現状でもあると指摘されている。

さわあれ、医たる者は常に学界の趨勢におくれないことを念じ東西の文献を渉猟して薬籠中のものとなす心掛がなくてはならぬ。のみならず、自らの経験は、要を摘んで記録に委し、広く利用と批判に備えるだけの余裕と謙虚さがありたいものである。よく観察を詳にし、考察を精しくするならば、何れの症例も何らかの真理を蔵し、科学的に役立たぬものはないというも過言ではあるまい。もとより精巧な器械や壮麗な設備は望ましいが、それにのみ拘泥するのは劣等感に襲われるものであり、無能と怠慢を暴露する以外の何ものでもない。実に個々症例の把握と治験の検討とは臨床家の努めて蓄積せねばならぬ資材であり、豊富な経験の持主が至宝とされるわけもここにあるが、漫然たる観察の重複は徒らに齢を加えるにも等しく憑信するに足るものがない。この経験には分析的並びに綜合的考察の裏づけがなくてはならぬ。本院の指向は、研究と離れない臨床、臨床に即する研究、いわば病室を直結した運営にあり、しかも蒐集に係る病的資料はこれを整理することによって医師たる者の頭脳の訓練と行為の反省に資するにありと聞く。双手をあげてこれに賛意を表しない者はあるまい。

この空気の漲る所に研究意欲の溢れることは当然であり、成果また期してまつべきである。顧るに、本院が開かれてから日もまだ浅いのであるが、いま本誌を発刊してその価値を世に問うに至ったことは、寔に果敢な企図といわねばならぬ。それだけに、その将来には非凡な手腕を前提とされるわけである。なお研究を通じて、医界と連絡を密にし、その利便を計るように意を用いるならば、本誌の存在に一層の意義を添えるであろう。

かく考えると、籍を本院におく諸君の不断の努力と異常の奮起によって、この刊行が滞りなく継続されることを希望してやまない。

発刊に当り所感を述べ、本誌の発展を祈って祝辞に代える次第である。

（昭和28年1月）

南大阪病院医学雑誌

南大阪病院創立40周年記念史(平3.4.30発刊)掲載以後の既刊の演題と研究者を次に記す。

第 39 巻（平成３年10月1日発行）

創立40周年記念論文集

序

昭和28年の創刊以来、病院の学術面での賦活剤ともなり、診療業績の向上にも寄与してきた南大阪病院医学雑誌も今年で39巻となるが、病院創立40周年を迎えた本年は、本誌を1号から3号を纏め南大阪病院創立40周年記念論文集として刊行することとした。

南大阪医学誌は当院の学術雑誌として発刊以来、毎年継続して編集され医学雑誌としての業績は国内外から高く評価されている。これには内藤景岳院長の当初よりの本誌への御熱意、並びに関係各大学の先生方の多大の御指導による所が大きい。

40周年記念論文集として刊行された意義は、病院史の一つの通過点を強調するだけでなく病院の現在の実績を改めて認識し、その上で又明日に向ってよりレベルの高い医療を目指し各人が研鑽、努力する事にあり、一方、将来の医師にとっては、或る時代の節目の業績集として顧みられ、治療指針として参考となり得ることでもある。

40年に亘って掲載されてきた多くの論文にも時代の流れを感じるが、中でも10年前の28巻の創立30周年記念論文集にはない循環器内科、胸部外科並びに今秋で創立4周年を迎える南大阪総合健診センターからの論文が本記念誌には続々と登場しており、又新しく導入された高度先進医療機器の臨床応用の報告も夫々の論文中に見られ、医学、医療界における10年の歳月の発展的変化には著しいものがある。従って昭和28年の第1巻ともなれば隔世の感があるが、不安定な時代の多忙な臨床の間に実験、研究を全うされ本誌に投稿された12篇の学位論文もあり、40年間の不断の南大阪病院医学雑誌から、学術的な面以外の先輩医師の研究態度を教わる事も出来、古くからの夫々の論文には時代に応じた価値を見出すことができる。

当院では国内の医科大学雑誌と交換しその交流も活発であり、今後も21世紀の医学を目標に、多くの有益な論文を発表し本誌が院内外の医療、福祉に一層の貢献が出来るよう全職員の積極的な御協力、御支援をお願いする次第である。

終りに、この度の記念論文集の発刊に当り内藤景岳院長並びに当院顧問熊谷朗先生の御教示、御支援に対し心からの感謝を申し上げる。

平成3年10月

南大阪病院医学雑誌
編集委員長 久保正治

第 39 巻（平成3年10月1日発行）　創立40周年記念論文集

多価不飽和脂肪酸と疾患―動脈硬化より自己免疫疾患まで― …… 熊谷　朗
南大阪総合健診センターにおける最近の各種発見癌について …… 小畑大吉・他
Colorectal Cancer Screening by means of the Immunological
　Fecal Occult blood Test in our MHT …… 小畑大吉
イムノカルト2回法を用いた職域大腸癌スクリーニング …… 小畑大吉・他
われわれの施設における潰瘍性大腸炎の診断と治療方針について …… 北村彰英・他
当科におけるペースメーカー植込み症例100例の検討 …… 柿本祥太郎・他
当院耳鼻咽喉科14年間の下部気道・食道・消化管異物の統計的観察 …… 三木祐一郎・他
A Case of Primary Malignant Fibrous Histiocytoma of
　the Lung Associated with Marked Leukocytosis …… 忠田守喜・他
低Na血症を呈したリンパ球性下垂体炎と思われる1例 …… 濱田偉文・他
肝硬変症に合併した肺高血圧症の1剖検例 …… 小泉直人・他
術後多臓器不全を来した高齢者腹部大動脈瘤の1治験例 …… 堀本仁士・他
肺原発平滑筋肉腫の1手術例 …… 堀本仁士・他
79歳左房粘液腫の1治験例 …… 松山南律・他
イレウス様症状を伴った下腹部痛を主訴とし、
　偶然発見された腎血管筋脂肪腫の1例 …… 山田　卓・他
Hypokalemic myopathyの1例 …… 小松原千鶴子・他
悪性症候群の1例 …… 津留基通・他
熱性痙撃を主訴として来院し偶然発見された小児一過性
　高アルカリフォスファターゼ血症の2例 …… 梅本潤一・他
巨大子宮肉腫の1例 …… 緒方高志・他
腹水貯留を来たした妊娠中毒症の1例 …… 船内洋司・他
単眼児の1例 …… 塩谷朋弘・他
"エホバの証人"の妻をもち下血・意識消失で来院した
　多発性硬化症の1例について …… 宮越一穂・他
厚生省による最大酸素摂取量維持目標値について(第1報) …… 松原末佐・他
平成2年度、各種臨床検査材料からの細菌分離状況と薬剤感受性試験 …… 上霜　剛・他
脳血管障害患者の実態調査―特に心理的特性、家庭状況、通院状況について― …… 米山健一郎・他
当院における感染性医療廃棄物の取扱いについて …… 山名琢薫・他

第 40 巻　第 1 号（平成4年8月1日発行）

中等症潰瘍性大腸炎の亜分類の試みと中心静脈栄養療法の意義に関する研究 …… 北村彰英・他
高齢者心房中隔欠損症の検討 …… 濱田偉文・他
増殖糖尿病網膜症に対する硝子体手術 …… 佐康文平
Aztreamam(AZT)の胸水移行に関する臨床的検討 …… 堀本仁士・他
内視鏡的ポリペクトミーを行なった大腸脂肪腫の1例 …… 山田　卓・他
発熱を主訴として発見された腎外症候性腎炎の1例 …… 梅本潤一・他
ステロイド大量投与が有効であったと思われる術後ARDSの1例 …… 飛田忠之・他
珍らしい玩具ブレスレットによる気管異物の1例 …… 三木祐一郎・他
長期間逐年観察下で発見された2骨髄増殖性疾患―経年変化追究のシステム― …… 小畑大吉
健診で発見された多重癌 …… 小畑大吉・他
テオフィリン血中濃度に及ぼすエリスロシンの影響 …… 大西智子・他
ホルター型血圧計の有用性について …… 田口葉子・他

第 40 巻　第 2・3 号（平成4年12月1日発行）

大腸癌の遂年健診の意義 …… 小畑大吉・他
糖尿病患者における術後の血中脂質の変動と
　Postheparin lipolytic activities in vitro とin vino 測定の意義 …… 北村彰英・他
当院耳鼻咽喉科15年間の下部気道・食道・消化管異物100例の臨床統計的観察 …… 三木祐一郎・他

早期胃癌切除後9年を経過し播種性骨髄癌症を呈した1例 …… 中野稔雄・他
G-CSFが有効であった無顆粒球症の1例 …… 山根秀一・他
冠動脈―気管支動脈吻合を伴った異型狭心症の1例 …… 横田直人・他
多発性結節性肝脂肪滲潤の1例 …… 赤土みゆき・他
網膜血管炎によると思われた硝子体出血の2症例 …… 山口ひとみ・他
チョコレート嚢腫に対してアルコール固定法を施行した2症例 …… 村中純子・他
老人病院における診療課題―plateau患者の3割はADL改善が可能― …… 奥村悦之・他
老人病院における社会的入院の現状―退院を阻害する因子について― …… 奥村悦之・他
平成3年度各種臨床検査材料からの細菌分離状況と薬剤感受性試験 …… 申純実・他
当院における過去3年間の減点傾向について …… 狛秀和・他

第 41 巻　第 1 号（平成5年7月1日発行）

前立線肥大症治療の新しい展開―前立康レーザー治療について― …… 松井孝之
当院における食道表在癌症例の検討および治療方針 …… 北村彰英・他
南大阪総合健診センターにおける癌発見状況の推移とその特徴(第2報) …… 小畑大吉・他
腸間膜キャスルマン・リンパ腫―43例の文献的臨床的検討― …… 宮越一穂・他
当院糖尿病患者における無症候性心筋虚血の特徴 …… 間島毅彦・他
胃サルコイドーシスの1例 …… 津留基通・他
腹痛を主訴として来院した巨大大網嚢腫の1例 …… 木原明生・他
脂腺母斑に発生したSebaceomaの1例 …… 馬場堯・他
硝子体手術が奏功した星状硝子体症の1例 …… 石田理・他
超音波断層法とMRIの卵巣腫瘍診断への有用性の比較検討 …… 邢福棋・他
最近経験した薬剤副作用症例3例について …… 三木祐一郎・他
長期的な水中運動が整形外科疾患患者のADL得点に及ぼす影響について
　―女性についての検討― …… 皆吉正博・他

第 41 巻　第 2・3 号（平成5年12月1日発行）

食道癌患者におけるCoil Planet Centrifuge法を用いた
　赤血球膜抵抗の耐術栄養評価への応用について …… 北村彰英・他
健診における最近の高血圧と糖尿病の特徴とその対応について …… 小畑大吉
界面活性剤(DMSO)が原因と考えられる職業性過敏性肺臓炎の1例 …… 忠田守喜・他
肺絨毛癌の1例 …… 橋本隆彦・他
最近経験した上咽頭結核と口蓋扁桃結核の2症例について …… 西村啓三・他
特異な経過で受診した副鼻腔真菌症2例について …… 三木祐一郎・他
歯肉肉芽腫を伴ったFarber病の一例 …… 若見暁樹・他
心室遅延電位(Late Potential) の臨床的意義 …… 加奥節子・他
アンケート調査によるマタニティースイミングの効果について
　―スポーツが妊娠に及ぼす影響― …… 山田聖・他
本院における赤血球不規則抗体の検出状況について …… 大仲一善・他
当院における服薬指導の実際 …… 杉田弘子・他
当院における過去10年間のRI検査の推移について …… 中村勝利・他
看護学生の看護婦(看護士)イメージについて―基礎実習を通して― …… 増洋・他
当院における一般消耗品の節減対策について …… 戸谷雅己・他

第 42 巻　第 1 号（平成6年8月1日発行）

抗癌剤の血管外漏出による皮膚潰瘍の治療と対策 …… 北村彰英・他
注腸造影のダブルチェックの現状とその意義 …… 小畑大吉・他
術前放射線療法を施行した直腸癌手術症例の検討 …… 田中慶太朗・他
Blowout fractureの治療―アパタイト・セラミックスによる眼窩床再建― …… 若見暁樹・他
当科における過去4年間の耳下腺腫瘍の臨床統計 …… 三木祐一郎・他

白内障手術後に広範囲デスメ膜剝離をきたした症例 …… 川崎　茂・他
凝固線溶異常を伴った急性心筋梗塞の1例 …… 中野稔雄・他
グッドパスチャー症候群の1例 …… 茶谷徳行・他
麻疹後にみられたメチシリン耐性黄色ブドウ球菌濃胸の1例 …… 貫名貞之・他
胸郭内進展をした孤立性良性腕神経叢原発神経鞘腫の1例 …… 辻井英治・他
平成5年度 各種臨床検査材料からの細菌分離状況と薬剤感受性試験 …… 荒田昭二・他

第 42 巻　第 2・3 号（平成6年12月1日発行）

大腸憩室症と大腸癌 …… 小畑大吉・他
当院における経皮的冠動脈形成術(PTCA)の現況 …… 横田直人・他
我々の行っている眼瞼部皮膚悪性腫瘍の再建法 …… 古川雅祥・他
足底踵部の再建について …… 古川雅祥・他
50代半ばを過ぎ偶然発見されたDandy-WalkerVariantの1例 …… 忠田守喜・他
下大静脈肝部欠損・奇静脈接合症の一例 …… 山田　卓・他
重症心奇形および脳奇形を合併した13トリソミー症候群の1例 …… 木原明生・他
2つの嚢状腹部大動脈瘤を合併した血管型Behcet病の1手術例 …… 辻井英治・他
糖尿病併発症に対する硝子体手術、水晶体除去術および眼内レンズ挿入同時手術 …… 南　政宏・他
歯性類部蜂窩織炎及び耳下腺膿瘍の1例 …… 楠木　誠・他
舌根甲状腺の1症例 …… 三木祐一郎・他
巨大卵巣嚢種、および巨大子宮筋腫を合併し、分娩第２期で
　分娩停止を示した症例 …… 斉藤行生・他
腎被膜発生の悪性線維性組織球腫の一例 …… 田浦智幸・他
尿道異物の一例 …… 久保雅弘・他
点眼剤の配合変化 …… 藤井英樹・他
集団災害に対する医療機関の教訓について
　―大阪市営ニュートラムの事故を体験して― …… 森崎美登・他

第 43 巻　第 1 号（平成7年8月1日発行）

私達の外来におけるインフォームド・コンセントの実践 …… 村岡道徳・他
サラゾピリンの血中レベルからみた潰瘍性大腸炎の治療 …… 北村彰英・他
免疫便潜血検査と胃癌 …… 小畑大吉・他
特発性食道破裂の1治験例 …… 田中慶太朗・他
大弯側に交通路を持った重複幽門の一例 …… 宮地克彦・他
内視鏡で消化管病変を観察し得た溶血性尿毒症症候群の一例 …… 貫名貞之・他
入院治療を必要とした鼻出血症例の臨床統計 …… 三木祐一郎・他
当科におけるライナック一年間の利用状況 …… 楠木　誠・他
総合健診並びに人間ドック受診者に対して行った
　糖尿病予防教室の一つの試みとその効果 …… 小畑大吉・他
片麻痺患者と歩行―特に片麻痺患者の抵抗なく歩く距離について 第1報― …… 奥村悦之・他
片麻車患者と歩行―特に片麻車恋者の抵抗なく歩く距離について 第2報― …… 奥村悦之・他
電解酸化水による殺菌効果の有用性 …… 荒田昭二・他
国際保健医療援助活動とその考え方　―フィリピン、ネグロス島における
　活動のpositiveな面とnegativeな面の評価を中心として― …… 奥村悦之・他

第 43 巻　第 2・3 号（平成7年12月1日発行）

耳鼻咽喉科18年間の下気道、食道・消化管異物121例の臨床統計的観察 …… 三木祐一郎・他
南大阪総合健診センターにおける癌発見状況の推移(第3報) …… 小畑大吉・他
陳旧性心筋梗塞による慢性心不全から突然死に至った症例の
　ホルター心電図とその心拍変動解析 …… 松田茂樹・他
急性型成人T細胞白血病(ATL)の一例 …… 忠田守喜・他

心不全を伴った右冠動脈左室瘻の一例 …… 山下英丸・他
心拍動下冠状動脈バイパス術の一例 …… 田中馨・他
大腸癌肝転移切除後の残肝再発に対する再肝切除の2例について …… 飛田忠之・他
播種性骨髄癌症にて発症し剖検により初めて診断された早期胃癌の一例 …… 成山硬・他
下咽頭梨状窩瘻を感染経路として急性化濃性甲状腺炎を発症した一例 …… 石野雄一・他
溶接業従事着にみられたBowen病の一例 …… 竹村宏代・他
反復する鼻出血を主訴とした鼻腔血管腫の3症例 …… 秦尚修・他
追悼論文　故 三宅宗隆先生の病理解剖報告
　―肝硬変に合併した肝内胆管癌の組織発生について― …… 磯田幸太郎・他
植物状態患者の医学的リハビリテーション
　―同意の得られない患者に対する医療行為の限界について …… 金城一二・他
心室細動からの救命後の亜急性期に心破裂を来した
　急性心筋梗塞の看護を行って―絵文字による意思疎通の提案― …… 豊見城カズコ・他

第 44 巻　第 1 号（平成8年8月1日発行）

放射線治療の変遷―1978、1984、1994年の放射線治療新登録患者の分析― …… 中島俊文・他
EIAにより測定した麻疹IgM、IgG抗体の有用性について …… 貫名貞之・他
下口唇粘液嚢胞に関する臨床統計的検討
　―自験31例及び凍結手術の有効性について― …… 田嶋敏彦・他
鼻腔通気度検査の有用性について …… 三木祐一郎・他
頭部レントゲンCT検査等による脳スクリーニングの経験 …… 小畑大吉
特発性大脳基底核石灰化症の一例 …… 竹下篤・他
胃軸捻転を合併した食道裂孔ヘルニア症(upside-down stomach)に対する
　腹腔鏡下手術の一例 …… 北村彰英・他
自然消失した胃前庭部山田IV型ポリープの1例 …… 奥村泰之・他
大腸顆粒細胞種の一例 …… 山田卓・他
放射線大腸炎の一例 …… 田浦智幸・他
機能的左室流出路閉塞と血管内溶血を認めた求心性肥大心の一例 …… 濱田偉文・他
β遮断薬の漸増療法が有効と考えられた特発性拡張型心筋症の3症例 …… 筈井寛・他
乳腺穿刺吸引細胞診と組織診断との不一致例の検討 …… 山名琢薫・他
平成6･7年度　各種臨床検査材料からの細菌分離状況と薬剤感受性試験 …… 上野信子・他

第 44 巻　第 2・3 号（平成8年12月1日発行）

今夏経験した成人における腸管出血性大腸菌(O-157:H7)感染症について …… 北川浩子・他
Single Lead Systemを用いたVDDペースメーカーの使用経験 …… 柿本祥太郎・他
当科におけるアトピー性白内障手術について …… 佐藤文平・他
経耳下腺進入法による下顎関節突起骨折の治療経験 …… 矢部哲司・他
過去6年間の乳癌健診の成績とその評価 …… 小畑大吉・他
PTCA後ガイドワイヤーによる冠動脈穿孔にて心タンポナーデをきたした1例 …… 山下英丸・他
保存的治療で経過観察中の上腸間膜動脈症候群の一例 …… 石野雄一・他
2回の開腹ドレナージ術を要した外傷性小児膵損傷の一例 …… 飛田忠之・他
乳癌手術後タモキシフェン投与中に両側卵巣嚢腫を認めた1症例 …… 石田雄三・他
口外法手術により治癒した巨大頚性ガマ腫の1症例 …… 秦尚修・他
当院耳鼻咽喉科の鼻アレルギー外来の現況 …… 三木祐一郎・他
厚生省による最大酸素摂取量維持目標値について―第2報― …… 皆吉正博・他
老人病院における長期入院患者の生活実態および退院阻害因子についての考察 …… 市村瑞也・他
寝たきり患者に対するリハビリテーションの現況 …… 岡林豊・他
平成8年4月診療報酬改定の影響と今後の対策について …… 狛秀和・他
看護学生に効果的な臨床実習の実施とその効果について …… 木下千富

第 45 巻　第 1 号（平成9年8月1日発行）

当院におけるAcute Coronary Syndromeに対するDirect PTCAの現況 …… 井坂　拓・他
開心術における自己血輸血について …… 田中　馨・他
アニサキスと思われる腸管線虫症の2手術例について …… 北村彰英・他
乳癌術後癌性心タンポナーデをきたした3例 …… 長田啓嗣・他
画像的に診断しえた頚動脈小体腫瘍の一例 …… 江村俊也・他
汎下垂体機能低下による低ナトリウム血症を来したEmpty Sellaの一例 …… 山口信子・他
内視鏡的に切除し得た原発性早期十二指腸球部癌の1例 …… 星本真弘・他
胎児超音波検査で発見された総胆管拡張症の一例 …… 石野雄一・他
術前診断が困難であった腎血管筋脂肪腫の1例 …… 中島秀行・他
CT、MRIが有用であった子宮筋脂肪腫の1例 …… 中島秀行・他
外頸動脈結紮により止血し得た難治性鼻出血2症例について …… 久保正治・他
稀な外耳異物2症例 …… 三木祐一郎・他
地域がん登録との照合による人間ドック発見癌の検証 …… 小畑大吉・他

第 45 巻　第 2・3 号（平成9年12月1日発行）

リハビリテーション阻害因子の検討
　―特に老人病院における「いじめ」状況との関連について― …… 岡田和也・他
高度黄疸を呈したDubin-Johnson症候群の一例 …… 津留基通・他
腹痛を主訴に発症した肺動脈塞栓症の1例 …… 山下英丸・他
確定診断には至らなかったが臨床的にMELASと考えられた一例 …… 貫名貞之・他
仮性瘤様形態を呈した真性左心室瘤の一例 …… 森田雅文・他
視野欠損で発見されたラトケ嚢胞の一例 …… 竹安一郎・他
頸部・縦隔気腫の3症例 …… 三木祐一郎・他
巨大な顎下部神経鞘腫の一例 …… 富山健太・他
von Recklinghausen病に合併した乳癌の1例 …… 長田啓嗣・他
乳腺管状腺腫の1例 …… 長田啓嗣・他
画像診断が有用であった黄色肉芽腫性胆嚢炎の1例 …… 中島秀行・他
腹水を伴ったがん性腹膜炎に対して
　腹腔内Cisplatin大量投与が著効を示した原発不明癌の1例 …… 飛田忠之・他
食事、運動療法が効果不十分な若年男性NIDDM患者への
　トログリタゾン単独投与が有効であった一例 …… 川床　聡・他
南大阪総合健診センターにおける癌発見状況の推移(第4報) …… 小畑大吉・他
院内感染について―薬剤科の立場より― …… 藤谷一良・他
臨床検査科の新システムについて …… 大仲一善・他

第 46 巻　第 1 号（平成10年8月1日発行）

職域大腸集検7年間の成績 …… 小畑大吉・他
手術不能癌、再発癌および局所進行癌に対する温熱療法の治療経験 …… 長田啓嗣・他
当科におけるケロイドと肥厚性瘢痕の治療 …… 加茂理英・他
中磁場装置を用いた肝ダイナミックMRIの2症例 …… 中島秀行・他
胆石症に合併した肝嚢胞にたいして腹腔鏡下嚢胞前壁切除術を施行した1例 …… 北村彰英・他
食道癌浸潤による気管狭窄に対して
　Self-Expanding Metallic Stentが有効であった1例 …… 三重野繁敏・他
t-PA無効例に対してウロキナーゼが著効を認めた肺塞栓症の1例 …… 日浦正仁・他
健常人に発症したサイトメガロウイルス肝炎の１症例 …… 茶谷徳行・他
インスリン過剰性低血糖症にジアゾキサイドが有効であった
　フロッピーインファントの1例 …… 田中太郎・他
同一耳下腺に発生したミクリッツ病とワルチン腫瘍症例 …… 三木祐一郎・他
有疾患者に対する集団運動療法について
　―高血圧・糖尿病クラスについての検討― …… 松原末佐・他

老人病院長期入院患者の日常生活動作の推移(第1報)
—いわゆるプラトー患者の1、2年後の変遷について— …… 東　純夫・他
老人病院長期入院患者における日常生活動作の推移(第2報)
—ADL推移の判別因子とQOLの構成因子— …… 戸田武範・他
老人病院長期入院患者における日常生活動作の推移(第3報)
—主に情緒的関連因子からの予測— …… 池川公章・他
多項目自動血球分析装置SE-9000の基礎的検討 …… 仲子國典・他
自動分析装置502Xの基礎的検討 …… 西村　新・他
平成8･9年度　各種臨床検査材料からの細菌分離状況と薬剤感受性試験 …… 申　純実・他

第 46 巻　第 2・3 号（平成10年12月1日発行）

肝動脈塞栓術による肝癌治療の病理学的背景 …… 桜井幹己
南大阪総合健診センターにおける癌発見状況の推移(第5報) …… 小畑大吉・他
Neurally Mediated Syncope患者のHead-up Tilt Testにおける血行動態の検討 …… 大久保知之・他
メチルプレドニゾロンのパルス療法に比較的良く反応し、10年間経過
観察し得た再帰型特発性血小板減少性紫斑病(recurrent ITP)1例 …… 忠田守喜・他
Lateral Arm Free Flapの経験 …… 矢部哲司・他
良好な経過をとった手指高圧圧注損傷の1例 …… 山崎　久・他
子宮頚癌の乳腺転移の2例 …… 長田啓嗣・他
術後6年を経て再発した顆粒膜細胞腫の1例 …… 福田　洋・他
当科における外耳道異物症例(続報) …… 三木祐一郎・他
扁桃周囲膿瘍から波及した頸部膿瘍の1症例 …… 三木祐一郎・他
坐剤挿入器の作成と使用経験について …… 松下智帆・他
癌患者におけるリハビリテーションの諸問題 …… 山里健二・他

第 47 巻　第 1 号（平成11年8月1日発行）

肝悪性腫瘍にたいする温熱療法の治療経験 …… 飛田忠之・他
屈折型多焦点レンズの使用経験 …… 高井七重・他
切除した空腸の病理所見よりChurg-Strauss症候群が疑われた一例 …… 太田俊輔・他
原発性アルドステロン症の一例 …… 日浦正仁・他
緊急冠動脈バイパス術を施行した慢性透析患者の一例 …… 三重野繁敏・他
悪性腫瘍との鑑別が困難であった上顎洞血瘤腫の1例 …… 江村俊也・他
左副咽頭間隙に多発した再発性多形腺腫の1例 …… 三木祐一郎・他
興味ある痴呆患者の臨床的推移—改善例、無変化例及び悪化例の諸因子について— …… 岡部孝生・他
南大阪総合健診センターにおける癌発見状況の推移(第6報) …… 小畑大吉・他
患者サービスの探求　病棟臨床検査技師の導入について …… 市来晶子・他
当院における環境菌レジオネラ属菌の汚染状況 …… 荒田昭二・他

第 47 巻　第 2・3 号（平成11年12月1日発行）

脾過誤腫の組織発生に関する免疫組織化学的検索 …… 礒田幸太郎・他
MRCP(MRcholangiopancreatography)の有用性についての検討 …… 中島秀行・他
乳癌と他臓器重複癌症例の検討 …… 長田啓嗣・他
耳下腺腫瘍手術症例37例の検討 …… 坂本道治・他
Leber's Idiopathic Stellate Neuroretinitisに前部虚血性視神経症を合併した1例 …… 澤田　達・他
非定型抗酸菌症の1女児例 …… 西機哲夫・他
胸部レントゲン検査にて見つかった巨大冠動脈瘤を伴う冠動脈肺動脈瘻の1例 …… 村岡英幸・他
動脈硬化性嚢状真性腹部大動脈瘤の1例 …… 吉田正隆・他
動静脈吻合とfish mouth切開による指尖再接着の2例 …… 矢部哲司・他
腎部分切除術を施行した腎血管筋脂肪腫の一例 …… 桑江秀樹・他
歯原性疾患2症例 …… 久保正治・他

悪性腫瘍を疑わせた上顎洞良性腫瘤2症例 …… 三木祐一郎・他
クラミジア感染が起因していると思われた付属器腫瘍の一症例 …… 霞　雅子・他
当健診センター発見癌において母体病院の果した役割について
　―癌情報収集ルートの解析で明らかになったことを中心にして― …… 小畑大吉・他
リハビリテーション科受診外来患者における意識調査と長期通院化因子の検討 …… 川田久雄・他
本校の看護学科1年生の見学実習における効果 …… 木下千富

第 48 巻　第 1 号（平成12年8月1日発行）

当院における過去10年間(平成元年から平成10年まで)の分娩統計 …… 吉田好子・他
頭頸部腫瘍再発症例に対するポジトロンCTの応用―3症例の経験― …… 阪本浩一・他
冠動脈に拡張性病変を認めた若年性心筋梗塞の1例 …… 村岡英幸・他
乳管内乳頭腫の近傍にductal adenomaの組織像を呈した1例 …… 長田啓嗣・他
血胸を呈した胸壁desmoid腫瘍の1例 …… 森田雅文・他
腹部リンパ節結核の1例 …… 茶谷徳行・他
頸部亜急性壊死性リンパ節炎2症例について …… 三木祐一郎・他
耳下腺唾石症例について …… 三木祐一郎・他
Lithclast®を利用した小児尿管結石に対する経尿道的尿管砕石術の経験 …… 桑江秀樹・他
肝癌に対する高周波凝固療法を施行した1例 …… 茨木利彦・他
南大阪総合健診センターにおける癌発見状況の推移(第7報) …… 小畑大吉・他

第 48 巻　第 2・3 号（平成12年12月1日発行）

悪性リンパ腫の診断と治療―最近の現況について― …… 日吉基文・他
南大阪病院における1999年の小児救急受診患者について …… 西機哲夫・他
潰瘍性大腸炎治療におけるアザチオプリン投与に関する研究 …… 北村彰英・他
胸腺原発ホジキンリンパ腫の1例 …… 上田信三・他
Pacemaker植込み術後のリード損傷の検討 …… 湯田　淳・他
術前に診断した腎オンコサイトーマの1例 …… 中島秀行・他
弯曲爪の治療経験 …… 矢部哲司・他
髄膜炎を合併したHunt症候群および喉頭帯状疱疹例 …… 三木祐一郎・他
鰓性嚢胞の一例 …… 安田大作・他
体腔液細胞診への酵素抗体法の応用　―細胞転写法を用いて― …… 宇津野美弥子・他
免疫便潜血検査　ヘモプレートオートⅡ(定量法)の2回法を用いた
　大腸癌スクリーニングの成績 …… 吉田裕子・他
大阪市西成区における指定居宅介護支援事業者連絡会の現状と課題
―医療と福祉の統合のための地域コアを目標に― …… 三浦浩史

第 49 巻　第 1 号（平成13年8月1日発行）

アプノモニターによる睡眠時無呼吸症候群のスクリーニング検査の有用性について …… 福井純一・他
心電図上ST低下を認め、冠動脈造影にて有意狭窄のない単冠動脈の一例 …… 宇津典明・他
胃結核の1例 …… 石井洋光・他
細胞診にて診断しえた乳頭部腺腫(adenoma of the nipple)の1例 …… 長田啓嗣・他
気管支喘息を基礎疾患とし、持続する咳嗽に起因する肋骨疲労骨折の2症例 …… 柏　智之・他
Methotrexate療法にて保存的に治療し得た子宮外妊娠の2例 …… 藤本和也・他
サイドポート前嚢切開鑷子による前嚢切開 …… 澤田　達・他
眼窩下壁吹き抜け骨折(blowout fracture)整復の一症例 …… 安田大作・他
小児急性乳様突起炎手術施行3症例 …… 三木祐一郎・他
喫煙習慣が学生の呼吸機能や学業成績に及ぼす影響 …… 小野誠三・他
生化学13項目における基礎的検討 …… 山本益子・他

創立50周年記念論文集

南大阪病院医学雑誌
50周年記念雑誌発刊のことば

内藤景岳先生が、昭和28年にこの南大阪病院医学雑誌を創刊されてより、今年はちょうど50年を迎えることになった。その間『継続は力なり』の諺どおり1巻も欠けることなく50巻目を刊行できたことは、内藤先生の陣頭指揮と南大阪医学会の発展に対する熱烈な思いと、協力いただいた各年代の医局員や、さらに多忙のなか、投稿していただいた関係各大学の先生方のおかげであると、改めて感謝のことばを申し上げます。

昨今、医療制度は一世紀に一度という大きな変革の波のなかにあるが、このような激変の時代にあっても医療の原点は患者様に対して、良質な医療を提供することにある。そのためには、我々医療を担う専門家は不断の、生涯にわたる研修が必要であり、そして日々診察している患者様に対して、最新の医療を提供する責務がある。そこで体験した貴重な症例を自分一人だけの経験にするだけでなく、多くの同志の医療担当者の共通体験とすることが医学医療の発展のために必要であると考える。そのような意味からも本医学雑誌の存在はきわめて大きい。

社団法人日本医師会の『医の倫理網領』の中にも「医師は生涯学習の精神を保ち、つねに医学の知識と技術の習得に努めるとともに、その進歩、発展に尽くす」ということがうたわれている。綿々と50年間続いてきたこの南大阪病院医学雑誌が、今後も未来永劫に存続し、『医の倫理網領』にうたわれていることに背かないように、関係者一同のさらなる努力を切に希望します。

平成14年7月

特定医療法人 景岳会　理事長　飛田忠之

第 50 巻　第 1 号（平成14年8月1日発行）

わが国における生体肝移植の現状 …… 広　橋　一　裕・他
び漫性胸膜中皮腫におけるグリコサミノグルカン(GAG)産生腫瘍細胞の
　酵素組織化学的及び細胞測光的フォイルゲン-DNA分析 …… 磯 田 幸 太 郎
南大阪病院小児救急受診患者の動向、特に気管支喘息患者について
　―2000年9月の調査より― …… 西　機　哲　夫・他
遺伝性難聴についての一考察；Pendred症候群の一家系を通じて …… 日　吉　基　文・他
胃切除後逆流性食道炎の治療及び対策に関する研究 …… 北　村　彰　英・他
連射式食道静脈瘤結紮装置を用いて治療した内痔核及び直腸脱症例の検討 …… 李　　喬　遠・他
南大阪病院における冠動脈疾患～とくに冠動脈バイパス術について …… 森　田　雅　文・他
在宅医療7年の経験 …… 宮　越　一　穂
総合病院と介護老人保健施設における外泊の実態 …… 川　田　久　雄・他
老人病院における長期入院患者の生活条件の実際　価値ある生活に導き
　良い生活の質を追求するための老人病院と一般病院との比較 …… 池　田　速　人・他
嚥下障害に対するアプローチについて≪摂食・嚥下評価表を用いて≫ …… 松　本　知　子
患者サービスの向上―入院時オリエンテーションの改善― …… 水　島　美　奈・他

非クロストリジウム性ガス壊疽の2例 …… 矢部哲司・他
Recklinghausen氏病に合併した悪性神経鞘腫の1例 …… 大橋菜都子・他
最近の耳鼻咽喉科領域の結核3症例について …… 三木祐一郎・他
MRIが有用であった変性子宮筋腫の2例 …… 江村俊也・他
Phaco Prechop法を用いた超音波水晶体乳化吸引術 …… 澤田達
再発翼状片に対する羊膜移植 …… 山谷珠美・他
男性乳癌の2例 …… 長田啓嗣・他
孤立性冠動脈入口部病変の一例 …… 大久保知之・他
冠動脈瘤を伴った両側性冠動脈肺動脈瘻の一例 …… 村井基修・他
意識障害と腸閉塞を契機に発見されEmpty sella症候群を合併した
ACTH単独欠損症の一例 …… 宇津典明・他
再発を繰り返す逆流性食道炎に対し腹腔鏡下Nissen法が有用であった1例 …… 米田浩二・他
黄色肉芽腫性腎盂腎炎の一例 …… 青木大・他
Methotrexate療法にて保存的に治療し得た胎児心拍陽性の子宮外妊娠の一例 …… 藤本和也・他
子宮頸部villoglandular papillary adenocarcinomaの一症例 …… 上村桃子・他
気管支脂肪腫の一手術治験例 …… 中井康成・他
経口的に摘出し得た下咽頭脂肪腫の一例 …… 安田大作・他
南大阪総合健診センターにおける各種癌発見状況の推移(第8報) …… 小畑大吉
抗MRSA薬 塩酸バンコマイシン®(VCM)の薬物血中濃度モニタリング導入について …… 南野充宏・他
冠動脈疾患診療への脈波伝播速度検査導入の試み …… 山口たか子・他
経口抗凝固薬療法評価におけるプロトロンビン時間(INR値)と
トロンボテストの有用性について …… 辰己しおり・他
自動分析装置を用いた梅毒診断試薬の検討 …… 木村千賀子・他
平成10・11・12年度 各種臨床材料からの細菌分離状況と薬剤感受性試験 …… 兼田信子・他

第 51 巻 第 1 号（平成15年9月1日発行）

全国抽出66看護学校における喫煙事情 …… 山家康嗣
看護学校での禁煙教育 禁煙教育講演と学生のアンケート調査から …… 山家康嗣
脳血管障害例の脳computer tomography所見と手指変形との関連 …… 島津晃・他
画像診断が有用であった副腎骨髄脂肪腫の2症例 …… 中島秀行・他
結腸癌転移巣に免疫化学療法が著効を呈した1例 …… 長田啓嗣・他
巨大有毛性色素性母斑に対するcombined laserとcurettingによる早期治療 …… 西村真紀子・他
低肺機能を呈した高齢者心房中隔欠損症の1例 …… 田中馨・他
右急性耳下腺炎に起因した右深頸部から上縦隔膿瘍への進展例 …… 久保正治・他
肛門周囲膿瘍が緩解中に発症したと思われるフルニエ症候群の1治験例 …… 北村彰英・他
過去5年間の当科における異物症統計 …… 高山靖史・他
局所麻酔下手術における音楽療法の有用性 …… 山中清孝・他
両側下肢壊疽の急速進展を伴った持続性肝炎の1例
南大阪総合病院第1回臨床病理カンファレンスの報告 …… 宮越一穂・他
持続性肝炎から両下肢の壊疽を発症し死亡した1例 …… 宮越一穂・他
LDLコレステロール直接測定法の基礎的検討 …… 木村千賀子・他
平成14年度医療事故集計報告 …… 山内一浩・他

第 51 巻 第 2・3 号（平成15年12月29日発行）

糖尿病透析患者の管理 …… 庄司繁市・他
喫煙と健康に関する意識調査 …… 宇津野美弥子・他
手指指尖部損傷の治療経験 …… 原岡剛一
肺動脈四尖弁の一例 …… 山下英丸・他
急性、多発性塞栓症を契機に発見された左房粘液腫の1例 …… 森田雅文・他
移植後混濁を生じ、摘出を要した眼内レンズ …… 澤田達・他
右口蓋扁桃に発生したカンジダ症の1例 …… 岡部宇彦・他
受け持ち患者制の導入における看護意識と看護過程の変化 …… 宮腰貴美子・他

老人病院における車椅子使用患者の再転倒・転落発生状況と関連要因について …… 清岡 学・他
介護老人保健施設における外泊状況
―特に盆休み、正月休みにおける自宅への外泊について― …… 池田速人・他
訪問リハビリテーションを行った終末期ガン患者の1症例 …… 森田有紀・他

第 52 巻　第 1 号（平成16年9月1日発行）

顔面の犬咬傷29例の検討 …… 山中清孝・他
大臀筋穿通動脈島状転位皮弁による仙骨部褥瘡の治療 …… 原岡剛一・他
胸郭出口症候群の一例 …… 田浦智幸・他
原発性肺高血圧症に対し、経口PGI2誘導体が比較的短期間で著効した一例 …… 柚木孝仁・他
膵石症治療に体外衝撃波結石破砕療法が有用であった1例 …… 北村彰英・他
脾機能亢進症を呈した乳癌脾転移の1例 …… 長田啓嗣・他
大腸狭窄を伴う胃癌再発症例におけるフェンタニルパッチの
有用性について―症例報告― …… 米田浩二・他
再発の度に化学療法が奏効した正常大卵巣癌症候群の一例 …… 山崎則行・他
外側型と内側型を合併した高位頸静脈球症例 …… 高山雅裕・他
コレステロール肉芽腫症の1症例 …… 高山靖史・他
子供の肌に合った点滴固定テープの選定 …… 輪田美樹子・他

第 52 巻　第 2・3 号（平成17年2月1日発行）

小児がんの特性：神経芽腫および腎芽腫の病理所見を中心に …… 小林庸次
糖尿病と脳血管障害 …… 庄司繁市・他
プライマリーケア実践に向けての課題に関する一考察(第一報)
―過去3年間の医療依存度の変化― …… 山内恵美
老人病院における介護従事者の介護負担感とその関連要因(第1報)
―特に介護従事者側からの側面― …… 伊藤亜希子・他
老人病院における介護従事者の介護負担感とその関連要因(第2報)
―特に介護負担を感じる患者の特性についての考察― …… 伊藤亜希子・他
肋間動脈肺静脈交通症に対し肋間動脈塞栓術を施行した1例 …… 田中馨・他
切断指再接着に対する医療用leech(ヒル)の使用経験 …… 原岡剛一・他
大菱形骨骨折を合併したBennett骨折の1例 …… 阿部宗樹・他
左頸部腫瘍を合併したvon Recklinghausen氏病の1例 …… 岡部宇彦・他
簡易型睡眠時無呼吸検査の導入を試みて …… 山本益子・他

第 53 巻　第 1 号（平成17年9月1日発行）

大腸癌検診における一次スクリーニングの考察―疑似便によるHb検出感度比較― …… 浜崎寛・他
当施設における若年者虚血性心疾患の動向 …… 藤阪智弘・他
過去3年間の当院での胸腺関連腫瘍の経験 …… 田中馨・他
幼児期から青年期まで経過を追い治療を終えたHemifacial Microsomiaの1例 …… 村岡道徳・他
外科手術を受けた上唇部の腫瘍形成イチゴ状血管腫の2症例 …… 村岡道徳・他
Bell麻痺に対する徒手療法の有用性 …… 小山茂和・他
膀胱内逸脱尿道ステントを核とした膀胱結石の一例 …… 長井潤・他
喀痰中に腫瘍細胞が出現した悪性リンパ腫の1症例 …… 宇津野美弥子・他
カンジダ属の同定に用いるポアメディアViカンジダ寒天と従来法との比較検討 …… 兼田信子・他
薬-薬連携における患者情報の共有化について―保険薬局の意識調査から― …… 山家直・他
転倒・転落予防―安全計画の立案と実施― …… 中村真由美・他

第 53 巻　第 2・3 号（平成17年12月31日発行）

食生活改善によるメタボリックシンドローム治療 …… 吉川純一
総説「味覚障害 その現状・診断・治療」 …… 愛場庸雅
当科における鼾症、閉塞性睡眠時無呼吸症候群(OSAS)症例に対する
　術後アンケート調査 …… 久保正治・他
慢性腎不全患者に併発した壊死性小腸炎の1剖検例 …… 庄司繁市・他
Blowout Fracture症例の臨床的検討 …… 綾部忍・他
15年以上放置されていた気管孔閉鎖不全に対し、
　hinged flapおよび耳介軟骨移植を用いて再建した一例 …… 羽多野隆治・他
劇症1型糖尿病の1症例 …… 土蔵尚子・他
糖尿病患者嗜好調査(第1報) …… 金石智津子・他
アモキシシリン投与による急性出血性腸炎の1例 …… 山川佳子・他
ドレーン抜去部から嵌頓壊死した小腸脱出を認め小腸切除した1例 …… 横山和武・他
ICUの精神障害発症要因となった環境の改善
　―患者嗜好の音楽を用いたストレスの緩和― …… 谷垣貴子・他
回復期リハビリテーション病棟入院患者における訓練途中中止症例の検討 …… 林口幸裕・他
介護施設におけるインフルエンザ対策に関する報告
　～加湿器導入の試みと今後の課題～ …… 山内恵美・他

第 54 巻　第 1 号（平成18年10月1日発行）

当院における総合診療外来について―開設後3ヵ月間の総括と今後の展望― …… 新藤光郎・他
医療安全に関する職員の意識調査と今後の課題
　―医療安全管理室開設1年9ヵ月経過して― …… 森雅子・他
当院感染制御室の活動　―経費節減の取組みを中心に― …… 大坂芳明・他
症例対照研究による大腸癌検診の有効性の評価 …… 浜崎寛・他
極細径経鼻的胃内視鏡検査における前処置の改良
　―リドカイン・ポンプスプレーのノズルを用いた点鼻薬散布に関する研究― …… 北村彰英・他
超高齢者(80歳以上)体外循環下心臓大血管手術症例の検討 …… 中井康成・他
耳介腫瘍を治療するため耳介と軟骨膜部分切除後耳介再構築を行った2例 …… 村岡道徳・他
外耳道真珠腫および高位頸静脈球症を合併した先天性外耳道狭窄症例 …… 高山雅裕・他
原発性肺多形癌の一例 …… 田中馨・他
足病変の早期発見とフットケアの試み―二次感染の予防に向けて― …… 新家千春・他
循環型開発機構による医療機器管理ソフトウェアの無償提供 …… 西謙一・他

第 54 巻　第 2・3 号（平成19年3月1日発行）

骨粗鬆症患者に対する外来での対応 …… 三木隆己
南大阪病院における腹部大動脈瘤の手術について …… 森田雅文・他
下肢静脈瘤の治療について考えること …… 柿木英佑
南大阪病院における集団災害への医療対応上の問題点(2006年) …… 新藤光郎・他
間歇的にWDHA症候群を呈した原因不明の高VIP血症の一例 …… 中山聖子・他
回復期リハビリテーション施行中、多彩な肝不全症状を呈した脳出血後遺症の一例 …… 松本陽介・他
Epstein-Barr virus(EBV)感染が契機となって発症した急性小脳炎の1例 …… 古下尚美・他
インプラント異物による一側性上顎洞炎の一例 …… 久保正治・他
特殊疾患療養病棟入院患者におけるリハビリテーション途中中止症例の検討 …… 林口幸裕・他
簡易懸濁法導入の効果と課題 …… 梶原啓伯・他
ラテックス免疫比濁法を用いたPSA試薬の基礎的検討 …… 吉川慎一・他
東芝製汎用自動分析装置のセル洗浄改善について
　―アルカリ性洗剤の改良等によるセル間干渉の回避― …… 桑山和哉・他

第 55 巻　第 1 号（平成19年9月1日発行）

病院職員の意識調査に基づいた院内救急蘇生法(AED)普及活動について …… 新藤光郎・他
効かせる漢方―耳鼻咽喉科医のための漢方薬― …… 蔭山充
身体拘束アセスメント基準の標準化
　―集中治療領域での安全・安楽・尊厳の取り組み― …… 瀧昌代・他
特別養護老人ホームにおける栄養ケア・マネジメントの成果と課題 …… 只熊亜子・他
定期健康診断の結果と課題―介護老人福祉施設職員の例から― …… 山内恵美・他
リハビリテーション治療の成果調査―手術を行った股関節疾患の症例― …… 岡本恵・他
入院規則を守らぬ回復期リハビリテーション病棟入院患者の一例
　―患者教育に難渋した症例― …… 清岡学・他
経静脈的ペースメーカー植込みを契機に心不全をきたした
　超高齢者心房中隔欠損症の1手術治験例 …… 中井康成・他
Bednar tumorの一例 …… 羽多野隆治・他
剖検肺に認められたびまん性特発性肺神経内分泌細胞過形成Diffuse
　Idiopathic Pulmonary Neuroendocrine Cell Hyperplasiaの1例 …… 小林庸次・他

第 55 巻　第 2・3 号（平成20年3月1日発行）

耳鳴に対するtinnitus retraining therapy(TRT) …… 坂下哲史・他
盲腸原発の大細胞神経内分泌癌の1剖検例 …… 小林庸次・他
反応性中皮細胞と鑑別が困難であった悪性腹膜中皮腫の1症例 …… 宇津野美弥子・他
成人の心因性難聴の2例 …… 松下直樹・他
呼吸器リハビリテーションが継続し得なかった一内科医の臨床経過 …… 中川類・他
半側空間無視及びPusher現象を伴った左片麻痺患者
　―転倒による大腿骨転子部骨折後の日常生活動作能力低下症例― …… 谷脇弘将・他
白斑を主病変とした喉頭疾患5例について …… 久保正治・他
簡易懸濁法の現状と問題点 …… 勝本大・他

第 56 巻　第 1 号（平成21年3月1日発行）

大腸癌検診における問診の有用性の検討 …… 浜崎寛・他
上顎洞結核の一症例 …… 小西一夫・他
浅大腿動脈に骨化生を認めた長期透析2型糖尿病患者の一例 …… 庄司繁市・他
粘液炎症性線維芽細胞性肉腫Myxoinflammatory Fibroblastic Sarcoma
　―1症例と文献的考察― …… 小林庸次・他
プライマリーケア実践に向けての課題に関する一考察(第二報)
　―介護・医療連携のための課題― …… 山内恵美
看護師に対する呼吸フィジカルアセスメント講習会について …… 新藤光郎・他
肝細胞癌の自然治癒に伴ってリハビリテーション上の軽快が得られた脳梗塞の一例 …… 北村通英・他
当院における冷却塔のレジオネラ属菌検出状況 …… 荒田昭二・他

第 57 巻　第 1 号（平成22年2月1日発行）

耳下腺腫瘍手術における顔面神経主幹部の見つけ方―我々が行っている方法― …… 永田基樹・他
小腸原発の形質芽細胞性リンパ腫plasmablastic lymphoma―1症例と文献的考察― …… 小林庸次・他
学校現場での心肺蘇生法研修を支援するための自主学習支援教材について …… 新藤光郎・他
南大阪病院耳鼻咽喉科における過去30年間の
　鼻中隔彎曲症矯正術施行症例の統計的検討 …… 久保正治・他
術前診断で卵巣腫瘍と考えられた盲端尿管の1症例 …… 長井潤・他
前立腺癌遠隔リンパ節転移の1例 …… 長井潤・他
突発性難聴が疑われた心因性難聴の1例 …… 恒川宜子・他
認知症患者における手指機能と認知機能との関連について―第1報― …… 中村剛・他

回復期病棟において社会的異常行動を示した困惑症例
　―昼夜逆転をきたした認知症症例の経過―　……　川村壮一郎・他
看護師の蓄積的疲労徴候の把握　……　黒坪瑞恵・他
業務改善に向けた衛生材料キットの導入　……　苔縄行博・他
大阪府における難聴児早期発見体制　……　大迫茂人

第 58 巻　第 1 号（平成23年2月1日発行）

総合診療外来からみた糖尿病診療―開設後52ヵ月間の総括―　……　新藤光郎・他
後頭骨・後頭蓋窩の形態的計測結果にもとづいた
　小脳扁桃の下垂の成因についての検討　……　西川　節・他
脳血管性認知症患者における手指機能と認知機能との関連について―第2報―　……　中村　剛・他
当院における浅大腿動脈閉塞症例に対する経皮的動脈形成術　……　宇津典明・他
前立腺針生検によるヘモグロビン変化の検討　……　長井　潤・他
糖尿病教育入院における食事療法の効果について　……　藤吉恭子・他
緊急手術を施行した両側自然血気胸の1例　……　柿本祥太郎
Stent留置によりBrugada様心電図を来した1例　……　中島大成・他
加齢性EBV陽性びまん性大細胞型Bリンパ腫 EBV positive diffuse large
　B-cell lymphoma of the elderlyの1例　……　小林庸次・他
病識欠如などにより訓練拒否をきたした視床出血の一症例　……　谷脇弘将・他
合併症の胆嚢穿孔による腹腔内膿瘍をきたし
　リハビリテーション上の治療が遷延した脳梗塞の1例　……　戸梶史也・他
特別養護老人ホームにおける腫瘍による疼痛評価・コントロールへの関わり
　―胸髄腫瘍・脊柱管狭窄症の一症例を通して―　……　辰己洋史・他
薬剤部における持参薬管理　……　石割美香・他
手指消毒指導への取り組み―患者指導を行ってみて―　……　濱崎　恵・他

第 59 巻　第 1 号（平成24年2月1日発行）

骨粗鬆症性椎体骨折の診断と治療　……　中村博亮
頭蓋頸椎移行部の不安定性に対する後頭骨頸椎固定術：
　治療成績と予後に影響する因子の検討　……　西川　節・他
当科における単純性血管腫242名の統計　……　春原真理・他
蘇生法新ガイドライン説明会を通じた病院職員の蘇生に対する意識調査　……　新藤光郎・他
胸腺非定型的カルチノイドの2手術例　……　柿本祥太郎・他
当科で経験した特殊な大動脈瘤の2例　……　上田航平・他
縦隔鏡検査で診断できた縦隔小細胞神経内分泌癌の1例　……　久保正治・他
広汎にラブドイド像を伴う結腸癌(composite rhabdoid tumor)の1例
　および文献的考察　……　小林庸次・他
小児肘関節分散脱臼の1例　……　恒遠祐子・他
声門下狭窄に対して気管形成術をおこなった1例　……　和田匡史・他
口蓋扁桃の神経鞘腫(Schwannoma of the palatine tonsil)(英語)　……　後藤淑子・他
リンパ節腫脹との鑑別に拡散強調MR neurographyが有用であった
　頸神経原性腫瘍の一例　……　井口広義・他
リラグルチドにより強化インスリン療法から離脱できた高齢者糖尿病の1例　……　森上浩和・他
2型糖尿病・関節リウマチ合併患者に直接Coombs試験陰性の
　自己免疫性溶血性貧血を合併した1例　……　澤　絢・他
糖尿病患者に対する安静時代謝量測定を用いた必要エネルギー量の検討　……　藤吉恭子・他
要介護老人における身体状況と介護士による介護所要時間との関係　……　鎌倉　裕・他

南大阪病院医学雑誌
第60巻記念誌発刊にあたり

南大阪病院医学雑誌が発刊されて既に半世紀以上が経過し、今回第60巻記念誌の発刊を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

昭和52年4月に南大阪病院に赴任以来医学雑誌の編集を任され、退職の平成24年3月までの35年間を務めたのち現在に至りますが、この間ご協力を頂いた多くの皆様に感謝申し上げますと共に、古くは昭和28年の創刊以来、昭和52年に私が編集を引き継ぐまでの四半世紀に亘る諸先輩医師、職員の方々の医学雑誌維持への意志と情熱におおきく敬意を表する次第です。

創刊者の内藤景岳元院長は、職員にとって日頃の研究成果を容易に掲載出来る病院独自の定期学術誌を持つことは、医学、医療の向上に有益とされ、さらに医師にとっては学位申請論文の投稿、発表にも有利であるとの学究的な理念に基づき、この医学雑誌の意義を語られました。実際に昭和52年までに数名余の方が、南大阪病院から当誌に研究業績を発表され学位を取得され指導医として、活躍されておりました。

昭和52年以降も産婦人科、小児科の診療は評判がよく、加えて同法人下に健診センター、看護専門学校、臨床検査技師専門学校、 介護施設の増設により、各職場から多くの論文の応募が増え、中には英文、独文による投稿、おひとりで数編もの貴重な原稿を頂ける時期が続き、年2回の発行に加え、節目の30年、40年、50年にはさらに充実した記念誌も編集、刊行しております。各号の論文の中から、優秀論文を推薦、表彰する学術奨励賞制度も昭和60年から行なわれ、昨年で第26回を数えます。第1回の受賞選考時には、公平を期すために大学の専門家に選評を確認に出向いたことが、なつかしく思い出されます。

その後研修医制度の変革等で、複数の診療科の閉鎖、医局員の減少から論文の応募が少なくなり、年2回の発行は困難となり第56巻からは年1回となりました。院内、外共に熱心に貴重な投稿を頂く皆様には、ご迷惑をお掛けすることとなりましたが、中央担当者への一部内容変更届けを経て、本誌は伝統の灯を消すことなく今日まで脈々と受け継がれております。未来に向けても南大阪病院医学雑誌は、病院と共に永遠です。

発刊60周年のお祝いと共に、本誌の益々のご発展を祈念申し上げ、ご挨拶と致します。

平成25年4月

弘道会　浪速生野病院　久保正治
（前　南大阪病院医学雑誌編集委員長）

第 60 巻　第 1 号（平成25年4月30日発行）

睡眠障害と生活習慣病との悪循環 …… 稲葉雅章
末梢動脈疾患(PAD)の診断と意義 …… 福本真也
頸椎前方除圧固定術・椎弓拡大形成術の長期治療成績 …… 西川節・他
診断が困難であった結核性頸部リンパ節炎の1例 …… 久保正治・他
肺胞出血を伴ったMPO-ANCA関連腎炎を発症し、
剖検にて珪肺の合併を認めた1症例 …… 久米田靖郎・他

漿膜に及ぶ偽浸潤がみられた胃の巨大なPeutz-Jeghers型ポリープの1例 …… 小林庸次・他
18トリソミー症候群にみられた肺動脈の解離性動脈瘤の1新生児剖検例 …… 小林庸次・他
肺MALTリンパ腫の1例 …… 柿本祥太郎・他
検診の上部消化管バリウム検査後に大腸穿孔を来たした1例 …… 三木高平・他
ARB服用糖尿病合併高血圧患者におけるカンデサルタン切り替えによる
　血圧等の検討 …… 川口祐司・他
看護師に対する人工呼吸器警報シナリオ対応シミュレーション講習について …… 新藤光郎・他
術後せん妄評価のためのアセスメントシート導入による意識効果の検討 …… 村上咲希・他
当科で経験した総頸動脈蛇行症の1例 …… 上田航平・他
病棟薬剤業務を開始して　―疑義照会内容の変化― …… 村田美香・他
意識下手術を受ける患者の不安に対する音楽効果の検証 …… 七津角美幸・他
変形性膝関節症で転倒後に立ち上がり困難となった症例 …… 松原俊男・他
右人工骨頭置換術施術1ヵ月後に当院回復期に転院された症例 …… 松井智史・他
乳房超音波検査で発見された微小乳癌の一例 …… 中谷守一・他
糖尿病外来患者の継続栄養指導に対する意識調査 …… 藤吉恭子・他
NiTi形状記憶合金性尿道ステント(メモカス028®)の使用経験 …… 丸山琢雄・他
診断に苦慮した血管免疫芽球性T細胞リンパ腫の症例 …… 森　彰之・他

第 61 巻　第 1 号（平成26年4月1日発行）

骨髄以外の脂肪組織にも広汎に膠様変性のみられた1剖検例 …… 小林庸次・他
南大阪病院初期臨床研修医に対するフィードバックシステムの問題点（第一報） …… 新藤光郎
グリメピリド服用2型糖尿病患者における
　アログリプチン追加投与による脂質改善の検討 …… 川口祐司・他
血液透析患者におけるエポエチンアルファ(EPO)から
　エポエチンベータペゴル(CERA)に変更後の鉄代謝動態の変化に関する検討 …… 久米田靖郎・他
胆石イレウスの1例 …… 沢田明也・他
動作への介入により歩容の改善が得られた外来片麻痺患者の1症例 …… 中原裕貴・他
フラダンス後に右膝関節痛を呈した1症例 …… 川崎翔吾・他
離床センサーベッド使用基準の作成～統一したアセスメントを目指して～ …… 松村知架・他
糖尿病患者のフットケアに対する指導の統一
　～患者のセルフケアに対する意識向上を目指して～ …… 藤田美紗子・他

第 62 巻　第 1 号（平成27年4月1日発行）

原発不明癌性心膜炎の1例 …… 柿本祥太郎・他
イコサペント酸エチル服用糖尿病合併高脂血症患者における
　オメガ-3脂肪酸エチル切り替えによるトリグリセリド値等の検討 …… 川口祐司
グラルギン・グリルジンを用いたB2B療法の有用性と安全性の検討 …… 川口祐司・他
大阪市南部地域における糖尿病患者の高血圧治療の意識調査
　―2000年と2012年の比較― …… 久米田靖郎・他
扁平上皮への分化がみられた胃の神経内分泌癌―1例報告と文献的考察― …… 小林庸次・他
人工呼吸器警報対応研修の改善の試み …… 新藤光郎・他
腸間膜静脈血栓症の1例 …… 中島大成・他
膵仮性嚢胞内出血の1例 …… 橋本篤・他
胆管癌に胆嚢癌を合併した1例 …… 宮岡雄太・他
入院患者における疑義照会の分析と今後の課題 …… 森澤祐子・他

第 63 巻　第 1 号（平成28年4月1日発行）

１週間持続型DPP-4阻害薬の24時間持続血糖モニター(CGM)による検討 …… 川口祐司・他
結腸の内反性増殖のみられるsessile serrated adenoma/polyp(SSA/P)内に
　発生した大細胞神経内分泌癌の1例 …… 小林庸次・他
術後悪心・嘔吐に対するジフェンヒドラミン・ジプロフィリン配合薬と
　デキサメタゾンの併用による抑制効果 …… 下雅意学・他
GLP1受容体作動薬とSGLT2阻害薬を併用した高度肥満2型糖尿病患者の1例 …… 桑村麻由子・他
肺癌術後に脊髄梗塞を発症した1例 …… 柿本祥太郎・他
右胸部打撲3週間後に緑色連鎖球菌群細菌による左膿胸をきたした1症例 …… 新藤光郎・他
足関節三果骨折に対して超音波画像診断装置で評価し検証した1症例 …… 森田春信・他
円滑な退院支援システムの構築
　―スクリーニングシート・退院調整チェックリストを用いて― …… 岡田麻衣・他
高位脛骨骨切り術後に内転筋板へのアプローチにより立ち上がり
　動作改善がみられた1症例 …… 川田淳司・他
自立度に応じた口腔ケアを実践するために …… 樫本　円・他
当院におけるDoor-to-balloon-time短縮への取り組み
　―フローチャートを作成・使用して― …… 西本和江・他
当院におけるNST臨床実地修練の成果と今後の課題 …… 井ノ上恭子・他

第 64 巻　第 1 号（平成29年5月1日発行）

血管再生療法が奏功した女性上肢Buerger病の1例 …… 中島大成・他
大阪市南部地域における病診連携の試み(第16報)―低血糖に関するアンケート― …… 西村有里・他
南大阪病院初期臨床研修医に対するフィードバックシステムの問題点(第2報) …… 新藤光郎
未熟成分のみられないpineal anlage tumor(松果体原基腫瘍)の亜型の1小児例 …… 小林庸次・他
多発骨転移がみられた原発不明神経内分泌癌の1例 …… 北坂七瀬・他
肝不全をきたし死亡した常染色体優性多発性嚢胞腎の1例 …… 和田嵩史・他
当科におけるインシデント・アクシデントに対する改善の試み …… 齋藤　隆・他
動作への介入で膝関節痛増強に伴い出現した腰背部痛が軽減した症例 …… 坂下裕哉・他
〈CPC記録〉2型糖尿病、慢性腎不全の治療中に原発不明癌のため死亡した1例 …… 林　優里・他

第 65 巻　第 1 号（平成30年5月1日発行）

保存的治療が可能であった特発性大網出血の1例 …… 竹村雅至・他
肝孤立性壊死性結節(solitary necrotic nodule)の1例報告
　―病因検索および文献的考察― …… 小林庸次・他
持続性選択的DPP4阻害薬トレラグリプチンによる
　服薬アドヒアランスと血糖コントロールの検討 …… 川口祐司・他
デュラグルチドとインスリン配合剤を併用しCGMで効果を見た
　高齢ステロイド糖尿病の1例 …… 西村有里・他
魚骨の小腸穿孔により多発肝膿瘍をきたした1例 …… 池田大輔・他
当院外来維持透析患者における骨密度と各種パラメーターとの関連 …… 佐久間知子・他
ヘモダイアフィルターABH-26PAとMFX-25Sの溶質除去性能の比較 …… 安田栄吉・他
非麻痺側の過活動が歩行の安定性向上を阻害した脳梗塞患者 …… 平川正彦・他
後足部回内偏位による膝関節内側部痛が出現した1症例
　―動的アライメント修正に着目して― …… 松野諒平・他
ボリコナゾールのTDM実施が有効であった1症例 …… 古川高英・他
ウォーキングカンファレンスの導入―従来の申し送り廃止を目指して― …… 長瀬英子・他
乳癌の術後合併症により肩関節の可動域制限をきたした1症例 …… 稲川由里・他

第 66 巻　第 1 号（平成31年4月30日発行）

週1回GLP-1受容体作動薬と週1回DPP-4阻害薬の2型糖尿病合併透析患者の
　血糖変動に及ぼす影響
　―フラッシュグルコースモニタリング(FGM)を用いた検討― …… 佐久間知子・他
当院における80歳以上の高齢者胃癌に対する胃切除術の成績と問題点 …… 竹村雅至・他
乳頭部超音波検査における撮像の工夫―乳頭部腺腫―
　NAC(Nipple-Areola Complex:乳頭乳輪部)を囲む円筒状リングの使用、供覧画像 …… 中谷守一・他
急性胆嚢炎に対して内視鏡的経乳頭的胆嚢ドレナージ術を施行した3例 …… 前田夏美・他
血液透析患者の難治性腹水に対し腹膜透析移行により
　腹水コントロールを行った1例 …… 増本晃治・他
当院における胃粘膜下腫瘍に対する腹腔鏡内視鏡合同手術の外科的治療成績 …… 竹村雅至・他
直腸癌症例に認められた線毛性前腸性肝嚢胞(ciliated hepatic foregut cyst)の1例 …… 小林庸次・他
膝蓋骨骨折術後に生じた筋硬結の改善によりしゃがみ込みが可能となった1症例 …… 川崎春名・他
ヘモダイアフィルターABH-26PAの補液量の違いによる溶質除去性能の比較 …… 安田栄吉・他
新型ヘモダイアフィルターPF-170Hの希釈方法の違いによる溶質除去性能の比較 …… 高田龍弥・他

第 67 巻　第 1 号（令和2年7月31日発行）

高度肥満患者5名に対する腹腔鏡下スリーブ状胃切除術の減量および代謝改善効果 …… 宮本祥子・他
経口プレドニゾロン治療を行ったリウマチ性多発筋痛症14症例の
　診断および治療経過についての検討 …… 新藤光郎・他
血液透析患者におけるerythropoietin(EPO)抵抗性貧血に及ぼす
　continuous erythropoietin receptor activator(CERA)の効果 …… 久米田靖郎・他
巨大食道裂孔ヘルニアに伴う瘢痕性食道狭窄に対して
　鏡視下に食道切除再建術を施行した1例 …… 竹村雅至・他
尿路感染症の血行性感染が疑われた透析人工血管感染症の1例 …… 増本晃治・他
上行結腸癌による腸閉塞に対して経鼻内視鏡とディスポーザブルスライディング
　チューブを併用し回盲部ステント留置術を行った1例 …… 前田夏美・他
糖尿病患者における災害時に対する患者教育について～当院の現状と今後の課題～ …… 菊池庄祐・他
ABH-18LAとポリフラックスH(170H)における溶質除去性能の比較 …… 矢崎日光・他
外側膝蓋支帯の滑走性向上によりしゃがみ込み動作獲得した1例 …… 坂井晴美・他
歩行速度と歩行能力の向上を認めた脳卒中患者への治療経験 …… 渡邊　忠・他

第 68 巻　第 1 号（令和3年4月30日発行）

左乳房部分切除術と左腋窩センチネルリンパ節生検術後36日目に
　発症した乳び漏の1例 …… 中谷守一・他
腹腔鏡下に憩室切除術を行った十二指腸憩室穿孔の1例 …… 竹村雅至・他
多発肝転移を有する切除不能進行胃癌に対して
　3次治療でのペムブロリズマブが著効した1例 …… 竹村雅至・他
エビデンスと実臨床から考える糖尿病治療～SGLT2阻害薬の位置づけ～ …… 川口祐司・他
血糖変動から読み解く～ソリクア配合注の可能性　4症例からわかったこと～ …… 濱崎健司・他
極細径内視鏡を用いた経口直接胆道鏡が有用であった3例 …… 前田夏美・他
ANCA関連血管炎で加療中に急性呼吸不全を来した1症例：剖検例 …… 宮本祥子・他
1型糖尿病患者におけるSGLT2阻害薬(イプラグリフロジン)の有効性と
　安全性の検討 …… 羽鹿由里子・他
泌尿器科領域における抗菌薬投与期間変更による術後感染発生率の検証 …… 森崎佳生梨・他
2018年から始まった施設基準取得ワーキンググループの取組について …… 徳永雅美・他
新型血液回路「アーチループ」使用時の抗凝固剤投与量の検討 …… 安田栄吉・他
大規模災害時におけるセルフケア能力向上を目指して
　～糖尿病患者への集団指導を実施して～ …… 小川雅寛・他
維持血液透析患者の生活習慣と栄養状態の検討 …… 金石智津子・他

慢性リンパ性白血病との鑑別にフローサイトメトリーが有用であった
　サイトメガロウイルスによる単核球症類似疾患の1例 …… 新 藤 光 郎・他
胸腔鏡下に切除した胸腔内脂肪腫の1例 …… 竹 村 雅 至・他
私がよくする手術、そのコツ
　その1：下腿切断－長期フォローアップも視野に入れて－ …… 蔡 顯 真
腎移植後9年の移植尿管結石に対してf-ＴＵＬを施行した1例 …… 壁 井 和 也・他
多嚢胞性卵巣形態（PCOM）併存の、膵酵素上昇が軽度のコクサッキーウィルス
　A5型関連劇症1型糖尿病－PCOMも併存した、膵酵素上昇が軽度のFT1DM－ …… 羽 鹿 由 里 子・他
2型糖尿病患者におけるSGLT2阻害薬ルセオグリフロジンの
　脂質プロファイルへの影響 …… 羽 鹿 由 里 子・他
右肝円索に伴った左側胆嚢に対し腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した1例 …… 逸 見 冴 子・他
褥瘡予防対策委員のラダーレベルに応じた教育方法と評価表の作成 …… 村 上 巌・他

創刊70周年記念論文集

南大阪病院医学雑誌
第70巻記念誌発刊に寄せて

南大阪病院医学雑誌は昭和28年に創刊され、このたび節目となる第70巻記念誌の発刊を迎えることができました。南大阪病院の開設が昭和26年であるため、南大阪病院の歴史は南大阪医学雑誌の歴史とほぼ重なります。当初は年2回の発行でありましたが、医療業務の多忙化や医局員の減少、医学論文の作成に対する指導者の不在などがあり、第56巻からは年1回の発行となっています。

さらに、ここ数年間はCOVID-19の感染拡大によりほとんどの診療科の医師や、看護師、薬剤師、理学療法士が自分たちの専門領域を越えて、かつ感染のリスクを抱えながらもCOVID-19の治療や感染制御に注力を続けてきました。この影響でほとんどの学会がWEB開催となり、医療従事者同士が対面で議論を交わす機会が失われたことで学会発表や論文作成にも支障が生じています。しかしながら、COVID-19感染症は慢性疾患があると重症化するリスクがあるため、循環器疾患、呼吸器疾患、代謝内分泌疾患に対して治療計画をきっちりと立てて、定期的に見直し、計画から外れている場合には治療強化をする必要が出てきているために医学研究は停滞してはいけません。

研究成果を学会発表だけにとどめるとそれは一時的なもので、開催後に誰もが入手できる情報ではなくなります。それに対して、論文の場合は、図書館、大学、研究機関、WEBなどを通じて世界中で閲覧できるため、学術研究では刊行物に掲載される原著論文が最も重要視されます。原著論文では、関連分野の先行研究を引用文献として、新たに得られた知見を発表します。さらに、他の研究者がその後に研究を継続・発展しやすいように、残された課題にも言及していきます。これにより過去や未来の論文との接続が可能となります。そして将来にわたる医療知識の積み重ねとなることが論文作成の醍醐味であります。

このたび、第70巻の記念誌を発刊できたことは大変喜ばしいことで、多くの諸先輩医師、職員の方々に感謝と敬意を表します。しかし、これは単なる通過点です。

これからも南大阪病院は、地域からよろこばれ、信頼される病院を目指すと同時に、最先端の医療行為を受けることができる病院となるために南大阪病院医学雑誌を通じて新しい研究成果を発信し続けることを期待しております。

令和5年5月

南大阪病院医学雑誌編集委員長　川口　祐司

第 70 巻　第 1 号（令和5年5月1日発行）

南大阪病院の乳房手術における菱形皮弁術の適応と結果
－菱形皮弁を用いた3例－ …… 中谷守一・他
術前化学療法施行胸部食道癌症例における化学療法前後の
Glasgow Prognostic Scoreと予後の関係についての検討 …… 竹村雅至・他
症候性外反扁平足変形に対して機能的再建術を行った1例 …… 森川潤一・他
私がよくする手術、そのコツ　その2：リンパ管静脈吻合
－市中病院だからこそできること－ …… 蔡顯真
新型コロナウイルス感染症－本院入院患者の第1波～第3波と第4波の比較－ …… 中島秀行・他
新規超速効型インスリンから考える患者中心医療
－インスリン選択チェックシートの作成－ …… 川口祐司・他
CETP（Cholesteryl-Ester Transfer Protein）欠損症の急性心筋梗塞の一例 …… 中島大成・他
III型食道裂孔ヘルニア術後に洞不全症候群を合併した1例 …… 山田正法・他
チラーヂンS®錠から散剤への切り替えで薬剤性肝障害が改善した
甲状腺機能低下症の1例 …… 羽鹿由里子・他
6年間で増大し巨大な有茎性ポリープの形態を呈した胃幽門腺腺腫内癌の一例 …… 山本一輝・他
嚢腫増大を認め腹腔鏡下に手術を行った小腸間膜リンパ管腫の1例 …… 加藤きみ佳・他
高齢男性に生じた乳頭状汗管嚢胞腺腫の1例 …… 奥野高裕
患者の自律・尊厳の尊重・看護部での倫理的取り組み
－IVRを受ける患者のおむつ着用に対する看護師の認識について－ …… 堀野祥子・他
上腹部での自由呼吸下におけるFast 3Dモードを併用したT1 FFE3D法の検討 …… 石谷萌・他
繰り返し再発する腰部脊柱管狭窄症術後患者の歩行獲得症例 …… 石原茉奈・他
趣味活動を取り入れた訓練で立ち上がり動作改善につながった一例 …… 植村太一・他
術後より右下肢の痺れが生じ立ち上がり動作獲得に至った症例 …… 山崎春香・他
足部･足趾に痺れがある腰部脊柱管狭窄症患者が起立動作を獲得した症例 …… 柳幸あおい・他
当院における新型コロナウイルス検査について
～新型コロナウイルス感染第2波から24時間体制で院内対応した
SARS-CoV-2検査の運用と検査結果から得た知見について～ …… 兼田信子・他
当院での減量代謝・改善手術における栄養指導の現状と今後 …… 野崎幸・他
無菌透析液供給（透析液清浄化）を目指した取り組み
約10年間使用した透析配管の評価と洗浄不足部位の特定 …… 七野裕美・他
当院におけるCOVID-19入院患者分析（発生後3年間の軌跡） …… 夜久直也・他

南大阪病院学術集談会から南大阪学術懇話会へ

南大阪病院は1951年5月に開設され、南大阪病院医学雑誌は1953年に創刊されました。また1955年1月から『南大阪学術集談会』が毎月開催されました。これは各診療科、薬剤部、診療支援部（臨床検査科、放射線科、リハビリテーション科、栄養科）、看護部および事務部が輪番制で主催し、診療・学術研究・業務報告・改善などを全職員対象に発表しその成果を共有する場として設けられました。ただし2008年5月第609回開催時から『南大阪病院学術懇話会』と改称するとともに3ヶ月に一度の開催に変更されました。

2006年4月に進藤光郎先生が着任され教育研修センターが設立されたのを機に、2007年より毎年3月開催時には、研修医が当院での研修期間で最も印象に残った患者さんの臨床経過についてまとめて報告する貴重な研修医発表の場にもなっています。

1955年1月の第1回南大阪病院学術集談会開催以来、現在、のべ685回 （現 第77回 南大阪病院学術懇話会、2023年3月22日開催）におよびます。本付録は総合病院南大阪病院創立40周年記念史（1991.5.1発行）掲載以後の1991年第423回以降2023年3月までの演題目次をまとめました。

学術集談会記録一覧表

第423回　1991年6月27日(木)　（当番：小児科）
- (1) 多彩な合併症を認めたMycoplasma肺炎の1例 …… 山根秀一・他
- (2) 学校検尿で発見されたslowly progressive IDDM(インスリン依存型糖尿病)の1例 …… 森岡久泰・他
- (3) 小児期悪性固形腫瘍とN-myc遺伝子 …… 堀井由博・他
- (4) 小児一過性高ALP血症の2例 …… 梅本潤一・他

第424回　1991年7月25日(木)（当番：内科、循環器内科）
- (1) 原発性アミロイドーシスに対するDMSOの1治験例 …… 濱田偉文・他
- (2) 悪性症候群の1例 …… 津留基通・他
- (3) 肝硬変症に合併した肺高血圧症の1剖検例 …… 小泉直人・他
- (4) 低カリウム性ミオパチーの1例 …… 小松原千鶴子・他
- (5) "エホバの証人"の妻をもつ下血・意識障害の1例について …… 宮越一穂・他
- (6) クルド民族問題と日本の医療援助 …… 奥村悦之・他

第425回　1991年8月29日(木)（当番：外科）
- (1) 腸重積を呈した小児回腸原発バーキットリンパ腫の1例 …… 左古昌蔵・他
- (2) スキンステープラーを使用した遊離皮膚移植について …… 福本進・他
- (3) 腹腔鏡下胆摘術の検討 …… 後藤司・他
- (4) 長期間、低血糖症状を呈したMENI型インスリノーマの1治験例 …… 飛田忠之・他

第426回　1991年9月26日(木)（当番：胸部外科）
- (1) 原発性肺平滑筋肉腫の1手術例 …… 堀本仁士・他
- (2) 大動脈弁置換術後の胸骨骨随炎、縦隔洞炎に対する有茎大網移植術について …… 森本大成・他
- (3) 術後多底器不全をきたした高令者腹部大動脈癌の1治験例 …… 堀本仁士・他
- (4) 79才高令者の左房粘液腫 …… 柿本祥太郎・他

第427回　1991年10月31日(木)（当番：南大阪総合健診センター）
（1）南大阪ファンクスプールにおける整形外科疾患の
　　運動療法について(第1報) …… 健康開発増進部　石　原　健　司・他
（2）発見から2年後に手術が行われた腎癌の1例 …… 健康管理部　張　　和　子・他
（3）大腸癌スクリーニングとその追跡業務 …… 健康管理部　中　村　真　理　子・他
（4）南大阪総合健診センターにおける最近2年間の全発見癌とその評価 …… 小　畑　大　吉・他

第428回　1991年11月28日(木)（当番：産婦人科）
（1）性器結核の1例 …… 村　中　純　子・他
（2）最近の不妊症治療について …… 小　林　真　一　郎・他
（3）異なった経過をとった常位胎盤早期剝離の2例 …… 船　内　洋　司・他

第429回　1991年12月26日(木)（当番：眼科、臨床検査科）
（1）糖尿病性網膜症について …… 渡　辺　ひ　と　み・他
（2）m-GOTの基礎的検討 …… 大　仲　一　善・他
（3）24時間ホルター血圧計の基礎的検討 …… 田　口　葉　子・他

第430回　1992年1月30日(木)（当番：耳鼻咽喉科、薬剤科）
（1）口蓋扁桃摘出手術時の扁桃膿栓よりの菌検出について …… 三　木　祐　一　郎・他
（2）喉頭癌症例に対するCordectomy施行例の音声機能と予後について …… 久　保　正　治・他
（3）テオフィリン血中濃度に及ぼすエリスロシンの影響について …… 大　西　智　子・他
（4）服薬指導の現況について …… 箕　山　か　お　る・他

第431回　1992年2月27日(木)（当番：整形外科、リハビリテーション、放射線科）
（1）MRIの概要と現況について …… 加　藤　　茂・他
（2）当院リハビリテーション室における昨年1年間の患者利用状況 …… 米　山　健　一　郎・他
（3）リスフラン関節脱臼骨折の1例 …… 安　水　　斉・他
（4）大腿骨頸部外側骨折における治療法の検討 …… 永　井　琢　巳・他
（5）モンテジア骨折の治療経験 …… 藤　島　宣　彦・他

第432回　1992年3月27日(金)（当番：給食料、医事部、看護部）
（1）糖尿病を誘発する食事と生活上の問題点 …… 林　　香　枝・他
（2）本院における受診患者の地区別分布状況について …… 門　林　広　幸・他
（3）転院をめぐる諸問題について―病々連携の具体的展開― …… 友　田　裕　康・他
（4）看護業務の1考察について―薬剤師の病棟進出による― …… 山　岸　国　子・他

第433回　1992年4月30日(木)（当番：小児科）
（1）咳嗽を主訴とした非ホジキンリンパ腫の1例 …… 木　原　明　生・他
（2）G-CSFにより治療しえた無顆粒球症の1例 …… 山　根　秀　一・他
（3）腎外症候性腎炎の１例 …… 梅　本　潤　一・他
（4）小人症―特に下垂体性小人症を中心に― …… 山　中　弘　文・他

第434回 1992年5月28日(木)（当番：内科、循環器内科）
（1）内視鏡的にポリペクトミーを行った大腸脂肪腫の1例 …… 山　田　卓　一・他
（2）Creutzfeldt-Jakob病の1例 …… 小　泉　直　人・他
（3）血糖コントロールによる糖尿病性神経障害の可逆性 …… 間　島　毅　彦・他
（4）トレッドミル負荷試験と冠動脈造影検査との対比 …… 宮　越　一　穂・他
（5）気管支喘息長期入院患者の問題点 …… 奥　村　悦　之・他

第435回　1992年6月25日(木)（当番、外科）
（1）男性乳癌の1例 …… 左　古　昌　蔵・他
（2）潰瘍性大腸炎の治療に対する中心静脈栄養の意義 …… 北　村　彰　英・他
（3）呼吸ガスモニターにて発見された術中無気肺の1例
　　(呼吸ガスモニターの有用性の検討) …… 福　本　　進・他
（4）住之江区大腸癌集団検診と手術 …… 後　藤　　司・他
（5）ステロイド大量投与が有効であったと思われる術後ARDSの1例 …… 飛　田　忠　之・他

第436回　1992年7月30日(木)（当番：胸部外科）
(1) 肺癌化学療法後の白血球減少に対するG-CSFの有用性 …… 森本大成・他
(2) 肺癌手術時縦隔リンパ節転移で発見された甲状腺癌の1例 …… 木村弘・他
(3) 大動脈弁置携術後の治療困難であったMRSA感染症の1例 …… 森本大成・他
(4) 肺癌脳転移に対する放射線療法の効果について …… 柿本祥太郎・他

第437回　1992年8月27日(木)（当番：南大阪総合健診センター）
(1) 総合健診及び短期人間ドックにおける糖尿病教室の試み …… 下田美紀・他
(2) 当健診センターにおける乳癌健診の成績 …… 中村知世・他
(3) 大腸癌の逐年健診 …… 小畑大吉・他
(4) 妊婦水泳のアンケート調査について …… 石川正子・他
(5) 成人病教室(高血圧・糖尿病クラス)のシステムについて …… 山本恵子・他

第438回　1992年9月24日(木)（当番：産婦人科）
(1) アルコール固定法にて治療を行った卵菓チョコレート嚢腫の2例 …… 村中純子・他
(2) クラミジア感染による絨毛羊膜炎の2例 …… 小林真一郎・他
(3) 巨大卵巣腫瘍の1例 …… 船内洋司・他
(4) 現代中国医療事情について …… 邢福祺

第439回　1992年10月29日(木)（当番：眼科、臨床検査科）
(1) 血液凝固検査に対するサンプリングエラーの影響 …… 水草洋子・他
(2) 院内におけるHCV陽性率の現状 …… 大仲一善・他
(3) 乳腺穿刺吸引細胞診について―男性乳癌の1例― …… 宇津野美弥子・他
(4) 網膜血管炎による硝子体出血の2例 …… 山口ひとみ・他
(5) 超音波白内障手術について …… 佐藤文平・他

第440回　1992年11月26日(木)（当番：耳鼻咽喉科、薬剤科）
(1) 当科過去15年間、100例の気道・食道異物について …… 三木祐一郎・他
(2) 同一耳下腺内複数発生の混合腫瘍の1例 …… 柴田重太郎・他
(3) 稀で危険な気管異物の1例と問題点 …… 久保正治・他
(4) 当院における外来糖尿病患者の使用薬剤の調査 …… 村山誠子・他
(5) アンキオテンシン変換酵素(ACE)阻害薬における副作用
としての空咳の調査 …… 加古良一・他

第441回　1992年12月24日(木)（当番：放射線科、リハビリテーション室）
(1) 非相称感材システムの検討 …… 中村勝・他
(2) 機能訓練室における入院患者の訓練状況について …… 米山健一郎・他

第442回　1993年1月28日(木)（当番：給食科、看護部、事務部）
(1) 食物繊維について …… 鍵純子・他
(2) 術後ストマケアーの工夫と実際 …… 佐藤祝子・他
(3) 健診機関で働く看護職の役割 …… 増田容子・他
(4) 本院における老人患者の推移とその影響 …… 門林広幸・他
(5) 消耗品等の使用状況とその改善策について …… 戸谷雅己・他

第443回　1993年2月25日(木)（当番：小児科）
(1) 急性腹症として当科に紹介された腹部巨大腫瘍の1例 …… 木原明生・他
(2) 初診時水腎症から腎不全に陥っていたダウン症候群の1例 …… 山根秀一・他
(3) 小学校低学年で脂肪肝を呈し、選択的IgA欠損症を合併した
小児肥満の1例―小児肥満の近年の動向と治療について― …… 山中弘文・他

第444回　1993年4月8日(木)（当番：内科、循環器内科）
(1) 最近経験した肺動脈血栓塞栓症の検討 …… 横田直人・他
(2) 胃サルコイドーシスの1例 …… 津留基通・他
(3) 高血圧心の形態的変化の検討 …… 中野稔雄・他
(4) EVLの施行経験 …… 茶谷徳行・他

(5) 当科の糖尿病における無通性心筋虚血疾患の検討 …… 間島毅彦・他

第445回 1993年4月30日(金)（当番：外科、泌尿器科）
(1) 術前放射線療法を施行した直腸癌手術症例の検討 …… 田中慶太郎・他
(2) 当院における食道表在癌の検討 …… 北村彰英・他
(3) 腹腔鏡下メッシュ充填法で治療した十二指腸潰瘍穿孔の1例 …… 後藤司・他
(4) 現代泌尿器科の進歩について …… 松井孝之

第446回 1993年5月27日(木)（当番：胸部外科）
(1) ペースメーカー植込み術後合併症について …… 橋本隆彦・他
(2) 開心術後縦隔膜の検討 …… 木村弘・他
(3) 肺繊毛癌の1例 …… 橋本隆彦・他
(4) 縦隔腫瘍手術例の検討 …… 柿本祥太郎・他

第447回 1993年6月24日(木)（当番：南大阪総合健診センター）
(1) 南大阪総合健診センターにおける癌発見状況の推移とその特徴 …… 小畑大吉
(2) 南大阪ファンクスにおける成人病教室の現状について …… 石崎共美

第448回 1993年7月29日(木)（当番：産婦人科）
(1) アンケート調査によるマタニティースイミングの効果について
—スポーツが妊娠に及ぼす影響— …… 山田聖・他
(2) 卵巣癌の化学療法後の血小板減少症hM-CSFが有効であった4症例 …… 村中純子・他
(3) 子宮筋腫核出術後妊娠に至った症例 …… 船内洋司・他

第449回 1993年8月26日(木)（当番：眼科、臨床検査科）
(1) 薬剤感受性試験の現状—セプターシステムについて— …… 荒田昭二・他
(2) 心室遅延電位(レイトポテンシャル)の臨床的意識 …… 加奥節子・他
(3) 硝子体手術が奏功した星状硝子体症の2例 …… 石田理・他

第450回 1993年9月30日(木)（当番：耳鼻咽喉科、蒸剤科）
(1) 本院における降圧剤の使用実態 …… 田中多宏・他
(2) 患者の意議調査から見た吸入薬の服薬指導の重要性 …… 岡山容子・他
(3) 当科における過去5年間の教急患者後送実態 …… 若見晩樹・他
(4) 最近経験した稀な両側口蓋扁桃結核並びに鼻咽腔結核の2症例について
鼻咽腔結 …… 西村啓三・他
(5) 眼症状を主症状としたカンジタ性左蝶形洞ピオツェーレの1例 …… 久保正治・他

第451回 1993年10月28日(木)（当番：整形外科、リハビリテーション室、放射線科）
(1) 若年性脳腫瘍患者の1症例報告—闘病生活の手記、記録をもとに— …… 楠田繁司・他
(2) 骨塩定量装置QDR-1000について …… 小林宏三・他
(3) 肩関節症患における超音波検査 …… 小山茂和・他

第452回 1993年10月25日(木)（当番：看護部、事務部、給食科）
(1) 糖尿病と栄養指導 …… 伊藤晶・他
(2) 福祉機器の利用について—車椅子の申請を例に— …… 瀬戸口格・他
(3) 5年目を迎えたショックコールの報告 …… 森崎美登・他
(4) ADLの自立に長期間要した患者の看護 …… 居垣清乃・他
(5) 在宅自己指導を考える …… 赤瀬恵子・他
(6) 臨床指導者委員会の現状と展望 …… 日高加代・他

第453回 1993年12月22日(木)（当番：小児科）
(1) 重症心不全および小脳虫部欠損を合併した13トリソミーの1例 …… 木原明生・他
(2) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌によるブドウ球菌性熱傷様症候群の1例 …… 山根秀一・他
(3) 麻疹後にみられたMRSA膿胸の1例 …… 貫名貞之・他
(4) 小人症の精査で見つかった甲状腺機能低下症の2例 …… 山中弘文・他

第454回　1994年1月27日(木)（当番：内科・循環器内科）
(1) 界面活性例(DMSO)が原因と考えられる職業性過敏性肺臓炎の1例 …… 忠田守喜・他
(2) トレッドミル運動負荷試験におけるST-HRループの有用性について …… 山下英丸・他
(3) 免疫芽球性リンパ節症の1例 …… 山田卓・他
(4) 当院におけるPTCAの現況 …… 横田直人・他
(5) 気管支喘息の重積発作におけるパルスオキシメーターの有用性 …… 神畠陽・他

第455回　1994年3月3日(木)（当番：外科）
(1) 特発性食道破裂の1治験例 …… 田中慶太朗・他
(2) 抗癌剤漏出による皮膚潰瘍とその対策 …… 北村彰英・他
(3) 食道静脈痛手術症例について …… 飛田忠之・他
(4) 薬物ショックについて …… 後藤司・他

第456回　1994年3月31日(木)（当番：胸部外科）
(1) 胸腔内進展をした腕神経叢原発神経鞘腫の1例 …… 辻井英治・他
(2) 心臓手術後遠隔期におけるペースメーカー植込み例の検討 …… 柿本祥太郎・他
(3) 悪性限局性胸膜中皮腫の1手術例 …… 辻井英治・他
(4) A-Cバイパスと胆摘の同時手術 …… 木村弘・他

第457回　1994年4月28日(木)（当番：南大阪総合健診センター）
(1) 南大阪総合健診センターでの発見癌の現況と人間ドック学会
総合健診医学会の動向並びにそれに対する対応について …… 小畑大吉・他
(2) 注腸造影の精度とダブルチェックの評価について …… 小畑大吉・他
(3) 成人病教室開始より2年を振り返って …… 安田まゆみ・他

第458回　1994年5月26日(木)（当番：産婦人科・泌尿器科）
(1) 小児泌尿器疾患の診断と治療 …… 松井孝之・他
(2) 腎移植の現況 …… 久保雅弘・他
(3) 巨大卵巣嚢腫及び巨大子宮筋種合併妊娠の1症例―筋腫合併妊娠― …… 斉藤行生・他
(4) HELLP症候群の1症例 …… 村中純子・他
(5) 当施設におけるマタニティースイミングの問題点と
今後の課題について―この1年を振り返って― …… 山田聖・他

第459回　1994年7月14日(木)　（当番：眼科・臨床検査科）
(1) 白内障術後に生じたデスメ膜剥離 …… 川崎茂・他
(2) アトピー性皮膚炎に伴う眼疾患について …… 佐藤文平・他
(3) 動脈硬化の独立した危険因子LP(a)の検討 …… 畑紀彦・他
(4) 尿定性検査と沈渣所見との相互関係に関する検討
―白血球反応について― …… 仲子国典・他

第460回　1994年7月28日(木)（当番：耳鼻咽喉科・薬剤科）
(1) 点眼剤の配合変化について …… 藤井英樹・他
(2) 病棟における服薬指導の現況について …… 丸岡かずこ・他
(3) 過去4年間の耳下腺腫瘍の臨床統計 …… 三木祐一郎・他
(4) 吹き抜け骨折(眼窩床骨折)の治療経験
―アパタイト・セラミックスの使用について― …… 楠木誠・他
(5) 突発性難聴と星状神経節ブロック療法について …… 久保正治・他

第461回　1994年8月25日(木)（当番：整形外科、放射線科、リハビリテーション室）
(1) 当院における大腿骨頚部骨折患者の訓練経過及び
歩行能力調査についての検討 …… 堀徳子・他
(2) 肩関節疾患における超音波検査―第2報― …… 小山茂和・他
(3) ライナック放射線治療装置と放射線治療計画及び線量分布図の作成 …… 田中良己・他

第462回　1994年10月13日(木)（当番：給食科、医事部、看護部）
(1) 糖尿病食の入院時指導における意識調査 …… 玉井清香・他

(2) 集団災害に対する医療機関の教訓 …… 森崎美登・他
(3) 脳梗塞患者の歩行への働きかけ …… 瀬戸山道子・他
(4) 術前オリエンテーション用紙の改善を試みて …… 三浦幸恵・他

第463回 1994年10月27日(木)（当番：小児科）
(1) Flank Pain Syndromeの1例 …… 石野雄一・他
(2) 小児の不定愁訴 …… 森本哲・他
(3) 大腸ファイバーにて潰瘍性大腸炎様の所見を認めた
溶血性尿毒症症候群の1例 …… 貫名貞之・他

第464回 1994年11月24日(木)（当番：内科、循環器内科）
(1) ホルター心電図検査中に急死した1例 …… 成山硬・他
(2) 下大静脈欠損・奇静脈接合の1例 …… 南里昌央・他
(3) 当院における急性心筋梗塞症の現況 …… 山下英丸・他
(4) 50代半ばを過ぎ偶然発見されたDandy-Walker Variantの1例 …… 宮地克彦・他
(5) 慢性冠動脈閉塞症(CTO)に対するPTCA …… 横田直人・他
(6) 解説「気管支鏡は苦しい検査か？気管支鏡で何ができるか？」 …… 神畠陽・他

第465回 1994年12月29日(木)（当番：外科）
(1) 穿孔性十二指腸潰瘍に対するメッシュ充填術の一治験例(臨床外科学会ビデオ)
(2) 横隔膜腱膜ヘルニアの一治験例 …… 田中慶太朗・他
(3) 潰瘍性大腸炎症例におけるサラゾピリン血中濃度の検討 …… 北村彰英・他
(4) 穿孔性十二指腸潰瘍の治療法 …… 後藤司・他
(5) 大腸癌肝転移の外科的治療について―近年の症例より― …… 飛田忠之・他

第466回 1995年1月26日(木)（当番：胸部外科、南大阪健診センター）
(1) 「大腸憩室症と大腸癌」 …… 小畑大吉
(2) 南大阪ファンクス成人病教室における運動療法
―高血圧、糖尿病クラスにおける運動効果― …… 福井寿美・他
(3) 気管支カルチノイドの一手術例 …… 辻井英治・他
(4) 内胸動脈を用いた冠状動脈バイパス術 …… 柿本祥太郎・他

第467回 1995年3月16日(木)（当番：臨床査科）
(1) 当院におけるHCV抗体陽性率について …… 伊沢久美子・他
(2) HCV検査の現状と展望―測定原理、感度、特異性について―
…… (株)エスアールエルRIデータ一管理課 小沢正明

第468回 1995年3月30日(木)（当番：眼科、産婦人科）
(1) 眼内レンズ毛様溝縫着術の検討 …… 南政宏・他
(2) 糖尿病併発症に対する硝子体手術、水晶体除去術
及び眼内レンズ挿入同時手術 …… 佐藤文平・他
(3) 腹腔内リザーバー留置からの抗癌剤反復投与が
著効した卵巣癌及び子宮体癌の一症例 …… 福田洋・他
(4) 悪性変化を伴った類皮嚢腫の一症例 …… 斎藤行生・他

第469回 1995年4月27日(木)（当番：薬剤科、耳鼻咽喉科）
(1) 当院における残置薬の実態 …… 藤田智子・他
(2) 褥瘡における薬剤、材料の新しい選択 …… 加古良一・他
(3) 当科でのライナック1年の利用状況 …… 楠木誠・他
(4) 過去1年間の鼻出血入院患者の統計 …… 三木祐一郎・他
(5) 最近6ヶ月の鼻骨骨折症例―原因と整復成績― …… 久保正治・他

第470回 1995年5月25日(木)（当番：リハビリテーション室、放射線科、整形外科）
(1) リハビリテーション科(理学療法部門)における管理、運営 …… 小川正敏・他
(2) 直腸子宮内膜症の一例―X線的及び内視鏡的所見を中心に― …… 田浦智幸・他
(3) C $^{3}/_{4}$頚部推間板ヘルニアの2例 …… 金明博・他

第471回　1995年7月13日(木)（当番：事務部、看護部、給食科）
(1) 保温配膳車の温度変化について …… 鍵　純子・他
(2) 当院における過去3年間の減点状況とその内容 …… 稲田　均・他
(3) 骨髄移植後のCVHDの看護について …… 森永江美・他
(4) 急性心筋梗塞、救命後の回復過程に心破裂をきたした患者の
看護管理を行って―重度の心不全を合併して― …… 阿部直子・他

第472回　1995年7月27日(木)（当番：小児科）
(1) 下咽頭梨状窩癆より急性甲状腺炎を発症した一例 …… 石野雄一・他
(2) 診断に難渋した頸部リンパ節腫脹の一例 …… 立花賢治・他
(3) 熱性痙撃の精査中、胸部X線検査で偶然発見された心筋炎の一例 …… 貫名貞之・他

第473回　1995年8日31日(木)（当番：内科、循環器内科）
(1) 重複幽門の一例 …… 鹿嶽佳紀・他
(2) 狭心症に対するDCA(冠動脈アテレクトミー) …… 松田茂樹・他
(3) 急性型ATLの一例とATLの概要 …… 忠田守喜・他
(4) 慢性冠動脈完全閉塞例に対するPTCA直後の冠循環反応
―ドップラーガイドワイヤーを用いた検討― …… 山下英丸・他
(5) 閉塞性睡眠時無呼吸症候群に対するnasal C-PAPの一例 …… 神畠　陽・他

第474回　1995年9月28日(木)（当番：外科）
(1) 診断治療に難渋した十二指腸狭窄の一例 …… 飛田忠之・他
(2) 内視鏡下粘膜切除術で軽快したゾーリンジャー・エリソン症候群の一例 …… 北村彰英・他
(3) 当院における腹腔鏡下胆嚢摘出術の現状 …… 田中慶太朗・他
(4) 腹腔鏡下外科手術 …… 後藤　司・他

第475回　1995年10月26日(木)（当番、胸部外科、健診センター）
(1) 南大阪ファンクスにおける成人病教室(高血圧症・糖尿病クラス)
の現状について―第3報― …… 松原未佐・他
(2) 過去6年間に発見された全癌症例と2～3の疫学的特徴について …… 小畑大吉・他
(3) 心拍動下冠状動脈バイパス術の一例 …… 田中　馨・他
(4) 右冠状動脈左室瘻の手術例 …… 柿本祥太郎・他

第476回　1995年11月30日(木)（当番：産婦人科、泌尿器科）
(1) リュープリン投与により著明な血小板減少症をきたした一症例 …… 福田　洋・他
(2) 卵巣癌の化学療法―超大量療法の試み― …… 石田雄三・他
(3) Piezolith 2500による体外衝撃波結石破砕術の実際 …… 岡本英一・他
(4) ESWLに伴う内視鏡的治療について …… 松井孝之・他

第477回　1995年12月21日(木)（当番：臨床検査科、眼科）
(1) 乳腺穿刺吸引細胞診と組織診との不一致例の検討 …… 山名琢薫・他
(2) 聴性脳幹反応の臨床的意義 …… 牛島美紀・他
(3) 白内障手術における眼内レンズの最近の進歩 …… 石田　理・他
(4) 特発性黄斑円孔に対する硝子体手術 …… 佐藤文平・他

第478回　1996年1月25日(木)（当番：耳鼻咽喉科、薬剤科）
(1) 多剤併用による化学療法にて緩解した頚部悪性リンパ腫の一症例 …… 秦　尚修・他
(2) 進行性壊疽性鼻炎の一例 …… 三木祐一郎・他
(3) 本院における調剤業務内での外来患者の待ち時間調査 …… 信達谷典子・他
(4) 院内製剤の必要性と経済性―現在の予製使用状況より― …… 藤本まゆみ・他
(5) 当院における特殊製剤の現状 …… 藤井英樹・他

第479回　1996年2月29日(木)（当番：放射線科、整形外科）
(1) エックス線シネ撮影検査におけるシネフィルムの現像条件の設定 …… 島田好和・他
(2) 放射線医学の新たな世紀に向けて
(エックス線発見100年を迎えて)ビデオ …… 島田好和・他

(3) 胸鎖関節後方脱臼の一例 …… 小山茂和・他
(4) 骨粗鬆症について …… 金明博・他

第480回 1996年3月28日(木)（当番：皮膚科、理学診療科）
(1) カポジー肉腫の一例 …… 馬場堯・他
(2) 皮膚腫瘍―見逃しやすい悪性腫瘍について― …… 竹村宏代・他
(3) 晩発性小脳皮質萎縮症例におけるリハビリテーション上の問題点 …… 奥村悦之・他
(4) 理学診療科の診療状況 …… 金城一二・他

第481回 1996年4月25日(木)（当番：事務部、看護部、給食科）
(1) 脂質の栄養について …… 鍵純子・他
(2) 医事相談室の利用状況について …… 門林広幸・他
(3) 妊婦初期検診の意識調査を行って …… 吉村里美・他

第482回 1996年5月30日(木)（当番：小児科）
(1) 胎児超音波検査で発見された総胆管嚢腫の一例 …… 石野雄一・他
(2) 火災による急性一酸化炭素中毒の一例 …… 田中太郎・他
(3) 重症感染症を契機に横紋筋融解症を発症した先天性水頭症の一例 …… 松田義和・他
(4) EIAにより測定した麻診1gM、1gG抗体の有用性について …… 貫名貞之・他

第483回 1996年6月27日(木)（当番：内科、循環器内科）
(1) 機能的左室流出路閉塞と血管内溶血を認めた求心性肥大心の一例 …… 塩見聡史・他
(2) 大腸顆粒細胞腫の一例 …… 後藤昌弘・他
(3) 拡張型心筋症の治療―β遮断薬漸増療法について― …… 筈井寛・他
(4) 大脳基底核石灰化症について …… 竹下篤・他
(5) 冠動脈病変に対するステントの使用経験 …… 山下英丸・他

第484回 1996年7月25日(木)（当番：外科）
(1) 妊娠・授乳期乳癌について …… 長田啓嗣・他
(2) 二回の開腹手術を要した小児膵損傷の一例 …… 飛田忠之・他
(3) 腹腔鏡下に手術し得た胆嚢穿孔の一例 …… 小林稔弘・他
(4) 胃軸捻転を伴った食道裂孔ヘルニア症に対する腹腔鏡下手術の一例 …… 北村彰英・他
(5) 大腸穿孔に対する腹腔鏡下穿孔部閉鎖術 …… 後藤司・他

第485回 1996年8月29日(木)（当番：健診センター、胸部外科）
(1) ヒールスキャン(DXA法)による骨塩定量の経験 …… 下田美紀・他
(2) 妊婦水泳実施(出産後)アンケート調査について …… 宮入美穂・他
(3) 胸腔鏡下肺切除術について …… 田中馨・他
(4) Single Lead Systemを用いたVDDペースメーカーの使用経験 …… 柿本祥太郎・他

第486回 1996年9月26日(木)（当番：泌尿器科、産婦人科）
(1) 前立腺肥大症について …… 岡本英一・他
(2) 前立腺肥大症の治療の実際について …… 松井孝之・他
(3) 経膣超音波検査の活用度と有用性について …… 霞雅子・他
(4) 乳癌手術後、タモキシフェン投与中に卵巣腫大を認めた
一症例について …… 石田雄三・他

第487回 1996年10月31日(木)（当番：臨床検査科、眼科）
(1) 凝固スクリーニング検査のサンプリングに於ける問題点
―採血後の経時変化について― …… 仲子国典・他
(2) 便からの主な食中毒菌の分離方法と検出状況について
―本年の6月～9月を対象として― …… 上野信子・他
(3) アレルギー性紫斑病を合併した樹氷状血管炎の一例 …… 南政宏・他
(4) アトピー性白内障の手術について …… 佐藤文平・他

第488回　1996年11月28日(木)（当番：薬剤科、耳鼻咽喉科）
(1) 本院における入院患者の服薬状況 …… 辻　川　文　子・他
(2) 注射セット用ワゴンの汚染調査 …… 南　野　充　宏・他
(3) ヒト大腸癌由来の培養細胞における薬物の経口吸収性の評価 …… 遠　藤　よ　り　子・他
(4) 当院耳鼻咽喉科の鼻アレルギー外来の現況 …… 三　木　祐　一　郎・他
(5) 口外法手術により治癒した頚性巨大ガマ腫の一例 …… 泰　　尚　修・他
(6) 珍しい外耳道異物二例 …… 久　保　正　治・他

第489回　1996年12月26日(木)（当番：放射線科、理学診療科）
(1) アンギオ室における術者の被爆について …… 山　元　裕　子・他
(2) ヘリカルCTの特徴とその有用性 …… 斎　藤　　隆・他
(3) CTによる三次元画像とMPR―当院の症例を中心にして― …… 江　村　俊　也・他
(4) 寝たきり、拘縮防止のリハビリテーションについて …… 岡　林　　豊・他
(5) 熱帯熱マラリアの重症例及びヒトのマラリア4種についての概要 …… 奥　村　悦　之・他

第490回　1997年1月30日(木)（当番：皮膚科、整形外科）
(1) 高齢者によくみられる皮膚腫瘍 …… 馬　場　　堯・他
(2) 水疱様外観を呈した石灰化上皮腫の1例 …… 竹　村　宏　代・他
(3) 大腿骨転子部骨折に対するGamma nailの治療経験
　―Compression hip screwとの比較― …… 鉄　村　信　治・他

第491回　1997年2月20日(木)（当番：給食科、事務部、看護部）
(1) 平成8年6月～11月の栄養指導件数と糖尿病の食事療法について …… 竹　中　千　恵・他
(2) 小児救急外来における誤飲の現状と症例報告 …… 中　平　悦　子・他
(3) 術前訪問時の患者指導の重要性―白内障手術を通して― …… 西　山　千　絵・他
(4) レセプト請求漏れ防止策についての一考察 …… 吉　見　和　彦・他

第492回　1997年3月27日(木)（当番：小児科）
(1) 保存的治療で経過観察中の上腸管膜動脈症候群の一例 …… 石　野　雄　一・他
(2) 新生児期に高インスリン血症性低血糖を起こした
　フロッピーインファントの一例 …… 田　中　太　郎・他

第493回　1997年4月24日(木)（当番：内科）
(1) 意識障害を来たした汎下垂体機能低下症の1例 …… 山　口　信　子・他
(2) Acute Coronary Syndromeの最近の治療
　―当院におけるDirect PTCAについて― …… 井　坂　　拓・他
(3) 内視鏡的に切除した早期十二指腸癌の1例 …… 星　本　真　弘・他
(4) 回旋枝領域の急性心筋梗塞に心破裂を合併した1例 …… 筈　井　　寛・他
(5) 閉塞性黄疸に対する自己展開型金属ステントの使用経験 …… 茶　谷　徳　行・他
(6) 住之江地区におけるショックコールシステムについて …… 山　下　英　丸・他

第494回　1997年6月12日(木)（当番：外科）
(1) 温熱療法の治療経験 …… 長　田　啓　嗣・他
(2) 小腸アニサキス症の1手術例 …… 北　村　彰　英・他
(3) 腹水を伴った癌性腹膜炎に対して腹腔内シスプラチン投与が
　著効を示した1例 …… 飛　田　忠　之・他
(4) 腹腔鏡下摘脾術―胃癌を合併した脾機能亢進症に対して― …… 後　藤　　司・他

495回　1997年6月26日(木)（当番：胸部外科、南大阪総合健診センター）
(1) 当センターにおける過去6年間の胆嚢超音波検診の成績 …… 張　　和　子・他
(2) 南大阪ファンクス成人病教室整形外科疾患クラスについて
　―開設5年を経過して― …… 皆　吉　正　博・他
(3) 肋間動脈―肺動脈交通症の1例― …… 田　中　　馨・他
(4) 開心術後のMRSA胸骨骨髄炎・縦隔炎に対する有茎大網充填術 …… 森　田　雅　文・他

第496回　1997年7月31日(木)（当番：産婦人科、泌尿器科）
(1) 術前診断にて判明した子宮脂肪平滑筋腫の一例 …… 福田　洋・他
(2) 妊娠19週で診断された四肢短縮症の一例 …… 石田雄三・他
(3) 医業経営とPR―泌尿器科での4年間のとりくみ― …… 松井孝之・他

第497回　1997年8月28日(木)（当番：臨床検査科、眼科）
(1) シングルマルチ装置502Xについて …… 西村　新・他
(2) 検査搬送システムの導入について …… 山内一浩・他
(3) 臨床検査科の新システムについて …… 大仲一善・他
(4) 視力障害で発見されたラトケ嚢胞の一例 …… 竹安一郎・他
(5) トキソカラ眼症の一例 …… 南　政宏・他

第498回　1997年9月25日(木)（当番：耳鼻咽喉科、薬剤科）
(1) 院内感染について―薬剤科の立場より― …… 藤谷一良・他
(2) 今後の外来窓口における服薬指導のあり方について
　―入院時の服薬指導をふまえて― …… 加古良一・他
(3) お茶の薬物に対する影響 …… 杉田弘子・他
(4) 小児仮性クループについて …… 三木祐一郎・他
(5) 鼾に対する手術的治療効果 …… 久保正治・他

第499回　1997年10月30日(木)（当番：放射線科、整形外科）
(1) マンモグラフィにおける性能評価 …… 伊藤広美・他
(2) ダイナミックCTによる肝腫瘤性病変の検討 …… 中島秀行・他
(3) 画像診断が有用であった黄色肉芽腫性胆嚢炎の1例 …… 江村俊也・他
(4) MRIが早期診断に有用であった小児化膿性仙腸関節炎の1例…… 鉄村信治・他
(5) 慢性関節リュウマチに対する整形外科的治療法
　―手関節、膝関節を中心として― …… 大坂芳明・他

第500回　1997年11月26日(水)（当番：皮膚科）
(1) サジテン点眼薬®とネオメドロールEE軟膏®による
　アレルギー性接触皮膚炎の1例 …… 竹村宏代・他
(2) 第500回記念特別講演　医療保険改革について …… 日本医師会副会長　糸氏英吉先生

第501回　1997年12月25日(木)（当番：医事部、看護部、給食科）
(1) 社会的ディプリベーションのMSWとしての対応への一考察 …… 佐原直幸・他
(2) 褥創班を結成して―褥創に対する看護の見直し― …… 木村貴子・他
(3) 患者ニーズに対する看護について
　―患者満足度のアンケート調査に基づき― …… 行徳佳子・他
(4) 小児の成人病と食生活 …… 鍵　純子・他

第502回　1998年1月29日(木)（当番：小児科）
(1) 痙攣を有する新生児にみられた低Ca血症について …… 貫名貞之・他
(2) 確定診断には至らなかったが臨床的にMELASと考えられた一例 …… 貫名貞之・他
(3) 未熟児貧血に対するエリスロポエチンの使用経験 …… 田中太郎・他
(4) 諸臓器発育不全と潜在性膜様増殖性腎炎を認めたライ様症候群の1剖検例 …… 西機哲夫・他

第503回　1998年2月26日(木)（当番：内科、循環器内科）
(1) t-PA無効例に対してウロキナーゼの著効を認めた肺塞栓症の一例 …… 日浦正仁・他
(2) 当院におけるPTCAの現況(平成9年) …… 山下英丸・他
(3) 著しい黄疸を呈したDubin Johnson症候群の一例 …… 津留基通・他
(4) 結核の最近の動向 …… 神畠　陽・他
(5) 健康成人に発症したサイトロメガウィルス肝炎の一例 …… 茶谷徳行・他

第504回　1998年3月26日(木)（当番：リハビリテーション科、社会福祉法人白寿会）
(1) 老人病院における長期入院患者の予後趨勢
　―特に脳血管障害後遺症Plateau患者を中心として― …… 戸田武範・他

(2) 癌患者におけるリハビリテーション上の諸問題 …… 山里健二・他
(3) 疥癬の発生について …… 新田正尚・他

第505回 1998年4月30日(木)（当番：外科）
(1) 当院における成人鼠径ヘルニア症例の検討 …… 河合英・他
(2) 原因不明の腹痛に腹腔鏡が有用であったクローン病の1例 …… 長田啓嗣・他
(3) 小腸嚢胞様気腫症を繰返した強皮症の1例 …… 北村彰英・他
(4) 大量出血をきたした胃平滑筋腫の1例 …… 飛田忠之・他

第506回 1998年6月11日(木)（当番：胸部外科、南大阪総合健診センター）
(1) 中小企業のTHP制度を利用した健康測定の結果について …… 石原健司・他
(2) 職域大腸集検7年の成績 …… 小畑大吉・他
(3) 食道癌浸潤による気管狭窄に対して
Self- Expanding Metallic Stentが有効であった1例 …… 三重野繁敏・他
(4) MIDCAB(低侵襲冠状動脈バイパス手術)について …… 森田雅文・他

第507回 1998年6月25日(木)（当番：産婦人科、泌尿器科）
(1) 「不妊症」について …… 山崎則行・他
(2) 当院における尿路結石の治療方針 …… 松井孝之・他
(3) 小児尿路結石の治療経験 …… 桑江秀樹・他

第508回 1998年7月30日(木)（当番：臨床検査科、眼科）
(1) 多項目自動血球分析装置SE-9000における白血球分類の有用性について …… 仲子国典・他
(2) 赤血球製剤の使用状況について(平成9年5月～10年6月) …… 伊沢久美子・他
(3) 真菌性眼内炎の2例 …… 竹安一郎・他
(4) 眼科未治療で受診した増殖糖尿病網膜症患者の検討 …… 南政宏・他

第509回 1998年8月27日(木)（当番：薬剤科、耳鼻咽喉科）
(1) 消毒剤の適正使用とマニュアル改訂 …… 阿部裕美・他
(2) 当院におけるモルヒネ製剤の使用動向について …… 森靖絵・他
(3) 内因性ジギタリス様物質 …… 杉野恭子・他
(4) 同一耳下腺に発生したミクリッツ病とワルチン腫瘍症例 …… 三木祐一郎・他
(5) 最近の外耳異物症例 …… 奥田文幸・他

第510回 1998年9月24日(木)（当番：放射線科、整形外科）
(1) 輸血用血液への放射線照射―輸血後GVHDの予防― …… 藤野由香・他
(2) 中磁場装置による肝dynamic MRI …… 江村俊也・他
(3) 大腿骨頚部骨折における院内骨折の検討 …… 服部智・他
(4) 当科における腰部椎間板ヘルニアのアプローチ …… 大坂芳明・他

第511回 1998年10月29日(木)（当番：リハビリテーション科、皮膚科）
(1) 長期入院老人患者の転倒・転落原因 …… 吉田聖生・他
(2) 当院リハビリテーション科の現状と今後の展開 …… 金城一二・他
(3) 掌蹠に水疱を呈したカルモフールによる薬疹 …… 竹村宏代・他

第512回 1998年11月26日(木)（当番：看護部、医事部、給食部）
(1) 院内における転倒事故防止について …… 松田香澄・他
(2) 業務内容のスリム化について―検温時間帯を考える― …… 清水真矢・他
(3) 喫食調査について …… 竹中千恵・他
(4) 外来患者アンケート実施結果について―厚生省調査との比較― …… 狛秀和・他

第513回 1998年12月24日(木)（当番：小児科）
(1) 若年型糖尿病の4例 …… 小坂喜太郎
(2) 初診時の状態が予後を決めた印象のある急性壊死性脳症の2例 …… 中内昭平・他
(3) 新生児心外膜炎の1例 …… 和泉守篤・他

第514回　1999年1月28日(木)（当番：内科）
(1) 長期間観察し得た再帰型特発性血小板減少性紫斑病
(recurrent ITP)の1例とその考察 …… 忠田守喜・他
(2) イレウスを来たした小腸潰瘍の1例 …… 太田俊輔・他
(3) 左冠動脈主幹部を梗塞責任病変とする急性心筋梗塞に対して
Direct PTCAを施行した2症例 …… 日浦正仁・他
(4) カビ取り剤により誘発された重症気管支喘息の1例 …… 神畠陽
(5) Neurally Mediated Syncope患者のHead-up Tilt Testにおける
血行動態の検討 …… 大久保知之・他
(6) 白寿会診療所の現状と課題―南大阪病院との連携から― …… 斉藤龍男・他

第515回　1999年2月25日(木)（当番：外科）
(1) 脾腫瘍の1例 …… 長田啓嗣・他
(2) 腹腔鏡下虫垂切除術の検討 …… 河合英・他
(3) イレウスに対する手術治療―腹腔鏡下手術を中心として― …… 後藤司・他
(4) 肝病変に対する温熱療法の治療経験 …… 飛田忠之・他
(5) イレウスを来たした小腸潰瘍の1例(続報) …… 磯田幸太郎・他

第516回　1999年3月18日(木)（当番：南大阪総合健診センター、胸部外科）
(1) 大阪市ヘルスアップ国保倶楽部について …… 国方和宏
(2) 人間ドックにおける癌検診の現状と今後―癌の自然史を参考にして― …… 小畑大吉
(3) 慢性透析患者に対して緊急冠動脈バイパス術を施行した1例 …… 三重野繁敏・他
(4) 低左心機能症例に対するCABGおよびDor手術 …… 森田雅文・他

第517回　1999年4月22日(木)（当番：産婦人科、泌尿器科）
(1) クラジミアの感染が起因していると思われた付属器腫瘍の1症例 …… 霞雅子・他
(2) 更年期障害―とくにホルモン補充療法(HRT)について― …… 山崎則行・他
(3) 腎血管筋脂肪腫に対する無阻血下腎部分切除の経験 …… 桑江秀樹
(4) 下部尿管腫瘍に対する経尿道的尿管腫瘍切除術の経験 …… 松井孝之

第518回　1999年5月27日(木)（当番：臨床検査科、眼科）
(1) 当院における環境菌レジオネラ菌属の汚染状況 …… 荒田昭二・他
(2) 本院で経験したレジオネラ肺炎の1例 …… 神畠陽
(3) 多焦点眼内レンズの使用経験 …… 高井七重
(4) 当科における硝子体手術について …… 佐藤文平

第519回　1999年6月24日(木)（当番：薬剤科、耳鼻咽喉科）
(1) 本院における医薬品情報の現状と展望 …… 米田奈央・他
(2) 当院におけるTDM業務
―小児のテオフィリンクリアランスと体重の関係― …… 藤原久達・他
(3) 悪性腫瘍を疑わせた上顎良性腫瘍の2例 …… 奥田文幸・他
(4) 11年後に再発した副咽頭腔の多発性多形腺腫(混合腫瘍)の1例 …… 三木祐一郎・他

第520回　1999年7月22日(木)（当番：放射線科、整形外科）
(1) MRCPについて …… 中島秀行
(2) 回収式自己血輸血法の使用経験 …… 小山茂和
(3) 全人工股関節置換術(T.H.A)の実際 …… 大坂芳明

第521回　1999年8月26日(木)（当番：皮膚科、リハビリテーション科）
(1) マダニ皮膚咬創の病理組織像 …… 礒田幸太郎・他
(2) リハビリテーション科の課題 …… 小山茂和

第522回　1999年9月30日(木)（当番：事務部、看護部）
(1) 看護業務効率化の為のクリティカルパス試作について …… 葛本その子・他
(2) 消耗品費・診療材料費の節減について …… 戸谷雅巳・他

第523回　1999年10月28日(木)（当番：給食科、南大阪看護専門学校、白寿苑）
(1) 嗜好調査の結果と実状 …… 増井美保・他
(2) 本校の見学実習における効果 …… 木下千富
(3) ヘルパーステーションの事業概要 …… 石原里加子・他
(4) 介護保険対策について …… 新田正尚・他

第524回　1999年11月25日(木)（当番：小児科）
(1) 水痘罹患後に著明な改善をみた紫斑病性腎炎の一例 …… 和泉守篤・他
(2) 著名な白血球増多を呈した百日咳の一例 …… 羽場哲法・他
(3) 喘息大発作後にポリオ様麻痺をきたした4歳男児の一例 …… 中内昭平・他
(4) 非定型抗酸菌感染症の一女児例 …… 西機哲夫・他

第525回　2000年1月13日(木)（当番：内科、循環器内科）
(1) TTV陽性急性肝炎の一例 …… 森口暁仁
(2) 胸部レントゲン検査にて見つかった巨大冠動脈瘤を伴う
冠動脈肺動脈瘻の一例 …… 村岡英幸
(3) 冠動脈内のエコーガイド下に冠動脈アテローム切除術を施行した二例 …… 大久保知之
(4) 腹部リンパ節結核の一例 …… 茶谷徳行

第526回　2000年1月27日(木)（当番：外科）
(1) 肝腫瘍に対するRadiofrequency ablation therapy …… 岸田賢治
(2) 2型直腸癌に類似した直腸粘膜脱症候群の一例 …… 溝渕敏水
(3) 胃幽門血管拡張症の一例 …… 河合英
(4) 最近の乳癌手術について …… 長田啓嗣

第527回　2000年2月24日(木)（当番：健診センター、胸部外科）
(1) 南大阪ファンクスにおける妊婦水泳について …… 松原末佐
(2) 人間ドックで発見された大腸癌の特徴と直腸癌の動静について …… 小畑大吉
(3) 嚢状腹部大動脈癌の一例 …… 吉田正隆・他
(4) 拍動下多枝バイパス術 …… 森田雅文・他

第528回　2000年3月30日(木)（当番：泌尿器科、産婦人科）
(1) ホルミウム・ヤグレーザーを用いた経尿道的前立腺レーザー切除術 …… 松井孝之
(2) 精巣上体炎を契機に発見された尿管異所開口の一例 …… 桑江秀樹
(3) 子宮頚癌の補助化学療法 …… 霞雅子・他
(4) 当科の分娩統計と妊産婦アンケート調査 …… 山崎則行・他

第529回　2000年4月27日(木)（当番：臨床検査科、眼科）
(1) パルスドプラー法を用いた左室拡張能の評価 …… 山内一浩・他
(2) 体腔細胞診における免疫組織化学の応用―細胞転写法を用いて― …… 宇津野実弥子・他
(3) MRA画像検査にて動脈瘤の診断が困難であった動眼神経麻痺の一例 …… 岡田康平
(4) 鼻性視神経症の併発を疑った外傷性視神経症の一例 …… 澤田達

第530回　2000年5月25日(木)（当番：薬剤科、耳鼻咽喉科）
(1) 薬剤情報提供の導入とその調査―外来患者を通じて― …… 倉田慶弥・他
(2) 当院における耳鼻科用ネブライザーNO.2及びNO.6中の
抗生物質(ホスミシンR)の安定性及び配合変化について …… 林由紀・他
(3) 耳下腺管結石の一例 …… 奥田文幸・他
(4) 亜急性頚部壊死性リンパ節炎の二症例 …… 三木祐一郎・他

第531回　2000年6月29日(木)（当番：整形外科、放射科）
(1) 高齢者大腿骨頚部骨折術後不良例の検討 …… 徳山文人・他
(2) 中高年のテニス障害(テニス肘を中心に) …… 山崎久・他
(3) 肝動脈塞栓術(TAE)の実際について …… 江村俊也・他

第532回　2000年7月27日(木)（当番：リハビリテーション科、皮膚科）
(1) 適正ある車椅子処方の必要性について …… 山川智之・他
(2) リハビリテーションにおける環境改善的アプローチ
　　―家屋改造を中心として― …… 栗本純子・他
(3) 日常よくみられる皮膚腫瘍 …… 竹田恵理・他
(4) PL顆粒による固定薬疹の一例 …… 竹村宏代・他

第533回　2000年8月31日(木)（当番：看護部、医事部）
(1) 清拭援助を見直す～清拭タオルの工夫～ …… 橋本典子
(2) 看護用具を考える～尿器設置方法について～ …… 玉屋智子
(3) DVと虐待のケースにおける当院の取り組み～MSWの視点から～ …… 佐原直幸

第534回　2000年9月28日(木)（当番：給食科、南大阪学園）
(1) 肥満症について …… 巽純子
(2) 設立以降の歩みと14年度カリキュラム改正に関する事項及び
　　学生の諸問題について …… 笹山夫美子

第535回　2000年10月26日(木)（当番：小児科）
(1) ムンプスウイルスによる前庭神経炎の一例 …… 羽場哲法・他
(2) シスプラチン耐性神経芽腫細胞株の樹立とその特性 …… 安野哲也
(3) 1999年の小児科救急受診患者について …… 西機哲夫・他

第536回　2000年11月30日(木)（当番：内科、循環器内科）
(1) 胸腺原発ホギシンリンパ腫の一例 …… 上田信三
(2) トキシックショック様症例群に類似した一症例 …… 北川浩子
(3) 冠動脈に拡張病変を認めた若年性心筋梗塞の一例 …… 村岡英幸
(4) 不整脈源性右室心筋症(ARVC)の一例 …… 宇津典明

第537回　2001年2月1日(木)（当番：外科）
(1) 平成12年度外科手術報告 …… 後藤司
(2) プロトンポンプ・インヒビターの薬物動態からみた問題点 …… 北村彰英
(3) 乳癌と間違われやすい乳頭部腺腫 …… 長田啓嗣
(4) 若年性に見られた腫瘍形成型直腸粘膜脱症候群の1例 …… 藤田能久

第538回　2001年2月22日(木)（当番：南大阪総合健診センター、胸部外科）
(1) 南大阪ファンクスにおける「健康相談」について …… 山田智子
(2) 免疫便潜血検査定量法ヘモプレートオートⅡを採用した
　　理由とその効用について …… 小畑大吉
(3) ペースメーカー植込み術後のリード損傷の検討 …… 湯田淳・他
(4) 緊急A―Cバイパス術を施行した1例 …… 森田雅文・他

第539回　2001年3月29日(木)（当番：産婦人科、泌尿器科）
(1) 当院における子宮外妊娠統計 …… 藤本和也
(2) 生活習慣と尿路結石症 …… 松井孝之
(3) 精巣奇形腫の1例 …… 桑江秀樹・他

第540回　2001年4月26日(木)（当番：眼科、臨床検査科）
(1) レーザー治療後に網膜色素上皮裂孔を生じた網膜色素線条の1例 …… 岡田康平
(2) 新しい前嚢切開鑷子を用いた超音波白内障手術 …… 澤田達
(3) 生化学13項目の基礎的検討及び
　　検量用酵素標準物質(ERM)の導入について …… 山本益子・他
(4) アーキテクト導入にともなう基礎的検討 …… 大仲一善・他

第541回　2001年5月31日(木)（当番：薬剤科、耳鼻咽喉科）
(1) 院外処方箋における疑義照会の分析
　　～リスクマネージメントをからめて～ …… 近藤英嗣・他

(2) 抗MRSA薬ABK(Arbekasin)及びVCM(Vancomycin)の血中濃度測定の意義
—TDM(薬物血中濃度モニタリング)の活用— …… 藤原久達・他
(3) 吹き抜け骨折(blow-out fracture)の一治験例 …… 安田大作・他
(4) 小児急性乳様突起炎手術三症例 …… 三木祐一郎・他

第542回 2001年6月28日(木) (当番：放射線科、整形外科)
(1) 新規導入の血管造影機器について …… 島田好和
(2) 胸部単純正面像の盲点について …… 中島秀行
(3) 介護保険施設で発生した大腿骨転子部骨折の治療成績 …… 糟谷彰去・他

第543回 2001年7月26日(木) (当番：皮膚科、リハビリテーション科)
(1) ヒト乳頭腫ウイルス16型DNAを検出した手指背のボーエン癌 …… 竹田恵理
(2) 脳血管障害患者における理学療法治療の実際
～装着装具の変化からの一考察～ …… 山川智之・他
(3) ターミナルケアにおける作業療法の関わり …… 森田有紀・他

第544回 2001年8月30日(木) (当番：事務部、看護部)
(1) レセプト請求業務改善中間報告 …… 千葉晃義・他
(2) 周手術期における体温管理～より効果的な体温保持を求めて～ …… 近藤未由紀・他
(3) 看護婦意識調査 ～ケアの向上を図って～ …… 山口由紀子

第545回 2001年9月27日(木) (当番：栄養科、南大阪学園、白寿会)
(1) 新カリキュラムについて …… 水田文子
(2) 患者給食嗜好調査より …… 金石智津子・他
(3) これからの在宅介護支援センターの在り方について
～活動報告及び将来展望～ …… 藤岡久実子・他

第546回 2001年10月25日(木) (当番：小児科)
(1) 生後3ヶ月以内の乳児インフルエンザにアマンタジンが有効であった2例 …… 菊地顕
(2) ボルタレン腎障害の1例 …… 田中一史
(3) タンデムマスを用いたカルニチン前駆体の測定 …… 大河内正和
(4) 気管支喘息児の教急受診について …… 西機哲夫

第547回 2001年11月29日(木) (当番：内科、循環器内科)
(1) 冠動脈瘤を伴った多発する冠動脈肺動脈瘻の1例 …… 村井基修・他
(2) 大腸嚢胞状気腫症の1例 …… 茶谷徳行
(3) 在宅医療の実際 …… 宮越一穂・他

第548回 2002年1月31日(木) (当番：外科)
(1) 原発性肝癌に対する経皮的ラジオ波熱凝固療法(RFA)の検討 …… 伊達政道
(2) 外傷性膵損傷に対し腹腔鏡下手術が有用であった1症例 …… 米田浩二
(3) 腹壁膿瘍を形成した胆のう癌の2例 …… 藤田能久
(4) 乳腺良性疾患の治療方針 …… 長田啓嗣
(5) 逆流性食道炎に対し腹腔鏡下Nissen法が有用であった1例 …… 米田浩二

第549回 2002年2月28日(木) (当番：胸部外科、南大阪総合健診センター)
(1) 当センターにおける子宮癌健診の現状 …… 銅銀清美
(2) 南大阪総合健診センター13年間の発見癌について …… 小畑大吉
(3) 気管脂肪腫の1例 …… 中井康成・他
(4) 原発不明縦隔リンパ節癌の1手術例 …… 森田雅文・他

第550回 2002年3月28日(木) (当番：産婦人科、沁尿器科)
(1) メソトレキセート(MTX)療法にて治癒し得た
胎児心拍陽性の子宮外妊娠の1例 …… 藤本和也・他
(2) 子宮頚部villograndullar papillary adenocarcinomaの1例 …… 上村桃子・他
(3) 黄色肉芽腫性腎盂腎炎の1例 …… 青木大・他

(4) エビデンスに基づいた尿路管理とは? …… 松 井 孝 之

第551回　2002年4月25日(木)（当番：臨床検査科、眼科）
(1) 乳腺原発神経内分泌癌の1症例 ～細胞像を中心に～ …… 山 田 映 子
(2) 当科で考案したペルオキシダーゼ反応を用いた
　　髄液染色液の有用性について …… 中 谷 智 子
(3) 再発翼状片に対する羊膜移植 …… 山 谷 珠 美
(4) プレチョップ法による超音波白内障手術 …… 澤 田 達

第552回　2002年5月30日(木)（当番：薬剤科、耳鼻咽喉科）
(1) 調剤過誤の分析とその対策 ～内服薬について～ …… 安 田 博 子・他
(2)「目標設定シート」導入による薬剤業務の検討 …… 杉 野 恭 子・他
(3) 経口的に摘出し得た下咽頭脂肪腫の1例 …… 安 田 大 作・他
(4) 近年の当科における稀な結核疾患3症例について …… 高 山 靖 史・他

第553回　2002年6月27日(木)（当番：整形外科、放射線科）
(1) 椎圧迫骨折後に生じた遅発性神経麻痺について …… 吉 良 貞 昭・他
(2) 医療IT化時代の画像検査 …… 高 木 晃 人・他
(3) 画像ネットワークの課題と展望 …… 中 村 勝 利・他
(4) MRIが有用であった子宮変性筋腫の2例 …… 江 村 俊 也・他
(5) 肺の高分解能CT(HRCT) …… 中 島 秀 行・他

第554回　2002年8月29日(木)　（当番：皮膚科、リハビリテーション科）
(1) 塩酸ヒドロキシジンとペンタゾシンの筋肉注射後に生じた皮膚潰瘍 …… 竹 田 恵 理・他
(2) Bell麻痺患者に対する徒手的治療の試み …… 岡 田 和 也・他
(3) 作業療法における集団訓練とその効果 …… 加 藤 さ や か・他

第555回　2002年9月24日(火)（当番：事務部、看護部）
(1) 小児点滴固定における絆創膏の貼りかえ時期の検討 …… 佐 藤 香 織
(2) ニーズに合う含嗽液を求めて～殺菌率と爽快感の両側面より～ …… 上 畠 順 次
(3) 職員アンケート調査の結果にみる当院活性化のポイント …… 後 藤 州 一

第556回　2002年10月22日(火)　（当番：栄養科、南大阪学園）
(1) 栄養改善法から健康増進法へ …… 村 田 友 美
(2) 当校看護学校の臨時実習におけるヒヤリ・ハット
　　（ニアミス体験の実態調査） …… 東 浦 龍 至

第557回　2002年11月19日(火)（当番：小児科、白寿会）
(1) 4歳ではじめて十二指腸閉塞を発症した腸回転異常症の一例 …… 田 中 一 史
(2) 川崎病罹患児におけるPWV(pulse wave verocity脈波伝搬速度)
　　・ABI(ankle blachial index)の検討 …… 菊 地 顕
(3) 小児結核性胸膜炎の一例 …… 榊 原 敏 記
(4) 食事サービスセンター白寿苑の概要 …… 石 原 里 加 子・他

第558回　2003年1月28日(火)（当番：内科、循環器内科）
(1) 下肢動脈血管形成におけるウォールステントの使用経験 …… 山 下 英 丸
(2) 心破裂を合併した急性心筋梗塞の1例 …… 寺 杣 晋 彦
(3) 急性心筋梗塞に対し血栓吸引術を行った症例 …… 村 井 基 修

第559回　2003年2月25日(火)　（当番：外科）
(1) 胆道ステントの使用経験 …… 米 田 浩 二
(2) S-1+CDDPが著効し、手術可能となった胃癌の一例 …… 藤 田 能 久
(3) 最近の乳癌治療のEBMと問題点 …… 長 田 啓 嗣

第560回　2003年3月25日(火)（当番：南大阪総合健診センター、胸部外科）
(1) ドックから見た体重～文献的考察を交えて～ …… 田 辺 香 苗

(2) 低肺機能を呈した高齢者心房中隔欠損症の一手術例 …… 田中 馨・他
(3) 腹部大動脈瘤術後に腸管内人工血管迷入をきたした一例 …… 森田雅文・他

第561回 2003年5月27日(火) (当番：産婦人科、泌尿器科、形成外科)
(1) 子宮頸癌におけるTAE併用術前動注化学療法を施行した3症例 …… 山崎則行・他
(2) 体外衝撃波結石破砕術(ESWL)に対する看護記録一体型パスの試用経験 …… 松井孝之・他
(3) 形成外科のご紹介 …… 原岡剛一

第562回 2003年6月24日(火) (当番：眼科、臨床検査科)
(1) アスリートIAチップの使用経験 …… 山谷珠美
(2) 糖尿病黄斑症の手術治療 …… 澤田達
(3) 新生児聴覚スクリーリングの有用性
～エコースクリーンの使用経験を踏まえて～ …… 畠山由子
(4) 検体検査代表20項目におけるコストについて～他院との比較～ …… 山名琢薫

第563回 2003年7月22日(火) (当番：耳鼻咽喉科、薬剤科、衛生委員会)
(1) 稀な右扁桃カンジダ症の一例 …… 岡部宇彦・他
(2) 鼾症、睡眠時無呼吸症候群に対する手術例の術後アンケート調査結果 …… 久保正治・他
(3) 特定抗菌薬に関するアンケート調査 …… 浅尾高光
(4) 喫煙と健康に関するアンケート …… 宇津野美弥子・他

第564回 2003年8月26日(火) (当番：放射線科、整形外科)
(1) 南大阪病院ホームページについて …… 中村勝利・他
(2) BRTOによる胃静脈瘤の治療 …… 江村俊也
(3) 大腿骨頚部骨折に対するハンソンピンの使用経験 …… 岡本純典・他

第565回 2003年9月30日(火) (当番：リハビリテーション科、医療社会事業科、皮膚科)
(1) 手指屈筋腱損傷におけるSuper Lizerの効果と可能性 …… 七谷倫子・他
(2) Low back painにおける不安についての一考察～STAIを使用して～ …… 前田光治・他
(3) 当科における未収金への取り組み～社会保障制度を利用して～ …… 屋島律子・他
(4) 一部疣贅様を呈したMycobacterium marinum感染症の1例 …… 加藤教

第566回 2003年10月28日(火) (当番：事務部、看護部)
(1) 病床区分届出後の医療経営 …… 後藤州一
(2) 業務時間の有効利用を目指して～入退院チェックリストを用いて～ …… 勝浦涼香・他
(3) 受け持ち患者制導入における看護意識と看護過程の変化 …… 宮腰貴美子・他

第567回 2003年11月25日(火) (当番：栄養科、南大阪学園)
(1) 外来糖尿病患者への栄養指導効果と分析 …… 田川朋美・他
(2) コミュニケーション・スキル尺度(NCSI)を用いた看護学生の
コミュニケーション能力の評価
～看護専門学校三年課程7校の2年生と3年生の比較～ …… 木下千富・他

第568回 2004年1月27日(火) (当番：白寿苑、小児科)
(1) 新人介護職員の教育体制に関する一考察～担当制導入を試みて～ …… 山谷恵美
(2) 短期入所生活介護における安心感をもたらす環境要因とは
～痴呆性高齢者の一事例を通して～ …… 種継敦
(3) 小児尿路結石症の一例 …… 榊原敏記・他
(4) インフルエンザ桿菌髄膜炎の一例 …… 若泉克次・他
(5) 乳児型ゴーシェ病の一例 …… 田中一史・他
(6) 南大阪病院における小児救急の現状 …… 西機哲夫・他

第569回 2004年2月24日(火) (当番：内科、循環器内科)
(1) サルモネラ腸炎に合併した横紋筋融解症の1例 …… 上野宏樹・他
(2) 肝生検にてDubin-Johnson syndromeと診断された1例 …… 横山陽子・他
(3) 肺動脈四尖弁の1例 …… 山下英丸・他

（4） 肺疾患に伴ったSIADHの2症例 …… 佐久間知子・他

第570回　2004年3月23日(火)（当番：外科、健診センター）
（1） 食道裂孔ヘルニアに対する新しい治療 …… 田代圭太郎・他
（2） 非乾酪性類上皮細胞肉芽腫を有する急性虫垂炎の1例 …… 米田浩二・他
（3） ファイルメーカーProを用いた診療支援システム …… 大村泰・他
（4） 高Ca血症クリーゼにて搬送された局所進行乳癌の1例 …… 長田啓嗣・他
（5） 景岳会職員健診における生活習慣病に関する現況 …… 中村真理子・他

第571回　2004年4月27日(火)（当番：形成外科、胸部外科）
（1） 褥瘡の外科治療 …… 原岡剛一
（2） 肋間動脈肺静脈交通症に対し肋間動脈塞栓術を施行した1例 …… 田中馨・他
（3） 急性、多発性塞栓症を契機に発見された左房粘液腫の1例 …… 森田雅文・他

第572回　2004年5月25日(火)（当番：産婦人科、沁尿器科）
（1） 正常大卵巣癌症候群の一例 …… 山崎則行・他
（2） 2号用紙一体型パスの長期使用経験 …… 松井孝之・他

第573回　2004年6月22日(火)（当番：眼科、臨床検査科）
（1） 保存的療法で軽快した眼窩内骨膜下血腫の一例 …… 奥野高司
（2） 混濁を生じ摘出を要したハイドロゲル眼内レンズの一例 …… 澤田達
（3） アセスメント蛋白の基礎的検討 …… 桑山和哉・他
（4） グリコアルブミンの基礎的検討 …… 大仲一善・他

第574回　2004年7月27日(火)（当番：耳鼻咽喉科、薬剤科）
（1） 左頚部腫瘍を伴ったvon Recklinghausen病の1例 …… 岡部宇彦・他
（2） 稀な食道発声者2症例の紹介～喉頭摘出と機能再建～ …… 天津久郎・他
（3） 病棟における高カロリー輸液の管理、及び混注操作 …… 佐々木真人・他
（4） 患者情報の共有化について～保健薬局の意識調査～ …… 山家直・他

第575回　2004年9月28日(火)（当番：整形外科、放射科）
（1） 硬膜外膿瘍の治療経験 …… 阿部宗樹・他
（2） マルチディテクターCTの紹介 …… 池田謙一・他
（3） 脾臓から発生したCastleman病の一例 …… 田浦智幸・他

第576回　2004年10月26日(火)（当番：皮膚科、リハビリテーション科）
（1） クラビット®による多発性固定薬疹 …… 竹田恵理・他
（2） 平成15年度退院患者からみた回復期リハビリテーション病棟の現況 …… 福本進・他
（3） 当院における言語聴覚療法重度発語失行を合併したBroca失語症の一症例 …… 白石敦子・他
（4） 糖尿病教育入院における運動療法の効果について～歩数と血糖値の関係～ …… 林田桂一・他

第577回　2004年11月30日(火)（当番：看護部、事務部）
（1） 術前訪問の改善を試みて～比較・調査を行って～ …… 加山聖泰・他
（2） 生活保護法について …… 田邊貴広・他

第578回　2005年1月25日(火)（当番：栄養科、南大阪学園）
（1） 第7次改定日本人の食事摂取基準について …… 金石智津子・他
（2） 看護教育をめぐる最近の動向について …… 棗原佐智子・他

第579回　2005年2月22日(火)（当番：白寿会、内科、循環器内科）
（1） 在宅ターミナル期におけるショートステイの役割と課題
～利用者・家族を支えるチームアプローチ～ …… 種継敦・他
（2） 肝臓型猫ひっかき病の1症例 …… 岩本裕敬・他
（3） 劇症1型糖尿病の1症例 …… 土蔵尚子・他
（4） 新しいARBの効果 …… 庄司繁市・他
（5） 慢性貧血によりうっ血性心不全を来たした1例 …… 藤阪智弘・他

第580回　2005年3月22日(火)（当番：外科、形成外科、研修医）
(1) グリセリン浣腸により直腸穿孔と溶血を起こしたと考えられた1例 …… 清田誠志・他
(2) 歯性感染より生じた咀嚼筋間陳膿症の1例 …… 山中清孝・他
(3) サルモレラ腸炎から急性腎不全をきたした1症例 …… 向井梨恵・他
(4) 腸重積を合併した横行結腸癌の1例 …… 藤川平四朗・他

第581回　2005年4月26日(火)（当番：胸部外科、健診センター）
(1) 胸腺関連腫瘍の経験 …… 田中馨・他
(2) 僧帽弁形成術について …… 森田雅文・他
(3) 平成16年度 景岳会職員健診まとめ …… 鈴木榮太郎・他
(4) 第19回南大阪病院医学雑誌(52巻1~3号)学術奨励賞授与式

第582回　2005年5月24日(火)（当番：尿器科、眼科）
(1) 胃癌を原発とする転移性腎盂尿管腫瘍の1例 …… 長井潤・他
(2) 経尿道的前立腺切除術(TUR-P)パス
　—アウトカム指向のパスへの転換 …… 松井孝之・他
(3) 点眼にて一時軽快した外眼筋炎の1症例 …… 丸一みどり・他

第583回　2005年6月28日(火)（当番：臨床検査科、臨床工学科）
(1) カンジダ属の固定に用いたポアメディアViカンジダ寒天と
　従来法との比較検討 …… 兼田信子・他
(2) 喀痰中に腫瘍細胞が出現した悪性リンパ腫の1症例 …… 宇津野美弥子・他
(3) 透析液についての初期検討 …… 平井達也・他

第584回　2005年8月23日(火)（当番：耳鼻咽喉科、薬剤科）
(1) 最近経験した頚部リンパ節結核の1症例 …… 森彰之・他
(2) 過去4年半に経験した扁桃周囲膿瘍103例の検討 …… 天津久郎・他
(3) 入院患者における服薬状況調査～コンプライアンス向上に向けて～ …… 森田美紀・他
(4) 薬剤科における調剤過誤防止対策 …… 後藤かおる・他

第585回　2005年9月20日(火)（当番：整形外科、放射線科）
(1) 腰椎椎間板ヘルニアの治療法 …… 松本崇宏・他
(2) 門脈圧亢進症に対するIVR …… 二ノ井照久・他

第586回　2005年10月25日(火)（当番：皮膚科、リハビリテーション科）
(1) 疥癬とその鑑別疾患 …… 竹田恵理・他
(2) 食べる時どんなことに気をつけていますか?
　～言語聴覚士からみた摂食・嚥下の評価～ …… 佐々木宏和・他
(3) 脛骨遠位端骨折の理学療法 …… 石田哲士・他

第587回　2005年11月22日(火)（当番：看護部、事務部）
(1) 院内感染対策～看護部からの報告～ …… 寺杣皇榮・他
(2) 地域医療推進室の紹介 …… 森崎美登・他

第588回　2006年2月28日(火)（当番：栄科、南大阪看護専門学校）
(1) 委託形態変更後10ヶ月を経ての検討と今後の課題 …… 森實友美・他
(2) 「学生の興味・理解を深める教授法の工夫」
　～手術室看護の講義における取り組み～ …… 近藤未由紀・他

第589回　2006年3月28日(火)（当番：内科、循環器内科）
(1) 腹膜中皮腫と診断された一例 …… 久松武志・他
(2) 透析シャント造設時にアナフラキシーショックをおこした一例 …… 和田憲嗣・他
(3) 薬物療法が奏効したMRSAによる内因性眼内炎の一例 …… 切池祥子・他
(4) ネフローゼ症候群(FGS)の一症例 …… 芝一弘・他
(5) ラムゼーハント症候群の一症例 …… 濱田直・他
(6) アモキシシリンによる抗生物質起因性出血性大腸炎の一例 …… 山川佳子・他

第590回　2006年4月25日(火)（当番：外科、形成外科）
(1) 先天性大胸筋欠損症を伴った乳癌の一例 …… 井上善博・他
(2) 当院における上腸間膜動脈閉塞症六例の検討 …… 横山和武・他
(3) 左上肢の正中領域に限局した多発性神経鞘腫の一例 …… 羽多野隆治・他

第591回　2006年5月23日(火)（当番：胸部外科、健診センター）
(1) 原発性肺多形癌の1例 …… 田中馨・他
(2) 南大阪病院における腹部大動脈瘤の手術について …… 森田雅文・他
(3) 平成17年度上期職員健診のまとめ …… 鈴木榮太郎・他
※　第20回　南大阪病院医学雑誌学術奨励賞授与式

第592回　2006年6月27日(火)（当番：沁尿器科、臨床検査科･臨床工学科）
(1) 外来ESWIパス～アウトカム志向パスの試作～ …… 松井孝之・他
(2) 近未来の医療機器管理の検討とシステム開発 …… 西謙一・他
(3) 血液像目視軽減に関する検討～自動血球分析機装置LH750の
好中球左方推移のflagは無視できるか?～ …… 吉川慎一・他
(4) 当院における睡眠時無呼吸検査について
～外来受診から治療までと今後の課題～ …… 佐々木美里・他

第593回　2006年7月25日(火)（当番：耳鼻咽喉科、眼科）
(1) 我々が経験した副鼻腔真菌症の一症例 …… 森彰之・他
(2) 頭頚部結核の3例 …… 古下尚美・他
(3) 帯状痕疹ヘルペス性虹彩炎後に発症した前部虚血性視神経症の一例 …… 矢舩伊那子・他

第594回　2006年9月26日(火)（当番：整形外科、薬剤科）
(1) 簡易懸濁法導入の効果と課題 …… 梶原啓伯・他
(2) アルカプトン尿症によるアキレス腱皮下断裂の1例 …… 吉村弘一郎・他
(3) 人工膝関節再置換術の例 …… 大坂芳明・他

第595回　2006年10月24日(火)（当番：皮膚科、放射線科）
(1) 固定薬疹 …… 加藤敦
(2) 急性腹症のCT像(総説) …… 中島秀行

第596回　2006年11月28日(火)（当番：看護部、リハビリテーション科、医療社会事業科）
(1) 足病変の早期発見とフットケアの試み～二次感染の予防に向けて～ …… 新家千春・他
(2) リハビリテーション治療の成果調査～手術を行った股関節疾患の症例～ …… 岡本恵・他
(3) チーム医療におけるソーシャルワーカの役割 …… 西原由起子・他

第597回　2007年1月23日(火)（当番：栄養科、事務部、南大阪看護専門学校）
(1) 糖尿病教育入院患者における効果の検討
～間食・飲酒習慣との関係を中心に～ …… 泉美紀・他
(2) 医療における未収問題について …… 山田沙耶香・他
(3) 南大阪看護専門学校
看護高等課程 准看護学科設立～学科廃止までの歩み …… 松浦真由美・他

第598回　2007年2月27日(火)（当番：内科、循環器内科）
(1) 原発巣不明のWDHA症候群にOCTREOSCANが有効であった一例 …… 中山聖子・他
(2) 肺塞栓症と深部静脈血栓症について …… 柴田兼作・他
(3) 睡眠時無呼吸症候群における動脈硬化進行の要因 …… 庄司繁市・他

第599回　2007年3月27日(火)（当番：研修医）
(1) 本院で経験した神経内分泌細胞癌の1例 …… 研修医　松山大樹・他
(2) 救命しえなかった肺塞栓症の一例 …… 研修医　森下真成・他
(3) 海外渡航歴のない女性に発症したアメーバ性肝膿瘍の1例 …… 研修医　三嶋美紀・他
(4) ステロイド治療が奏効した甲状腺機能異常を伴う
原因不明の急性間質性腎炎の1例 …… 寺西優雅・他

第600回　2007年4月24日(火)（当番：外科、形成外科）
(1) 大腸癌標準化学療法の実際 …… 井原歳夫・他
(2) 救急疾患に対する腹腔鏡下手術 …… 後藤　司・他
(3) 大臀筋穿通枝皮弁の知覚皮弁としての検討 …… 原岡剛一・他

第601回　2007年5月22日(火)（当番：健診センター、胸部外科）
(1) 糖代謝異常者に対する追跡調査の現状について …… 篠崎智美・他
(2) 心臓原発悪性腫瘍の1手術例 …… 田中　馨・他
※　第21回 南大阪病院医学雑誌学術奨励賞授与式

第602回　2007年6月26日(火)（当番：泌尿器科、臨床検査科、臨床工学科）
(1) 体外衝撃波結石破砕術 2000例の治療経験 …… 松井孝之・他
(2) 赤血球製剤の廃棄血削減の取り組みについて
　　―輸血療法委員会の活動を中心に― …… 黒川栄子・他
(3) 糖尿病教育入院(126例)の「糖尿病自己管理に関する理解度アンケート」
　　を基にした患者様の意識調査について …… 大仲一善・他
(4) 透析通信システムのデータを用いたダイアライザー管理 …… 岩橋雅延・他

第603回　2007年7月24日(火)（当番：耳鼻咽喉科、眼科）
(1) 最近経験した悪性リンパ腫の3症例 …… 森　彰之・他
(2) 深頚部膿瘍から縦隔膿瘍に至った1症例 …… 古下尚美・他
(3) 小瞳孔眼の白内障術後に前房出血を来たした血小板減少症の1例 …… 戸成匡宏・他

第604回　2007年9月25日(火)（当番：整形外科、薬剤科）
(1) 橈骨遠位端骨折に対する掌側プレート法の紹介 …… 森　拓美・他
(2) 簡易懸濁法導入後の現状と問題点～看護師へのアンケート調査～ …… 勝本　大・他

第605回　2007年10月23日(火)（当番：看護部、放射線科）
(1) 当院看護師の看護教育における意識調査に基づいた新教育システムの提案 …… 上畠順次・他
(2) 新しく導入された1.5T MRIの特徴と安全管理について …… 平岡一弘・他

第606回　2007年11月27日(火)（当番：リハビリテーション科、医事課）
(1) 在宅復帰に向けた「ADL」の考え方～アンケート調査をもとに～ …… 岡野真紀・他
(2) レセプト増減点報告 …… 吉川貴和・他

第607回　2008年1月22日(火)（当番：栄養科、南大阪看護専門学校）
(1) 途上国における医療現場を経験して …… 藤吉恭子
(2) 当校看護学生の臨地実習に関する認識と不安 …… 東浦龍至・他

第608回　2008年3月25日(火)（当番：研修医）
(1) L字型馬蹄腎に併発した原因不明の急速進行性腎炎症候群の一例 …… 小川明子・他
(2) 間質性肺炎 …… 堀谷亮介・他
(3) Lemmel症候群を併発した慢性透析患者の1例 …… 保科隆男・他

南大阪病院学術集談会から南大阪学術懇話会へ

第1回　南大阪学術懇話会(第609回学術集談会)　2008年5月27日(火)
(1) 大腿骨頸部骨折に対する人工骨頭の使用経験
　　～前側方アプローチと後側方アプローチの比較～ …… 整形外科　四方田光弘・他
(2) 腹腔鏡下手術を施行した食道アカラシアを疑う食道狭窄の1例 …… 外科　横山和武・他
(3) 当院における大阪市マンモグラフィ乳癌検診の経過 …… 外科　原田知明・他
※　第22回南大阪病院医学雑誌学術奨励賞授与式

第2回　南大阪学術懇話会(第610回学術集談会)　2008年7月22日(火)
(1) 慢性閉塞性動脈硬化症の経皮的動脈形成術に
　エコーカー有効であった1例 …… 循環器内科　津久田亨三・他
(2) ネフローゼ症候群を呈した糖尿病性腎症の2例 …… 内科　庄司繋市・他

第3回　南大阪学術懇話会(第611回学術集談会)　2008年9月30日(火)
(1) 両側尿管結石の1例 …… 泌尿器科　松井孝之・他
(2) 星状神経節ブロックが奏効した対側にも再発した突発性難聴 …… 耳鼻咽喉科　恒川宜子・他
(3) 画像診断が有用であった胃前壁から発生したGISTの1例 …… 放射線科　境　一光・他

第4回　南大阪学術懇話会(第612回学術集談会)　2008年11月25日
(1) 手指衛生遵守率向上への取り組み …… 3階中央病棟　近藤未由紀・他
(2) 業務改善に向けた衛生材料キットの導入 …… 手術室　苔縄行博・他
(3) リンクナースラウンドによる感染防御効果の検討 …… 感染制御室　渡邉美津江・他

第5回　南大阪学術懇話会(第613回学術集談会)　2009年1月27日
(1) e-GFRについて …… 臨床検査科　桑山和哉・他
(2) 透析中に簡易モニターを用いた
　睡眠時無呼吸症候群のスクリーニング …… 臨床工学科　野口浩一・他
(3) マンモグラフィについて …… 放射線科　有賀綾子・他

第6回　南大阪学術懇話会(第614回学術集談会)　2009年3月24日(火)
(1) ベリニ集合管癌の1症例 …… 研修医　塚口敦子・他
(2) 回腸の軸捻転により小穿孔を来し急死した1症例 …… 研修医　横井卓哉・他

第7回　南大阪学術懇話会(第615回学術集談会)　2009年7月28日(火)
(1) CTにて膵臓の形態学的変化を発症前から追えた
　劇症1型糖尿病の一例 …… 内科　川口祐司・他
(2) ステント再狭窄病変に光干渉断層法(OCT)による
　観察が有用であった一例 …… 循環器内科　横山　亮・他
※　第23回南大阪病院医学雑誌学術奨励賞授与式

第8回　南大阪学術懇話会(第616回学術集談会)　2009年9月15日(火)
(1) 突発性難聴を疑わせた心因性難聴の一例 …… 耳鼻咽喉科　森　彰之・他
(2) 腎疾患例におけるガドリニウムMRI造影剤と
　NSFの関連性について …… 放射線科　境　一光・他
(3) 乳房温存に菱形皮弁術を応用した一例 …… 乳腺外科　中谷守一・他

第9回　南大阪学術懇話会(第617回学術集談会)　2009年11月24日(火)
(1) 現在の医療のあり方に対する、医師会員と大阪府民の
　考え方に関する比較検討 …… 南大阪看護専門学校　小味渕智雄
(2) 内服薬自己管理へ向けての関わり …… 看護部　安田知世・他
(3) 口臭軽減のための口腔ケアを目指して―口臭測定値による検証― …… 看護部　田島麻祐美・他

第10回　南大阪学術懇話会（第618回学術集談会）　2010年1月26日（火）
(1) セルフケア行動の意識改善の必要性－香港単身赴任中に
　Ⅱ型糖尿病が増悪した症例－ …… リハビリテーション科　藤井　慎・他
(2) 糖尿病教育入院の効果について
　－入院時の血糖コントロール指標別に－ …… 栄養科　金石智津子・他
(3) 薬剤部における持参薬管理－現状と課題－ …… 薬剤部　森田恵理子・他

第11回　南大阪学術懇話会（第619回学術集談会）　2010年3月23日（火）
(1) 閉塞性黄疸で発症したIgG４関連硬化性疾患の1例 …… 研修医　角谷佳則・他
(2) 肺塞栓症を起こした1症例 …… 研修医　北田紘平・他
(3) 虚血性腸炎加療中急変した1例 …… 研修医　沢田明也・他
(4) 高齢者に発症した腸管嚢胞様気腫症の1例 …… 研修医　吉山智貴・他

第12回　南大阪学術懇話会（第620回学術集談会）　2010年5月25日（火）
（1）緊急手術を施行した両側血気胸の1例 …… 胸部外科　柿本祥太郎
（2）Tumescent Local Anesthesia による乳腺切除術の経験 …… 乳腺外科・外科　中谷守一・他
※　第24回　南大阪病院医学雑誌学術奨励賞授与式

第13回　南大阪学術懇話会（第621回学術集談会）　2010年7月27日（火）
（1）循環器疾患患者の非心臓手術の術前における抗血栓薬、
抗凝固薬の扱いについて－ガイドラインより－ …… 循環器内科　中島大成・他
（2）睡眠時無呼吸症候群とメタボリックシンドロームの1例 …… 内科　川口祐司・他

第14回　南大阪学術懇話会（第622回学術集談会）　2010年9月28日（火）
（1）乳腺のMRI診断 …… 放射線科　中島秀行
（2）難治性化膿性脊椎炎の1例 …… 整形外科　北原義大・他

第15回　南大阪学術懇話会（第623回学術集談会）　2010年11月30日（火）
（1）外来でのストーマケアの実際
―患者の声を聞いてはじめて知り得たこと― …… 看護部　藤谷淳子・他
（2）再発した若年乳がん患者に対する症状コントロール …… 看護部　千崎しづか・他

第16回　南大阪学術懇話会（第624回学術集談会）　2011年1月25日（火）
（1）PSG検査時の夜間血圧、早朝血圧についての検討 …… 臨床検査科　山口たか子・他
（2）骨塩定量についてのアンケートと装置のＱＣについて …… 放射線科　髙木晃人・他

第17回　南大阪学術懇話会（第625回学術集談会）　2011年3月22日（火）
（1）救急外来で経験した重症蜂窩織炎の1例 …… 研修医　河内　要・他
（2）抑うつ傾向でラポール形成の重要性を
認識させられた潰瘍性大腸炎の1例 …… 研修医　北山嘉隆・他
（3）骨折観血的手術後に肺塞栓症を起こした1例 …… 研修医　西田洋平・他
（4）画像診断に難渋した胆嚢癌の1例 …… 研修医　山内　真・他
（5）多科同時手術により軽快退院できた94歳女性 …… 研修医　山本亜弥・他

第18回　南大阪学術懇話会（第626回学術集談会）　2011年5月24日（火）
（1）メッケル憩室穿孔の1例 …… 外科　三木高平・他
（2）非定型胸腺カルチノイドの2手術例 …… 胸部外科　柿本祥太郎
※　第25回　南大阪病院医学雑誌学術奨励賞授与式

第19回　南大阪学術懇話会（第267回学術集談会）　2011年7月26日（火）
（1）リラグルチドによりインスリン強化療法から離脱できた
高齢者糖尿病の1例 …… 内科　森上浩和・他
（2）深部静脈血栓症 …… 循環器内科　中島大成・他

第20回　南大阪学術懇話会（第628回学術集談会）　2011年9月27日（火）
（1）MRIによる乳癌の形態診断 …… 放射線科　中島秀行

第21回　南大阪学術懇話会（第629回学術集談会）　2011年11月22日（火）
（1）「医療安全の視点から滴下調整訓練に取り組んで」
～アンケート調査から見えてきたもの～ …… 看護部　加山聖泰・他
（2）「統合実習に医療安全パトロールを取り入れて」 …… 看護部　松元直子・他
（3）「糖尿病外来における療養指導の実際」
～病棟との連携を視野にいれて～ …… 看護部　立和田真理子・他

第22回　南大阪病院学術懇話会（第630回学術集談会）　2014年1月22日（水）
（1）新マンモグラフィーの検討
－旧装置との比較と追加された機能について－ …… 放射線科　森　恵
（2）南大阪病院附属リハビリテーションクリニックの
業績と展望 …… リハビリテーション科　泊　伸悟

第23回　南大阪病院学術懇話会（第631回学術集談会）　2014年3月26日（水）
（1）冠動脈左主幹部病変に対するPCI施行例 …… 研修医　林　浩也
（2）心臓手術1か月後に心嚢液貯留をきたした1例 …… 研修医　眞鍋　琢
（3）原因を特定できなかった“不明熱”診療の反省点 …… 研修医　登千穂子
（4）研修医の立場での癌性疼痛コントロールから学んだこと …… 研修医　松山　瞳
（5）腸重積による小腸イレウスをきたした
　Inflammatory fibroid polypの1例 …… 研修医　周防舞仁
（6）ERCP後に重症急性膵炎症例から研修医として学んだこと …… 研修医　砂川弘憲

第24回　南大阪病院学術懇話会（第632回学術集談会）　2014年5月28日（水）
（1）類皮嚢胞感染を示唆する特徴的な超音波像を呈した
　乳輪下膿瘍の1例 …… 乳腺外科　中谷守一
（2）原発不明癌性心膜炎の1例 …… 胸部外科　柿本祥太郎
（3）腹腔鏡下のソケイヘルニア根治術 …… 外科　宮岡雄太

第25回　南大阪病院学術懇話会（第633回学術集談会）　2014年7月23日（水）
（1）心臓腫瘍の一自験例 …… 循環器内科　上田航平
（2）大阪南部地域病診連携の試み「糖尿病患者の高血圧の意識調査」 …… 内科　中川智恵

第26回　南大阪病院学術懇話会（第634回学術集談会）　2014年9月24日（水）
（1）MRIで診断した橋中心髄鞘崩壊症の1症例 …… 放射線科　中島秀行
（2）出血性及び間質性膀胱炎に対する高圧酸素療法について …… 泌尿器科　牧野哲也

第27回　南大阪病院学術懇話会（第635回学術集談会）　2014年11月26日（水）
（1）学校評価への取り組み
　－自己点検・自己評価の実践報告－ …… 南大阪看護専門学校　宮崎妙子
（2）糖尿病のフットケアに対する指導の統一
　－患者のセルフケアに対する意識向上を目指して－ …… 10階病棟　藤田美紗子
（3）心臓カテーテル検査前訪問を行なって
　－放射線科看護師の取り組み－ …… 外来　三田祥子

第28回　南大阪病院学術懇話会(第636回学術集談会)　2015年1月28日(水)
（1）入院内服疑義照会における分析と今後の課題 …… 薬剤部　森澤祐子
（2）オンラインHDF 療法の実施と治療評価 …… 臨床工学科　野口浩一
（3）当院における血液型亜型の症例について …… 臨床検査科　増井優子
（4）外来継続栄養指導の効果と今後の課題
　―栄養指導修了者へのアンケート調査より― …… 栄養科　井ノ上恭子

第29回　南大阪病院学術懇話会(第637回学術集談会)　2015年3月25日(水)
（1）左大腿骨頸部骨折に対して人工骨頭置換術を施行した症例 …… 研修医　上田昭一
（2）旅先での背部痛、腹痛を主訴に来院した70歳男性 …… 研修医　濱田晃佑
（3）虫垂炎術後の盲腸癌に対して
　回盲部切除+D3 郭清を施行した症例 …… 研修医　松田博人

第30回　南大阪病院学術懇話会(第638回学集談会)　2015年5月27日(水)
（1）最近経験した胸膜中皮種の2例 …… 胸部外科　柿本祥太郎
（2）平坦型上皮異型(FEA)と診断された症例の超音波像について …… 乳腺外科　中谷守一

第31回　南大阪病院学術懇話会(第639回学術集談会)　2015年7月22日(水)
（1）Good-bye warfarin? 新規抗凝固薬(NOAC)について …… 循環器内科　上田航平

第32回　南大阪病院学術懇話会(第640回学術集談会)　2015年9月30日(水)
（1）術後悪心・嘔吐に対するジフェンヒドラミン・シプロフィリン
　配合薬とデキサメタゾンの併用による抑制効果 …… 麻酔科　下雅意学
（2）複数の皮ふ感染症に連続して罹患しHIV 感染が判明した症例 …… 皮膚科　水野信之
（3）診断に苦慮した悪性リンパ腫症例 …… 放射線科　中島秀行

第33回　南大阪病院学術懇話会(第641回学術集談会)　2015年11月25日(水)
（1）円滑な退院調整システムの構築―スクリーニングシート・
　　退院調整チェックリストを用いて―　…… 7階病棟　坪　田　洋　子
（2）当院におけるDoor-to-balloon time 短縮への取り組み
　　―フローチャートを作成・使用して―　…… 救急外来　西　本　和　江
（3）自立度に応じた口腔ケアを実践するために　…… 5階病棟　久　米　真　司
（4）褥瘡予防に対する試み―スキンケアカンファレンスの
　　患者選定方法を見直して―　…… 10階病棟　春　日　恵　里

第34回　南大阪病院学術懇話会（第642回学術集談会）　2016年1月27日（水）
（1）視野検査から発見された頭蓋内疾患の1例　…… 視能訓練士　稲　垣　有　一
（2）乳腺MRIの紹介―ダイナミック撮像を中心に―　…… 放射線科　勝　部　俊　司

第35回　南大阪病院学術懇話会（第643回学術集談会）　2016年3月23日（水）
（1）長期の入院加療を要した重症肝炎の治療から学んだこと　…… 研修医　櫻　井　裕　久
（2）分娩後早期にケトアシドーシスを発症した急性Ⅰ型糖尿病の1例　…… 研修医　久　木　優　季
（3）原因不明の低酸素血症を呈した上腕骨骨折の1例　…… 研修医　三　木　智　英　子

第36回　南大阪病院学術懇話会（第644回学術集談会）　2016年5月25日（水）
（1）穿刺吸引で小嚢胞消失確認後の経過中に嚢胞内腫瘍像が
　　明瞭化した非触知乳房腫瘤の1例　…… 乳腺外科　中　谷　守　一
（2）S状結腸癌術後に発生した脾サルコイド様反応の1例　…… 外科　島　　卓　史

第37回　南大阪病院学術懇話会（第645回学術集談会）　2016年7月27日（水）
（1）産褥期に発症した急性発症Ⅰ型糖尿病の1例　…… 内科　川　口　祐　司

第38回　南大阪病院学術懇話会（第646回学術集談会）　2016年9月28日（水）
（1）南大阪病院アレルギー外来の現状　…… 耳鼻咽喉科　宮　田　啓　史
（2）前立腺癌のMRI―拡散強調像の有用性―　…… 放射線科　中　島　秀　行

第39回　南大阪病院学術懇話会（第647回学術集談会）　2016年11月30日（水）
（1）転倒防止予防のためのフローチャート作成と使用結果　…… 9階病棟　小　寺　一　輝
（2）暴露防止への取り組みと現状の把握　…… 外来　新田起久子
（3）災害対応のイメージ化をはかって　…… 手術室　田　村　　仁

第40回　南大阪病院学術懇話会（第648回学術集談会）　2017年1月25日（水）
（1）当院における呼吸器リハビリテーション　…… 理学療法士　立　石　知　士
（2）腎動脈エコー導入に向けて　…… 臨床検査技師　田　中　た　か　子

第41回　南大阪病院学術懇話会（第649回学術集談会）　2017年3月22日（水）
（1）強化インスリン療法にデュラグルチドを併用し
　　CGMで効果を観察した1例　…… 研修医　有　江　裕　香
（2）神経内分泌腫瘍（NETG2）に対して
　　膵頭十二指腸切除術を施行した1例　…… 研修医　北　坂　七　瀬
（3）急性心膜炎の1例　…… 研修医　中　道　陽　子
（4）2型糖尿病患者が劇症1型糖尿病を合併し
　　糖尿病性ケトアシドーシスを発症した1例　…… 研修医　林　　優　里
（5）EBウイルスによる伝染性単核球症で麻疹と
　　サイトメガロウイルスIgM抗体陽性となった1例　…… 研修医　和　田　嵩　史

第42回　南大阪病院学術懇話会（第650回学術集談会）　2017年5月24日（水）
（1）腹腔鏡内視鏡合同手術を施行した胃Glomus Tumor手術の1例　…… 内視鏡外科　竹　村　雅　至

第43回　南大阪病院学術懇話会（第651回学術集談会）　2017年7月26日（水）
（1）当院におけるESD（内視鏡的粘膜下層はく離術）の経験　…… 消化器内科　中　谷　雅　美

第44回　南大阪病院学術懇話会（第652回学術集談会）　2017年9月27日（水）
（1）白内障手術について …… 眼科　光辻辰馬

第45回　南大阪病院学術懇話会（第653回学術集談会）　2017年11月22日（水）
（1）看護学生の高齢者交流体験前後における
　肯定的イメージの変化 …… 南大阪看護専門学校専任教員　徳田千代乃
（2）患者の希望に沿った術前オリエンテーション
　－外来手術患者の恐怖や不安の軽減－ …… 手術室看護師　藤本真夢
（3）ウオーキングカンファレンスの導入
　－従来の申送り廃止を目指して－ …… 12階病棟看護師　長瀬英子

第46回　南大阪病院学術懇話会（第654回学術集談会）　2018年1月24日（水）
（1）ボリコナゾールのＴＤＭ実施が有効であった1症例 …… 薬剤部　篠崎真実
（2）透析センターでの災害対策 …… 臨床工学科　安田栄吉

第47回　南大阪病院学術懇話会（第655回学術集談会）　2018年3月28日（水）
（1）Ｓ状結腸癌術後に敗血症ＤＩＣを発症した1例 …… 研修医　本多敦至
（2）ＥＲＣＰ後に重症急性膵炎をきたした1例 …… 研修医　山本一輝
（3）院内心停止への初期対応の経過からみた
　心肺蘇生後の予後に関する1考察 …… 研修医　林下晃士

第48回　南大阪病院学術懇話会（第656回学術集談会）　2018年5月23日（水）
（1）予後不良因子を有する骨粗鬆症性脊椎骨折に対する
　テリパラチド使用 …… 整形外科　北原義大
（2）乳頭内腫瘤－超音波検査における当科の工夫－ …… 乳腺外科　中谷守一

第49回　南大阪病院学術懇話会（第657回学術集談会）　2018年7月25日（水）
（1）血液透析患者におけるEPO抵抗性貧血に及ぼすCERAの効果 …… 内科　曽根一真

第50回　南大阪病院学術懇話会（第658回学術集談会）　2018年9月26日（水）
（1）造影剤の副作用について …… 放射線科　境　一光
（2）Ｓ状結腸癌術後化学療法中に発症し
　広範囲なデブリードマンを要した重症壊死性筋膜炎 …… 皮膚科　水野信之

第51回　南大阪病院学術懇話会（第659回学術集談会）　2018年11月28日（水）
（1）急性期病院における緩和ケアチームの現状と課題 …… 看護部　神崎美和
（2）キャリア開発ラダー導入への取り組みと今後の課題 …… 看護部　西森恭子
　看護部　宇崎真由子

第52回　南大阪病院学術懇話会（第660回学術集談会）　2019年1月23日（水）
（1）外科手術を受けた大腸がん患者の予後に影響する
　栄養学的因子の検討 …… 栄養科　木村友理香
（2）3.0Ｔ（ステラ）ＭＲＩ装置の更新について …… 放射線科　平岡一弘
（3）幼児調節性内斜視の1例 …… 眼科　伊藤登紀子

第53回　南大阪病院学術懇話会（第661回学術集談会）　2019年3月27日（水）
（1）ビタミンB1欠乏により脚気心を来した1例 …… 研修医　雨皿和輝
（2）肝細胞癌の腹腔内破裂後に意識障害を来した1例 …… 研修医　奥野敬子
（3）犬咬傷により生じた化膿性腱鞘炎の1例 …… 研修医　中野　葵
（4）Ⅳ型食道裂孔ヘルニアに対する外科的治療の経験 …… 研修医　松井千明
（5）透析患者の難治性皮下膿瘍に対する治療経験 …… 研修医　森本真由美

第54回　南大阪病院学術懇話会（第662回学術集談会）　2019年5月22日（水）
（1）複合型食道裂孔ヘルニアに対する外科的治療成績と問題点 …… 内視鏡外科　竹村雅至
（2）免疫治療薬オプジーボが有効であった1例 …… 胸部外科　柿本祥太郎

第55回　南大阪病院学術懇話会（第663回学術集談会）　2019年7月24日（水）
（1）経過観察中に破裂を認めたValsalva洞動脈瘤の1例 …… 循環器内科　藤　吉　秀　樹

第56回　南大阪病院学術懇話会（第664回学術集談会）　2019年9月25日（水）
（1）経尿道的尿管結石砕石術(TUL)におけるフィルム・
　オクルージョンデバイスの有用性について …… 泌尿器科　竹　垣　嘉　訓
（2）嗅覚障害患者の動向 …… 耳鼻咽喉科　後　藤　孝　和

第57回　南大阪病院学術懇話会（第665回学術集談会）　2019年11月27日（水）
（1）化学療法を受ける患者のセルフケア指導
　－患者の決断を支えるために－ …… 看護部　奥　坊　紗　彩
（2）災害図上訓練による看護師の防災意識の変化 …… 看護部　西　野　知　子

第58回　南大阪病院学術懇話会（第666回学術集談会）　2020年1月22日（水）
（1）卒業研究を含めた学生実習の受入れについて …… 臨床検査科　大　仲　一　善
（2）当院における腎臓リハビリテーション …… リハビリテーション科　松　原　俊　男

第59回　南大阪病院学術懇話会（第667回学術集談会）　2020年3月25日（水）
新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

第60回　南大阪病院学術懇話会（第668回学術集談会）　2020年5月27日（水）
新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

第61回　南大阪病院学術懇話会（第669回学術集談会）　2020年7月22日（水）
新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

第62回　南大阪病院学術懇話会（第670回学術集談会）　2020年9月23日（水）
新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

第63回　南大阪病院学術懇話会（第671回学術集談会）　2020年11月25日（水）
新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

第64回　南大阪病院学術懇話会（第672回学術集談会）　2021年1月27日（水）
新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

第65回　南大阪病院学術懇話会（第673回学術集談会）　2021年3月24日（水）
新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

第66回　南大阪病院学術懇話会（第674回学術集談会）　2021年5月26日（水）
新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

第67回　南大阪病院学術懇話会（第675回学術集談会）　2021年7月28日（水）
（1）高血糖高浸透圧症候群と糖尿病性ケトアシドーシスの合併により
　2度の心停止を来し、蘇生後に小腸壊死を合併した
　2型糖尿病の一例 …… 内科　蘆　田　成　美
（2）心タンポナーデを契機に診断に至ったＳＬＥ心膜炎の一例 …… 循環器内科　綾　田　健　士

第68回　南大阪病院学術懇話会（第676回学術集談会）　2021年9月
新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

第69回　南大阪病院学術懇話会（第677回学術集談会）　2021年11月24日（水）
（1）時間管理意識の向上に向けた院内での取り組み …… ７階病棟　赤　井　え　り
（2）褥瘡予防対策委員のキャリア開発ラダーレベルに
　応じた教育と評価表の作成 …… ８階病棟　村　上　　巌
（3）退院支援に関わる看護師の質向上に向けた教育プログラムの開発と成果
　－ラダーレベルに応じた専門知識の習得を目指して－ …… ９階病棟　宇　崎　真　由　子

第70回　南大阪病院学術懇話会（第678回学術集談会）　2022年1月26日（水）
新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期
2022年4月27日（水）
（1）泌尿器科領域における抗菌薬投与期間変更による
術後感染発生率の検討 …… 薬剤部　森崎佳生梨
藤野杏奈
野口菜都子
（2）透析管理システム「FutureNetweb＋」の
他施設間共有使用について …… 臨床工学科　七野裕美

第71回　南大阪病院学術懇話会（第679回学術集談会）　2022年3月23日（水）
（1）腹部大動脈瘤切迫破裂の一例 …… 研修医　桑本智弘
（2）虫垂炎の診断で盲腸部分切除術を施行した一例 …… 研修医　藤本聖也
（3）右肝円索に伴った左側胆嚢に対し
腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した一例 …… 研修医　逸見冴子
（4）外来での心停止蘇生成功後、入院9日目に
再度心室細動により死亡した一例 …… 研修医　安川知宏

第72回　南大阪病院学術懇話会（第680回学術集談会）　2022年5月2日（水）
（1）安全かつ術後QOLに着目した腹腔鏡下スリーブ状胃切除術 …… 外科　瀧井麻美子

第73回　南大阪病院学術懇話会（第681回学術集談会）　2022年7月27日（水）
（1）動脈硬化と冠動脈疾患
～Rotablatorで高度石灰化病変に挑む～ …… 循環器内科　綾田健士

第74回　南大阪病院学術懇話会（第682回学術集談会）　2022年9月28日（水）
（1）新型コロナウイルス感染症の現況と鑑別すべき肺疾患について …… 放射線科　中島秀行

第75回　南大阪病院学術懇話会（第683回学術集談会）　2022年11月30日（水）
（1）透析室の穿刺場面におけるエコーの有用性について
－患者と透析室スタッフの負担軽減を目指して－ …… 10階病棟　市川裕美
（2）ＨＣＵにおける気管内挿管患者への口腔内評価・口腔ケアの統一 …… ＨＣＵ　越智朱里
（3）患者の自律・尊厳の尊重を目指して
－ＩＶＲを受ける患者のおむつ使用に対する看護師の認識－ …… 外来　堀野祥子

第76回　南大阪病院学術懇話会（第684回学術集談会）　2023年1月25日（水）
（1）当院での減量代謝・改善手術における栄養指導の現状と今後 …… 栄養科　野崎幸
（2）上腹部での自由呼吸下におけるFast3Dモードを併用した
T1FFE3D法の検討 …… ＨＣＵ　越智朱里
（3）累進屈折力眼鏡について …… 眼科　中元陽香

第77回　南大阪病院学術懇話会（第685回学術集談会）　2023年3月22日（水）
（1）治療抵抗性水様性下痢をきたした症例 …… 研修医　山﨑裕二
（2）潰瘍性大腸炎に対しステロイド導入し緩解した一例 …… 研修医　溝端勇基
（3）汎血球減少を呈し治療に難渋した肺炎症例 …… 研修医　戸川佳樹
（4）大腸癌周術期管理からShared-decision-makingの重要性を
学んだ一例 …… 研修医　小林颯平

70TH

社会医療法人景岳会　南大阪病院